岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第102集

万丁目遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

万丁目遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7,000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路など交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護、保存と開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、花巻南インターチェンジ建設に伴って、昭和60年に発掘調査した万丁目遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査地は現在水田となっているところですが、縄文時代から中世にわたる複合遺跡であることが判明しました。縄文時代では炉跡や陥し穴状遺構、奈良、平安時代、中世では竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されております。この地域には古墳や中世城館があり、大昔から連綿として人々の生活が行われた所と思われます。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助、御協力を賜りました岩手県土木部、農政部、日本道路公団江釣子管理事務所、花巻市、花巻市教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和60年2月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　中　村　　直

例　　言

1．本報告書は、岩手県花巻市中根子39に所在する「万丁目遺跡」の発掘調査の結果を収録したものである。

2．調査は、東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ建設に伴い、事前に記録保存するために行われた緊急発掘調査であり、岩手県土木部、農政部、日本道路公団仙台管理局、花巻市からの委託により、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．発掘調査は、4月11日から6月30日までの予定で開始したが、調査区全域に遺構が検出されたこと等によって、関係機関の御協力を得て、7月13日まで調査期間を延長して行った。

4．発掘調査面積は、2,614㎡である。

5．調査担当者は、中川重紀、片方宗明である。

6．鑑定委託については、石質鑑定を佐藤二郎氏、樹種鑑定を岩手県木炭協会の早坂松次郎氏、炭化穀類の鑑定を佐藤敏也氏、鉄製品、有機物の鑑定は岩手県立博物館に依頼した。

7．本報告書に用いたスクリーントーンは、焼土である。

8．調査方法は、次の通りである。

(1)　調査区の設定と遺構名

公団中心杭ＳＴＡ０＋70（基準点Ａ）とＳＴＡ１＋00（基準点Ｂ）を基準点として使用した。基準点の平面直角座標第Ｘ系による成果は次の通りである。

基準点Ａ　ＳＴＡ０＋70（Ｘ＝－68.438.1741、Ｙ＝22.236.3762）

基準点Ｂ　ＳＴＡ１＋00（Ｘ＝－68.438.8402、Ｙ＝22.206.3836）

基準点Ａと基準点Ｂを結んだ直線を東西方向の中心軸とし、それに直交する基準点Ａを通る直線を南北方向の中心軸とした。両中心軸の交点（基準点Ａ）を原点として、20m毎に区切り北から南へⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とし、西から東へＡ区、Ｂ区……Ｈ区とした。これにより構成される20m×20mを大区画とし、その呼称は、両者の組み合わせにより、ⅡＡ区、ⅢＢ区などとした。原点は、ⅢＦ区北西隅である。更に、大区画は５m間隔４等分の小区画を設け、北から南へＡ－Ｂ－Ｃ－Ｄ……Ｍ－Ｎ－Ｏ－Ｐとした。この小区画の呼称は、ⅡＡ－Ｋ区、ⅢＢ－Ｈ区などとした。

南北の中心軸は、磁北に対し6°東偏している。遺構名は、大区画名毎に住居跡、炉跡、カマド状焼土遺構、掘立柱建物跡、溝跡は01～、陥し穴状遺構、土坑は001～の番号を付し、大区画名との組み合わせにより、例えば、ⅡＡ001陥し穴状遺構、ⅢＢ01住居跡のように呼称した。

(2) 粗掘、検出

野外調査は、前記調査区の設定に先立ち、前年度文化課により試掘調査が実施されていたので、その排土の除去作業から始めた。トレンチは、8カ所入れられており、少量だが土器を発見することができた。調査区設定後は、小区画毎に粗掘りを実施し、遺構の検出に努めた。検出面は、E区付近では基本層序Ⅲ層であり古代の竪穴住居跡が検出されたが、大部分の遺構はⅣ層上面で検出され、G～H区はⅤ層になっている。

(3) 精査、記録

精査方法は、住居跡を4分法で、他の遺構は2分法で行った。遺構の平面図、断面図は、縮尺1/20で作成した。但し、平面形、断面形を詳細に記録するため縮尺1/10に作成したものもある。写真はモノクロ35㎜、6×7㎝、カラースライドの3種で撮影した。

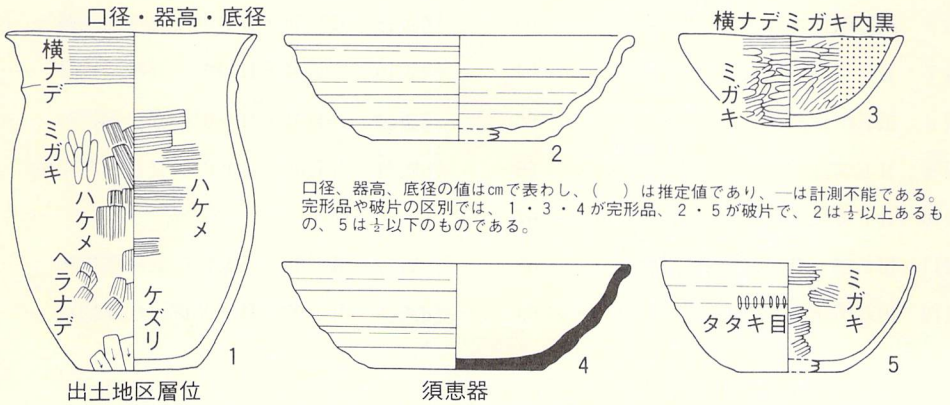
9．整理、まとめ作業については、次の通りである。

遺構配置図については、野外調査時に作成した平面図をもとに、縮尺不定で作成した。遺構図については、野外調査時に作成した図をトレースし、縮尺を1/40に統一した。但し、例外的に1/20ないし1/80を使用したものもある。各遺構図には、スケールを付している。図中の礫は斜線で、土器は黒ツブシで表わし、柱穴には番号を付している。遺物図版の縮尺は、実測図を原寸～1/3とし写真を小型の石器、土器製品、鉄器類を原寸～1/2とし、大型の石器、土器類を1/2～1/4、陶磁器は縮尺不定である。本書に掲載した遺物実測図のうち、土師器の器面調整の表し方は、下記に図示してある。遺物図版と写真図版の遺物番号は一致させてある。

10．本報告書の執筆は、調査に至る経過を近藤宗光、地形を菊池利和、遺跡の位置と周辺遺跡、検出した遺構と遺物、まとめの分は、中川重紀と片方宗明が分担した。

11．野外調査時には、地元作業員多数の協力を得た。室内整理作業では、当センター室内作業員多数の協力を得た。

12．発掘調査にあたり、花巻市、花巻市教育委員会、日本道路公団仙台管理局江釣子管理事務所、花巻土木事務所、花巻土地改良事業所、共同企業体佐田建設㈱、丸伊工業㈱の御協力を得た。



目　次

序

例　言

本　文

Ⅰ　調査に至る経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2
　1．遺跡の位置 …… 2
　2．地　形 …… 4
　3．周辺の遺跡 …… 7
　4．基本土層 …… 8
Ⅲ　検出された遺構と遺物 …… 9
　1．竪穴住居跡 …… 9
　2．炉　跡 …… 16
　3．掘立柱建物跡 …… 19
　4．カマド状焼土遺構 …… 24
　5．土　坑 …… 28
　6．陥し穴状遺構 …… 34
　7．屋敷跡 …… 35
　8．溝 …… 36
Ⅳ　まとめ …… 37
　1．発見された遺構について …… 37
　2．発見された遺物について …… 39
Ⅴ　鑑定、分析 …… 48

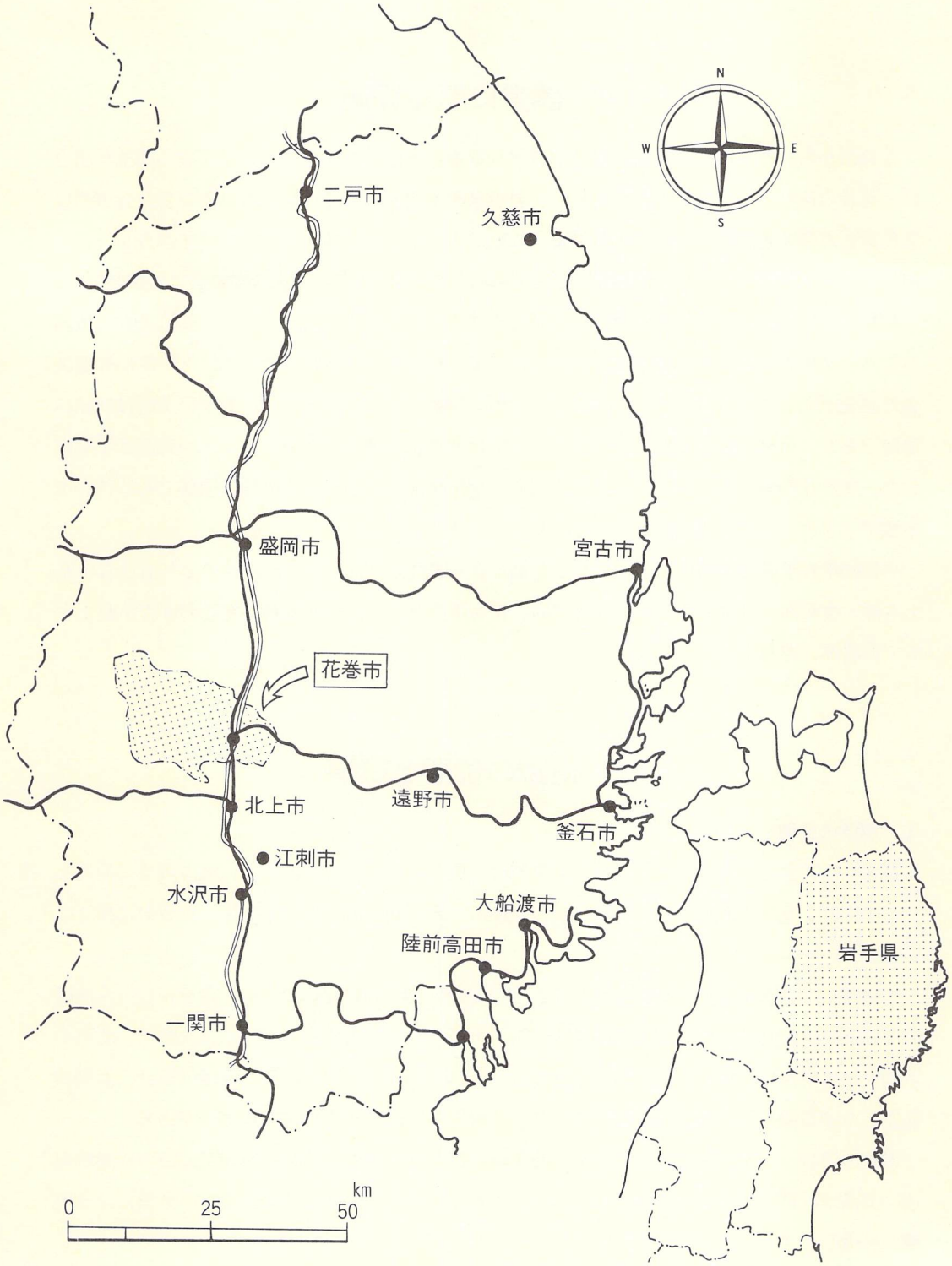
図　版　目　次

図版1　岩手県全図 …… 1
図版2　遺跡周辺地形図 …… 3
図版3　遺跡周辺地形分類図 …… 5
図版4　遺跡位置図、周辺の遺跡 …… 6
図版5　ⅡC01・ⅡE03住居跡 …… 62
図版6　ⅢD01住居跡 …… 63
図版7　ⅡE01住居跡 …… 64
図版8　ⅢE01住居跡 …… 65
図版9　ⅡF01住居跡 …… 66
図版10　ⅡF02住居跡 …… 67
図版11　ⅢE01・ⅡG01土器埋設炉 …… 68
図版12　ⅢG01土器埋設炉 …… 69
図版13　ⅡE01石囲炉 …… 70
図版14　ⅡE02石囲炉 …… 71
図版15　ⅡF01掘立柱建物跡 …… 72
図版16　ⅢF01掘立柱建物跡 …… 73
図版17　ⅢG01・ⅡH01掘立柱建物跡 …… 74
図版18　ⅡE04・ⅡD03掘立柱建物跡 …… 75
図版19　ⅢC01・ⅡD02掘立柱建物跡 …… 76
図版20　ⅡD01・ⅡC01掘立柱建物跡 …… 77
図版21　ⅡE01・ⅡE02・ⅡE03掘立柱建物跡 …… 78
図版22　ⅡF06・ⅡF05掘立柱建物跡 …… 79
図版23　ⅡF02・ⅡF03掘立柱建物跡 …… 80

図版24　カマド状焼土遺構(1) …… 81
図版25　カマド状焼土遺構(2) …… 82
図版26　土坑(1) …… 83
図版27　土坑(2) …… 84
図版28　土坑(3) …… 85
図版29　土坑(4) …… 86
図版30　陥し穴状遺構 …… 87
図版31　縄文土器(1) …… 88
図版32　縄文土器(2)・石器(1) …… 89
図版33　石器(2) …… 90
図版34　石器(3) …… 91
図版35　土師器・土製器・鉄製品 …… 92
図版36　土師器・鉄製品 …… 93
図版37　土師器・須恵器 …… 94
図版38　土師器・須恵器・陶器・鉄製品 … 95
図版39　土師器・須恵器 …… 96
図版40　土師器・須恵器・鉄製品 …… 97
図版41　土師器・須恵器 …… 98
付図　遺跡グリット遺構配置図

写　真　図　版

図版１　遺跡周辺航空写真（南から） …… 101
図版２　調査区域航空写真（真上から） … 102
図版３　調査区近景 …… 103
図版４　土層断面 …… 104
図版５　ⅢD01住居跡 …… 105
図版６　ⅡE01住居跡 …… 106
図版７　ⅢE01住居跡 …… 107
図版８　ⅡF01・ⅡF02住居跡検出状況 … 108
図版９　ⅡF01住居跡 …… 109
図版10　土器埋設炉 …… 110
図版11　石囲炉 …… 111
図版12　掘立柱建物跡 …… 112
図版13　掘立柱建物跡柱穴埋土断面 …… 113
図版14　カマド状焼土遺構(1) …… 114
図版15　カマド状焼土遺構(2) …… 115
図版16　土坑(1) …… 116
図版17　土坑(2) …… 117
図版18　土坑(3) …… 118
図版19　土坑(4) …… 119
図版20　土坑(5) …… 120
図版21　土坑(6) …… 121
図版22　陥し穴状遺構 …… 122
図版23　屋敷跡（ⅡG01・02溝） …… 123
図版24　縄文土器１ …… 124
図版25　縄文土器２・土製品 …… 125
図版26　石器１ …… 126
図版27　石器２ …… 127
図版28　土師器・須恵器・土製品
鉄製品 …… 128
図版29　土師器・須恵器 …… 129
図版30　土師器・須恵器・鉄製品 …… 130
図版31　土師器・須恵器・鉄製品
古銭 …… 131
図版32　殻粒１ …… 132
図版33　殻粒２ …… 133
図版34　ⅢE01住居跡刀子金属組織 …… 134
図版35　陶磁器 …… 135


N
W
E
S
二戸市
久慈市
盛岡市
宮古市
花巻市
北上市
遠野市
釜石市
江刺市
水沢市
大船渡市
陸前高田市
一関市
岩手県
0
25
50
km

図版１　岩手県全図

Ⅰ　調査に至る経過

花巻市から、花巻市街地西辺に東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ新設の要望が出され、建設の運びとなった。昭和58年10月、岩手県土木部用地高速道課から県教育委員会事務局文化課に対して当該地の埋蔵文化財調査の依頼があった。文化課はただちに分布調査を行い、同年11月遺構確認のための試掘調査の必要を解答した。同時に花巻市教育委員会にも通知した。

昭和59年７月には日本道路公団江釣子管理事務所から、関係２遺跡について試掘調査の依頼があり、文化課は同年９月試掘調査を行った。その結果万丁目遺跡については本格的な発掘調査の必要があることを解答した。同時に花巻市教育委員会にも通知した。万丁目遺跡は周知の遺跡であり、遺跡は広い範囲に及んでいる。文化課は試掘調査の結果により、調査範囲を限定した。また花巻南インターチェンジ建設関連の道路整備にかかわって周知の遺跡である花巻市中根子字米倉にわたる古館Ⅱ遺跡の発掘調査も必要となった。

昭和60年岩手県文化振興事業団に対し発掘調査が委託された。万丁目遺跡の委託者は岩手県土木部・農政部、日本道路公団仙台管理局、花巻市である。古館Ⅱ遺跡の委託者は岩手県土木部・農政部、花巻市である。

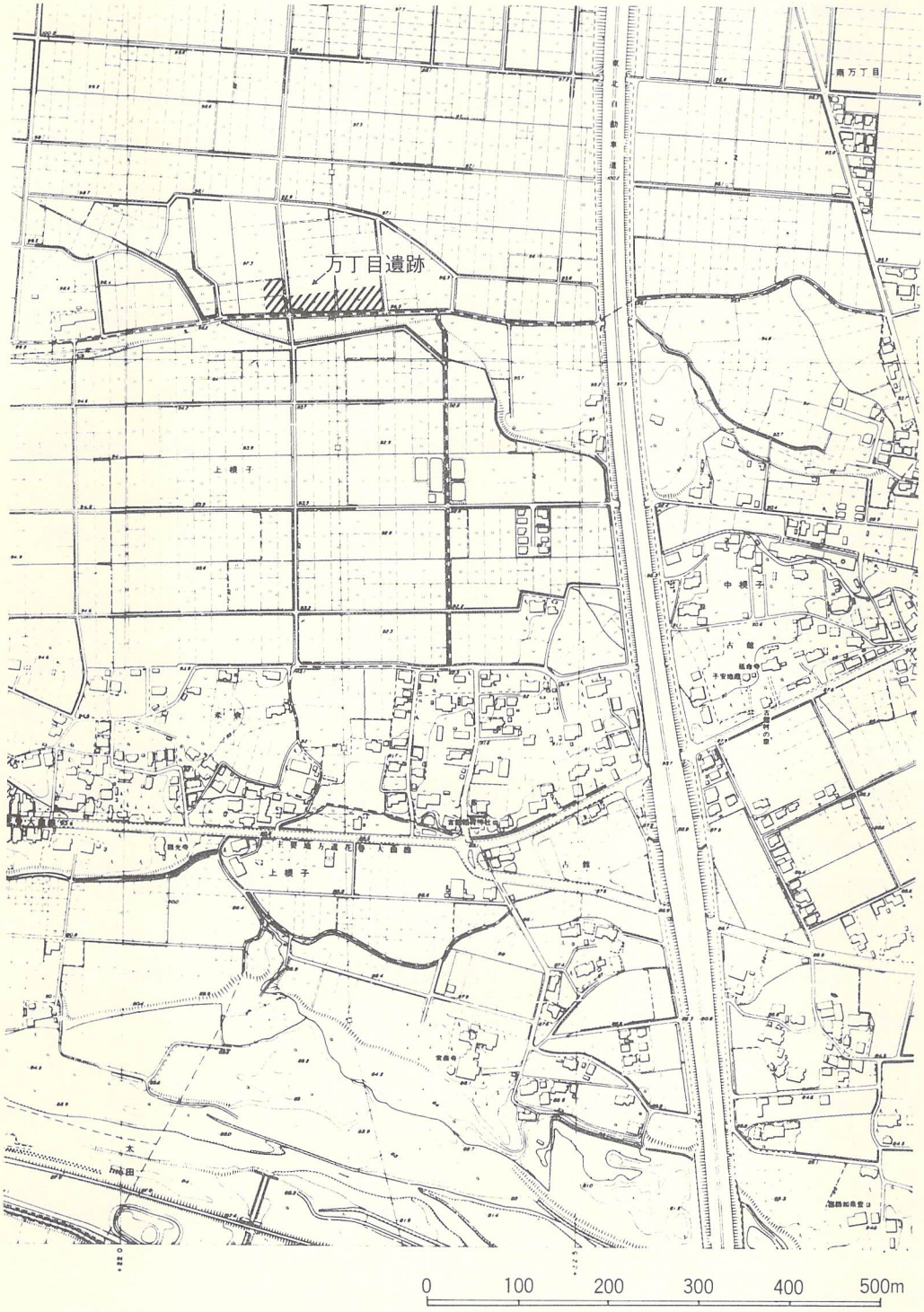
Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

遺跡の所在する花巻市は、岩手県の中央部に位置し、北上川と豊沢川の合流点近くに発達した町であり、北は雫石町、石鳥谷町、東は東和町、南は北上市、西は沢内村、和賀町に接している。

本遺跡は、東北本線花巻駅の南西2.1㎞、東北縦貫自動車道の西約250ｍ、県道花巻―大曲線の北約580ｍに位置する。南方0.9㎞に豊沢川が東流し、北上川に注いでいる。遺跡は、北西から南東に緩やかに傾斜する低位砂礫段丘にあり、標高96ｍ前後である。低位砂礫段丘は、南側に発達した沖積段丘と比高差約３ｍ程であり、豊沢川の川面より約14ｍの比高差がある。

遺跡の現状は、水田・畑で開田は昭和42年頃に行われている。遺跡の南側県道沿いや遺跡周辺の微高地には、集落が発達しているのがみられる。更に、東北縦貫自動車道の東側には市街地が発達してきている。



図版２：遺跡周辺地形図

2．地形と地質

(1)　地形概観

花巻市街地の東方には、南北にのびる幅数kmの北上川河谷平野があり、この平野(沖積低地)を北上川が蛇行しながら流れており、北上川を境として西側地域と東側地域とでは地形が大きく異っている。

北上川西岸地域では、西方奥に起伏の大きな奥羽山脈が分布し、グリーンタフ、安山岩、頁岩、砂岩などから構成されている。この奥羽山脈の東麓には扇状地が発達し、西方山地から発する豊沢川、瀬川などの河川は砂礫の堆積をもたらし、扇状地性の台地（段丘）を形成している。これらの台地（段丘）は、３段以上に分類できるが、特に下位、中位のものが広く分布している。本遺跡の北400mに位置する万丁目遺跡は、下位段丘縁辺部に立地している。

豊沢川、瀬川などの諸河川沿いには、小面積であるが沖積段丘が分布している。本遺跡は豊沢川左岸の沖積段丘の縁辺部に立地している。

一方、北上川東岸地域は、古生層などを基岩とする北上山地の西縁地域にあたり、丘陵地、山地が入り組んでおり、小規模な台地及び河川沿いに沖積低地が分布している。

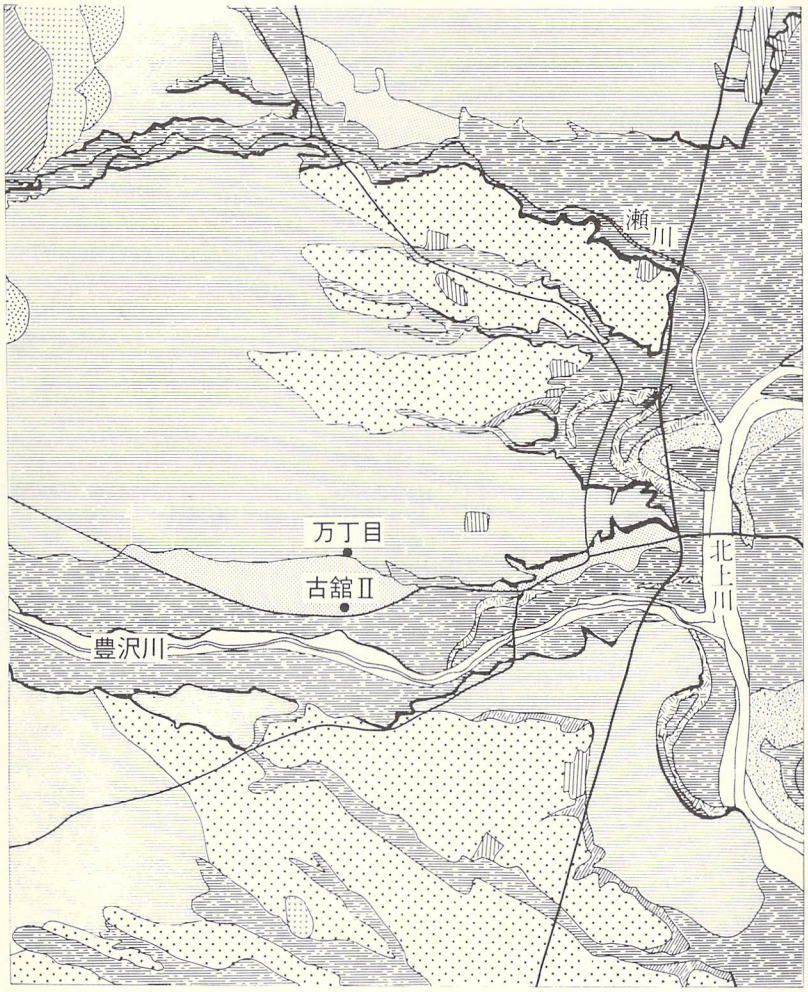
(2)　台地・低地

台地　北上川沿いの凹地は、大部分台地によって占められ、それらは上位、中位、下位の段丘として分類できる。上位段丘は西部山地東縁の丘陵地域にわずか分布しているが、開析が進み丘陵地化している。中位段丘は、主として扇状地性台地の中央から東縁にかけ分布し、緩やかな起伏を呈している。砂礫層で構成され、上位に火山灰層がのる。下位段丘は、扇状地性台地の広い部分を占め、砂礫層を覆う土層の発達もよい。

沖積段丘は、北上川およびその支流に沿って、よく分布している。河川との比高は小さく、明瞭な段丘崖が見られず、沖積低地へと続くものが多い。

低地　北上川本流沿いに幅数kmにわたって低地が発達しており、旧河道、自然堤防、段丘状の微高地がある。又、西部山地より東流する諸河川沿いにも沖積低地が発達しており、沖積段丘化されつつある。

引用参考文献　　土地分類基本調査　花巻（岩手県1975年）



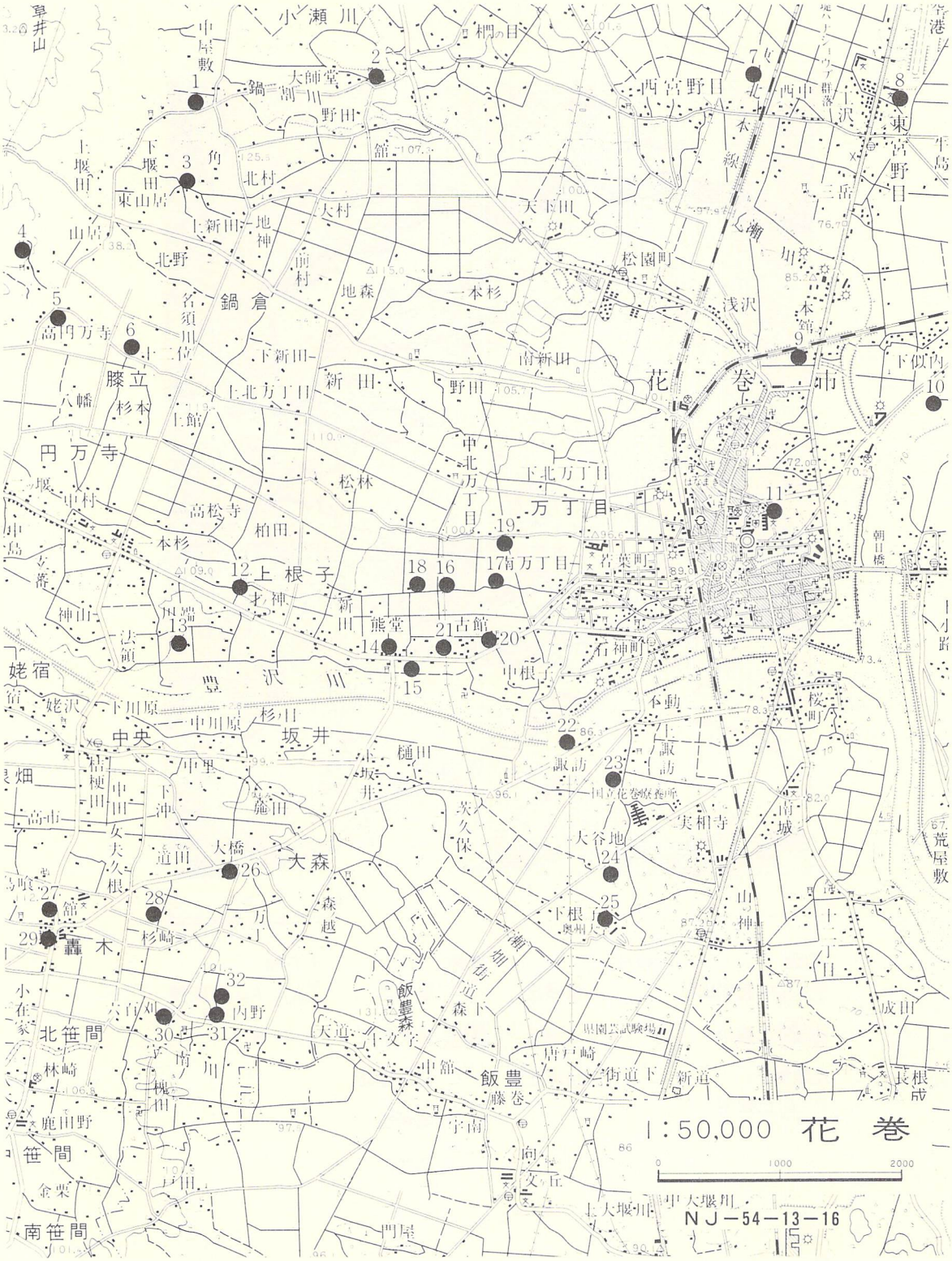
山地
中起伏山地
山麓地
丘陵地
丘陵地

台地
中位段丘
下位段丘
沖積段丘

低地
扇状地
谷底平野
自然堤防
旧河道
河原

その他
人工改変地
崖

図版 3　遺跡周辺地形分類図



図版４　遺跡位置図、周辺の遺跡

3．周辺の遺跡（図版４）

本遺跡の周辺には、表１の遺跡分布調査資料によれば32カ所の遺跡の存在が知られている。そのうち遺跡の内容を種別でみると、散布地が過半数を占めている。その他には、城館跡が古館、轟館等５カ所、集落跡３カ所、祭祀跡１カ所、古墳群１カ所、墳墓１カ所等がある。

又、遺構、遺物別にみた遺跡の年代を分類してみると、古代の遺跡が一番多く、全体の25％で縄文遺跡の30％を上廻る。中世～近世の遺跡は３カ所ある。複合遺跡は３カ所あり、本遺跡はこの中に含まれる。（図版４）

本遺跡に隣接する遺跡には、南万丁目、南万丁目II、谷地遺跡があり、いずれも古代に所属する。南側には、古館遺跡があり、南西700mの地点には熊堂古墳群がある。熊堂古墳群は、かつては数十基あったとされているが、現在は墳丘のあるものは１基のみである。大正末年の調査では、横穴式石室の中から、勾玉、管玉、蕨手刀、和同開珎、鍔帯金具等が出土している。

表１　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物
1	ME－1031	小瀬川	散布地	花巻市小瀬川9-92	縄文中期土器・石器
2	ME－1115	太子堂	散布地	花巻市小瀬川1-54	縄文土器・石器
3	ME－2000	幅	散布地	花巻市鍋倉字銀名4-2	縄文中期土器・土師器・須恵器・石器
4	ME－2267	円万寺館	城館跡	花巻市湯口膝立観音山	中～近世・堀・土塁他
5	ME－0310	高円万寺	集落跡	花巻市高円万寺46	
6	ME－0346	膝立	散布地	花巻市湯口膝立	土師器
7	ME－1017	西宮野目	散布地	花巻市西宮野目3-574	縄文前、後、晩期土器・石器、すり石
8	ME－1138	十三塚	祭祀跡	花巻市東宮野目葛	
9	ME－0140	本館	散布地	花巻市東宮野目本館332	縄文晩期土器・石器
10	ME－0263	下似内	散布地	花巻市東宮野目第５地割	土師器・須恵器
11	ME－1079	花巻城柵跡	館跡	花巻市城内	
12	ME－2045	鬼屋敷	散布地	花巻市上根子和田	土師器
13	ME－2080	中田	散布地	花巻市上根子道願138-1	縄文晩期土器・石器
14	ME－2185	熊堂古墳群	古墳群(円)	花巻市上根子87	須恵器・鍬・砥石・直刀・勾玉・古銭他
15	ME－0128	魔王塚	墳墓	花巻市上根子欠端107	
16	ME－2255	万丁目	散布地	花巻市中根子39	縄文・古代～中近世、住居・土坑・柱穴群
17	ME－2257	南万丁目	散布地	花巻市中根子22-1	土師器・須恵器
18	ME－2230	谷地	散布地	花巻市南万丁目818	土師器
19	ME－2207	南万丁目II	散布地	花巻市南万丁目1053	土師器
20	ME－2293	古館	城館跡	花巻市中根子古館36	土塁・堀、中～近世
21	ME－2282	古館II	集落跡	花巻市中根子古館11-3	古代・中世住居址・井戸、土師器・須恵器
22	ME－0362	下館	館跡	花巻市諏訪	土師器
23	ME－1306	諏訪	散布地	花巻市諏訪296-5	縄文土器・石匙
24	ME－1376	大谷地	集落跡	花巻市下根子大谷地	土師器・須恵器・焼土
25	ME－2315	富士大グランド	散布地	花巻市下根子富士大学敷地内	縄文土器
26	ME－1074	大橋	散布地	花巻市太田51	土器片
27	ME－2300	館I	散布地	花巻市轟木10	土師器片
28	ME－2324	館II	散布地	花巻市轟木5	縄文土器片
29	ME－2239	轟館	館跡	花巻市轟木9	須恵器
30	ME－2399	六百刈I	散布地	花巻市北笹間10	土師器
31	ME－2093	内野I	散布地	花巻市北笹間10	土師器片
32	ME－2084	内野II	散布地	花巻市北笹間1	須恵器

この表は、岩手県遺跡地名表・岩手県教育委員会をもとに作製した。

4．基本土層（写真図版４）

本遺跡の基本土層は、地点によって異なるがおおよそ以下のようになる。本遺跡は、遺跡の位置の項でふれたように、昭和42年頃の開田事業によってⅣ層上面まで削られたことが地元民より聞かされ確かめられている。Ⅳ層上面に載っている土層のほとんどが、開削された所に新たに入れられ、水田や畑地の耕作土として利用された土層であり、旧表土及びⅡ～Ⅲ層は既に失われている所が大半で、かろうじて調査区のＥ区の住居跡が検出された地区でⅡ層、Ⅲ層の残土が残っている。

本遺跡の基本層序は、次の通りである。

Ⅰ層　7.5ＹＲ2/2　黒褐色シルト

現在の耕作土層で、遺跡全面に見られる。層厚は、14cm～32cm

Ⅱ層　10ＹＲ2/2　黒褐色シルト

旧表土と思われる土で、遺構の埋土となり残されている。

Ⅲ層　10ＹＲ2/3　暗褐色シルト

Ｅ区の所で僅かに検出でき、住居跡の遺構検出面となる。層厚は５～13cm

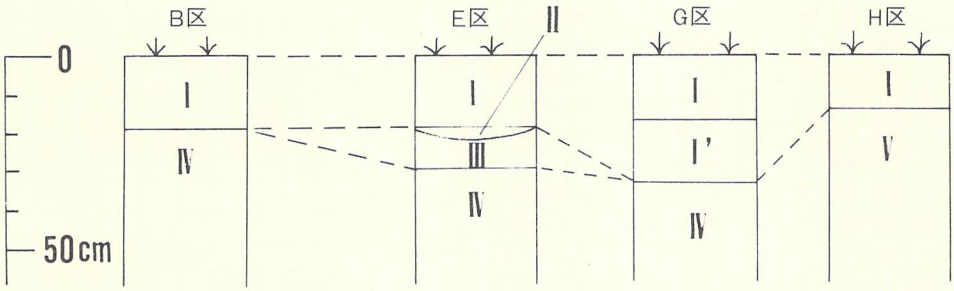
Ⅳ層　10ＹＲ5/6　黄褐色シルト

本遺跡の遺構検出面であり、本層上面までの旧表土の大部分が削られている。層厚は70～100cm

Ⅴ層ＹＲ5/4　にぶい黄褐色砂礫層

Ⅳ層と礫層の混合土層である。調査区の東側で見られることより、本層は大部分波打っていると思われる。

下記の図は、地点毎に異なる基本土層の状況である。



基本土層模式図

III　検出された遺構と遺物

発掘調査によって、以下のような遺構が検出されている。竪穴住居跡７棟、竪穴住居跡状遺構１棟、土器埋設炉３基、石囲炉２基、掘立柱建物跡17棟、カマド状焼土遺構12基、土坑41基、溝跡16条（屋敷跡１含む）陥し穴状遺構３基である。

上記の遺構の所属時期は、縄文時代から古代、中世以降のものまで広範囲にわたる。本稿では、遺構を時代別区分ではなく、種類別に分けて記述することにする。なお、各遺構に共伴した遺物については、遺構のところでふれると共に、第IV章まとめの遺物の項で遺構外の遺物と合わせた形でまとめることにする。

１．竪穴住居跡

奈良時代に位置づけられるもの３棟、平安時代に位置づけられるもの２棟、中世に位置づけられるもの２棟の計７棟が、大調査区Ｄ区、Ｅ区、Ｆ区で検出されている。

ＩＩＣ01住居跡　（図版５）

ＩＩＣ－Ｌ区の耕作土を除去したIV層上面で検出された。住居跡の大半は水田造成の際に削られており、煙道下部と住居跡掘り方の一部が残っていただけの住居跡である。

埋土は、掘り方部分が残り、黄褐色土と暗褐色土の混合土である。

平面形は、残存部より方形を呈していたと推定され、規模は東西300cm前後と推定される。

床面や壁はすでに削られておりどのような状況であったか不明であるが、掘り方部分が残っていることより床は貼り床の部分もあったと推定される。掘り方は小さな凹凸となっている。

柱穴は検出されなかった。

カマドは北壁中央にあり、燃焼部底が残存し、黄褐色土の強く焼けた焼土が64×39cmの範囲で見られ、厚さ２cmである。煙道は北壁より150cm北側に延びており、北壁近くより煙出し部分に向かって緩やかに下がっている。煙出し部分は壁が火熱のために赤変し固くなっていた。煙道内の埋土は、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で、各層に焼土粒が入る土層であり、２層、５層では焼けて赤変し固い部分も見られ、２層は天井の崩落土かと思われる。

出土遺物はない。

住居跡の時期は出土遺物がないが、他の奈良時代の住居跡（IIIＤ01住居跡）と同様の形態と推測され、ほぼ同時代頃と考えられる。

ＩＩＥ03住居跡（図版５）

本住居跡はＩＩＥ－Ｃ区のIII層中に検出されたが、住居の大半が調査区域外にあることや、上部の大部分が削られ、住居南側は攪乱穴があることから住居跡の輪郭は明瞭に捉えることが出来なかった。埋土は黒褐色土と暗褐色土の混合土に炭化物粒が混入した単層である。

規模は東西約335cmで平面形はほぼ方形と思われる。壁は明瞭に捉えることが出来なかった。床はⅣ層中にあり、床面に相当するところはⅣ層を僅かに掘り窪めていたと思われ、若干固くなっていた。床面上には炭化物があり、炭化物の樹種は栗である。柱穴は検出されていないが、他の施設として南壁際の中央付近に開口部で長径35cm、短径25cm、床面よりの深さ20cm程の小土坑がある。埋土は住居跡埋土と同様である。その他の施設は検出されていない。

出土遺物　（図版34―54・35―61、64～66・写真図版27―54・28―61、64～66）

出土遺物は土器、土製品、石製品が床面上や土坑内より出土している。土器は61の鉢で肩部に段を有し、体部にハケメが見られる小形鉢である。土製品は64～66の紡垂車であり、いずれも破損品である。断面形は台形状を呈しているもので、中央に径６㎜の孔が穿れている。石製品は54の石皿状の破片で、側面や上面は磨かれているため平滑となっている。石質は両輝石安山岩である。

ⅢＤ01住居跡（図版６・写真図版５）

ⅢＤ－Ｅ区のⅢ層上面で検出された。重複する遺構としてはⅡＤ01カマド状焼土遺構が煙道の煙出し付近を切り、住居の東南壁を切る極新期の土坑状の攪乱とがある。

埋土は３層に分けられるが、主に黒褐色土と基本土層Ⅳ層の小ブロックと炭化物粒の混合土である。埋土の状態から３層は自然流入と思われるが、１、２層は人為層と思われる。

規模は東西長下端360cm（上端378cm）、南北長下端約318cm（上端約338cm）で平面形は方形である。なお、カマドの東側の北壁はカマド南側の北壁に比べ約14cm北側に延びている。

壁はⅣ層上部まで掘り込まれ、床から僅かに外傾して立ち上がる。壁高は約20cmである。

床はⅣ層上部を床面としほぼ平坦であるが特に固い面はない。

カマドは北壁中央に設けられ、カマドの袖は石を芯材に用いてシルトを貼り付けていると思われるが、壊されているため詳細は不明である。カマドの東側袖は僅かであるが壁に近い部分をⅣ層面での造り出しとしている。燃焼部と思われる部分の下位には、直径60cm位の土坑状の浅い掘り窪みがあり、埋土は黒褐色土と炭化物粒の混合土である。燃焼部底となる土坑埋土上面には焼土粒が見られた。焚口幅は約50cm、袖の長さは60～70cm位であったと推定される。煙道は北壁部分より約180cm程あったと推定される（図示した破線部付近まで）。煙道部底は燃焼部から煙道中頃までは上がりそこから煙出し部に向かってゆるやかに下がっている。煙出し部は前述した状況であるため不明である。

この他の施設は住居のカマドと反対側の南壁際に土坑がある（土坑１）。規模は長径70cm、短径56cm、床面からの深さ12cmで平面形は楕円形状を呈している。埋土は１、２層とも黒褐色土であり１層は炭化物粒と基本土層Ⅳ層が小ブロック状に入り、２層は基本土層Ⅳ層が小ブロック状に入る土層である。この土坑の埋土上部には鉄鏃があり、土坑内には礫が入っている。

柱穴は検出されなかった。

出土遺物　（図版35―55～60、62、63、67、32―14・32―23・写真図版28―55～60、62、63、67・25―14・26）

土器、土製品、鉄製品が床面や床面近くの埋土より出土している。土器はロクロ不使用の坏と甕である。坏はいずれも内黒であり、55、56が小形丸底で、57、58は反転実測された坏破片である。55は無段で56～58は段や沈線を有する。55、56は内外面にミガキが見られ、57、58の口縁部外面には横ナデ、内面はミガキが見られる。甕は59、60と２個体で別個体である。59を見ると口縁部が外傾し肩部に段が見られるが明瞭ではない。59、60とも体部内外面にハケメが見られる。60の底面は木葉痕である。土製品は小玉と紡錘車がある。小玉（62）は直径９㎜のもので中央に径２㎜の孔が穿れている。紡錘車（67）は中央に径４㎜の孔が穿れている断面形が台形状のものである。鉄製品（63）は鉄鏃と思われるもので、先端が欠失している。残存長11.4cmで、断面形の形状は茎は方形を呈し、基部に近い部分は丸くなり、接合部らしき部分には段が見られる。先端部は残されている部分より見て平らであったと推定される。この他には南壁際の床面上に粘土の塊があり、埋土中の炭化物の樹種は栗である。その他に14と23の縄文時代の土器片と石鏃がある。

ⅡＥ01住居跡（図版７・写真図版６）

本住居跡はⅡＥ－Ｌ区の基本土層Ⅲ層中で検出された。重複する遺構としては土坑１を切りⅡＥ002土坑、ⅡＥ01、02掘立柱建物跡、土坑２に切られている。これら重複する遺構の時期は検出状況や埋土から、土坑１は縄文時代、土坑２やⅡＥ002土坑は極新期、掘立柱建物跡は中世の時期にそれぞれ該当する。本住居の埋土は５～９層までの土層で、５～７層は黒褐色土で自然層と思われる。8、9層は黒褐色土と黄褐色土（Ⅳ層）の混合土で人為層であり、本層の上面をⅡ期住居の床面としている。

本住居はカマドの在り方や埋土の状態より北カマドから東カマドに造り替えられ、さらに東カマドを造り替え、その際に床面も造り替えていることが判った住居であり、出土遺物より同一時期での建て替えを行っている住居であることが判明した。以下古い順に述べる。

Ⅰ期

北カマドから東カマドに造り替えている住居で、床面を基本土層Ⅳ層としている。規模は東西約350cm、南北370cmで平面形は南北に若干長い方形状を呈していたと考えられる。壁は上面をⅡ期住居によって削られているが直に立上がっている。壁高は残存部で約10cmである。

床は南側の壁沿いにⅣ層とⅢ層の混合土によって貼り床をしている部分が見られるが、ほぼ平坦であり、特に固い面はない。柱穴は住居内に柱穴状の小土坑が見られるがいずれも浅く配置的にも柱穴と思われないものであるため不明である。また東側壁沿いの東カマドを除去した

部分の壁沿いに直径10～25cm、深さ35cmの柱穴状の土坑が50～70cmの間隔で検出されたものがある。検出状況から東カマドに伴うとは思われず、本住居に伴う出入口部の施設の可能性がある。カマドは北カマドから東カマドに造り替えられているが、いずれもその原形を留めていない。北カマドは北壁中央付近に構築され、くり抜き式の煙道と燃焼部が残っている。燃焼部に当たる部分は90×80cmの範囲でIV層が焼けた焼土があり、煙道は北壁より120cm北に延び、底面は煙出し部に向かってゆるやかに下降している。煙出し部は直径30cmの直円筒形を呈している。埋土は黒褐色土に焼土粒、炭化物粒が僅かに混入する土層であり、３層とした部分は天上部が崩落したIV層で若干焼けていた。東カマドは東壁の南寄りにII期住居カマドの南袖部下位に見られる直径50cmの範囲で焼けた部分が燃焼部であったと考えられるが、カマド袖等はなかった。

本住居の付属施設は南西隅に検出された貯蔵穴２とした開口部で直径105cm、深さ25cmの土坑である。埋土は暗褐色土と黒褐色土からなり、堆積状況から埋め戻されていると考えられる。

本住居の出土遺物は床面上に検出された図版36―73の赤焼き坏片の１点だけである。

II期

Ｉ期住居を埋め戻して建て替えている住居である。規模は東西400cm、南北442cmで平面形は南北に長い方形状を呈し、Ｉ期住居より僅かに拡張している。壁はIII層中にあり、直に立ち上がっている。壁高は約15cmである。床はＩ期住居を埋め戻した８、９層上面を床面としているが特に固い面はなかった。柱穴は検出されない。カマドは東壁の南寄りに設けられ、Ｉ期住居の東カマドより僅かに北側に位置する。袖は石を芯にし、IV層やIII層の土と一緒に甕片を入れて造られている。カマド全体の規模は長さ80cm、幅約100cmである。燃焼部は床面より15cm位までの深さに及び、燃焼部は浅い土坑状となっている。焚口幅は約50cmである。煙道はなく、煙出し部は燃焼部より急に上がるものと思われる。またカマド北袖の下位へ燃焼部下位にかけて90×90cmの範囲で深さ20cmの掘り込みがある。埋土は小ブロック状の焼土が入っている。

本住居の付属施設は東南隅に検出された貯蔵穴１とした開口部で直径85cm、深さ35cmの土坑である。埋土は褐色土と黒褐色土の混合土を主体とした土層である。この土坑の底面より坏や鉄製品が出土している。

出土遺物(図版36・37―68～90・32―17・33―35・34―48・写真図版28・29―68～90・35―175・25―17・27―35、48)

出土遺物は、土器、陶器、鉄製品である。Ｉ期住居床面上から出土した73の赤焼き坏を除いて他はII期住居の埋土中（72、81、87)、カマド袖に使用（75～78、80、84、88、89)、カマド北脇（85)、床面上（77、79、82、83、90)、貯蔵穴１（68～71、74）の出土である。

坏はいずれもロクロ使用であり、内黒（68～72)、赤焼き（73、79、80)、須恵器（81、82）に分けられる。内黒坏は内面にミガキが見られ、底面は方形状にミガキを施している。また、68

～70の外面の底部から底面にかけて、ロクロ使用によるヘラ再調整が施されている。なお、68の底面に「＋」状の窯印らしきものが付けられている。

甕はロクロ使用のもの（76～78、83～86）、ロクロ不使用のもの（75、87～90）がある。

ロクロ使用の内83は須恵器口縁部破片であるが、他は酸化焔焼成による土師質のものである。76は部分的に体部下半にケズリが見られる。85、86の小形甕は糸切り切り離しが見られる。

ロクロ不使用の甕は内外面にハケメを施しているものである。

陶器は写真図版35―175に載せた長頸瓶の腰部分の破片がカマド南側の床面より出土した。表面には人工釉である灰釉が見られ、内面には樹脂と思われるものが付着している。

鉄製品は図版36―74の釘状のものが貯蔵穴１の底面より出土している。錆による腐蝕のため全体形は不明であるが、現存長4.1cm、幅３cmで断面形が方形を呈している。その他、埋土中より17、35、48の縄文時代の土器や石器が発見されている。

ⅢＥ01住居跡（図版８・写真図版７）

本住居跡は県教委文化課の遺跡確認調査の際に一部分が確認されていた住居であり、調査区のⅢＥ－Ｆ区を中心に基本土層Ⅰ層を除去したⅢ層面で検出されたが、耕地整理事業の際に上部は削られており、壁及び輪郭は明瞭に捉えることが出来なかった。埋土は黒褐色土と暗褐色土であり、１層には多量の炭化物が入っている。また北壁に沿って炭化物が多く検出されている。重複する遺構はⅢＥ002土坑、ⅡＥ03掘立柱建物跡に切られ、住居北壁近くにある縄文時代のⅡＥ01土器埋設炉を切っている。また、新旧関係は不明であるがⅢＥ001土坑が住居の南西に検出されている。

規模及び平面形は北壁部と西壁部の一部が判る程度であり、推定の域を出ないが、規模は東西約690cm、南北約550cmで平面形は東西に長い長方形状を呈していたと考えられる。

壁は北壁部と西壁部が残っているだけである。壁高は５cm弱である。床は北側の一部とカマド周辺に残されているが、南側は石が多く見られ床面との区別はつけられない。北側やカマド周辺の床面は平坦であるが特に固い面はない。掘り方は西壁沿いから北壁沿いにあり、掘り方底面は凹凸がある。埋土は明黄褐色土と黒褐色土の混合土で埋め戻されている。(断面図７層)

カマドは東壁北寄りの北東隅に近い部分に構築されている。袖部はなく燃焼部底が残されているもので、焼土の範囲は東西140cm、南北100cm、厚さは約15cmで、Ⅳ層が焼けている。

以上の他には本住居に伴う柱穴等は検出されていない。

出土遺物（図版38―91～116・39―124、125・32―13・33―37・34―51・写真図版29―91～111・30―124、125・35―114、115・25―13・27）

遺物は埋土中から床面にかけてとカマド部分から土器、陶器、鉄製品が出土している。土器は土師器、須恵器であり器種は坏、高台付坏、甕である。他には縄文時代の遺物が出土している。

坏はいずれもロクロ使用であり、内黒（91）、赤焼き（92～194）、須恵器（111）で92、94、96以外はいずれも破片である。92は燈明皿的な器形である。

高台付坏はいずれもロクロ使用であり、内黒（105）、赤焼き（106～110）で台部が比較的長いもの（106、109、110）と短かいもの（105、107、108）がある。

甕は112、113、124、125のもの112、124、125が須恵器で、112は口縁部破片、124、125は同一個体の甕胴部破片で外面に縄目状のタタキメが施されている。113はロクロ不使用の土師器甕であり、胴部にはケズリが見られる。

陶器は114、115であり、114は灰釉陶器で長頸瓶の底部で断面三角形のつけ高台が付けられている。115は緑釉陶器の碗の口縁部破片である。

鉄製品は116の刀子が１点出土している。現存長116cm、最大幅1.6cmである。なおこの刀子は鑑定していただいてあるのでⅤ章を参照のこと。

ⅡＦ01住居跡（図版９・写真図版８・９）

本遺構は、調査区東側ⅡＦ－Ｏ～Ｐ区に位置する。遺構の検出面は、基本層序第Ⅳ層上面の黄褐色土層である。そこに黒褐色土の落ち込みが住居跡状にあったことから遺構として確認した。

本遺構は、ⅡＦ02、ⅡＦ03掘立柱建物跡と重複関係にあるが、床面下にあるそれらの柱穴を切って構築されていることから、掘立柱建物跡より新しい時期に作られたものと思われる。

埋土は、人為堆積土で黒色土と黒褐色土の混合土である。単層で黒褐色土を主体として、黄褐色土が粒状に、黒色土がブロック状又は帯状に含まれている。又、全体に炭が多く含まれ、礫も含んでいる壁際の部分で、土層断面図には表われないが若干の黒色土が見られる。

平面形はほぼ正方形で、規模は東西が310cm、南北が300cm～310cmの長さである。

壁はⅣ層を切ってつくられており、床面から直立ぎみに立ち上がっている。壁高は場所によって異なり10cm～23cmである。

床は、砂礫層のためがりがり堅く締まっている。中央部付近で径60cm×26cmの範囲で炭化物が集中して検出されている。

柱穴は、全部で13基検出されている。位置は、４隅と東壁下１基、北壁下２基、西壁下２基、南壁下２基、出入口両脇２基である。柱穴の規模は、径、深さの順で示すと次の通りである。柱穴１（20×16cm、12cm）柱穴２（26×24cm、16cm）柱穴３（15×14cm、15cm）柱穴４（16×20cm、15cm）柱穴５（16×15cm、10cm）柱穴６（18×16cm、10cm）柱穴７（20×14cm、12cm）であり平均すると径18cm、深さ13cmほどである。

周溝状の溝は、西壁の南半部と南壁の東側に一部幅10cm、深さ約５cm程であるが周溝であるかどうか疑問である。

出入口は、南壁のほぼ中央に設けられない。規模は、東西（巾）90cm、南北（長さ）120cmで先端の平面は丸く、かつ先端から床面にむかって緩やかに下がるスロープ状になっている。

炉やカマドなどは見当たらない。

年代決定資料は発見されず遺構の所属時期は不明であるが、次の理由により中世の遺構であると思われる。①遺構は掘立柱建物跡の柱穴を切って構築されたものである。②埋土から永楽通宝が出土している。③過去の類似の遺構を扱った報告書の検討等。

出土遺物（図版32・写真図版25－８～10、16・31－165）

165は、中央部付近の埋土中位より出土した永楽通宝（明銭）である。採り上げた段階から非常に脆く、縁が欠けたりしたので拓本はとらず写真だけにしている。又、埋土中位から下位にかけて縄文土器の破片８～10、16が出土している。

ＩＩＦ02住居跡（図版10・写真図版８）

本遺構は、調査区東側ＩＩＦ－Ｋ～Ｏ区に位置する。検出面は、黄褐色土のⅣ層上面である。試掘トレンチの際に、住居跡の床面の半分以上が削平により消滅したが、東側の残存部分から遺構の存在を確認することができた。本遺構は、ＩＩＦ01、02、03の掘立柱建物跡及びＩＩＦ03住居跡状遺構、ＩＩＦ002土坑と重複関係にあるが、本遺構はそれらの遺構を切って構築されているのでこの中では一番新しい時期のものと思われる。

埋土は、ＩＩＦ01住居跡と同様に黒色土と地山の混合土からなる人為堆積土で単層である。黒褐色土が土層の主体になり、黄褐色土の粒子が全体に多く含まれている。又、炭が全体に散らばって混入している。

平面形は、かすかに部分的に残っている西壁や周辺溝の痕跡からほぼ正方形であると捉えることができる。規模は、東西310cm～320cm、南北320cm～330cmである。出入口を含む総長は395cmである。

壁は、東側の残存部分で４cm～10cmを呈する。削平された西側の壁は全くなく、痕跡をやや残すのみである。

床面は、東側ではほぼ平坦で堅く締まっている。西側では試掘の削平により全く残っておらず、床面下よりＩＩＦ01掘立柱建物跡の方形の柱穴やＩＩＦ02掘立柱建物跡の円形の柱穴など数基が検出されている。それと共に中央部付近より焼土が径28cm×22cmの範囲で検出されている。これが炉跡を示すものかどうかは不明である。

柱穴は、全部で10基検出されているが、平均すると規模は径20cm、深さ14cmほどである。各柱穴の径、深さは次の通りである。柱穴１（21×22cm、24cm）柱穴２（28×24cm、15cm）柱穴３（22×26cm、19cm）柱穴４（12×14cm、12cm）柱穴５（15×15cm、８cm）柱穴６（１０×11cm、９cm）柱穴７（28×20cm、14cm）柱穴８（20×16cm、８cm）柱穴９（28×22cm、15cm）。柱穴の

位置は、３隅と北壁下１基、西壁下２基、南壁下１基、東壁下１基、出入口脇２基である。

カマドは見当たらない。

遺構はⅡＦ01住居跡と全く類似のもので、従って遺構の所属時期は同じく中世であると思われる。出土遺物はない。

ⅡＦ03住居跡状遺構（図版28・写真図版20）

本遺構は、調査区東側のⅡＦ－Ｌ区に位置している。遺構検出面は、Ⅳ層上面で黒色土が落ちこんでいることにより遺構を確認した。これは、試掘トレンチの中に入っていた遺構である。重複する遺構としては、ⅡＦ001、002土坑がある。これら土坑と本遺構の新旧関係は、不明である。理由は、検出時の埋土が全く同じ黒色土で見分けがつかなかったこと、又埋土が浅いため容易に捉えることは出来ないが本遺構より貼り床等が特別見られないこと等による。なお本遺構とⅡＦ002土坑の北端部はⅡＦ02住居跡と重複関係にあり、切られていることからⅡＦ02住居跡よりは古い時期のものと思われる。

本遺構の平面形は、一辺が255cmほどの方形を呈する。埋土は黒色土で、壁はⅣ層を切って作られているが、上部の削平によりわずかに残っているのみで、東壁と西壁の壁高は２cm～５cmである。床は、ほぼ平坦で堅い。床面は、北側をⅡＦ002土坑、南側をⅡＦ001土坑により切られている。柱穴は見当たらない。床面中央部ち、径32cm×26cmの範囲で焼土が見られるがⅡＦ002土坑の方に伴うものと思われる。

本遺構の所属時期は、古代に属すると思われるが、重複する土坑との新旧関係は不明である。最後に、出土遺物もなく住居跡の諸条件に乏しく、住居跡にならないかもしれないことをつけ加えておく。

２．炉　　跡

炉跡は、５基検出されている。そのうち３基は、土器埋設炉で、２基は石囲炉である。検出地点は、Ｅ区とＧ区である。

ⅢＥ01土器埋設炉（図版11・写真図版10）

本遺構は、ⅡＥ－Ａ区～Ｅ区に位置して、南側のⅢＥ01住居跡の北壁と隣接している。検出面は、Ⅲ層及びⅣ層である。東西２つの埋設土器のうち、西側の方は、試掘トレンチの際にⅣ層上面より検出されている。焼土が広がり土器が埋設されていることから、遺構の確認をした。

本遺構は、東西に２つの埋設土器を伴う複合土器埋設炉である。西側の土器は直立埋設土器で、東側の土器は西方向に開口する斜位埋設土器である。両土器間の隔たりは40cmほどである。

２つの土器は類似しており、どちらも粗製大型深鉢土器と思われるが、底部及び胴下半部を残すのみで口径、器高は不明である。底部は、径13cm及び11.5cmで木葉痕を持っている。火熱のため焼成を受け、赤褐色化し又はボロボロしている。文様は、両土器とも器高にＬＲ単節斜

行縄文が縦回転で施文されている。

炉の周辺の黄褐色土は、火熱により焼土化しているが、特に開口部のある両炉間は著しく、焼土層厚は14cmを呈する。斜位埋設土器の埋土も焼成を受けており、焼土粒を多く含む黒色土である。

本遺構周辺の柱穴の位置及び規模は、図版11及び以下に示す通りである。柱穴１（径58cm×35cm、深さ47cm）柱穴２（37×32cm、23cm）柱穴３（45×40cm、35cm）柱穴４（20×20cm、35cm）柱穴５（67×20cm、60cm）柱穴６（62×25cm、68cm）である。５と６は、芯々間の距離は68cmで、本遺構を伴う住居跡の出入口と思われ、図版の円形内即ち１－４の柱穴の中にも住居跡の柱穴があるものと推定される。

出土遺物（図版31－３、４・写真図版24－３、４）

３は東側の炉、４は西側の炉として使用されていたもので、深鉢土器の底部破片である。

ⅡＧ01土器埋設炉（図版11・写真図版10）

本遺構は、調査区東側ⅡＧ－Ｊ区に位置している。南西方向3.6mには、ⅡＧ001土坑が隣接している。検出面はⅣ層上面である。焼土が楕円形状に広がり、その中に土器が削平により欠損を受けながら横たわるように埋設されていることから遺構の確認をした。

検出された炉は、北西方向に開口する斜位埋設土器を伴ったものである。土器は、欠損を受けているが底部は残り、底径9.5cmの粗製深鉢形土器である。土器周辺の焼成範囲は、径62cm×40cmにわたる。特に、土器の開口部付近はよく焼成を受け、焼土の層厚は４cmほどである。土器内の埋土は、暗褐色土で焼土をブロック状に含んでいる。埋設土器下の周辺も焼成を受けている。

検出面より土器下底部までの深さは６cmである。埋設土器の斜位の勾配は、緩やかである。

出土遺物（図版31－６・写真図版24－６）

炉に使用されていた粗製深鉢で、口縁部は欠損しており全容は不明である。大木９式～10式に相当する土器で、時期は、中期末葉と思われる。

ⅢＧ01土器埋設炉（図版12・写真図版10）

本遺構は、調査区東側ⅢＧ－Ａ区に位置している。検出面は、黄褐色土のⅣ層上面である。焼土が楕円形状に広がり、その中に土器が縦に半割りされたような状態で埋設されていたことから遺構として確認した。

検出された炉は、西方向に開口する斜位埋設土器を伴ったものである。土器は、大型粗製深鉢土器である。土器の埋設傾斜は緩やかで、平面より土器下底部までの深さは12cmである。埋設土器周辺の黄褐色土はよく焼成を受け、焼土の広がりは径125cm×35～65cmである。土器口縁部付近は特によく焼成されており、径65cmほどの円形状の焼土と化している。その中央部は柱

穴により切られている。

土器の埋土は、黄褐色土が強く焼けている橙色土が主体で、他に極暗赤褐色土と黒褐色土で占められている。埋設土器下のⅣ層も明赤褐色化し、焼土の層厚は口縁部付近で10cmである。

埋設土器は、口径26.4cm、器高49cm、底部径13.6cmを呈し、器形は底部から胴中央部までやや外傾し立ち上がった後、口縁部までは真っ直ぐに伸びる円筒形である。文様は櫛状の工具で縦横に器面全体に沈線を施文している。火熱のため赤褐色化し、胴下半部はボロボロしている。

本遺構を炉とする住居跡の存在が考えられるが、削平により壁は消失している。炉の周辺には柱穴が多く、図版12のように径5.25mの円内には27基の柱穴が存在している。これらの中に本遺構を伴う住居跡の柱穴が存在するものと推定している。なお、炉の東側にある柱穴35は、径77cm×42cm、深さ18cm、柱穴36は、径70cm×42cm、深さ20cmである。芯々間の距離は、80cmであり、住居跡とした場合に出入口の可能性がある。

出土遺物（図版31・写真図版24－５）

粗製深鉢形土器は、半完形の状態で出土している。

ⅡＥ01石囲炉（図版13、写真図版11）

本遺構は、調査中央部付近のⅡＥ－Ｄ区に位置している。北東方向6.5mに、ⅡＥ02石囲炉が隣接している。検出面は、Ⅲ層である。遺構の東半部は、試掘トレンチの際に削平され消失しているが、残存部において礫が半円状に並んで検出されたことにより遺構の確認をした。

平面形は、礫の並びからみて楕円形と推定される。半円状の炉縁には、６個の礫が並んで載っており、礫の大きさは10cm～20cmである。

炉の規模は詳細が不明であるが、構成礫の外縁間で径70cm×50cmほどと推定する。

炉内の埋土は黒褐色土で、下位には焼土層が見られず出土遺物もない。

本遺構に伴うものと思われる住居跡の壁は、既に開田当時の削平により消失していると思われる。炉の中心より半径250cm以内に検出された柱穴の配置とその規模は、図版13及び以下に示す通りである。柱穴１（径30cm、深さ12cm）柱穴２（径22cm、深さ20cm）柱穴３（径22cm、深さ18～42cm）柱穴10（径13cm、深さ18cm）柱穴11（径19cm、深さ16cm）柱穴12（径20cm、深さ27cm）柱穴13（径20cm、深さ35cm）柱穴14（径16cm、深さ15cm）の14柱穴がある。石囲炉に伴うものと思われる住居跡の主柱穴は、上記穴の中に存在すると推定するが、特定する柱穴は不明である。

ⅡＥ02石囲炉（図版14・写真図版11）

本遺構は、調査区中央部付近のⅡＥ－Ｈ区に位置している。検出面はⅢ層で、礫がほぼ円形に並んで検出されたことから遺構であることを確認した。平面形は、楕円形である。規模は、構成礫の外縁間で75cm×51cmを計る。炉縁に載る礫は11個からなり、東側がやや開口しているのは、この部分の礫の移動が考えられる。礫の大きさは、10cm～20cmである。埋土は、２層か

らなり、上位が黒褐色土で層厚は約5cmである。これは、II層の土で焼土粒が僅かに混じっている。下位は、層厚5cmの明赤褐色土（焼土）で上面ががりがりに固くなっており、粘土質が焼成を受けたものである。出土遺物としては、炉中央部から土器1個体の破片の一部と思われる縄文土器片数片が焼土上面にへばりつくような形で検出されている。

本遺構は、住居跡に伴う炉と考えられるが、壁は削平により消失し住居跡の範囲が不明である。炉を中心とした半径3.1m内の柱穴分布状況及びその柱穴規模は、図版14及び次の通りである。柱穴2（径30cm、深さ12cm）柱穴3（径18cm、深さ10cm）柱穴4（径22cm、深さ18cm）柱穴5（径16cm、深さ10cm）柱穴7（径25cm、深さ9cm）柱穴8（径25cm、深さ13cm）柱穴9（径22cm、深さ12cm）柱穴10（径25cm、深さ10cm）である。推定にすぎないが、上記柱穴の中の本遺構を包含する住居跡の主柱穴が含まれているものと思われる。

出土遺物（図版31－1・32—21・写真図版25—1・26）

焼土上面より検出された粗製深鉢の胴部破片であると、RL縦回転の斜縄文が施されている。時期は中期末葉～後期初頭頃に位置づけられると思われる。炉の周辺よりチップ及び21の石鏃が検出されている。

3．掘立柱建物跡

柱穴は、500個ほど検出され、それらの柱穴の中から野外調査の段階ではっきり建物跡として把握できたのは、方形の掘り方をもつ掘立柱建物跡3棟と掘り方が円形の柱穴の建物跡1棟の計4棟である。室内整理に入ってからは、建物跡として柱穴間に線引きの可能なものがないか、図面やフィールドカードをもとに考察してみた。その結果、あるいは誤まりがあるかもしれないが、以下に記すような13棟の掘立柱建物跡の存在を考えることができた。

掘立柱建物跡は、分布状況からみて大きく4群に分けられる。第I群は、C～D区の5棟、第II群はE区の4棟、第III群はF区の6棟、第IV群はG～H区の2棟である。第I群の柱穴は比較的小さなものが多く、埋土は黒色土である。それに対し、第II群～第IV群の柱穴は、規模の大きなものがかなりあり、埋土は、黒褐色土ないし黒色土に黄褐色土を粒状又は小ブロック状に含んでいる。第II群の柱穴は、円形の規模の大きなものが多く、炭化穀類が出土した柱穴もある。方形の掘り方をもつ柱穴の掘立柱建物跡は、F区で2棟、G区で1棟検出されている。所属時期は、埋土、遺物、切り合い関係等より考えて古代であり、その他の建物跡は中世以降と考えられる。以下、各掘立柱建物跡遺構について述べる。

II F01掘立柱建物跡（図版15・写真図版12）

本遺構は、調査区東側II F－K区に位置する。柱穴3、4は、II F02住居跡と重複関係にある。南側には、II F03住居跡状遺構が隣接している。検出面はIV層上面で、黒色土の小さい方形の広がりが1.2m～1.9m間隔に10基検出されたことから、掘立柱建物跡遺構として確認した。な

お、重複関係にある柱穴３、４は、試掘段階で検出されている。

本遺構は、南北棟で棟方向はN－４°－Eを計る。規模は、桁行３間(4.4m～4.6m)、梁行２間（3.5m）である。柱穴は、10基とも方形の掘り方をもつもので、全体の柱穴配置は方形である。柱穴間の距離は、梁間1.7m～1.8m、桁間1.2m～1.9mである。柱穴の規模は、検出面での径は36cm～46cm、深さは22cm～40cmである。柱痕が検出できたものは６基の柱で、検出面又は断面精査の段階で確認することができた。柱痕径は、14cm～18cmである。

埋土は、いずれも黒色土で、黄褐色土を小ブロック状又は粒状に少量含む柱穴もある。柱穴の６、７は、それぞれ他の柱穴により切られている。遺構の所属時期は古代と思われる。

出土遺物は内黒の坏の口縁部片、甕や坏のロクロ不使用の胴部破片などが、柱穴の掘り方部分の埋土上位から数片出土している。

ⅢＦ01掘立柱建物跡（図版16・写真図版12）

本遺構は、調査区のⅢＦ～Ｉ～M区付近に位置する。北方向５ｍには、ⅡＦ01掘立柱建物跡が隣接し、遺構内にはⅢＦ001陥し穴状遺構が重複している。柱穴９は、ⅢＦ002土坑を切っている。検出面は、Ⅳ層上面である。黒色土が、方形又は円形状にほぼ等間隔に14基広がっていたことから遺構の確認をした。南北棟で棟方向はN－３°－Wを計る。規模は、桁行３間(5.9m）梁行２間（4.3m）の身舎に桁行3間(5.9m)、梁行１間（1.7m）の東廂をもつ建物である。ⅡＦ01掘立柱建物跡に比し、身舎は一回り大きくそれに廂のついた建物といえる。

全体の柱穴配置は、３間×３間で、ほぼ６ｍ四方の正方形配置である。身舎の梁間は2.1m～2.2m、桁間は1.9m～2.0mである。柱穴の形は、11を除いて方形を呈している。規模は検出面での径37cm～54cm、深さ８cm～30cm程度である。埋土は、柱痕部分は黒褐色土を呈して焼土粒、炭などが入り柔らかい。掘り方部分は、黒褐色土と黄褐色土の混土で固くなっている。遺構の所属時期は、古代と思われる。

出土遺物　（図版32―25・写真図版26）

ロクロ不使用の壺の底部片で、外面にハケメが見られるものやロクロ不使用の坏や甕の胴部破片が出土している。その他、25の石鏃が検出されている。

ⅢＧ01掘立柱建物跡（図版17）

本遺構は、調査区東側のⅢＧ－Ｆ～Ｊ区に位置し、調査区外へと遺構が伸びている。北西方向９ｍにはⅢＦ01掘立柱建物跡が、北側にはⅢＧ01陥し穴状遺構が隣接している。検出面は黄褐色土のⅣ層上面で、黒色土がほぼ等間隔に落ちこんでいることにより遺構の存在を確認した。

検出された柱穴は６基で、遺構は調査区外へ延びているため建物の規模、構造等の詳細は不明確であるが、ⅢＦ01掘立柱建物跡とほぼ同規模の２間×３間の身舎に東廂のついた掘立柱建物跡と推定される。ただ、廂の柱穴と思われる45の柱穴の南側にそれに続く柱穴が検出されて

おらず、あるいは廂のない建物になるかもしれない。

南北棟で棟方向は磁北を指しⅡF01、ⅢF01掘立柱建物跡と一致している。建物の規模は、梁行２間（3.6m）に廂2.0mがついている。南北は2.7mを測るのみでその先は不明である。

柱穴配置は、方形である。柱間の長さは、梁間1.7m～1.9m、桁間2.1m～2.2mである。

柱穴の形は、５基が方形で、廂の部分と思われる柱穴45は円形である。方形柱穴のうち柱痕をもつものは、１基で、柱痕の規模は径15cmほどである。柱穴の規模は、径35cm～45cm、深さ９cm～31cmほどを呈する。柱穴46は、ⅢG01陥し穴状遺構の南端壁を切っている。遺構の所属時期は古代に位置づけられると思われる。

ⅡH01掘立柱建物跡（図版17）

本遺構は、調査区東端ⅡH－C～D区に位置する。重複する遺構としては、ⅡH001、002、004土坑がある。検出面はⅤ層上面である。桁行7.1m～7.3m、梁行4.0m～4.2mの長方形の建物で、柱位置は四隅の他に北辺に２基、南辺に１基見られる。柱穴の平面形は円形で規模は、径23cm～32cm、深さ８cm～40cmである。遺構の所属時期は、重複の土坑よりも新しいと考えられる。南北棟建物で、棟方向はN－３°－Wである。

ⅡE04掘立柱建物跡（図版18）

本遺構は、調査区中央部E区の北端、ⅡE－K区付近に位置し、調査区外へ延びている。検出面はⅢ層である。柱穴は、142、153の２隅のほか、147、150、154が関連すると思われる。ほぼ方形に配置された建物跡と思われるが、調査区外へ延びているため、遺構の全容は不明である。142、153間の長さは4.8mで３間からなる。153、154の柱間は2.1mである。柱穴の平面形は円形で、規模は径22cm～35cm、深さは８cm～24cmである。建物の棟方向はN－27°－Eである。

ⅡD03掘立柱建物跡（図版18）

本遺構は、ⅡD－L区～ⅢD－I区にかけて位置する。検出面はⅣ層上面である。柱穴は４基でほぼ正方形に配置されている。建物の棟方向はN－５°－Eである。柱穴間は、東西が3.4m前後、南北が3.2m前後である。柱穴の平面形は、柱穴98の方形を除き円形である。規模は柱穴98の径18cm×30cmを除き、径25cmほどである。深さは、柱穴98の29cmを除き、８cm～15cmほどである。この建物跡は、竪穴式住居の柱穴となる可能性もある。

ⅢC01掘立柱建物跡（図版19）

本遺構は、調査区西側C区のⅢC－M区に位置する。柱穴は３基だけだが、１基はⅢC001土坑により壊され、ほぼ方形に配置されていたものと思われる。建物の棟方向は、磁北を指す柱穴間は、東西が3.1m、南北が2.9mである。柱穴の平面形は円形で、規模は径15cm～20cm、深さは８cm～21cmである。なお、この建物跡は、竪穴式住居の柱穴となる可能性もある。

II D02掘立柱建物跡（図版19）

本遺構は、D区の北端II D－0区に位置する。検出面はIV層上面である。柱穴は4基で、長方形に配置されている。東西棟建物で、棟方向はE－5°－Sである。柱穴間は、桁行3.90m、梁行1.40m～1.52mである。柱穴の平面形は円形で、3基の規模は、径20cm～30cmであるが、柱穴183は楕円形を呈し、口径52cm×42cmである。深さは、12cm～26cmである。

II D01掘立柱建物跡（図版20）

D区の北端II D－J～K区に位置する。検出面はIV層上面である。柱穴は4基で、長方形に配置されている。南北棟建物で、棟方向はN－9°－Eである。桁行3.7m、梁行2.3m～2.6mで南辺が短い。柱穴の平面形は円形で、規模は、径16cm～26cm、深さは8cm～36cmである。

II C01掘立柱建物跡（図版20）

本遺構は、西側C区のII C－O～P区に位置する。柱穴は4基で、ほぼ正方形に配置されている。建物の棟方向は、N－30°－Wである。柱穴間は、3.5mほどである。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は、径20cm前後、深さは径12cmほどだが柱穴1のみ23cmである。なお、この建物跡は竪穴式住居の柱穴となる可能性もある。

II E01掘立柱建物跡（図版21）

本遺構は、調査区中央部E区のII E－L～P区に位置する。重複する遺構としては、II E01住居跡及びII E03掘立柱建物跡がある。検出面は、III層である。柱位置から考えて、ほぼ正方形の2間×2間の建物跡と思われるが、北西隅と西辺には柱穴が見つかっていない。東西棟建物と思われ、建物の東西の長さは4.7mで、柱穴間は2.3m～2.5m、南北の長さは4.6mで柱穴間は2.1m～2.5mである。柱穴は平面形が円形で、規模は径30cm～53cm、深さは18cm～36cmである。所属時期は、柱穴173がII E01住居跡を切っていることから、住居跡よりは新しく中世以降と思われる。II E03掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

II E02掘立柱建物跡（図版21）

本遺構は、調査区中央部E区のII E－H区～III E－E区に位置する。検出面は、III層である。四本柱の南北棟建物で、棟方向N－4°－Eである。規模は、南北が5.6m～5.8m、東西が3.0m～3.3mである。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は、径32cm～50cm、深さは46cm～60cmである。柱穴E－7、E－1には柱痕が見られる。

〔出土遺物〕柱4の埋土中より炭化穀類が検出されている。

II E03掘立柱建物跡（図版21）

本遺構は、調査区中央部E区のII E－L区～III E－I区付近に位置する。重複遺構としてはII E01掘立柱建物跡、II E01住居跡がある。検出面は、III層である。東西棟建物を呈し、棟方向はE－6°－Sである。建物の規模は、桁行5.8m、梁行4.2m～4.6mの長さである。柱穴は6

基からなり、桁間は2.5m～3.2mである。柱穴の規模は、径27cm～39cm、深さ22cm～44cmで、4基の柱穴は柱痕を有している。本遺構は、住居跡を切っていることから、所属時期は中世以降と思われる。ⅡE01掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

上記のⅡE02、ⅡE03掘立柱建物跡のほかに、更にそれらを包含するより大きな建物跡を想定できる。即ち、それらの北辺の柱穴170、171、E2、E1を利用した図版21の一点鎖線に示したような南廂をもつ大型の東西棟建物跡である。その場合の建物の規模は、東西約11.1m×南北約5.5mほどとなり、8m×1.2mほどの廂が南辺に付属する。突き出した廂部分の柱穴は、E32、E17、E26、E30である。更に別の考え方をすれば、大型建物跡の南辺及び廂部分を東西に延びる柱穴列と想定する見方もできる。

ⅡF04掘立柱建物跡（図版22）

本遺構は、調査区東側F区のⅡF－L～P区付近に位置する。重複遺構としては、ⅡF001、002土坑がある。本遺構は、土坑を切って作られていることから、両者の新旧関係は本遺構の方が新しい。検出面は、Ⅳ層上面である。本遺構は、柱穴44、7、39、10を四隅とする桁行5.6m～5.9m、梁行3.6m～3.8mの南北棟建物である。棟方向はN－8.5°－Eである。柱穴は他に東辺に4基、南辺に1基、西辺に2基みられる。柱穴の平面形は円形で、規模は径26cm～50cm、深さは5cm～42cmである。重複するⅡF03、05、ⅢF01掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。本遺構の所属時期は、中世以降に位置づけられると思われる。

ⅡF05掘立柱建物跡（図版22）

本遺構は、ⅡF－L・P～ⅢF－I・M区に位置する。北西隅の柱穴を欠くが、柱穴36、8、25を結ぶ長方形の建物の存在を想定することができる。規模は、梁行5.6m、桁行7.9mの大型の南北棟建物である。棟方向はN－7°－Eである。柱穴は他に東辺に4基、南辺に3基、西辺に5基、北辺に2基が見られる。柱穴の規模は径15cm～47cm、深さ6cm～38cmである。重複する遺構はⅢF01、ⅡF03、ⅡF04掘立柱建物跡である。新旧関係はⅢF01建物よりは新しくⅡF03、04との新旧関係は不明である。

ⅡF02掘立柱建物跡（図版23）

本遺構は、調査区東側F区のⅡF－O～P区付近に位置している。重複する遺構はⅡF01、02住居跡とⅡF03竪穴状遺構がある。ⅡF01、02住居跡は本遺構を切り、ⅡF03竪穴状遺構は、本遺構に切られている。即ち、三者の新旧関係は、本遺構はⅡF03竪穴状遺構より新しく、ⅡF01、02住居跡より古いという関係になる。又、ⅡF03～05掘立柱建物跡とも重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。検出面は、Ⅳ層上面である。南東隅の柱穴が検出されていないが、3間×1間の建物跡と思われる。東西棟建物で、棟方向は、E－5°－Sである。桁行は7.5mで、柱穴間は2.1m～2.9mである。梁行は3.0mである。柱穴の平面形は円形で、規模

は径16cm～30cm、深さ７cm～38cmである。本遺構の所属時期は、中世以降に位置づけられ、ⅡＦ01、02住居跡よりは古い時期と思われる。

ⅡＦ03掘立柱建物跡（図版23）

本遺構は、調査区東側Ｆ区のⅡＦ－Ｐ区付近に位置している。重複する遺構としては、ⅡＦ01、02住居跡がある。本遺構を住居跡が切っているので住居跡よりも古い時期のものといえる。又、ⅡＦ02、04、05各掘立柱建物跡とも重複し合っている。互いの新旧関係は不明である。東西棟建物で、棟方向はＥ－６°－Ｓである。検出面はⅣ層上面である。柱穴は長方形に配置され、桁行３間7.2m、梁行１間3.3m～3.8mを計る。桁間は、2.2m～2.5mである。柱穴の平面形は円形で、規模は、径25cm～43cm、深さは19cm～38cmである。遺構の所属時期は、中世以降でⅡＦ01、02住居跡よりは古い時期に位置づけられると思われる。

４．カマド状焼土遺構

カマド状焼土遺構とした理由は、その形態がカマドのような形状を呈していること、及び他遺跡の過去の調査で類似の遺構をそのように名付けていることによる。検出地点及び検出数は調査区中央付近のＤ区で１基、調査区東側のＧ区で11基の計12基であり、Ｄ区検出のものは焚口部を北側にしているが、Ｇ区検出のものは焚口部を南側としている。Ｇ区の11基は、Ｄ区のものに較べ遺構の残存状態は悪く、底面しか残っていない状況にある。なお、ⅡＧ06、09のカマド状焼土遺構は、平面を省略している。理由は、水はけが悪い上に湧水も重なり、調査に支障をきたしたことによる。

ⅡＤ01カマド状焼土遺構（図版24・写真図版15）

本遺構は調査区中央部のⅡＤ－Ｐ区に位置する。ⅢＤ01住居跡の煙道部を切って構築されている。従って、本遺構は住居跡よりも新しい時期のものといえる。検出面は、Ⅲ層で煙道精査中に遺構を確認した。長軸の方向は南北を指し、燃焼部は南側、焚口部は北側にある。平面形は溝状を呈し規模は長軸で150cm、燃焼部径50cm×35cm、焚口部100cm×55cmほどである。検出面からの燃焼部の深さは30cmほどである。埋土は、燃焼部は焼土で被われており、層厚５cmである。焚口部は、暗褐色土と極暗褐色土で占められ、下位に炭化物が多く見られる。壁は、燃焼部では底部から開口部にかけて直立ぎみに立ち上がっている。底面は、燃焼部から焚口部へ向けて上昇している。出土遺物はない。

ⅡＧ01カマド状焼土遺構（図版24・写真図版24）

本遺構は、調査区東側のⅡＧ－Ｐ～ⅢＧ－Ｍ区にかけて位置する。東方１mには、ⅡＧ10カマド状焼土遺構が並立している。検出面は、Ｖ層の黄褐色土礫層で、円形に焼土が広がっていることから遺構を確認した。上部は削られており、底面しか残っていない。燃焼部は北側へ焚口部は南側にある。規模は長軸145cmあり、燃焼部は径60cm×70cmほどの楕円形を呈し、焚口部

は径65cm×45cmほどの溝状を呈している。燃焼部の埋土は、焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色土と焼土（明赤褐色土）で構成されている。焼土は、下位にあり層厚５cmである。焚口部は、黒色土で占められる。燃焼部は、深さ12cmで凹んでいる。焚口部は、凹みがみられるものの、全体的には燃焼部より緩やかに上昇している。出土遺物はない。

ⅡＧ02カマド状焼土遺構（図版24・写真図版15）

本遺構は、調査区東側Ｈ区寄りのⅡＧ－Ｎ～Ｏ区に位置している。南東方向にⅡＧ07カマド状焼土遺構があり、焚口部と接している。検出面はＶ層で、焼土の広がりとそれに続く溝状の黒色土の落ちこみにより遺構の確認をした。長軸方向は、ほぼ南北を指し、北側が燃焼部である。規模は、長軸285cmあり、燃焼部は径127cm×85cmほどの楕円形状を呈し、焚口部は、径155cm×75cmほどの溝状を呈している。埋土は黒褐色土で燃焼部では下位に層厚６cmの焼土があり、底部を被っている。又、焚口部の埋土下位では炭化物粒を多く含む。燃焼部、焚口部ともに深さは14cmである。底面は、ほぼ平坦で、焚口部は燃焼部より緩やかに上昇している。燃焼部の底面は砂礫層でがりがり焼けている。焚口部に天井部分の崩壊土が残っている。出土遺物はない。

ⅡＧ03カマド状焼土遺構（図版24・写真図版14）

本遺構は、調査区東側のＨ区寄りのⅡＧ－Ｏ区に位置している。南側にあるⅡＧ04カマド状焼土遺構とは切り合い関係にあり、新旧関係は本遺構の方が古い。検出面はＶ層である。平面形は、燃焼部が円形状で、焚口部は溝状である。規模は、燃焼部径90cm×80cm、焚口部径90cm×55cmで、長軸は180cmである。長軸の方位はほぼ南北を指し、燃焼部は北側にある。埋土は、燃焼部は上位が黒色土で、中位から下位にかけては焼土で大部分を占める。焼土層厚は13cmである。炭化物粒は、下位でみられる。焚口部は、黒褐色土、黒色土以外ににぶい黄褐色土で構成されている。燃焼部は深さ15cmで凹んでいる。それに対し焚口部は、深さ６cmで平面はほぼ平坦である。焚口部の先端部は、ⅡＧ04カマド状焼土遺構の燃焼部に切られている。出土遺物はない。

ⅡＧ04カマド状焼土遺構（図版24・写真図版14）

本遺構は調査区東側のＨ区寄り、ⅡＧ－Ｐ区に位置している。東方1.5mにⅡＧ05カマド状焼土遺構が隣接している。検出面はＶ層である。燃焼部が、ⅡＧ03カマド状焼土遺構の焚口部の先端を切って構築されている。平面形は、燃焼部は円形状を呈し、全面焼土に被われている。焚口部は、溝状であるがほとんど削られてしまい輪郭が不明確である。規模は、長軸で305cmあり、燃焼部径は85cm×80cm、焚口部径は228cm×42cmである。長軸の方位は南北を指し、燃焼部は北側、焚口部は南側にある。燃焼部の埋土は、黒褐色土及び黒色土で、下位に厚さ４cmの焼土層がみられる。燃焼部はよく焼けており、深さは10cmで凹んでいる。焚口部の深さは３～６

cmである。

II G05カマド状焼土遺構（図版25・写真図版14・15）

本遺構は、調査区東側H区に隣接するII G－O～P区に位置している。東方1.5mにII H01土坑が隣接している。検出面は、V層上面である。焼土が円形に広がっていることから、遺構の確認をした。長軸の方向は、ほぼ南北を指し、燃焼部が北側、焚口部が南側につくられている。平面形は、燃焼部が円形状を呈し、全面焼土で被われ赤褐色化している。焚口部は、溝状を呈している。規模は、長軸で194cmほどあり、燃焼部径は110cm×100cmほど、焚口部径は、100cm×75cmほどである。埋土は、焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色土と焼土で大半を占め、一部暗褐色土がみられる。燃焼部の焼土層厚は最大8cmほどである。燃焼部底面より炭化物が多く検出されている。燃焼部は深さ8cmで、凹んでいる。焚口部は深さ5cmほどで、底面は、平坦で燃焼部より緩やかに立ち上がっている。出土遺物はない。

II G06カマド状焼土遺構（図版25・写真図版15）

本遺構は、調査区東側H区寄りのII G－N区に位置している。南西方向にII G02カマド状焼土遺構、北側にII G02溝が隣接している。検出面はV層で、焼土の広がりと黒色土の落ちこみから遺構を確認した。平面図は省略している。長軸の方向は南北を指し、燃焼部は北側に焚口部は南側にある。土地の削平が著しいため遺構は底部しか残存せず輪郭も不鮮明である。平面形は、燃焼部が円形状で、焚口部は溝状である。規模は、長軸で215cmほど、燃焼部は径85cmほどを計る。燃焼部の埋土は、炭化物粒や焼土粒を含む黒褐色土と焼土からなり、焼土層厚は8cmを計る。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは8cmほどである。出土遺物はない。

II G07カマド状焼土遺構（図版25・写真図版15）

本遺構は、調査区東側のH区寄り、II G－O区に位置している。焚口部は、西側に隣接するII G02カマド状焼土遺構の焚口部により切られている。新旧関係は、本遺構の方が古い。検出面は、V層で焼土混じりの黒色土の落ちこみがカマド状に見られることから遺構の確認をした。長軸は、南東～北西方向を指し、南東側に燃焼部が、北西側に焚口部がある。平面形は、燃焼部が円形状、焚口部は溝状を呈する。規模は、長軸が135cmほどで燃焼部径105cm×80cm、焚口部径65cm×50cmほどである。燃焼部の埋土は、黒褐色土で焼土粒や炭化物粒を全体に含んでいる。焼土は、燃焼部の縁の方に厚く見られ、焼土の残りとしてはよい方である。燃焼部は深さ13cmで、凹んでおり、中央部に天井からの崩落壁と思われる黄褐色土の塊がみられる。焚口部は、燃焼部より緩やかに上昇しており、数個の礫の散在が見られる。又、燃焼部南縁に見られる礫は、焼けている。出土遺物はない。

II G08カマド状焼土遺構（図版25）

本遺構は、調査区東側のH区寄り、II G－P区に位置している。北側にII G04、南側にII G

01カマド状焼土遺構が隣接している。検出面はⅤ層で、焼土が円形に広がっていることから遺構の確認をした。長軸の方向は、南北を指している。平面形は、楕円形状を呈し、北側が燃焼部、南側が焚口部になっている。規模は、長軸が110cmで、燃焼部は径65cm×55cmほど、焚口部は径55cm×50cmほどである。埋土は黒褐色土で、焼土粒、炭化物粒を含んでいる。特に、燃焼部底部付近は焼土をブロック状に含んでいる。燃焼部は、深さ10cmほどで凹んでおり、焚口部は、燃焼部より緩やかに上昇している。出土遺物はない。

ⅡG09カマド状焼土遺構（図版25）

本遺構は、調査区東側のH区寄り、HG－N区に位置している。北側にⅡG02溝、南東側にⅡH003土坑が隣接している。検出面はⅤ層である。焼土の広がりから遺構を確認した。平面図は省略している。削平が著しく、残存状況は非常に悪い。壁は全くなく、底部の痕跡があるのみである。燃焼部は円形状を呈し、深さは8cmほどで焼土層も見られるが、焚口部は不鮮明である。長軸方向は、南北を指している。遺物は出土しない。

ⅡG10カマド状焼土遺構（図版25・写真図版15）

本遺構は、調査区東側H区寄り、ⅡG－P～ⅢG－M区に位置する。東方1.4mにはⅢG01溝、西方0.6mにはⅡG01カマド状焼土遺構が隣接している。検出面はⅤ層で、黒色土の周りに環状に焼土が検出され、かつ溝状に黒色土が広がっていることから遺構の確認をした。長軸方向は南北を指し、燃焼部は北側、焚口部は南側にある。平面形は、燃焼部が円形状を焚口部は溝状を呈している。規模は、長軸190cmを計り、燃焼部径は105cm×100cmほど、焚口部径は85cm×60cmほどである。燃焼部の埋土は、黒褐色土が主で中位に黒色土もみられる。いずれも焼土粒と炭化物粒を全体に含み、特に下位では焼土がブロック状に多く含まれている。焼土層は10cmである。焚口部の埋土は、黒褐色土で炭化物粒を含み、燃焼部付近では焼土粒が多く含まれている。燃焼部の深さは、20cmほどで凹んでいる。焚口部の掘り入みは、燃焼部へ向けて、緩やかに下降している。出土遺物はない。

ⅡG11カマド状焼土遺構（図版24）

本遺構は、調査区東側のH区寄り、ⅡG－P区に位置している。ⅡG04カマド状焼土遺構の焚口部の先端を切って燃焼部が構築されている。燃焼部の規模は、径76cm×54cmほどである。燃焼部の深さは6cmほどで、下方に焼土の堆積が見られる。焚口部は溝状で、長さ44cmほどである。長軸は南北方向を指し、燃焼部は北側にある。遺物は出土しない。

以上12基のほかに、カマド状焼土遺構に類似した遺構にⅡF002土坑がある。形態状からはカマドに似ており、又焼土の存在からカマド状焼土遺構の可能性も考え得るが、焼土分布の様子や土師器が10数片出土していることは、ⅡG区の遺構群の出土状況とは異っている。従って、不明な点が多い遺構である。

5．土　坑

土坑は全体で39基検出されている。その内、縄文時代に属するものは７基（ⅡＢ001、ⅢＢ001、ⅡＥ003、ⅢＦ001・002、ⅡＧ001・002土坑）、平安時代に属すると思われるもの10基（ⅡＤ001・003、ⅢＤ003・005、ⅢＥ001・002、ⅡＦ001・002、ⅡＨ004・005土坑）、時期不明のもの11基（ⅠＡ001、ⅠＢ001～005、ⅢＤ004、ⅢＧ001・003、ⅡＨ001～003土坑）、現代のもの10基（ⅡＣ001土坑他９基）である。

ⅡＢ001土坑（図版26・写真図版16）

西側調査区のⅡＢ－Ｄ区に位置する。検出面は、Ⅳ層上面である。検出面での平面形は、円形である。断面形はフラスコ形を呈し、断面精査にあたっては、長方形に底面まで掘り下げる方法をとった。地割れなどにより、精査、実測の段階で開口部の一部が崩落している。規模は、検出面での開口部径106cm×103cm、底部径154cm×147cm、深さ49cmである。埋土は、15層に細分されるが黒色土が主体で、最下層の褐色土は、黒色土が混じり中央部が厚く堆積している。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

ⅢＢ001土坑（図版26・写真図版16）

西側調査区のⅢＢ－Ｆ区に位置する。検出面はⅣ層上面である。平面形は円形を呈する。断面形はフラスコ形である。断面精査は、長方形に底部まで掘り下げる方法をとった。西半分の精査、実測の段階で地割れ等により開口部の一部が崩落している。規模は、開口部径が検出面で77cm×85cm、底部径130cm×125cm、深さ37cmである。埋土は、５層から成り、黒色土で大半を占め、最下位の黒色土を含むにぶい黄褐色土は中央部が厚く堆積している。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

ⅡＥ003土坑（図版26）

中央部のⅡＥ－Ｄ区に位置する。平面形は、楕円形を呈する。断面形は皿形で、規模は、開口部径75cm×66cm、底部径60cm×52cm、深さ16cmである。埋土は、黒褐色土の単層である。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

ⅢＦ001土坑（図版26・写真図版16）

調査区中央部寄りの南側ⅢＦ－Ｅ区に位置する。検出面はⅣ層上面で、平面形は楕円形である。断面形は皿形で、規模は、開口部径114cm×85cm、底部径104cm×80cm、深さ13cmである。埋土は、３層からなるが、黒色土が大半を占める。底面はほぼ平坦であるが、北と東の壁際に数個の小礫が見られる。遺物は出土しない。

ⅢＦ002土坑（図版26・写真図版16）

Ｆ区の南端のⅢＦ－Ｊ区に位置する。ⅢＦ01掘立柱建物跡の柱穴９により、南東部壁を切られている。平面形は、楕円形を呈する。断面形は皿形で、規模は、開口部径88cm×76cm、底部

径78cm×62cm、深さ6cmである。埋土は黒褐色土である。底面はほぼ平坦であるが、中央部より20cm以下の礫が数個検出されている。出土遺物は、図版32－2の深鉢胴部破片が床面中央より出土している。表面には単節斜縄文が施文されている。

II G001土坑（図版26・写真図版16）

調査区東側のII G－F区に位置する。検出面はIV層上面である。平面形は円形である。断面形は皿形で、上部は削平によりほとんど残っていない。規模は、開口部径72cm×75cm、底部径62cm×65cm、深さ9cmである。埋土は、単層の黒色土である。底面は平坦で、出土遺物はない。

II G002土坑（図版26・写真図版16）

調査区東側のII G－G区に位置する。検出面はIV層上面である。平面形は楕円形である。断面形は浅皿状で、上部は削平により全く残っていない。底部に土坑の痕跡を残すのみである。規模は、開口部径72cm×62cm、底部径66cm×57cm、深さ4cmである。埋土は、黒色土の単層である。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

II D001土坑（図版28・写真図版17）

調査区西側のII D－G区に位置している。検出面は、黄褐色土のIV層上面である。平面形は、円形を呈している。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径76cm×76cm、底部径78cm×82cm、深さ26cmである。埋土は3層からなり、上位は黒色土、下位は人為堆積層（混土層）である。底面の中央部付近に径35cm、深さ10cmほどの円形の小さな土坑状の凹みが見られる。

出土遺物としては、坏の小破片がある。内黒でロクロを使用している。

II D003土坑（図版28・写真図版17）

本遺構は、II D－D～H区に位置している。平面形は、楕円形である。断面形はフラスコ形を呈している。壁は、底部から開口部にかけて南東及び北西で外傾し立ち上がるが、その他では内弯しつつ立ち上がっている。規模は、開口部径64cm×40cm、底部径58cm×58cm、深さ26cmである。埋土は4層からなり、上位は黒褐色土、中位は黄褐色土と黒褐色土の混合土、下位は黒褐色土と明黄褐色土で構成されている。底面の中央部に、径22cmの小さな土坑状の円形の凹みを持っている。出土遺物はない。

III D003土坑（図版28・写真図版17）

調査区西側のII D－E区に位置し、検出面はIV層である。平面形は、円形を呈する。断面形は、皿形である。規模は、開口部径70cm×67cm、底部径70cm×60cm、深さ23cmである。埋土は2層からなり、黒褐色土で占められている。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

III D005土坑（図版28、写真図版17）

調査区西側のIII D－A区に位置している。平面形は、円形を呈している。断面形は皿形である。規模は、開口部径50cm×50cm、底部径44cm×42cm、深さ10cmである。埋土は2層からなり

黒褐色土が主体である。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

III E 001土坑（図版８・写真図版17）

本土坑はIII E 01住居跡の南西隅付近と思われる位置に検出された土坑である。III E 01住居跡の付属施設かどうかは疑問のものである。規模は長径95cm短径85cm、深さ15cmで平面形は円形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物は図版39―117、119、120のロクロ使用の坏と、130の須恵器大甕破片である。坏は117が内黒坏であるが他は赤焼き坏である。須恵器甕は表面にタタキ目、裏面に当て具痕である青海波文がある。この他には、縄文時代の遺物である図版34―50の磨石１点が埋土中から出土している。

III E 002土坑（図版８・写真図版７）

本土坑はIII E 01住居址のカマドの一部を切って作られている土坑である。規模は長径105cm、短径90cm、深さ25cmの平面形は楕円形状を呈する。埋土は３層よりなり、上層は黒褐色土から暗褐色土、下層は黒色土と明黄褐色土である。黒色土である５層は炭化物が特に多く入り、すべての埋土に焼土粒、炭化物粒が混入している。出土遺物は図版39―118、121～123、126～129、131である。坏はいずれもロクロ使用であり、122が内黒坏であるが他は赤焼き坏である。高台付坏は126が内黒、127が赤焼き坏である。126のものは台部が取れた後も坏として再使用していると思われる。この坏には底面に窯印と思われる沈刻が付されている。甕は、128、129がロクロ使用の甕破片で口縁部片では横ナデ、底部片ではナデとケズリが見られる。131が須恵器大甕の破片で外面には縄目状のタタキ目痕が施されるが内面は無文である。また５層より出土している炭化物の樹種は栗であった。その他図版34―53の石刀状の珪化木が発見されている。

II F 001土坑（図版28・写真図版20）

本遺構は、II F 03住居跡状遺構の床面中央に位置している。検出面は、床面のIV層である。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は、開口部径125cm×110cm、底部径98cm×76cm、深さ18cmである。埋土は、黒色土が主体で黒褐色土が上に載っている。底面は、ほぼ平坦であるが、壁際でII F 04掘立柱建物跡の柱穴により切られている。埋土中より、土師器の破片一点が出土している。本遺構は、II F 03住居跡状遺構を精査していく中で床面から検出したものであり、両者の新旧関係は不明である。所属時期は、古代に位置づけられると思われる。

II F 002土坑（図版28・写真図版20）

本遺構は、II F 001土坑と同様にII F 03住居跡状遺構の精査中に検出している。検出面は床面のIV層上面である。平面形は不整形、断面形は皿形を呈する。規模は、開口部径255cm×150cm、底部径225cm×120cm、深さ32cmである。埋土は、上位は黒色土、中位は黒褐色土、下位はにぶい黄褐色土で占められ、中位から下位にかけて焼土が見られる。底面は凸凹がみられ、かつ焼土が西側で径30cm×40cm、南壁付近で径40cm×15cmの範囲で検出されている。またII F 04掘立

柱建物跡の柱穴が、本遺構の中央部及び、ⅡＦ03住居跡状遺構の中央部床面を切っている。従って、三者の新旧関係は、掘立柱建物跡が一番新しい時期のものとすることができる。本遺構は、埋土等からみて３つ位の土坑の切り合いではないか、又は全体の形状や焼土の検出等からカマド状焼土遺構の可能性も考えられる。所属時期は、古代と思われⅡＦ03住居址跡遺構との新旧関係は不明である。出土遺物は、埋土中より土師器片が数片検出されている。大部分は甕の胴部破片で坏では黒色処理をしたものやロクロ使用の口縁部片が見られる。

ⅡＨ004土坑（図版27・写真図版18）

本遺構は、調査区東端のⅡＨ－Ｃ区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は、開口部径178cm×84cm、底部径172cm×76cm、深さ10cmである。埋土は、上位が黒褐色土、下位は褐色土とにぶい黄橙色土である。褐色土には、焼土と炭化物が粒状に多く含まれている。底面はほぼ平坦である。出土遺物は、図版40―146の須恵器胴部破片と土師器破片が数点出土している。

ⅡＨ005土坑（図版27・写真図版19）

本遺構は、調査区東端の中央部付近のⅡＨ－Ｈ区に位置する。平面形は円形で、断面形は鉢形を呈する。規模は、開口部径85cm×70cm、底部径36cm×34cm、深さ30cmである。埋土は、黒色土が主体である。底面は、礫層で堅い。遺構の南側には、径150cm×100cm位の範囲で焼土が検出されている。焼土の厚さは、約10cmほどである。焼土の性格は不明確であるが、この場所に廃棄されたものではないかと思われる。

出土遺物は、図版40―133～141、143の土師器、須恵器破片が多く出土している。坏は、いずれもロクロ使用である。134、135、140は、内黒の坏である。135は、ほぼ完形で、底部から底面にかけて再調整が見られる。140は、底部破片である。138、139は赤焼き土器で、138はほぼ完形である。141、143は、ロクロ不使用の土師器の甕の破片である。141は、胴部破片、143は口縁部～胴部破片である。133、136、137は、須恵器の坏の破片である。133の底面には墨書らしいものが見られる。

ＩＡ001土坑（図版29・写真図版21）

西側調査区北端部のＩＡ－Ｏ区に位置する。平面形は、楕円形である。断面形は皿形で規模は、開口部径83cm×64cm、底部径34cm×32cm、深さ14cmである。埋土は黒色土の単層である。底面は、やや丸みを帯びている。出土遺物はない。

ＩＢ001土坑（図版29・写真図版19）

西側調査区北端のＩＢ－Ｇ区に位置する。規模、形態は、遺構が調査区域外に延びているため詳細は不明である。平面形は不整形である。断面形は皿形で、規模は、開口部径122cm以上×114cm、底部径80cm×72cm、深さ14cmである。底面は、西側に土坑状の凹みをもつ。埋土は単層

の黒色土で褐色土を小ブロック状又は粒状に含んでいる。遺物は出土しない。

ＩＢ002土坑（図版29・写真図版19）

西側調査区ＩＢ－Ｇ区に位置する。平面形は楕円形を呈する。断面形は皿形で、規模は、開口部径106cm×70cm、底部径84cm×42cm、深さ17cmである。埋土は、単層の黒色土である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

ＩＢ003土坑（図版19・写真図版19）

西側調査区北端のＩＢ－Ｃ区に位置する。平面形は、楕円形を呈する。断面形は皿形で、規模は、開口部径120cm×97cm、底部径93cm×66cm、深さ19cmである。埋土は４層からなり、上位～中位が黒色土、下位は黒褐色土である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

ＩＢ004土坑（図版29・写真図版19）

西側調査区のＩＢ－Ｄ区に位置する。平面形は、楕円形である。断面形は浅鉢形で、規模は、開口部径118cm×64cm、底部径50cm×40cm、深さ33cmである。埋土は２層からなり黒色土である。底面は丸みを持つ。出土遺物はない。

ＩＢ005土坑（図版29・写真図版21）

ＩＢ－Ｃ区に位置する。西側のＩＢ006土坑と開口部が接している。平面形は、楕円形である。断面形は皿形で、規模は、開口部径106cm×84cm、底部径72cm×56cm、深さ15cmである。埋土は黒色土の２層からなる。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

IIIＤ004土坑（図版28・写真図版17）

調査区西側のIIIＤ－Ｂ区に位置する。平面形は楕円形である。断面形は皿状である。規模は、開口部径72cm×47cm、底部径62cm×40cm、深さ18cmである。埋土は、２層からなるが大半は黒褐色土で占められ、下位に褐色土が見られる。底面は、丸味を帯び、堅く縮まっている。なお南壁の上部は、柱穴により切られている。出土遺物はない。

IIＧ003土坑（図版27・写真図版18）

調査区東側北端のIIＧ－Ｅ区に位置しており、遺構の北側は調査区域外にかかっている。検出面はIV層上面で、廃棄されたと思われる焼土が楕円形状に広がっていることにより遺構を確認した。遺構の一部が調査区外にあるため、遺構の全容は不明であるが、平面形は、楕円形を呈していると考えられる。断面形は、皿状である。規模は、開口部径86cm以上×72cm、深さ10cmである。埋土は、上位が黒色土、黒褐色土が混ざった焼土、下位は黒褐色土と暗褐色土で構成されている。なお、底面には柱穴状の土坑が検出された。規模は、径54cm、深さ10cmであるが、あるいは柱穴となるかもしれないものである。遺物は出土しない。

III G001土坑（図版27・写真図版18）

本遺構は、調査区東側のIIIG－E区に位置する。西側一帯には、柱穴群がみられる。検出面はIV層上面で、柱穴と切り合っている形で遺構が検出された。南壁が柱穴により切られているため詳細は不明であるが、平面形は、楕円形と思われる。断面形は、浅鉢状である。規模は、開口部径（80）cm×64cm、底部径（65）cm×45cm、深さ29cmである。埋土は黒色土の単層である。底面は、丸味をもち中央部が凹んでいる。本遺構は、柱穴よりも古い時期のものと思われる。出土遺物はない。

II H001土坑（図版27・写真図版18）

調査区東端のII H－C区に位置する。検出面は、IV層上面である。平面形は楕円形を呈し、断面形は浅鉢形である。規模は、開口部径54cm×40cm、底部径48cm×32cm、深さ18cmである。埋土は、3層からなり上位から順に黒褐色土、黒色土、にぶい黄褐色土であるが、黒色土が主体である。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

II H002土坑（図版27・写真図版18）

調査区東端のII H－C区に位置する。平面形は、楕円形で、断面形は鉢形である。規模は、開口部径53cm×45cm、底部径46cm×40cm、深さ20cmである。埋土は、黒褐色土の単層で礫や炭を多く含んでいる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しない。

II H003土坑（図版27・写真図版18）

調査区東端のII H－B区に位置する。検出面は、IV層上面である。平面形は隅丸方形を呈する。断面形は、皿状を呈している。規模は、開口部径122cm×75cm、深さ6cmである。南半部底面に径76cm×54cm、深さ検出面より14cmの土坑の凹みをもっている。出土遺物はない。

現代の土坑

現代の土坑は、道路を挟んで西側のB区に2基、C～E区にかけて8基の計10基検出されている。このうちIII B002土坑を除く9基は、規模、形態や埋土、カヤが床面上に敷かれている事が類似している。西側調査区南東端に位置するIII B002土坑は、埋土や深さ、カヤの検出のない点が他と異なるが、これら10基の位置関係は、道路を挟んで東西2例、東西南北9mほどの等間隔でつくられていることから一連の土坑群と考えられる。10基の土坑名は、II B002土坑、III B002土坑、II C001土坑、III C001土坑、II C002土坑、III D001土坑、II E001土坑、III D002土坑、II E002土坑、III E003土坑である。なお、II E002土坑は、II E01住居跡の床面を切ってつくられている。これら一連の土坑群の性格は、地元の人達の話なども考慮すると、りんごの苗（？）でも植えようとした跡ではないかと思われる。土坑内は特別撹乱されておらず、植樹の痕跡はない。出土遺物は、III C001土坑内より陶磁器片とガラス玉がある。

以上の理由により土坑群の一例として、II C001土坑について記述する。

II C001土坑（図版29・写真図版21）

調査区西端II C－O～P区に位置する。平面形は円形を呈する。断面形はビーカー形で、規模は開口部径180cm×176cm、底部径156cm×140cm、深さ44cmである。この土坑は、床面から8cmほど上部に一面にカヤが敷きつめられており、その上部は開口部まで埋め戻されている。カヤは長さ80cm～100cmのものが15cm～30cmの束で織り成すように敷かれ、壁際は緩やかに開口部にむけて立ち上がるように敷かれている。埋め戻し部分の埋土は、3層からなり上位から明黄褐色土、黒褐色土、明黄褐色土の順で構成されているが、いずれの層も混土であり又、礫を多く含有している。カヤの下部は、黒褐色土で柔らかく、べそべそしており腐植土と思われる。周辺の壁際は明黄褐色土と黒褐色土が交互に入っており自然堆積と思われる。底面は、砂礫層で平坦である。出土遺物はない。

6．陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、3基検出されている。それらの形状、規模は類似性があり、いずれも段丘縁に直交するように構築されているが、並列性はなく個々が単独に位置している。

II A01陥し穴状遺構（図版30・写真図版22）

本遺構は、道路を隔てて西側の調査区II A－P区に位置している。隣接する遺構としては、東側にII B001土坑、南側にIII A001溝がある。検出面はIV層上面で、黒色土が調査区外へ向かって溝状に落ちこんでいることによって遺構の存在を確認した。

平面形は溝状で、長軸方向は北東～南西を指している。短軸の断面形はU字形である。規模は、南東部が調査区域外に存在するため詳細は不明であるが、開口部径170cm以上×36cm、底部径186cm以上×10cm、開口部から底面までの深さは中央部で70cmである。

埋土は、シルト質土の8層からなり、上位は旧表土の黒色土が大半を占め、中位から下位にかけては黒褐色土～黒色土とにぶい黄褐色土～褐色土が交互に堆積しており、自然堆積の様相を示している。

底面は、砂礫層で、北東から南西にむけて緩やかな下降が見られる。

壁は、長軸の北東端部で底面から20cmほどオーバーハングし、開口部へと立ち上がる。また、図示していないが、長軸方向の壁の最奥部で杭状の穴が斜位に1ヵ所検出されている。遺物は出土しない。

III F001陥し穴状遺構（図版30・写真図版22）

本遺構は、調査区東側の南端III F－I～J区に位置している。段丘縁に直交するような形でつくられており、III F01掘立柱建物と重複関係にある。西方向1.5mには、III F002土坑がある。

試掘トレンチの段階でIV層上面で検出された。平面形は溝状で、長軸は北東～南西を指している。短軸の断面形は、開口部が開きぎみのU字形である。

規模は、開口部径266cm×34cm、底部径298cm×12cm、深さは70cmである。

埋土は5層からなり、上位が黒色土で中位はにぶい黄褐色土と黒色土が交互に堆積し、最下位は黒色土である。自然堆積状況を示している。

底面は、両端部がやや高まり、中央部との比高は15～20cmである。

壁は、北東端部で底面から16cm、南西端部で18cmほどオーバーハングし開口部へと立ち上がる。遺物は出土しない。

III G01陥し穴状遺構（図版30・写真図版22）

本遺構は、調査区東側のIIIG－E区に位置している。周辺の遺構としては、北側1mにIIIG001土坑があり、西側5mの地点にはIIIG01土器埋設炉がある。検出面はIV層上面で、黒色土が南北に細長く続いていることによって遺構の存在を確認した。

平面形は溝状で、長軸方向はほぼ南北を指している。短軸の断面形はU字形である。規模は開口部径が310cm×26cm、底部径が318cm×16cm、深さは62cmである。

埋土は、上位と下位は黒色土で占められ、中位は上から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土の順に堆積しており、自然堆積の状況を呈している。

底面は平坦であるが、南端部では壁との区別がつけにくくなる。

壁は、北端部で26cmほど底面からオーバーハングし開口部へと立ち上がる。南端部では、底面から開口部にかけて緩やかに外傾して立ち上がる。なお、北端部の東西両壁、南端部の東壁は柱穴によって切られている。

遺物は出土しない。

7．屋敷跡（II G01、02溝）（付図・写真図版23）

本遺構は、大調査区II G区に検出された2条の溝の配置から考えられたものである。大部分が調査区域外にあることから即断は避けたいが、II G01溝、II G02溝の間は3.5mの間隔があり、恐らくこの部分に出入口があったと思われ、全体形が方形状を呈し、その周囲に溝が巡る屋敷跡と考えられたものである。

II G01溝は、II F－N区からII G－F区に位置し、II G02溝は、II G－J区からII H－A区に位置する。検出面はIV層上面で、黒色土が溝状に細長く広がっていることによって遺構の存在を確認した。II G01溝は、長さが9.5mで西側の調査区外へと続いている。一方II G02溝は東西が8m、南北が4mを計り北側調査区外へと続いている。幅は、II G01溝は50cm～120cm、II G02溝は55cm～110cm、深さは両溝とも8cm前後である。断面形はIII形で、埋土は黒色土ないし黒褐色土の単層である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はなく、所属時期は近世以降と思われる。

8．溝（付図）

溝は、道路を挟んで西側のＢ区で12条、Ｄ区で１条、東端部で４条の計17条が検出されている。Ｂ区内の溝は、ＩＢ01溝、IIIＡ01溝を除き短かく浅いものばかりで、遺物もなく時期、性格等は不明である。検出面は、現状水田の耕作土下のIV層上面である。IIIＡ01溝は、IIIＢ区内を自然地形に沿った形で北西より南東方向へ延び、水が流れていたと思われる。溝の長さは13ｍで、幅は北西端で上端220cm、深さ18cm、南東端で上端80cm、深さ５cmである。

Ｄ区のIIＤ01溝は、IIＤ区南側よりIIIＤ区にかけて南北に延びる溝で、調査区南端で跡切れしている。検出面はIII層で、溝の長さは約11ｍである。幅は、上端で38cm～64cm、深さは４cmほどである。埋土は、II層の黒褐色土である。出土遺物としては、図版33―36の掻器があり、周辺からはそのほかにも剝片石器が検出されているが、溝との関わりは不明である。

調査区IIIＧ区では、溝の規模、方向等からみてIIＤ01溝と対になるような形で、IIIＧ01溝がＧ区とＨ区の境界線上に位置している。溝は、IIIＨ－Ａ区を起点に南北に延び、調査区外へ続いている。検出された長さは７ｍで、幅は上端35cm、深さは10cmほどで埋土は黒色土である。なお、IIIＧ01溝の西側には、並列して雨裂により出来た溝と思われる大溝のIIIＧ02溝がある。幅は、上端350cm～450cmで、検出した長さは７ｍ、深さは、検出面から10cm～40cmほどで、北から南側に傾斜している。埋土は、黒褐色土と黄褐色土の混合土で人為的に埋められている。なお、IIIＧ01、02溝の北側にカマド状焼土遺構群が検出されているが、溝との関係は不明である。

Ⅳ まとめ

今回の発掘調査によって得られた遺構についてはⅢ章で述べた通りであるが、ここではさらに要約した形で、遺物についてまとめてみる。

1．発見された遺構について

今回の調査によって明らかになった遺構は竪穴住居跡7棟、住居跡状遺構1棟、炉跡5基、掘を柱建物跡17棟、カマド状焼土遺構12基、陥し穴状遺構3基、土坑46基、溝17条（屋敷跡と思われる溝2を含む）が検出されている。これら遺構の時期は縄文時代から近現代までのものである。以下竪穴住居跡、炉跡、掘立柱建物跡、カマド状焼土遺構について若干まとめてみる。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居址は住居跡状遺構も含めて8棟検出されている。これら竪穴住居跡は出土遺物や平面形態より、奈良、平安、中世の各時代の住居跡であることが判明している。

1）奈良時代

奈良時代の住居跡は大調査区C～E区にかけて3棟が検出されている。遺構名はⅡC01，ⅢD01、ⅡE03住居跡である。このうち平面形態が判るものはⅢD01住居跡だけである。それによると平面形は方形状を呈し、北壁中央にカマドを持ち、長い煙道を伴うもので、規模は東西3.60m、南北3.18mであり、他の住居もほぼ同様の規模、形態であると考えられる。これら住居は分布状況からほぼ同時に営まれていたと考えられ、時期は出土遺物より奈良時代後半の8世紀後半から9世紀初頭頃であろう。

2）平安時代

平安時代の住居跡は大調査区E区に2棟が検出され、この他に住居跡状遺構が大調査区F区に1棟検出されている。遺構名はⅡE01、ⅢE01住居跡とⅡF03住居跡状遺構である。ⅡE01住居跡は北側カマドから東カマドに造り替え、さらにそれを埋めて建て替えている住居である。ⅢE01住居跡は東カマドの住居であり、東西660mと比較的大形の住居である。両住居ともカマドの構造としては煙道が見られず、棟方向は東西にある。両住居の時期は平面形態や出土遺物より若干時期がずれるようであり、ⅡE01住居が10世紀代、ⅢE01住居が11世紀から12世紀代に入ると考えられる。ⅡF03住居跡状遺構に関しては出土遺物がないことより良く判らない。

3）中世

中世の住居跡は大調査区ⅡF区に2棟検出された。遺構名はⅡF01、02住居跡である。両住居の規模はⅡF01住居が東西3.10m、南北3.00m、ⅡF02住居が東西3.10m、南北3.20mとほぼ同様の規模であり、平面形態も方形を呈している。出入口はⅡF01住居が南壁、ⅡF02住居

が東壁中央に設けられている。両住居は近接していることから時期差があると思われるが先後関係は不明である。両住居とも中世の掘立柱であろう柱穴群を切って造られていることから中世でも新しい時期かと考えられる。

(2) 炉跡

縄文時代の炉跡は、E区とG区から5基検出されている。そのうち、E区からは石囲炉2基と土器埋設炉1基、G区からは土器埋設炉2基が検出されている。E区のⅡE01石囲炉は、遺物も焼土も見られないが、ⅡE02石囲炉は、規模が径75cm×51cmを計り、埋土下から単節斜縄文の深鉢の胴部破片が出土し、破片の下部には層厚5cmの焼土が見られる。又、ⅡE01石囲炉に隣接するⅢE01石囲炉に隣接するⅢE01土器埋設炉は、直立埋設土器と西側に開口部をもつ斜位埋設土器からなる複式炉である。炉の周辺には焼土が広がり、使用土器は深鉢土器で単節斜縄文が施されている。一方、G区には、2基の土器埋設炉がある。どちらも深鉢土器が斜位に埋設され、土器周辺の黄褐色土は焼土化している。炉の開口部は、ⅡG01炉は北西側に、ⅢG01炉は西側としている。ⅡG01炉は単独炉と思われるが、その他の4基はいずれも炉の周辺に柱穴が多く、図版や付図の破線で示した円内に、本炉を伴う住居跡が存在した可能性がある。

5つの炉の時期は、炉の形態や出土遺物から判断して、ほぼ中期末葉～後期初頭頃に位置づけられると思われる。

(3) 掘立柱建物跡

柱穴は大調査区C～H区にかけて500個程検出され、ほぼ調査区の全域に検出されている。そのなかでも特に集中して検出された地区は、E、F、G区である。柱穴は開口部径15cm以下のものと15cm以上のものに分けられ、平面形も方形のもの、円形のものがあり、15cm以上の円形ないし方形のものは掘り方を持つものである。これらの中で建物として捉えたものは、掘り方が方形の建物跡3棟と、掘り方が円形のものや、柱穴だけの建物跡14棟である。この中で、掘り方が方形の掘立柱建物跡は、調査区のF、G区に検出されている3棟であり、遺構名はⅡF01、ⅢF01、ⅢG01掘立柱建物跡である。規模はⅢG01掘立柱建物跡が南側部分を調査区域外にあると思われる事から断定出来兼ねるが、何れも2間×3間の建物と思われ、ⅢF01掘立柱建物跡は東庇を有している。棟方向は3棟ともほぼ磁北に一致している。建物の配置は調査区に限って見るとⅢF01掘立柱建物を中心に構築されたと思われ、ⅡF01、ⅢF01掘立柱建物が南北に並び、若干ずれるがⅢG01掘立柱建物がⅡF01、ⅢF01掘立柱建物に並列するように約8m東側に配置されていたと考えられる。

掘り方が円形のものや、柱穴だけの掘立柱建物跡は14棟考えられたが、C、D区に見られる柱配置が方形を呈するものは住居跡の柱穴の可能性があるものであり、掘立柱建物跡としては11棟が考えられるが、図上復元のものが殆どであり、別な柱配置での建物の在り方も考えられ

るものであるため、ここでは敢えて規模等について触れないが、ⅡH01掘立柱建物跡を見ると桁行7mの長大な建物の在った可能性もあるし、ⅡE02、03建物を包括した別な大きな建物の可能性があるものなどもあるが良く分からなかった。何れにしても調査区域内に見られた柱穴群から大、小の建物が在った事は間違いないと思われる。

これら掘立柱建物跡の時期であるが、掘り方が方形の建物は円形の柱穴を持つ建物に切られている事や埋土の状態、近接する平安時代遺構のⅡF03住居跡状遺構等より考えて、平安時代中頃から末葉頃と推定され、掘り方が円形の建物や、柱穴群の殆どが一部で中世の住居跡であるⅡF01、02住居跡に切られている事から中世の時期と思われるものである。また、円形の柱穴のなかでⅢE区に検出された柱穴の埋土中には炭化穀類が入っており鑑定結果からも中世頃と出ている。

(4) カマド状焼土遺構

カマド状焼土遺構は、形態が燃焼部と焚口部からなりカマドに似ていることからそのように名付けた。検出された遺構数は、12基で、内1基はD区にあり住居跡の煙道を切って作られたものである。残りの11基は、東側H区よりのⅡG区から集中的に検出されている。ほぼ等間隔の縦二列に構築されており、互いに切り合いが見られること、遺構間隔が狭すぎること等から、おそらく何回かの造り替えが行われているのではないかと思われる。ⅡG区の遺構は同じ時期、同じ性格のものと考えてよいであろう。

検出面はⅤ層で、黄褐色土砂礫層に焼土が円形に広がっていることから遺構として確認した。遺構の形態は、土地の削平が行われているため、底部がわずかに残っているのみで、全容が不明である。遺構は燃焼部と焚口部からなる。燃焼部は北側にあり、円形状を呈し、検出面での規模は径90cmほどである。燃焼部には、焼土が形成され、炭化物が多く、中央部は凹んでいる。検出面からの深さは、8cm～20cmほどである。焚口部は、燃焼部の南側にあり、溝状を呈し、燃焼部より緩やかな立ち上がりを見せるが、削平により僅かにその痕跡を残すのみのものもある。規模は、長さが48～155cm、幅44～75cmである。長軸方向は、大部分が南北を呈し、長軸は、100cm～285cmである。

カマド状焼土遺構が検出されている遺跡としては、北館遺跡（衣川村）、大瀬川C遺跡（石鳥谷町）、柳田館跡（紫波町）、高玉遺跡（平泉町）等がある。本遺構の所属時期は、遺構内からの出土遺物もなく資料に乏しく不明であるが、上記の類例から推定すると中世末から近世の時代に位置づけてよいのではないかと思われる。又、周辺の遺構との関わりは不明である。

2．発見された遺物について

本遺跡から出土した遺物には、縄文時代の土器・土製器・石器・石製品、奈良・平安時代の

土師器・須恵器・鉄製品・土製品・陶磁器等がある。量的には、土師器が主体である。それらは主に遺構内から得られたもので、石製品・本遺跡では遺構外遺物は少ない。そこで、ここでは遺構内外の遺物を一括してまとめることにする。なお、土製品と鉄製品については割愛した。以下、(1) 土器　第Ⅰ群　縄文土器　第Ⅱ群　奈良時代に属すると思われる土器類　第Ⅲ群　平安時代に属すると思われる土器類　第Ⅳ群　近世以降の陶磁器類　(2) 石器、石製品の順で述べてみる。

(1)　土器

第Ⅰ群　縄文土器（図版31、32、写真図版24、25）

縄文土器は、少量であるが、D区～G区にかけての炉址や土坑等の遺構内や表土より検出している。図版掲載の土器は19点で、器種は深鉢土器及びその破片である。時期は、一部の土器を除き、中期末葉～後期初頭頃に位置づけられると思われる。19点の土器を施文の違いから分類してみると次のようになる。

1類（図版31、写真図版24－5）

ⅢG01埋設土器炉に使用されていた粗製深鉢で、半完形の状態で出土している。器形は胴部下半がやや脹らみをもちつつ外傾している。器表面は火熱のためボロボロになっている。規模は、口径26.4cm、器高49.0cm、底径13.6cmである。胎土はやや良、色調は赤褐色で、厚さは0.8cmである。文様は櫛状の工具で器面全体に縦横に沈線を施文し縦位では「V」字状に施文している。本類は器形や文様から中期末から後期初頭に位置すると思われる。

2類（図版32、写真図版25－7）

ⅡE区で検出された口縁部破片である。圧痕文が口唇部直下に連続して施されている。時期は、胎土等より縄文前期頃と思われるが、小破片のため時期を特定できなかった。

3類（図版32、写真図版25－9）

19は、ⅢE01埋設土器炉内より得られた胴部破片で、網目状撚糸文が施されている。

4類（図版31、32、写真図版24－6・25－8、14）

6、8、14は、沈線文をもつ土器である。6は、ⅡG01土器埋設炉に使用されていた粗製深鉢で、口縁部は欠損しており全容は不明である。器形は、底部から胴部へかけて外傾し立ち上がっている。文様は、沈線文による逆U字形が胴部に並列し、縦方向の文様展開を示す。区画文の外側は無文で、内側はRL縦回転の斜縄文で埋められている。大木9式～10式の土器の一般的特徴を示しているので、時期は中期末葉と思われる。8は、胴部破片であり、沈線が横に入り、上下は無文で研磨されている。14は、口縁部破片であり、口唇部は、丸味をもち、直下に沈線が巡る。LR縦回転の斜縄文が施されている。

5類（図版32・写真図版25－9～13）

隆帯をもつ土器で、9～13が該当し、口縁部や胴部の破片である。9は、隆帯の上位を無文研磨し、下位をＬＲ縦回転の斜縄文を施こしている。10は、隆帯が三方に延び、無文帯と文様帯とを区画している左下位の区画内には、ＬＲ横回転の斜縄文が施こされている。11は、曲線を描く隆帯により無文帯と文様体が区画され、文様は、ＬＲ縦回転の斜縄文である。12は、2本の隆帯が平行して垂下し、その内部は無文研磨されている。外側には、ＬＲ縦回転の斜縄文が施されている。13は、施文方法は12と同じであるが、区画帯隆帯の縁どりに沈線を用いている。地文は、ＲＬ縦回転の斜縄文である。

6類（図版31、32、写真図版24－3、4・25－15～18）

単節斜行縄文を施文している土器である。1～4、15～18が該当する。1は、IIＥ02石囲炉の埋土下より検出された粗製深鉢の胴部破片で、ＲＬ縦回転の斜縄文が施されている。2は、IIIＦ002土坑より出土した粗製深鉢の胴部破片で単節斜行縄文が施文されている。3と4は、IIIＥ01埋設土器炉（複式炉）に使用されていた粗製深鉢の底部破片である。3は、東側の炉で底径13cm、色調は7.5ＹＲ6/6橙色、厚さは0.6cm～1.5cmである。ＬＲ縦回転の斜縄文が施されている。底部側面に、ヘラなでが施され、底面に木葉痕が見られる。器面は、全体が火熱のために脆い。4は、西側の炉として使われていたもので、底径11.5cm、胎土やや良、色調は橙色、底面に同じく木葉痕がある。底面が火熱により赤変している。厚さは、0.7cm～0.9cmで、ＬＲ縦回転の斜縄文が施されている。15は、ＬＲ縦回転の斜縄文が施されている。16は、ＲＬ縦回転の斜縄文が施されている。色調は赤褐色で、胎土中に砂粒を含む。17は、口縁部破片であり、ＲＬ縦回転の斜縄文が施されている。色調は、赤褐色である。18は、胴部片で、ＲＬ横回転の斜縄文が施されている。色調は、浅黄橙色である。

なお、この他には土製品が1点ある。20は土偶脚部であり、表面は無文である。色調は褐色を呈している。出土地点はIIＨ－Ａ区のIV層上面である。

第Ⅱ群　奈良時代に属すると思われる土器（図版35－55～61・41－154、159）

奈良時代に属すると思われる土器を一括した。出土地区はIIIＤ01、IIIＥ03住居跡とIIＦ～Ｈ区Ｉ層からの出土である。器形は坏、鉢、甕等でありいずれもロクロ不使用の土師器である。

坏：坏はいずれも内黒で体部に段がないもの（55）、段があるもの（56～58、154）である。55、56は丸底であり、57、58、154も丸底を呈するものと思われる。器面調整は55、56が内外ともミガキの調整が行われ、57、58は口縁部外面にヨコナデ、内面はミガキの調整が行われている。154は外面の剝落が激しく詳細は不明であるが底部近くをケズリ調整を行い、内面をナデ調整しているようである。この土器は火熱によって内黒が剝落していると思われる。

甕：甕は59、60、159の口縁部から体部にかけてのものと体部下半から底部のものである。口

縁部が外傾し、頸部に僅かに段が見られ、器面調整はいずれも内外面に口縁部にヨコナデ、頸部から体部にかけてハケメの調整が行われている。60の底部には木葉痕がついている。

鉢：鉢は61のものであり、口縁部は直立気味に段が見られる。器面調整は脆いため良く判らないが、口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をヘラナデの調整が行われている。

この他には、本群に伴うか判らないが、ロクロ不使用の土師器として図版41―160～162の壺破片や鉢がある壺（160、161）はいずれも最大径が胴中央部にあると思われるが破片のため判らない。器面調整も口縁部にみられるヨコナデやナデの痕跡が見られるだけである。

鉢（162）は内外とも色調が黒い土器であり外面と底部にケズリ調整、内面をナデ調整しているものである。この鉢はあるいは第Ⅲ群に伴うものかも知れないが一応ここに入れた。

以上の器種が出土しているが出土点数も少なく分類するに至らないものであり、遺物の多くはⅢD01住居跡の出土で、僅かに61の鉢がⅡE03住居跡の出土である。これらは共伴関係はないが、土器の特徴から同一時期のものと考えられ、8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。

第Ⅲ群　平安時代に属すると思われる土器（図版36～41―68～153、155～158、163、164）

平安時代に属すると思われる土器、陶器を一括した。出土地区は遺構ではⅡE01、ⅢE01住居跡、ⅢE001、002、ⅡH004、005、ⅡF002土坑であり埋土中や床面、カマド内より出土している。遺構外としては主に大調査区ⅡH区のⅠ層より出土しているが出土量は多くない。

土器：器形として坏、高台付坏、甕であり、ロクロ使用の坏、高台付坏、甕とロクロ不使用の甕である。

坏：坏は内面黒色処理を施こしたもの（一類）と色調が赤褐色ないし黄褐色を呈し、一見して酸化焔焼成と思われるもので、〝赤焼き土器〟としたもの（2類）、還元焔焼成による、所謂須恵器のもの（3類）がある。1類のものは68～72、91、117、122、134、135、147、148である。これら1類のものはいずれも内面にミガキ調整を施こしているものであり、外面や底面の特徴によってさらに細分が可能である。底部や底面にヘラ再調整を施すもの（68～70、135、140、147）a種、再調整を施こしていないもの（72、117、122）b種に分けられる。破片の多くはb種に含まれると思われるがはっきりしない。なおa種の68～71のものは他の坏に比べて器厚も薄く、胎土も良いものであり、70は外面にタタキメが見られることから他地域からの搬入品と思われる。2類のものは73、79、80、92～104、118～121、123、138、139、149～151、153である。本遺跡での出土が最も多いものであり、最終的な調整を施こしていないものである。形態的には92、121、149の燈明皿的なものも含めた。3類としたものは81、82、111、132、133、136、137、152、155、156であり、再調整は行われず口径に比して器高が低いものである。

高台付坏：高台付坏は内面黒色処理を施しているもの（4類）の〝赤焼き〟のもの（5類）とがある。いずれも坏部を製作後に台部を貼り合わせているものであり、126は接合部と思われ

る部分に沈線状の凹みが見られる。4類のものは105、126の2点であり、台は脚の短いものである。なお126の底面には窯印と思われる沈線による刻みが見られる。5類のものは106～110、127であり、台は脚が短いものと比較的長いものが付けられている。坏部は106、127に限って言えることは、いずれも口径に比して器高が低いものである。

甕：甕は破損品が多く全体形が判るものは、85、86の2点だけである。土師器と須恵器がある。

土師器ではロクロ使用のもの（6類）、ロクロ不使用のもの（7類）がある。6類のものは、76～78、84～86、143、163、164であり、器形的にはいずれも同形のもので最大径が口縁部にあるもので、小形～大形まである。口縁部はいずれも外反し、口縁部が立ち上るものである。76は体部外面にケズリが施されるが他はロクロ痕だけである。7類のものは87～90、113、128、129、141であり、いずれも全体形を伺えるものはない。口縁部が大きく外反するものであり、内面はナデやハケメ調整がされ、外面はケズリやハケメ調整が施されている。

須恵器（8類）は83、112、124、125、130、131、145、146、157、158であり、83、112の口縁部破片以外は体部破片である。83、112、はロクロ痕だけであるが、他の体部破片には叩き具痕と当て具痕が見られる。130は外面に平行叩き具痕、内面に青海波文、145、146、158は外面に平行叩き具痕、内面に平行文、124、125、137、157は外面に縄文状叩き具痕、内面は無文のものである。

陶器：陶器はⅡE01、ⅢE01住居跡の床面より土師器、須恵器に伴って3点出土している。（114、115、175）。114は灰釉陶器の長頸瓶底部片である。高台は断面が三角形を呈する三角付高台である。色調は灰白色を呈している。115は緑釉陶器の碗口縁部片である。口縁部が僅かに外傾している。175は灰釉陶器の袋物の腰部分の破片であり、表面には自然釉が見られ、内面には炭化樹脂が付いている。なお、愛知県陶磁資料館学芸員の井上喜久男氏の所見によると、114は製作年代が10世紀～11世紀末頃であり、瀬戸産か美濃産であり、窯では大原2号窯か折戸53号窯に相当する。115は製作年代が10世紀前半頃であり、窯は猿投窯であり、黒笹90号窯に相当する。175は破片のため詳細については判らないが製作年代は10世紀頃で窯は猿投窯であろう、とのことである。

以上第Ⅲ群の土器、陶器について記述したが、ロクロ不使用の甕を除いて、他のものはロクロ使用という特徴を持っている。これら土器は土器の特徴から10世紀から12世紀頃にかけてのものと考えられ、共伴関係を見ると1類a（68～71、135、140）、1類b（72）、2類（73、79、80）、3類（81、82、132、133、136、137）、6類（76～78、84～86、143）、7類（75、87～90、141）8類（83）、陶器175のものと、1類b（91、117）、2類（92～104、118～121、123）、3類（111）、4類（105、126）、5類（106～110、127）、7類（113、128、129）、8類（112、124、

125、130、131)、陶器(114、115)のものに分けられ、前者はⅡE01住居跡、ⅡH005土坑出土のもの等であり、坏の調整技法や陶器の年代より10世紀代と思われ、後者はⅢE01住居跡、ⅢE001、002土坑出土のもの等であり、坏の中に灯明皿的器形のものが入ることや陶器の年代より11世紀～12世紀代と思われる。

第Ⅳ群　陶磁器(写真図版35－166～174)

中世末から近世以降のものと思われる陶磁器類は9点あり、いずれも表採や粗掘りの中の出土で、遺構との関わりは不明なものである。小破片のため、詳細は不明なものが多い。169は白磁(？)と思われる皿の破片で、F区の粗掘りで検出されている。170は、ⅡH－H区4層上面より検出した。青磁の碗の口縁部破片である。171は、E区のトレンチ粗掘りの中で検出された。白磁の碗の胴部の破片である。167と173は、表採による皿の破片である。166と172は口縁部破片で器種は不明である。ⅡE－D区とⅡG－Ⅰ区の表土より検出している。時期は、近世初頭と思われる。168と174は、胴部破片であるが、器種は不明である。それぞれ、ⅢD－M区表土及びF区トレンチ粗掘りから検出している。これら陶磁器の時期であるが胎土や文様等からほぼ15～16C頃と推測されるものが多く、167が17～18C頃と思われる。

(2)　石器、石器品

本遺跡では石器、石製品、剝片類は全体で184点検出している。そのうち本報告書には、34点を掲載した。内訳は、石鏃6点、石錐1点、石匙1点、削器2点、掻器4点、不定形石器7点、石核2点、接合資料1点、円盤状石製品、凹石1点、磨石1点、石弾(？)1点、石斧1点、石皿2点、珪化木2点である。チップ類も24点検出しているが、そのうち同一個体からのものと思われる7点は、ⅢE－E区Ⅲ層中から検出している。黒曜石のチップも1点見つかっており、石器製作が行われていた可能性がある。以下、本遺跡から出土の石器、石製品について述べる。

石鏃(図版32－21～26・写真図版26－21～26)

6点出土した。形態的には、22、23、24の3点は基部に抉込があり凹基鏃に属する。21、25の2点は、基部が丸味をおびており円基鏃に属する。26は、欠損部分の大きい石鏃である。その他22は基部、23～25は先端部をそれぞれ欠損している。21は、中央部が膨らみ厚く、他と比べ大型を呈する。22の先端部は鋭く尖っている。これらの出土地点は、D～G区の遺構内外にまたがる。

石匙(図版33－31・写真図版26－31)

1点出土した。31は、つまみ等欠損しているので詳細は不明であるが、横型石匙の右半部と思われる。全周縁に、片面からの細かい剝離調整が行われ、刃部が作り出されている。

石錐（図版32－28・写真図版26－28）

１点出土した。不定形な剝片の一端に加工調整して錐部を作り出しているが先端部は欠損していると思われる。

削器（図版33－33・35・写真図版26－33・27－35）

35は、三角形状の剝片の一側縁に片面から連続的な調整によって刃部を作り出している。刃部は直線的である。33は、台形状の剝片の一側縁に、片面から刃部調整が施されている。

掻器（図版33－36・37・41・43・写真図版27－41・37・43・36）

41は、長円形状の剝片で、周縁に表は全体に丁寧に細部調整が施されている。刃部は鋭い。石質は玉髄である。37は、長円形状のものにつまみがついたような剝片で、側縁の一部に両面から刃部調整が施されている。43は、半円状の剝片で、弧状の側縁に片面より細部調整が施されている。36は、つまみのない石匙状を呈する掻器である。刃部はほぼ全周縁に形成されており、両面から細部調整が施されている。

不定形石器（図版32－27・28・33－29、30、38、40、32、写真図版26、27）

27は、下縁で片面からの調整や使用痕がみられる。形態は、28と類似しており石錐的な使用も考えられる。29、30は、方形状の小剝片で、どちらも楔的使用が考えられる。29の周縁は全体に細かく剝落しており使用痕と思われる。30は、薄形で一部側縁を除き、刃部状調整が見られる。38は、つまみのある掻器状の形態を有し、凸刃の調整により鋭く形成されている。34は、部分的に刃部状の調整や使用痕がみられる。40は、部分的に第一次剝離により凸刃が形成されている。使用痕、細部調整もみられる。32は、扇形状の剝片で、弧状の刃部には細部調整も加わり、使用痕がみられる。

石核（図版33・34－45・46・写真図版27－46）

45、46の２点である。母岩から剝片が剝がされたものである。

接合資料（図版33－39・写真図版27－39、39－１、39－２）

ⅡＧ－Ｂ区とＣ区から検出されている。39剝片上面より打撃を加え、39－１を剝離している。先行する剝離も同方向である。剝離された39－１剝片周縁部細部調整が行われている。

円盤状石製品（図版33－42・44・写真図版27－42、44）

42と44は、扁平な原石の周縁部を打欠いて円形状に成形したものである。42は、片面からの打撃加工及び調整痕がみられる。44は、原石の縁辺に、片面からの細部調整剝離がみられる。

凹石（図版34－47・写真図版27－47）

47は、凹石兼磨石である。扁平な楕円礫を用いたもので、両面に磨痕を有している。表面の中央部に凹みがあり、凹石としても利用された可能性がある。

磨石（図版34－50・写真図版27－50）

形状が、球をおしつぶしたような円形を呈する。使用面は、平坦な片面と側縁部で磨痕を有している。

石弾（図版34－49・写真図版27－49）

石弾状を呈する球状の自然礫である。磨痕、打潰痕等は認められない。

石斧（図版34－48・写真図版27－48）

刃部を欠損しており、刃部形態は、不明であるが磨製石斧と思われ、全面がよく研磨されている。両側縁部は平坦で、石斧主面との間に稜がある。断面形は、長円形である。

石皿（図版34－52・写真図版27－52）

破片のため、全体の器形は不明である。両面に明らかな磨耗が見られ、その部分は僅かに凹んでいる。残存する周縁部は、一部欠損しているが丁寧に面取りされている。

珪化木（図版34－51・53・写真図版27－51）

珪化木であり、51は上側面部に磨痕がみられすべすべし、光沢がある。53は、石刀状のものである。表面右の側面部は平坦ですべすべし光沢がある。色調は白っぽい。

参考文献

熊谷　常正 他　1982 岩手の土器－岩手県博物館

1981 縄文土器大成２、３　講談社

八重樫良宏 他　1981 石田遺跡－東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ岩手県文化財調査報告書第60集　岩手県教育委員会

1985 岩手の遺跡－岩手県埋文センター

昆野　　靖　　1981 大瀬川遺跡－東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ岩手県文化財調査報告書第57集　岩手県教育委員会

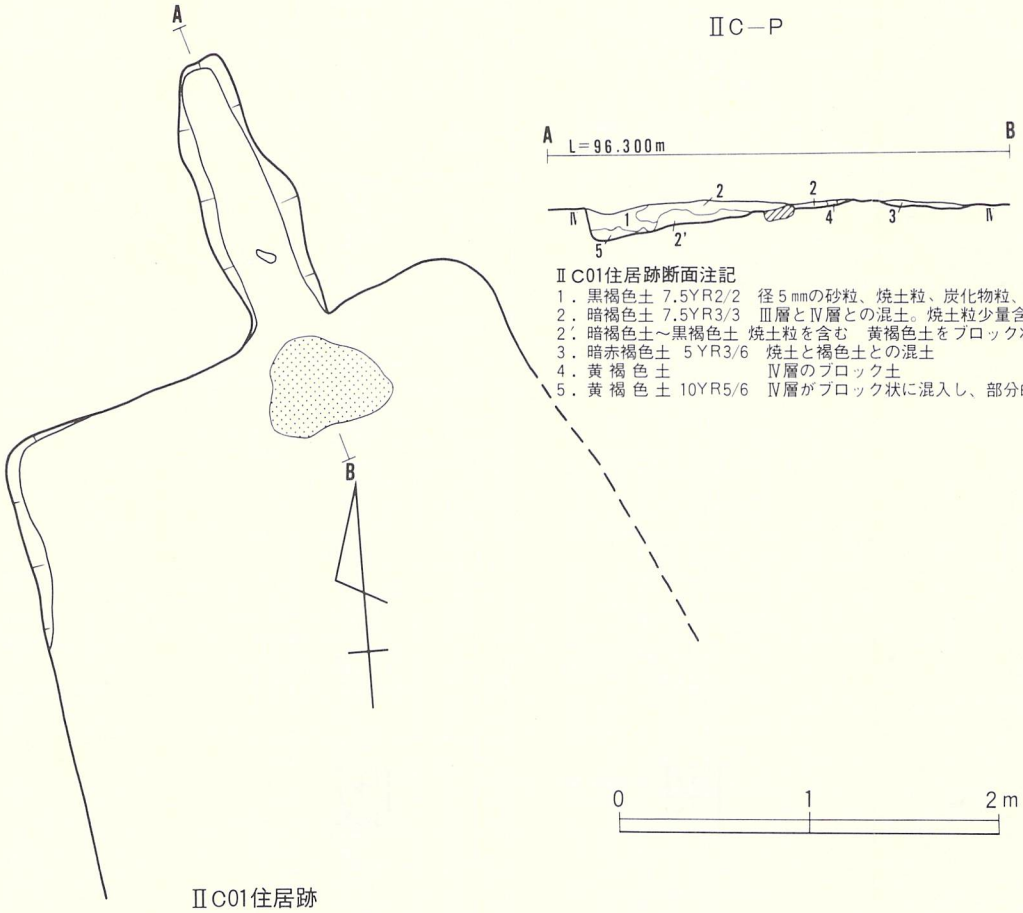
石川　長喜 他　1980 柳田館遺跡－東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ岩手県文化財調査報告書第53集　岩手県教育委員会

国生　　尚　　1986 高玉遺跡－岩手県埋文調査報告書第93集　岩手県埋文センター

石器、石製品一覧表

No.	割付番号	器種	出土地点	法量(mm) 全長	全幅	厚み	重量(g)	石質	石材産地
1	21	石鏃	ⅡE02石囲炉付近	32	21	10	4.37	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
2	22	石鏃	ⅡE－EⅡ層	25	14	4	0.74	なし	なし
3	23	石鏃	ⅡG－D表土	18	15	4	0.82	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
4	24	石鏃	ⅢD01住埋土	19	15.5	4	0.88	輝緑凝灰岩	北上山土、古生界
5	25	石鏃	ⅢF建物址№11	16	16	3	0.79	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
6	26	石鏃	ⅡG－Jグリット表採	19	15	3	0.83	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
7	27	不定形石器	ⅡD－K柱穴122	23	18	9	3.74	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
8	28	石錐	ⅡH－H4層上	30	18	6	2.55	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西部新第三中新統
9	29	不定形石器	ⅢE－EⅠ層	21	21	8	4.43	輝緑凝灰岩	雫石西部新第三系中新統
10	30	不定形石器	ⅡE-D ⅡE-A・B トレンチ粗掘	23	19	5	2.16	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
11	31	石匙	表採	27	40	8	8.49	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
12	32	不定形石器	ⅢE－ⅠⅠ層	29	29	9	7.80	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
13	33	削器	ⅡF－GH ⅢF－EF トレンチ粗掘	31	41	7	9.14	凝灰質珪泥岩	雫石西部新第三系中新統
14	34	不定形石器	ⅠB検出面	35	30	5	5.83	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
15	35	削器	ⅡE01住	46	53	6	17.02	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
16	36	掻器	ⅢDJ溝	33	52	9	16.75	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
17	37	掻器	ⅢE01住	40	54	14	28.92	硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
18	38	不定形石器	ⅡE－D表土	51	32	12	17.12	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
19	39	-1. -2. 接合資料	ⅡG－C表土 ⅡE－B表土	35 39	35 47	7 8	1. 8.90 2. 17.53	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西南部新第三系中新統
20	40	不定形石器	ⅡE－DⅠ層グリット	36	32	8	9.12	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
21	41	掻器	ⅡE-D ⅢE-A・B トレンチ粗掘	58	47	12	37.77	なし	なし
22	42	円盤状石製品	ⅡF G・H ⅢF-F トレンチ粗掘	31	32	7	10.52	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西南部新第三系中新統
23	43	掻器	ⅡE－H表土	53	37	6	15.09	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
24	44	円盤状石製品	ⅡE-D ⅢE-A・B トレンチ粗掘	45	40	6	7.73	流紋岩質極細粒凝灰岩	雫石西南部新第三系中新統
25	45	石核	ⅡF－HグリットⅠ層下部	24	23	45	5.36	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
26	46	石核	ⅡF－HグリットⅠ層下部	62	51	24	80.00	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
27	47	凹石	ⅡE02石囲炉付近	112	95	56	780	角閃黒雲母花崗岩	北上山地、古生界
28	48	石斧	ⅢE01住埋土	82	42	29	140	濃緑色細粒凝灰岩	雫石南西部新第三系中新統
29	49	石弾？	ⅢE－EⅡ層	45	39	39	83	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
30	50	磨石	ⅢE001土坑	80	68	54	302	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
31	51	珪化木	ⅢE01住 Q3埋土	86	35	23	120	珪化木	奥羽山地、中新統
32	52	石皿	ⅢE－EⅡ層	92	73	32 40	382	輝石安山岩	奥羽山地新第三系新統
33	53	珪化木	ⅢE002土坑埋土	184	39	23	215	珪化木	奥羽山地、中新統
34	54	石皿	ⅡE03住床	90	113	37	225	含かんらん石両輝石安山岩	岩手火山周辺第四系

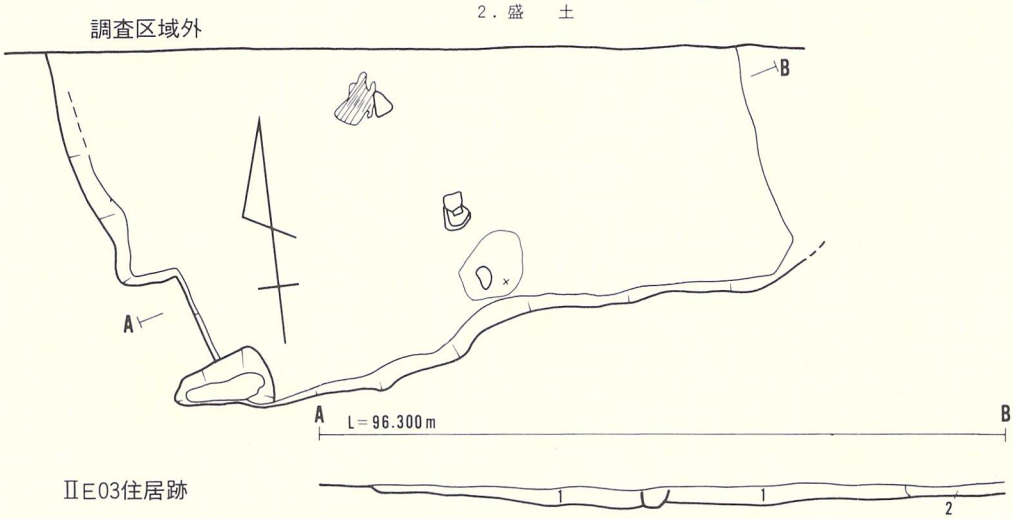
図　　版



ⅡC01住居跡断面注記
1．黒褐色土 7.5YR2/2　径５㎜の砂粒、焼土粒、炭化物粒、黄褐色土を混入
2．暗褐色土 7.5YR3/3　Ⅲ層とⅣ層との混土。焼土粒少量含む
2′暗褐色土～黒褐色土 焼土粒を含む　黄褐色土をブロック状に含む
3．暗赤褐色土　5YR3/6　焼土と褐色土との混土
4．黄 褐 色 土　　Ⅳ層のブロック土
5．黄 褐 色 土 10YR5/6　Ⅳ層がブロック状に混入し、部分的に焼けている

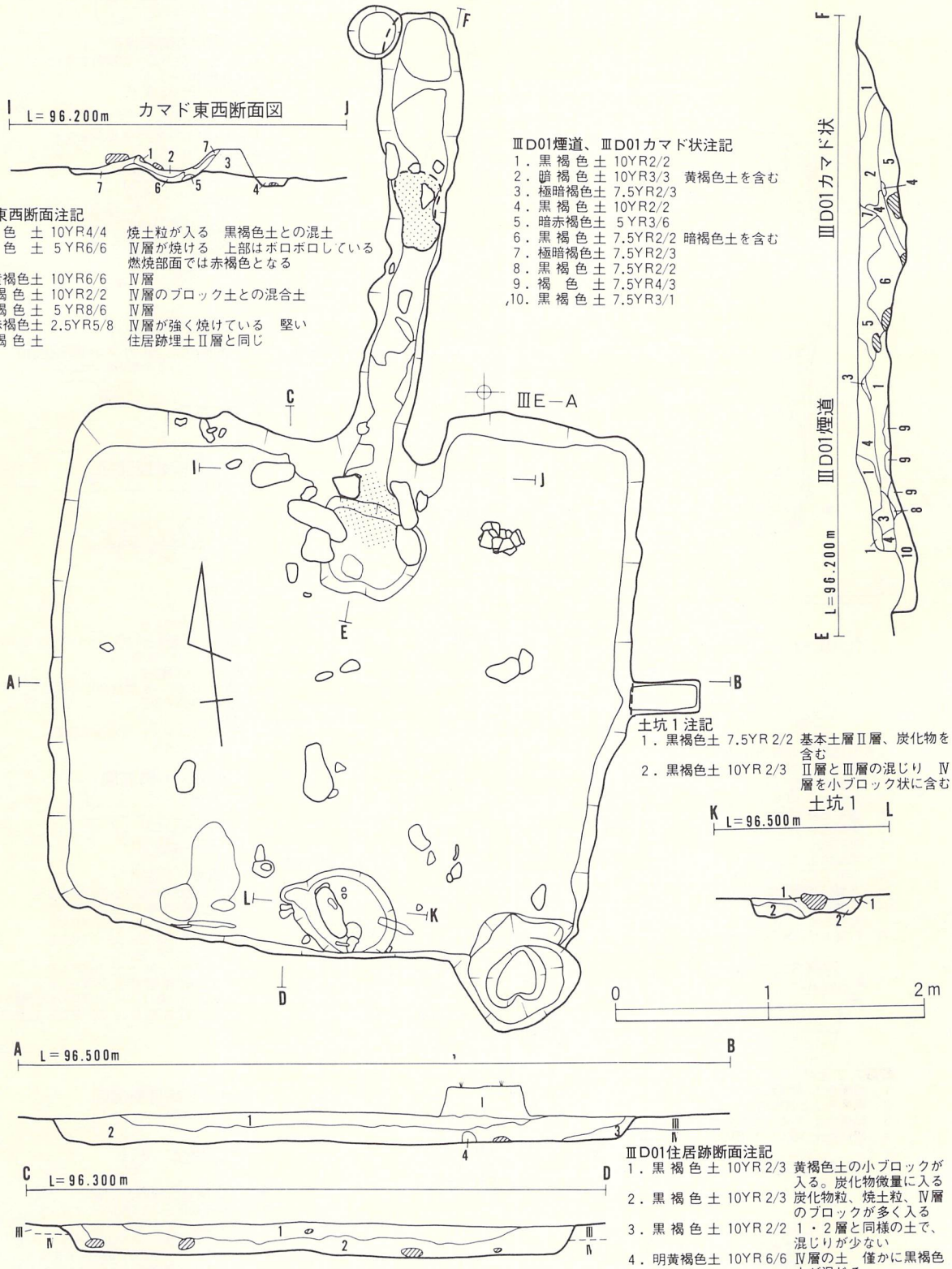
ⅡC01住居跡

ⅢE03住居跡断面注記
1．黒褐色土 7.5YR2/2　基本土層Ⅱ層　微量の炭化物及び黄褐色土をブロック状に含む
2．盛　　土

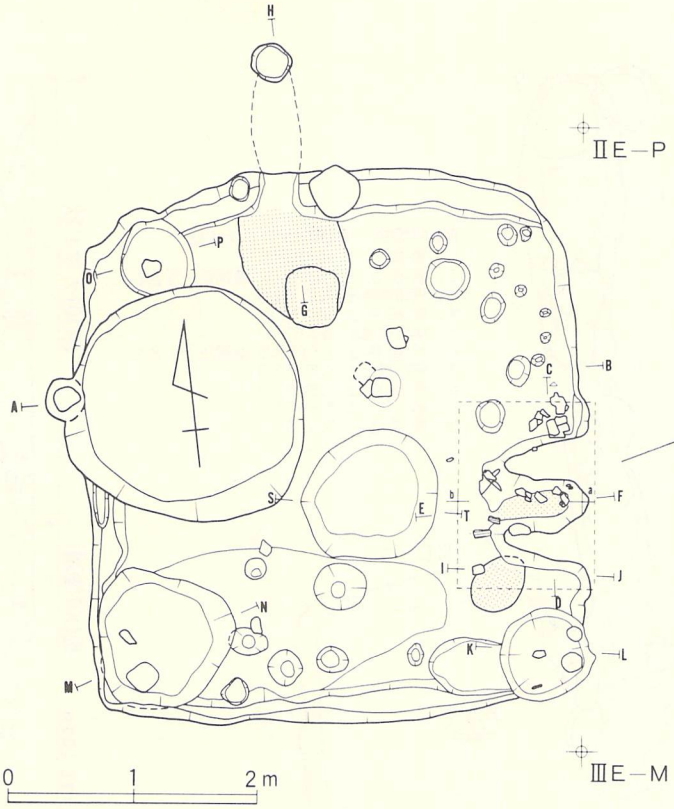


ⅡE03住居跡

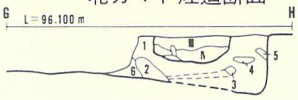
図版５：ⅡC01・ⅡE03住居跡


カマド東西断面図
I L=96.200m J
カマド東西断面注記
1．褐　色　土 10YR4/4　焼土粒が入る　黒褐色土との混土
2．橙　色　土 5YR6/6　Ⅳ層が焼ける　上部はボロボロしている
燃焼部面では赤褐色となる
3．明黄褐色土 10YR6/6　Ⅳ層
4．黒 褐 色 土 10YR2/2　Ⅳ層のブロック土との混合土
5．黄 褐 色 土 5YR8/6　Ⅳ層
6．明赤褐色土 2.5YR5/8　Ⅳ層が強く焼けている　堅い
7．黒 褐 色 土　住居跡埋土Ⅱ層と同じ
ⅢD01煙道、ⅢD01カマド状注記
1．黒 褐 色 土 10YR2/2
2．暗 褐 色 土 10YR3/3　黄褐色土を含む
3．極暗褐色土 7.5YR2/3
4．黒 褐 色 土 10YR2/2
5．暗赤褐色土　5YR3/6
6．黒 褐 色 土 7.5YR2/2 暗褐色土を含む
7．極暗褐色土 7.5YR2/3
8．黒 褐 色 土 7.5YR2/2
9．褐　色　土 7.5YR4/3
10．黒 褐 色 土 7.5YR3/1
ⅢD01カマド状
ⅢD01煙道
F E L=96.200m
ⅢE－A
土坑１注記
1．黒褐色土 7.5YR 2/2 基本土層Ⅱ層、炭化物を含む
2．黒褐色土 10YR 2/3 Ⅱ層とⅢ層の混じり　Ⅳ層を小ブロック状に含む
土坑１
K L=96.500m L
0 1 2m
A L=96.500m B
C L=96.300m D
ⅢD01住居跡断面注記
1．黒 褐 色 土 10YR 2/3 黄褐色土の小ブロックが入る。炭化物微量に入る
2．黒 褐 色 土 10YR 2/3 炭化物粒、焼土粒、Ⅳ層のブロックが多く入る
3．黒 褐 色 土 10YR 2/2 1・2層と同様の土で、混じりが少ない
4．明黄褐色土 10YR 6/6 Ⅳ層の土　僅かに黒褐色土が混じる

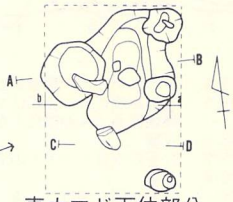
図版６：ⅢＤ01住居跡



北カマド煙道断面



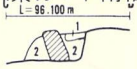
北カマド煙道土層断面注記
1．黒褐色土 7.5YR2/1 黄褐色を含む
2．暗褐色土 10YR3/4
3．黄 褐 色 10YR5/6
4．褐　　色 10YR4/6
5．暗褐色土 10YR3/4
6．黒褐色土 10YR2/2 黄褐色を含む
7．黒 色 土 10YR2/1



東カマド下位部分

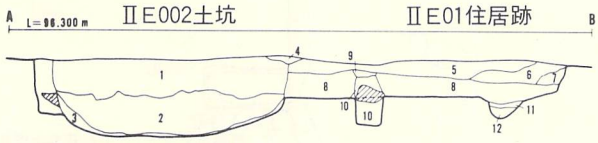
東カマド北袖断面

東カマド南袖断面



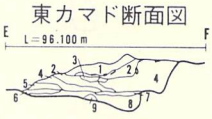
東カマド南北断面図

東カマド注記
1．10YR2/2
1．黒褐色土 10YR3/2
2．黄褐色土 暗褐色土 5YR2/3～7.5YR5/6
3．5YR2/3～5YR3/4
4．黒褐色土 10YR2/2
5．黄 色 土 2.5Y7/8 黒褐色土を含む
6．黒褐色土 10YR2/2
7．黄 色 土
8．暗褐色土 10YR3/5 黄褐色を含む
9．ぼろぼろした焼土



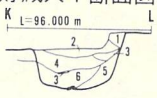
ⅡE01住居跡土層断面注記
1．黒色土 10YR2/1 Ⅳ層を含む
2．Ⅳ層と黒色土の混土
3．黒色土 7.5YR2/1
（1～3：ⅡE002土坑）
4．基本土層 Ⅰ層
5．黒褐色土 7.5YR3/3 暗褐色土を含む
6．黒褐色土 7.5YR2/2
7．黒褐色土 7.5YR2/2 黄褐色土を含む
8．7.5YR2/2～3/3 Ⅰ層とⅡ層の混合土、Ⅳ層も含む
9．5層に黄褐色土を含む
10．9層とほぼ同様
11．暗褐色土 7.5YR3/3 Ⅳ層の中にⅡ層を含む
12．11層よりⅡ層の混じりが多い

東カマド断面図



東カマド注記
1．極暗赤褐色土 5YR2/3
2．暗 赤 褐 色 土 5YR3/3
3．暗 褐 色 土 7YR3/4
4．赤 褐 色 土 5YR4/6
5．黒 褐 色 土
6．褐　　色 土 10YR4/6
7．明 赤 褐 色 土 5YR5/8
8．暗 褐 色 土 10YR3/4 Ⅳ層を含む
9．明 黄 褐 色 土 10YR7/6 Ⅳ層

貯蔵穴1断面図



貯蔵穴1注記
1．褐 色 土 10YR4/4～4/6
2．暗褐色土 7.5YR3/3 Ⅳ層を含む
3．黒褐色土 10YR2/2
4．2層と同一
5．暗褐色土 7.5YR3/3 黄褐色土を含む
6．2、4層と同一 Ⅳ層を含む

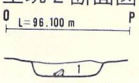
貯蔵穴2断面図

貯蔵穴2注記
1．暗褐色土 黄褐色土を含む
2．黒褐色土と黄褐色土の混土
3．暗褐色土 明るい黄褐色土を含む
4．暗褐色土 明るい黄褐色土

土坑1断面図

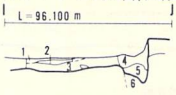
土坑1注記
1．暗褐色土 10YR3/3 黄褐色土を含む
2．黒褐色土 10YR2/3 黄褐色土を含む
3．暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土を含む

土坑2断面図



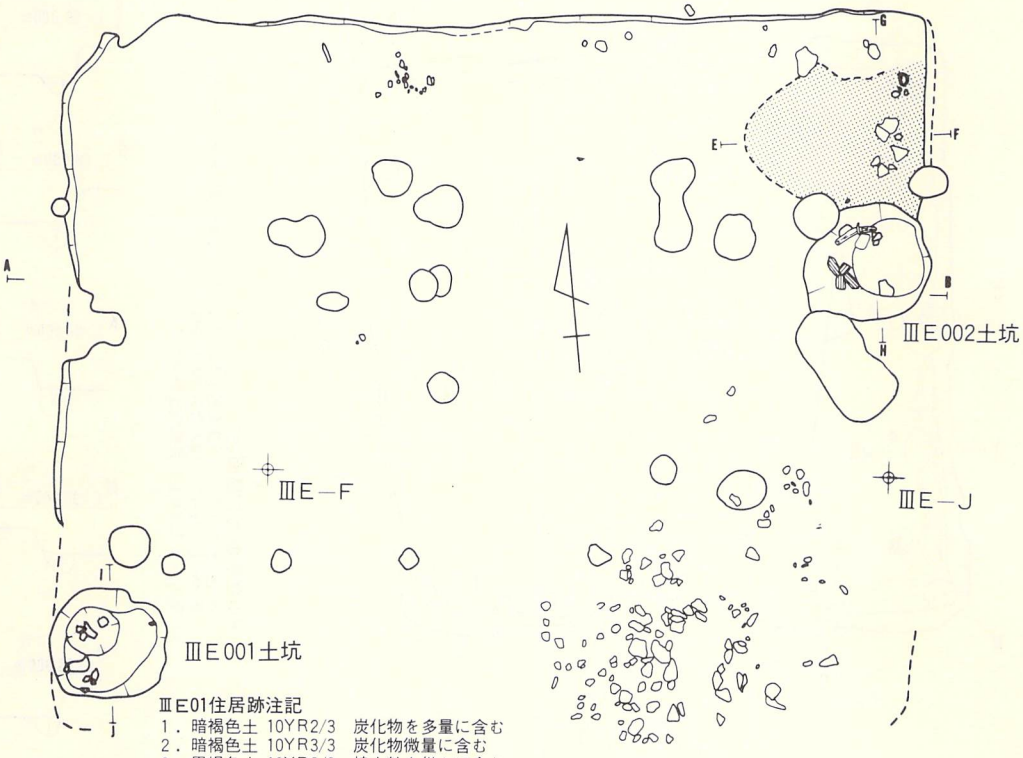
土坑2注記
1．黒褐色土

東カマド南側断面図

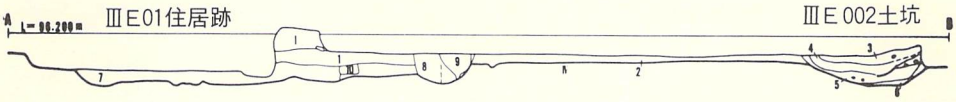


東カマド南側土層断面注記
1．極暗赤褐色土 5YR2/3
2．黒褐色土 10 YR2/3
3．焼土と黄褐色土 10YR4/4～5YR3/6
4．黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土を含む
5．黄褐色土と黒褐色土との混土 10YR4/3
6．黄褐色土 10YR5/6

図版7：ⅡE01住居跡



ⅢE01住居跡注記
1．暗褐色土 10YR2/3　炭化物を多量に含む
2．暗褐色土 10YR3/3　炭化物微量に含む
3．黒褐色土 10YR2/3　焼土粒を僅かに含む
4．暗褐色土 7.5YR3/3 炭化物、焼土を含む
5．黒 色 土 7.5YR 7/1 炭化物を多く含む
6．明黄褐色土 10YR7/6 粘性
7．明黄褐色土と黒褐色土の混合 10YR7/6と10YR2/3 黄褐色土はブロック状入り
8．暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土を含む
9．黒 褐 色 10YR3/2 炭化物を含む
10．暗褐色土 10YR3/5 黄褐色土を含む

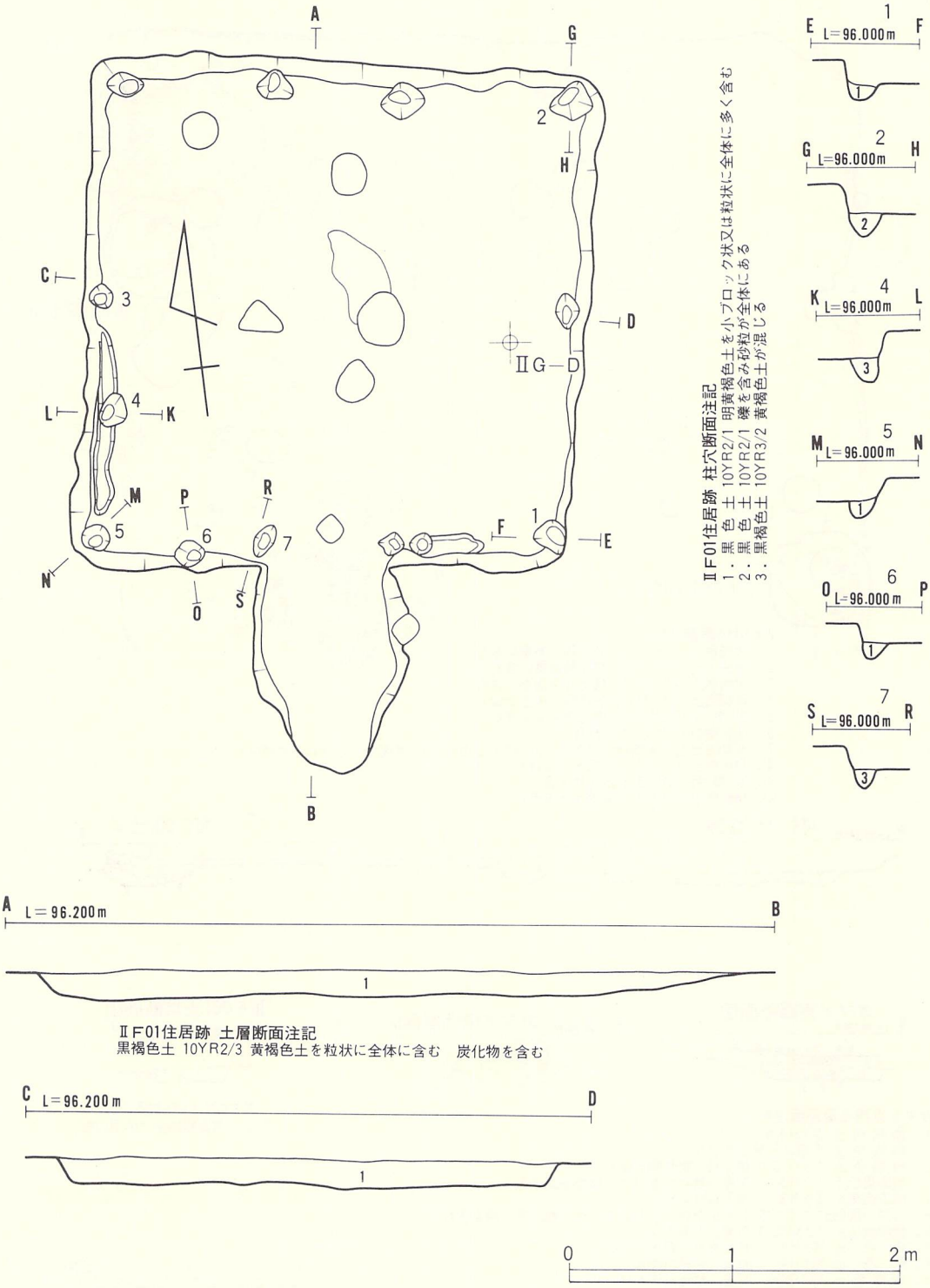


カマド東西土層断面注記
1．赤 褐 色 土 5YR4/8
1'．赤 褐 色 土 1層より焼土が少ない
2．暗 褐 色 土 7.5YR3/4 焼土粒、炭化物を含む
3．明赤褐色土 5YR5/8　Ⅳ層が焼けたもので、燃焼部底である
4．暗赤褐色土 5YR3/3　若干粘性あり
5．にぶい褐色土 7.5YR5/4 粘土が焼けたもので、焼土粒、炭化物を含む
6．極暗褐色土 7.5YR2/3 Ⅲ層とⅣ層を含む
7．褐　色　土 10YR4/6　粘性あり、若干かたい
8．褐　色　土 10YR4/6　Ⅲ層とⅣ層の混合
9．黄 褐 色 土 10YR5/6　Ⅳ層、粘性若干あり

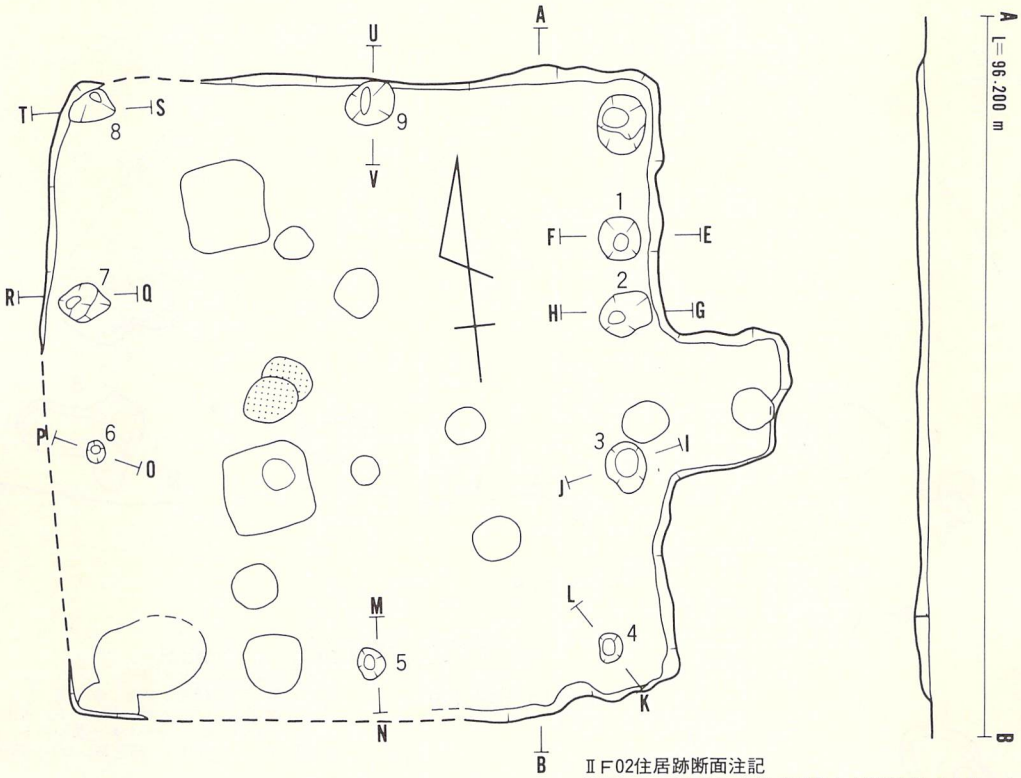
ⅢE001土坑注記
1．明黄褐色土 10YR6/6

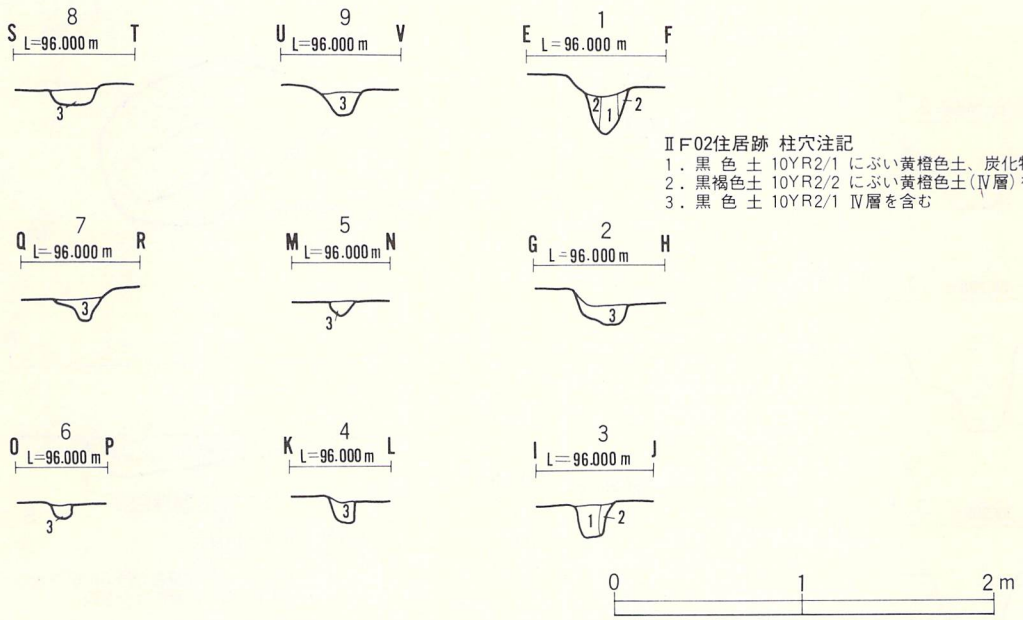
0　1　2m

図版8：ⅢE01住居跡

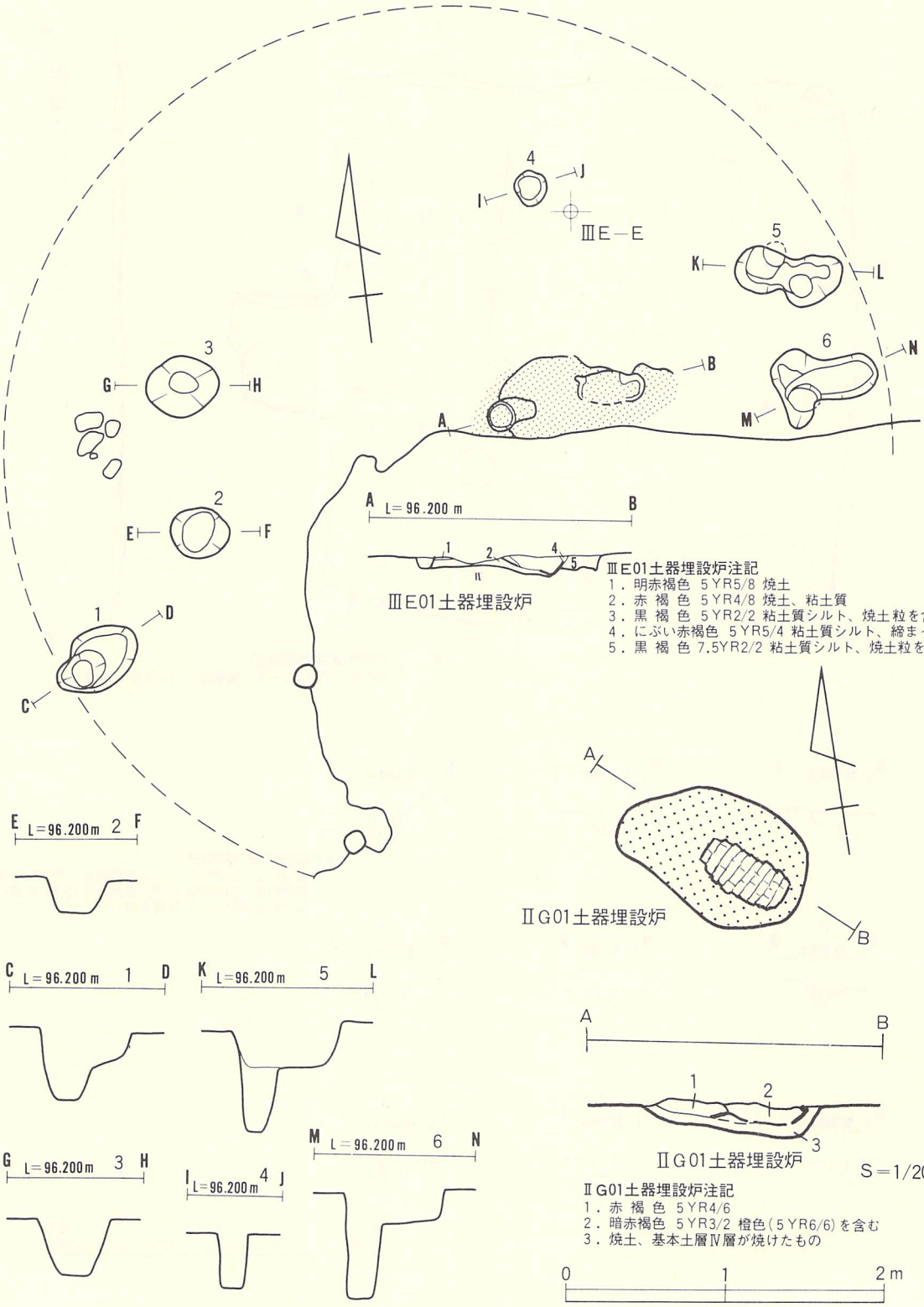

A
B
C
D
E
F
G
H
K
L
M
N
O
P
R
S
1
2
3
4
5
6
7
ⅡG－D
ⅡF01住居跡 柱穴断面注記
1：黒 色 土 10YR2/1 明黄褐色土を小ブロック状又は粒状に全体に多く含む
2：黒 色 土 10YR2/1 礫を含み砂粒が全体にある
3：黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土が混じる
L=96.000m
L=96.200m
ⅡF01住居跡 土層断面注記
黒褐色土 10YR2/3 黄褐色土を粒状に全体に含む 炭化物を含む
0
1
2m

図版９：ⅡF01住居跡

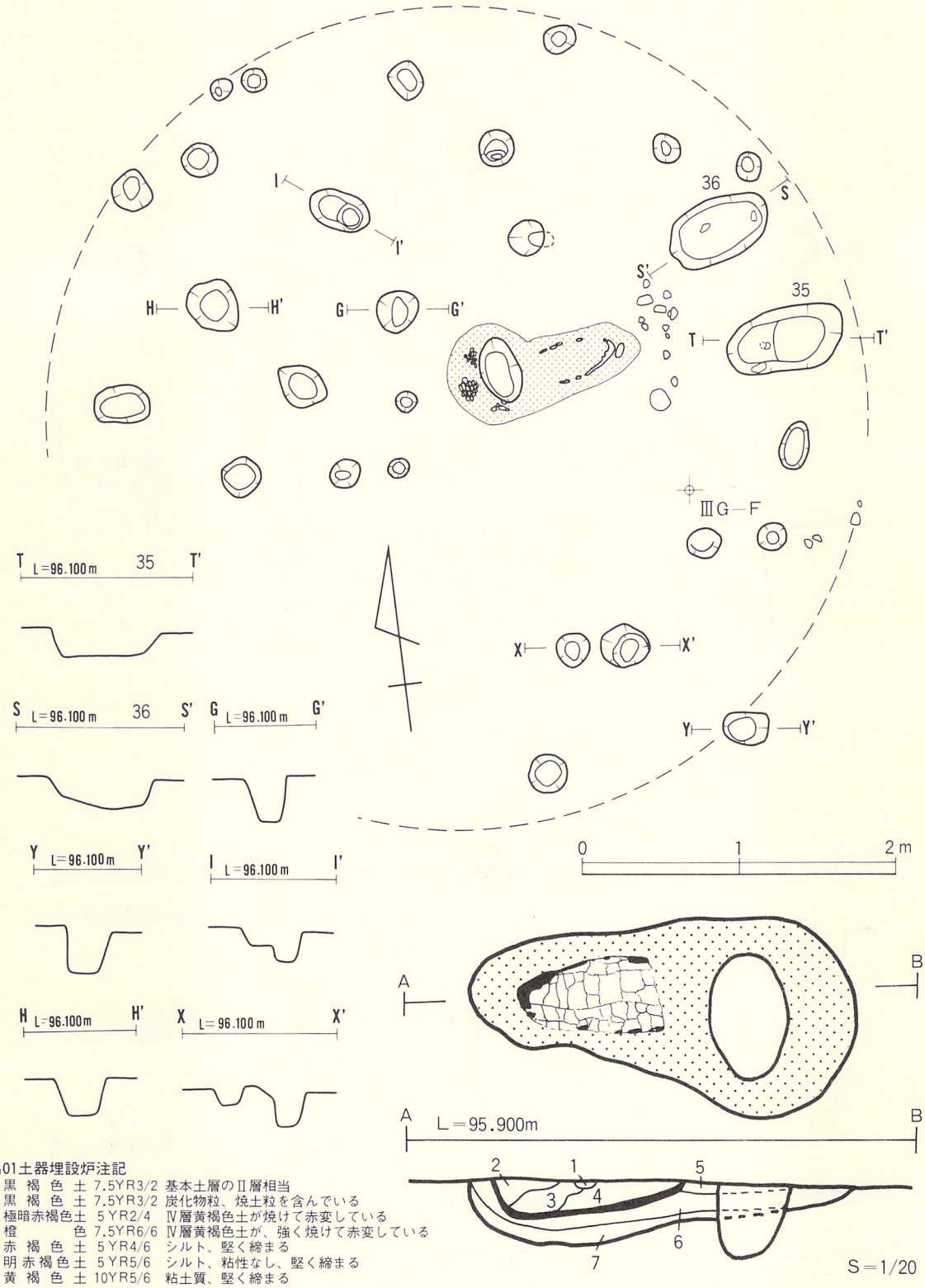




図版10：ⅡF02住居跡



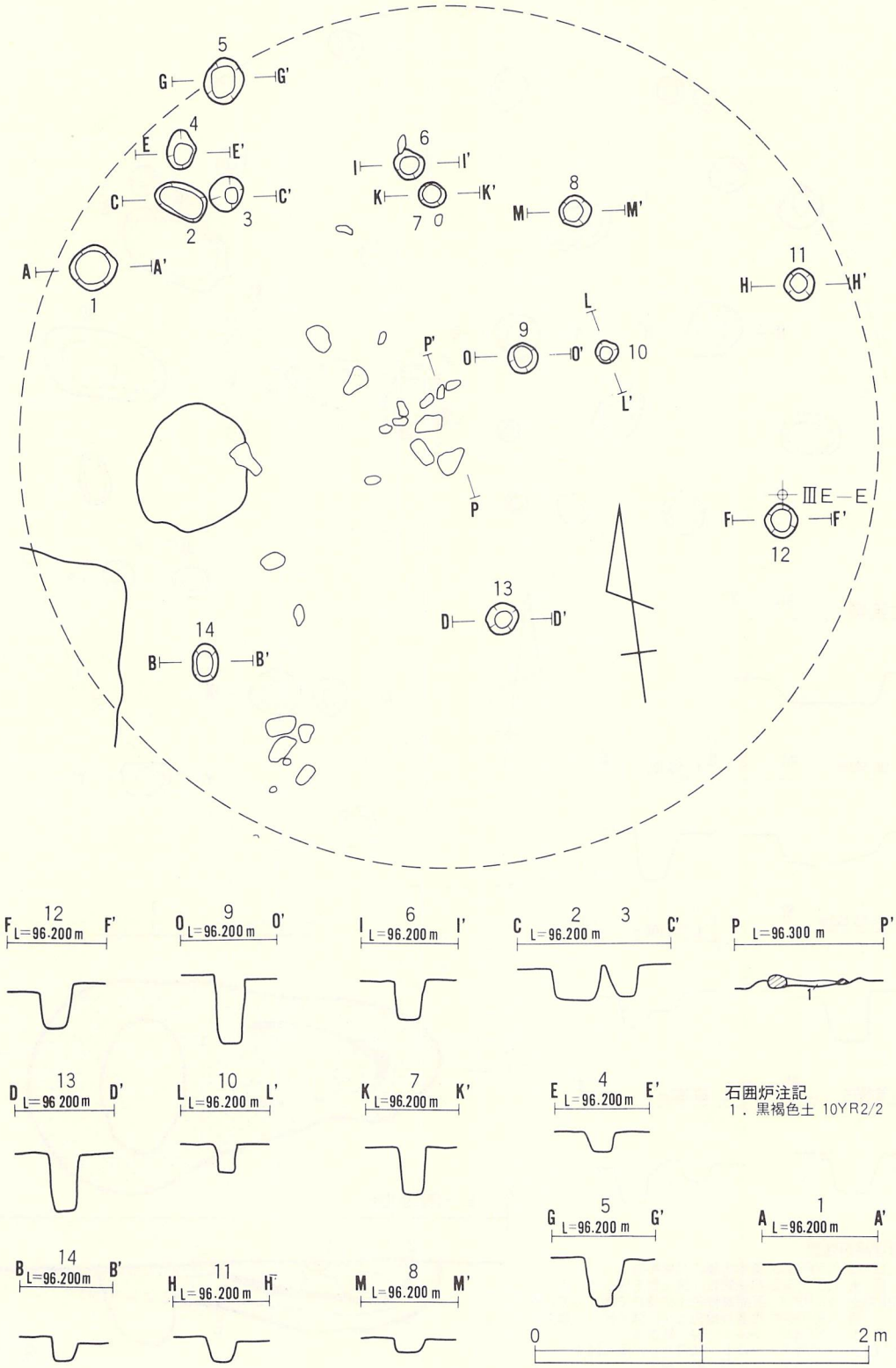
図版11：ⅢE01・ⅡG01土器埋設炉



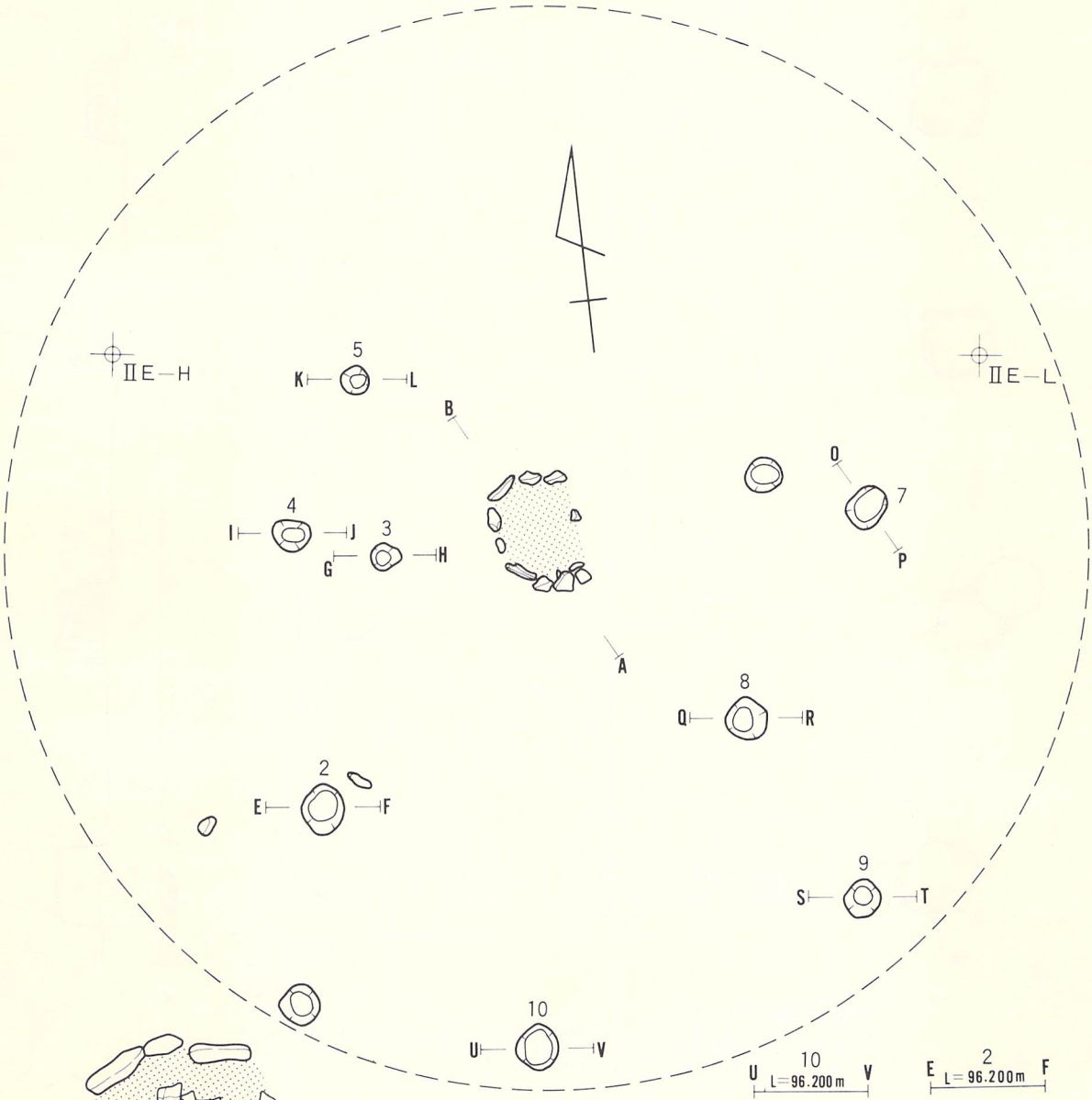
ⅢG01土器埋設炉注記

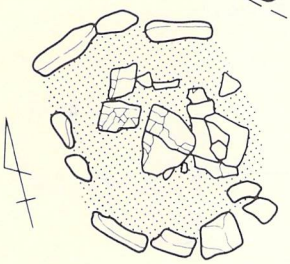
1．黒 褐 色 土 7.5YR3/2 基本土層のⅡ層相当
2．黒 褐 色 土 7.5YR3/2 炭化物粒、焼土粒を含んでいる
3．極暗赤褐色土 5YR2/4 Ⅳ層黄褐色土が焼けて赤変している
4．橙 色 7.5YR6/6 Ⅳ層黄褐色土が、強く焼けて赤変している
5．赤 褐 色 土 5YR4/6 シルト、堅く締まる
6．明赤褐色土 5YR5/6 シルト、粘性なし、堅く締まる
7．黄 褐 色 土 10YR5/6 粘土質、堅く締まる

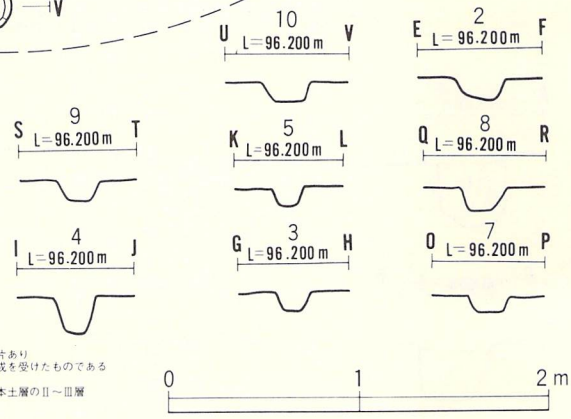
図版12：ⅢG01土器埋設炉

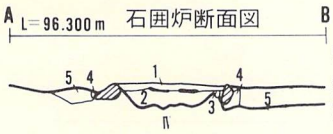


図版13：ⅡE01石囲炉



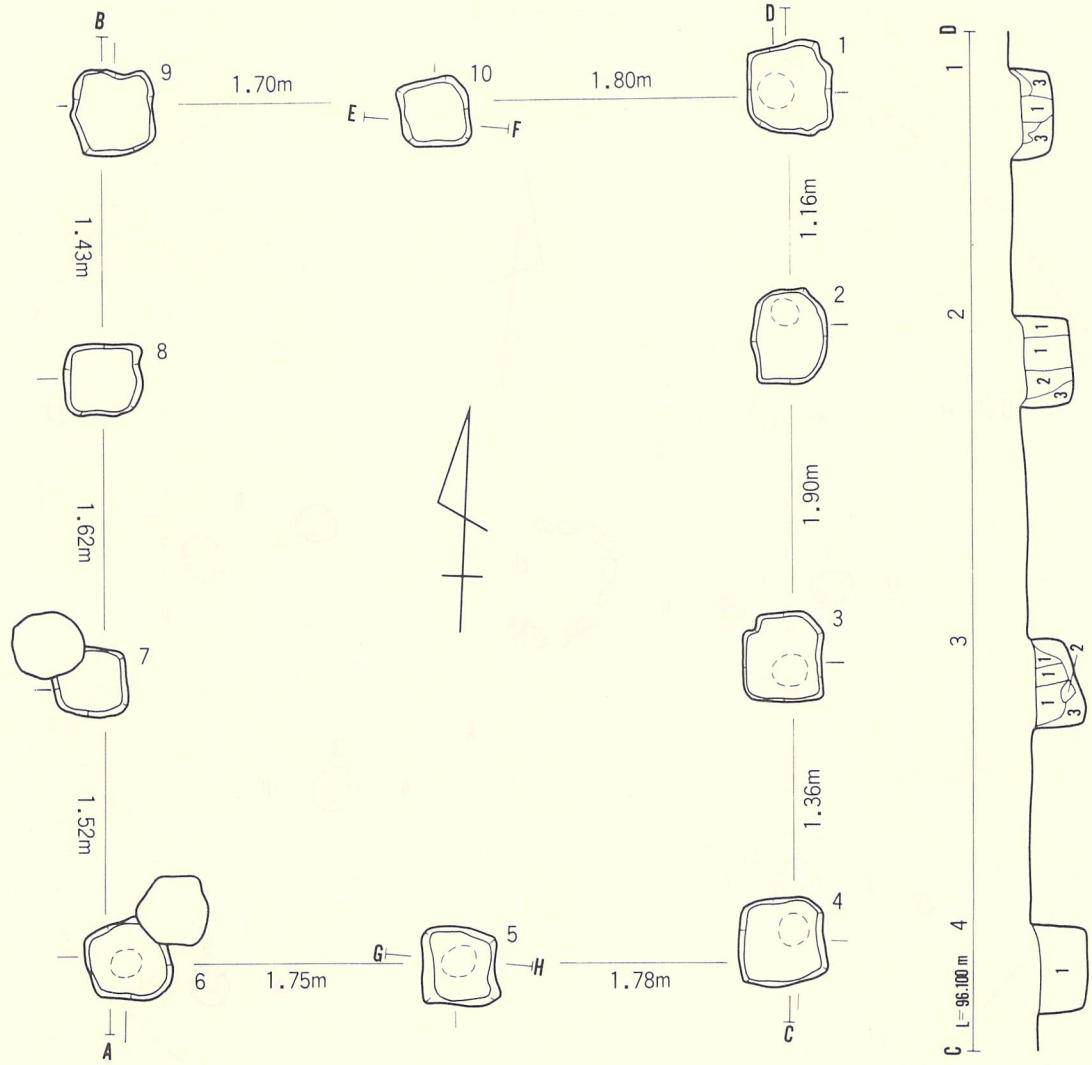




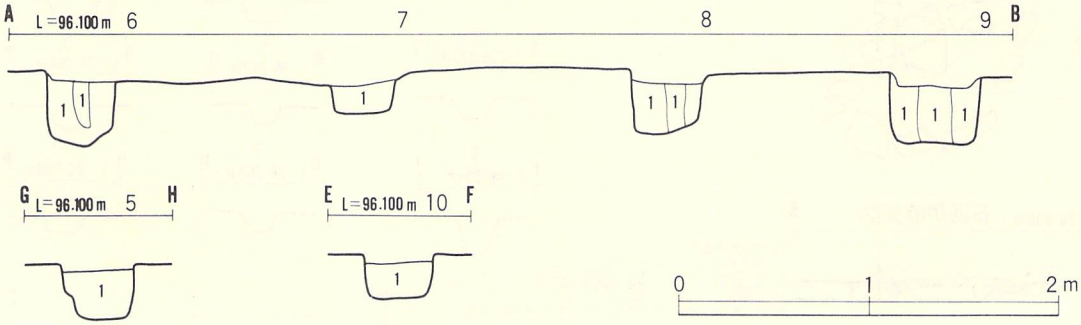


ⅡE02石囲炉注記
1．黒 褐 色 土 10YR2/2　焼土を含む
2．明赤褐色土 5YR5/8　焼土、上面に土器片あり
3．明赤褐色土 5YR3/4　基本土層Ⅳ層が焼成を受けたものである
4．黒 褐 色 土 7.5YR2/2 焼成を受けている
5．黒　色　土 7.5YR2/1 褐色土を含む、基本土層のⅡ～Ⅲ層

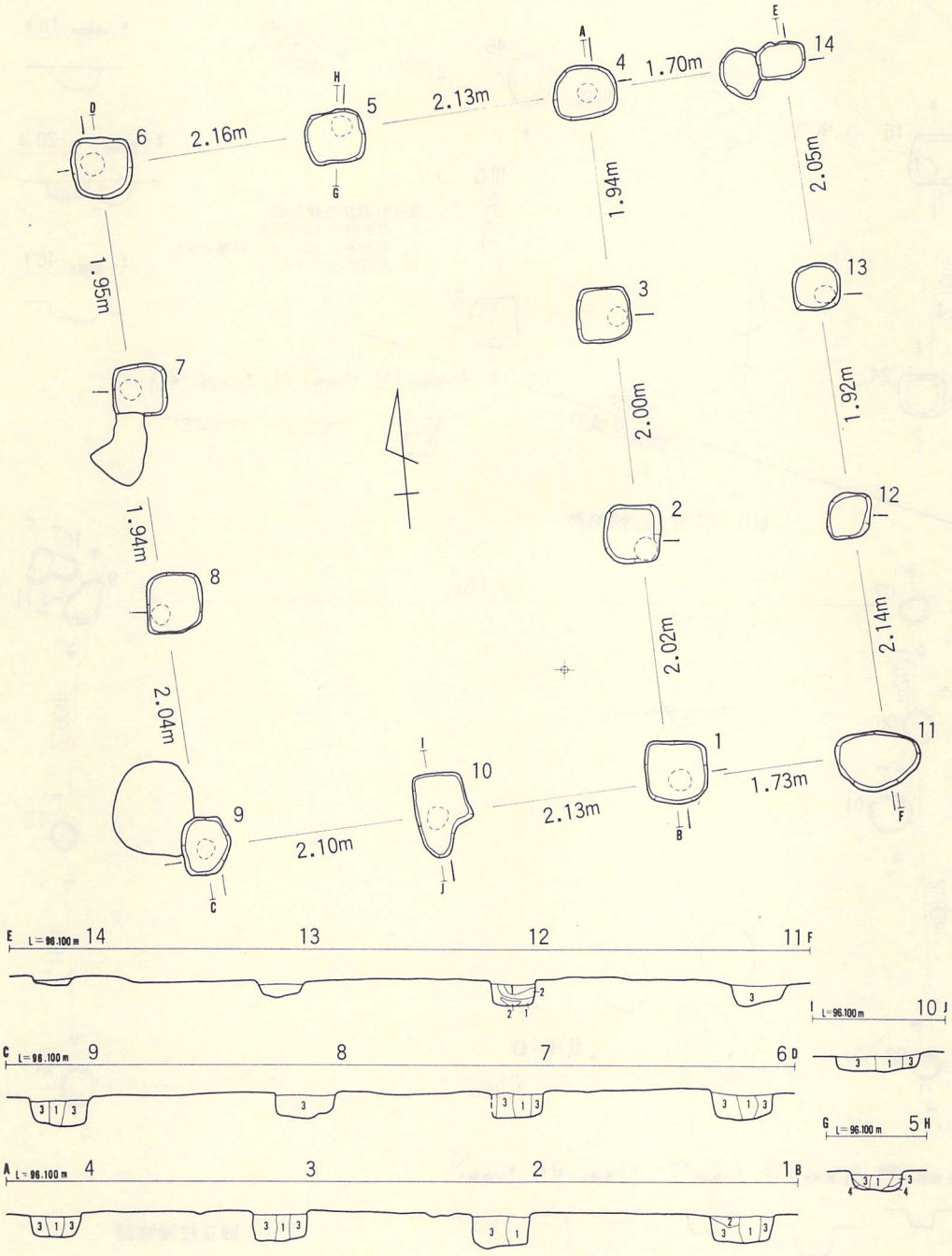
図版14：ⅡE02石囲炉



ⅡF01掘立柱建物跡注記
1．黒 色 土～黒褐色土 7.5YR1.7/1～10YR2/2 炭含む　土器片有　炭化物、焼土粒含む
2．黒 色 土～暗褐色土 7.5YR1.7/1～10YR3/3 黒色土の混土
3．黒褐色土～褐 色 土 10YR2/2～4/6 黒色土が混入



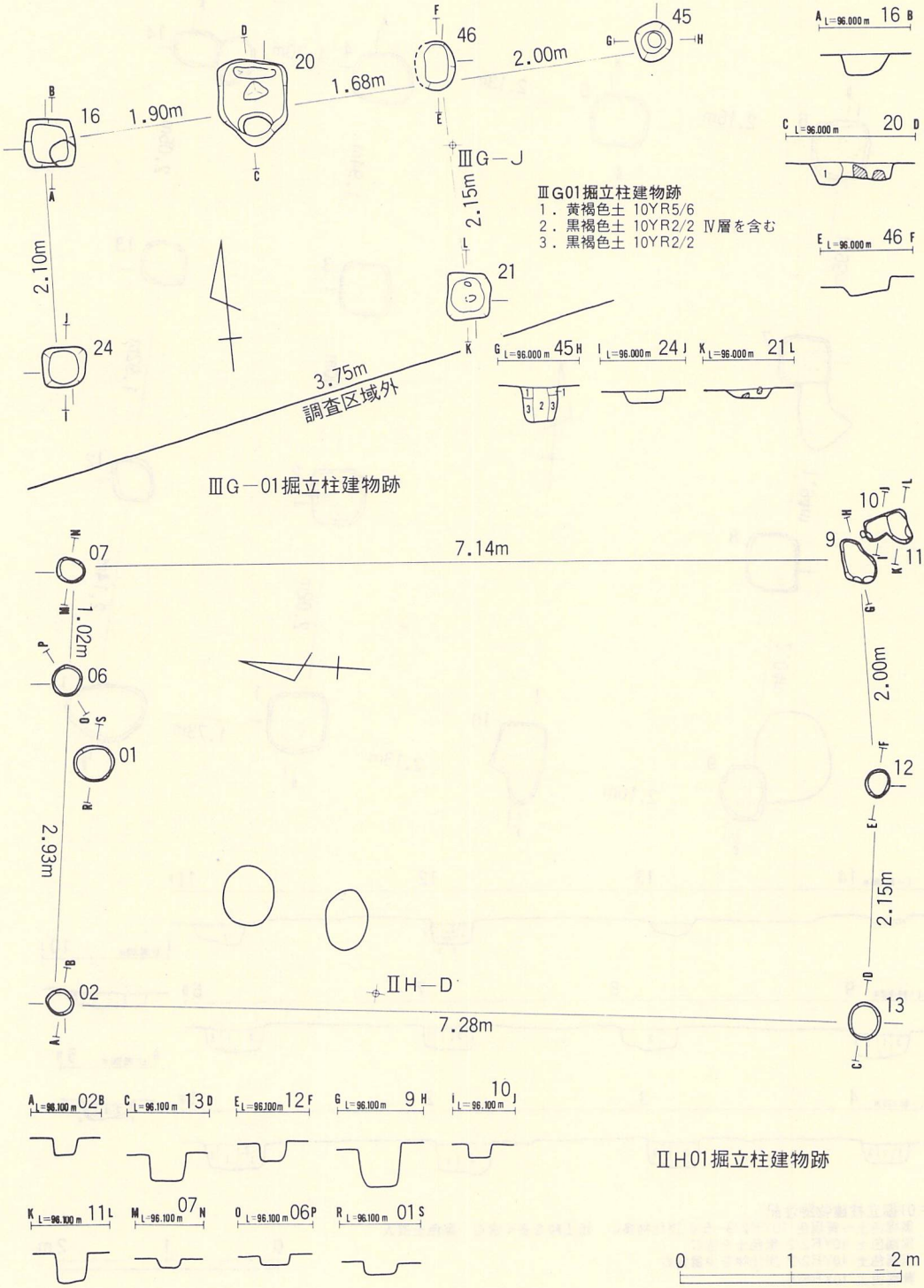
図版15：ⅡF01掘立柱建物跡



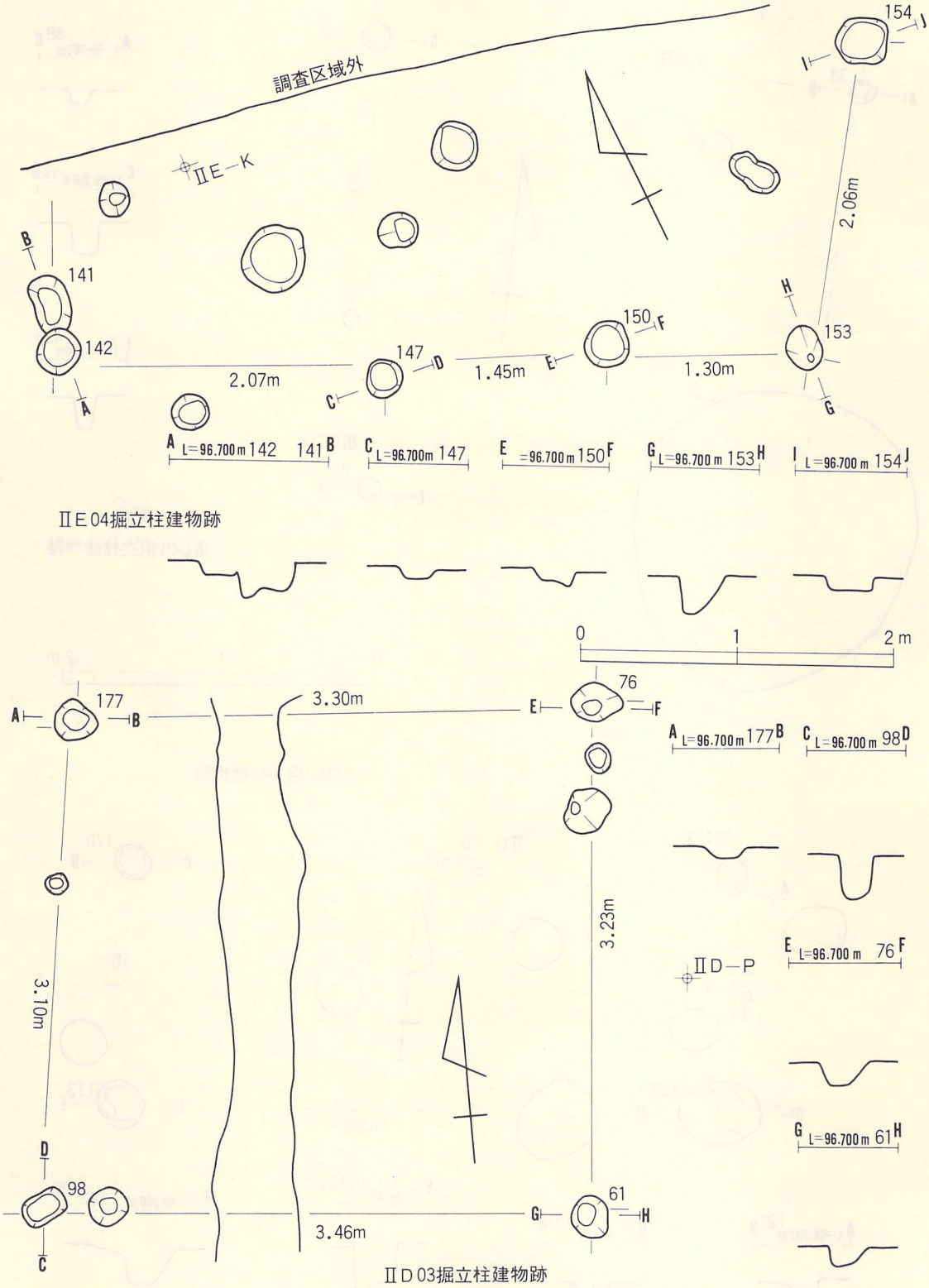
ⅢF01掘立柱建物跡注記
1．黒褐色土～黄褐色 10YR2/3～5/6 炭化物多い。焼土粒を多く含む　黒色土混入
2．黒褐色土 10YR2/2 黒色土を含む
3．黒褐色土 10YR2/2 炭化物を少量含む
4．黄褐色土 10YR5/6

0　1　2m

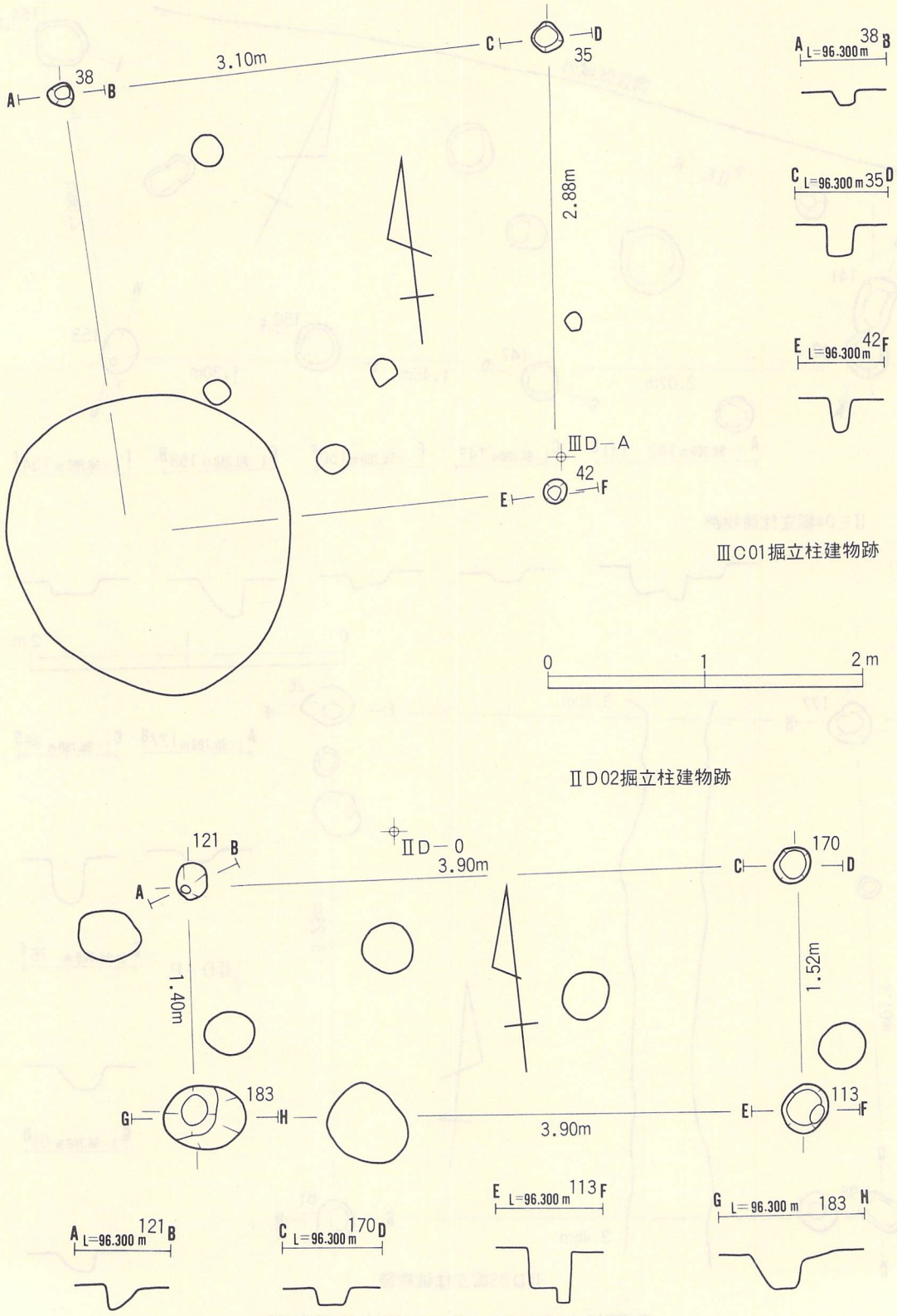
図版16：ⅢF01掘立柱建物跡



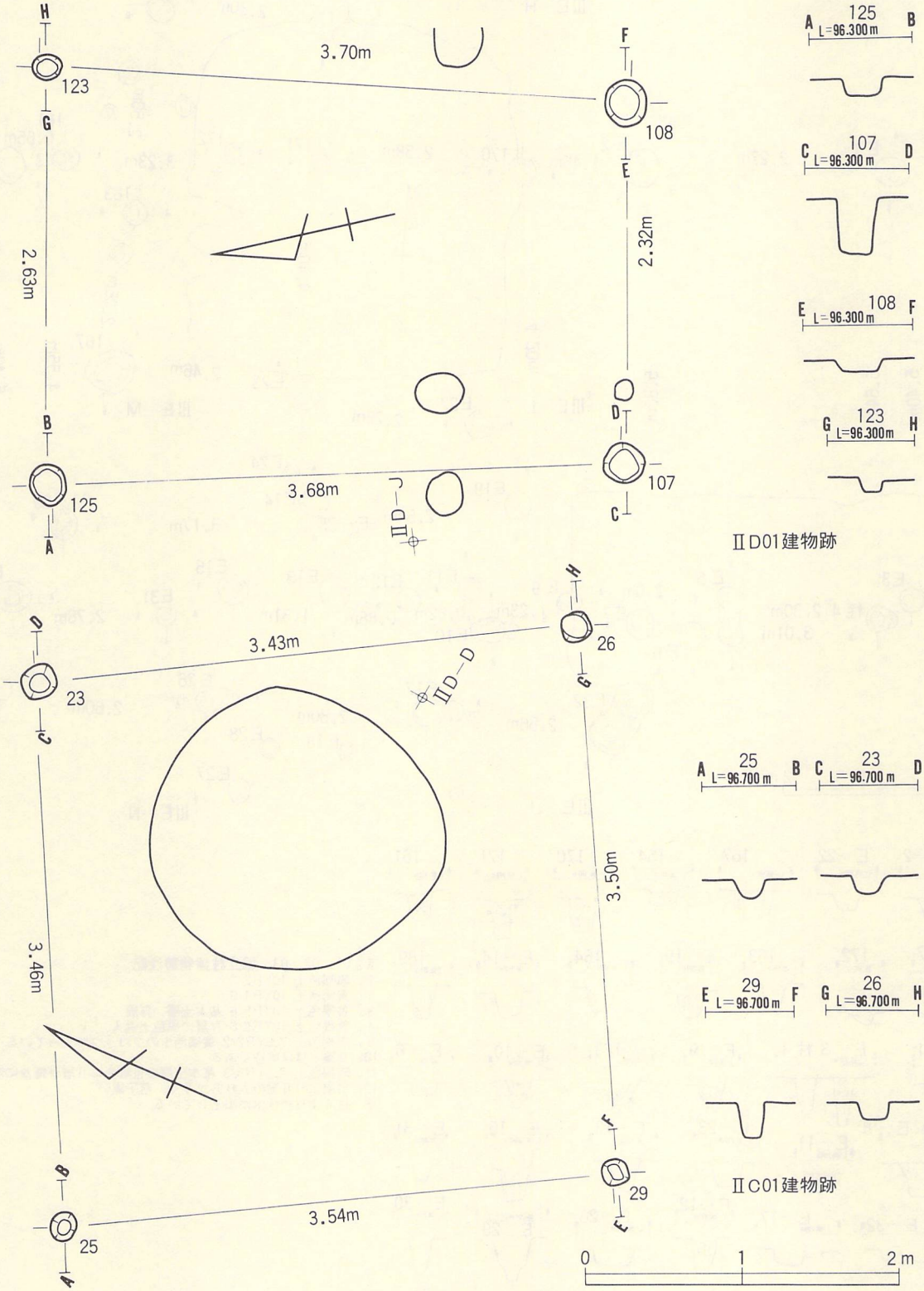
図版17：ⅢG01・ⅡH01掘立柱建物跡



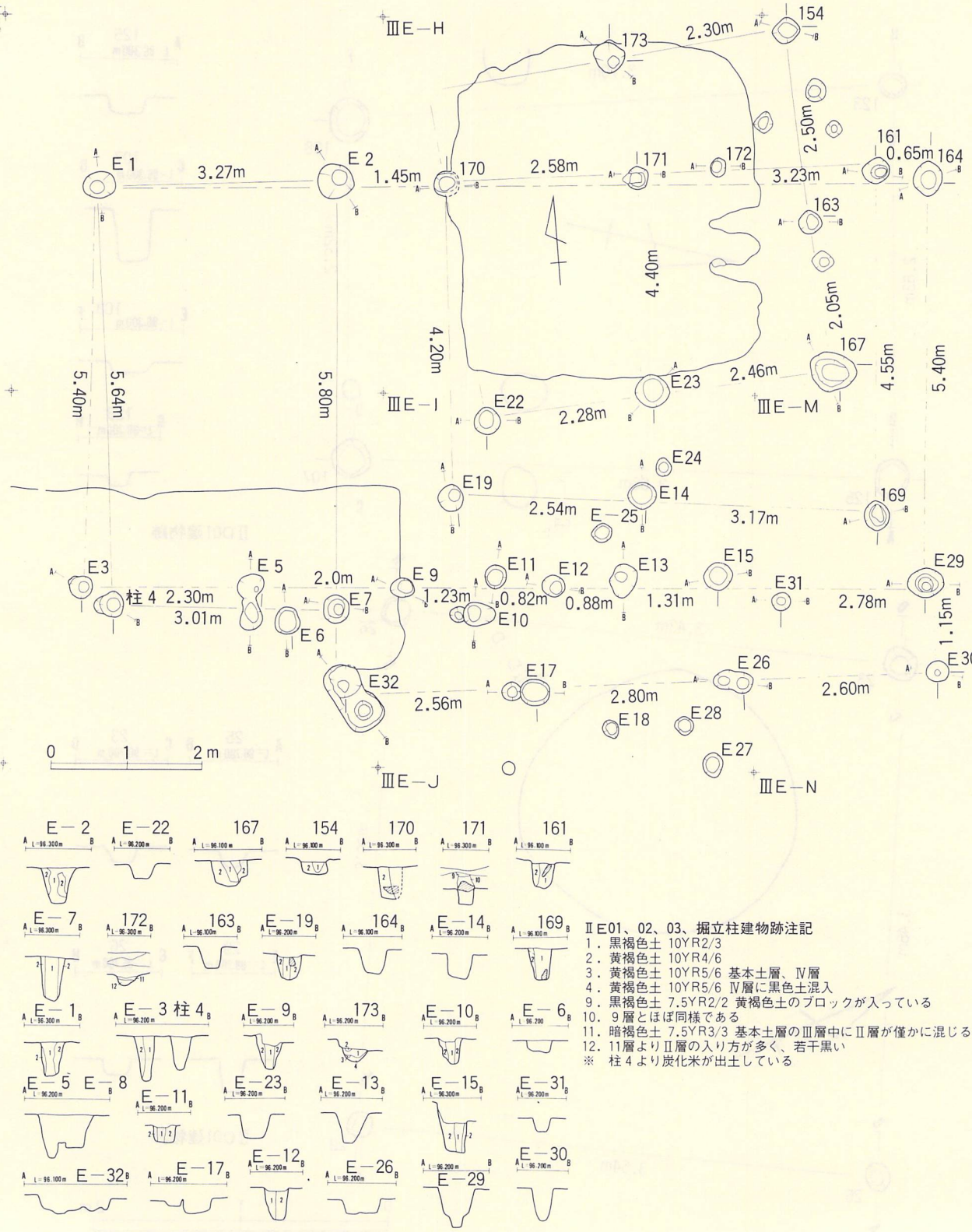
図版18：ⅡE04・ⅡD03掘立柱建物跡



図版19：ⅢC01・ⅡD02掘立建物跡



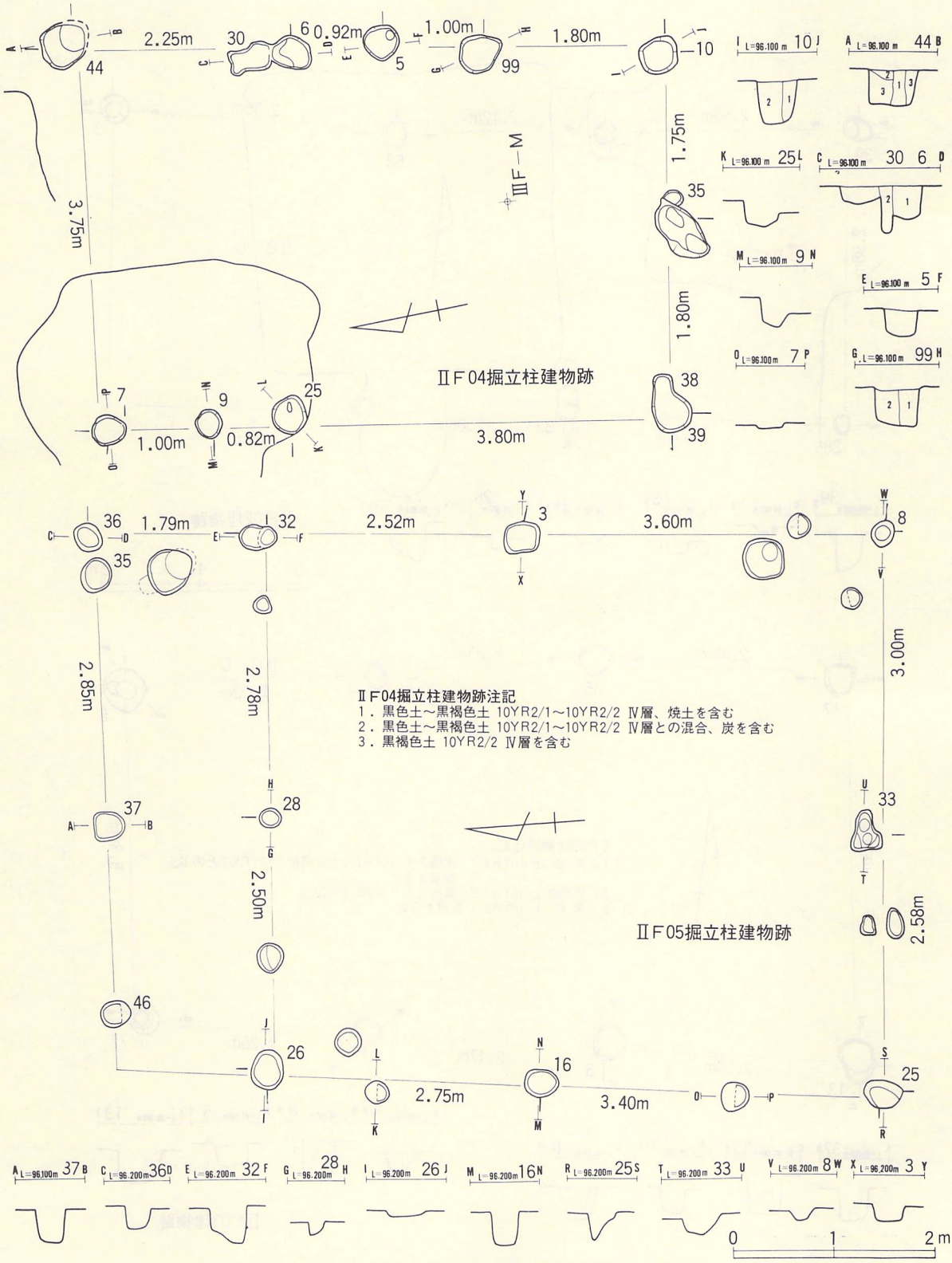
図版20：ⅡD01・ⅡC01建物跡



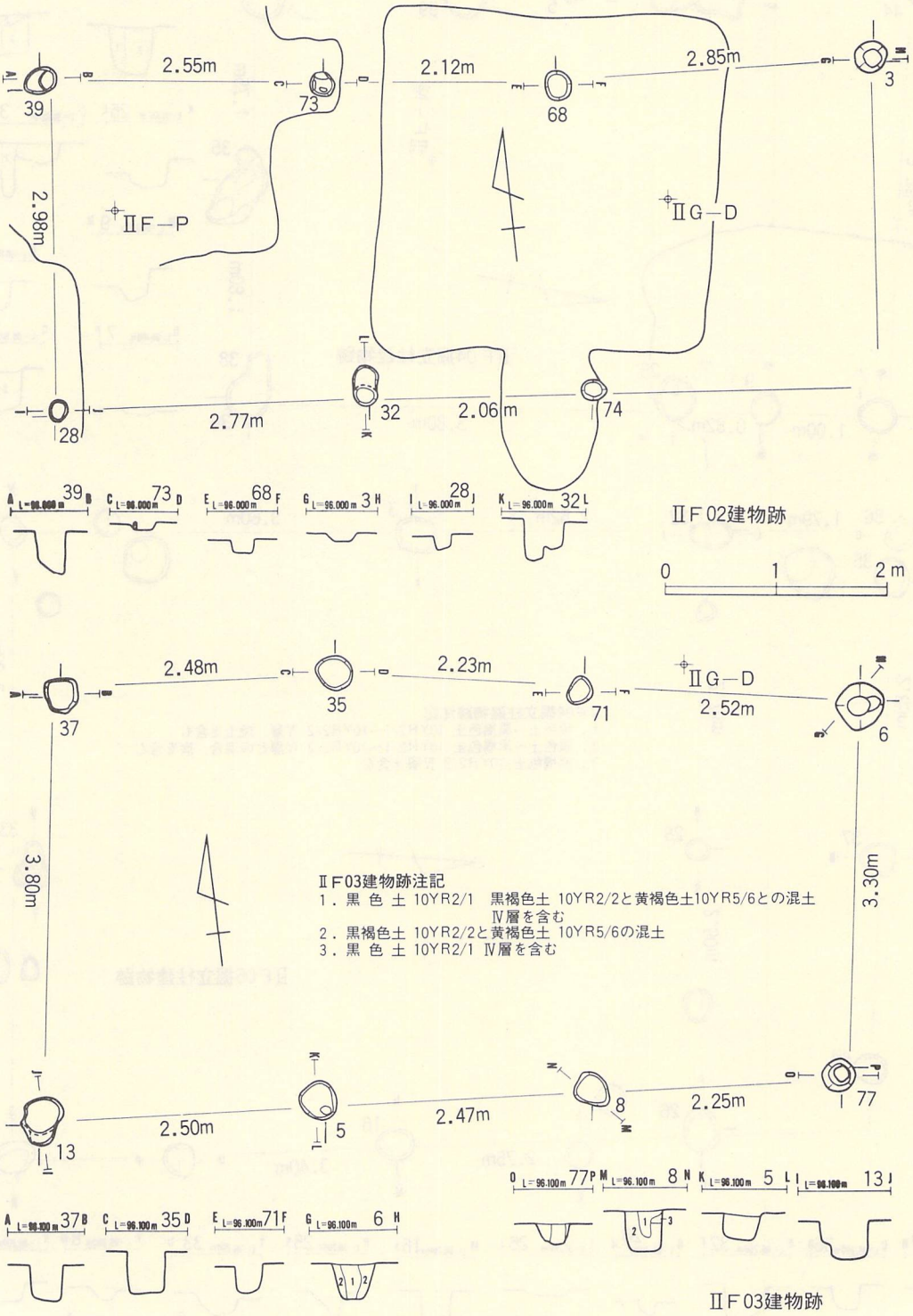
ⅡE01、02、03、掘立柱建物跡注記

1．黒褐色土 10YR2/3
2．黄褐色土 10YR4/6
3．黄褐色土 10YR5/6 基本土層、Ⅳ層
4．黄褐色土 10YR5/6 Ⅳ層に黒色土混入
9．黒褐色土 7.5YR2/2 黄褐色土のブロックが入っている
10．9層とほぼ同様である
11．暗褐色土 7.5YR3/3 基本土層のⅢ層中にⅡ層が僅かに混じる
12．11層よりⅡ層の入り方が多く、若干黒い
※　柱4より炭化米が出土している

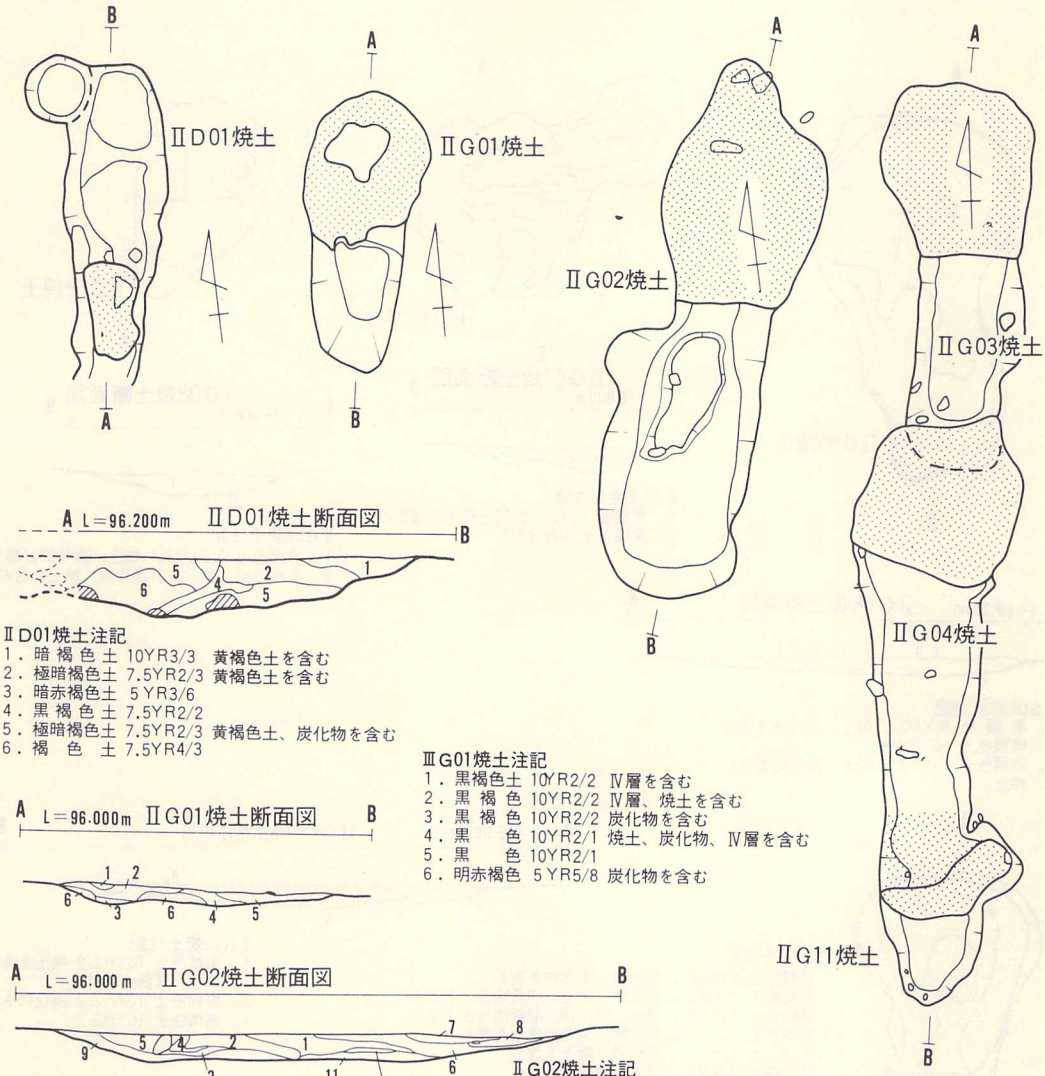
図版21：ⅡE01・02・03掘立柱建物跡



図版22：ⅡF04・05掘立柱建物跡



図版23：ⅡF02・03建物跡



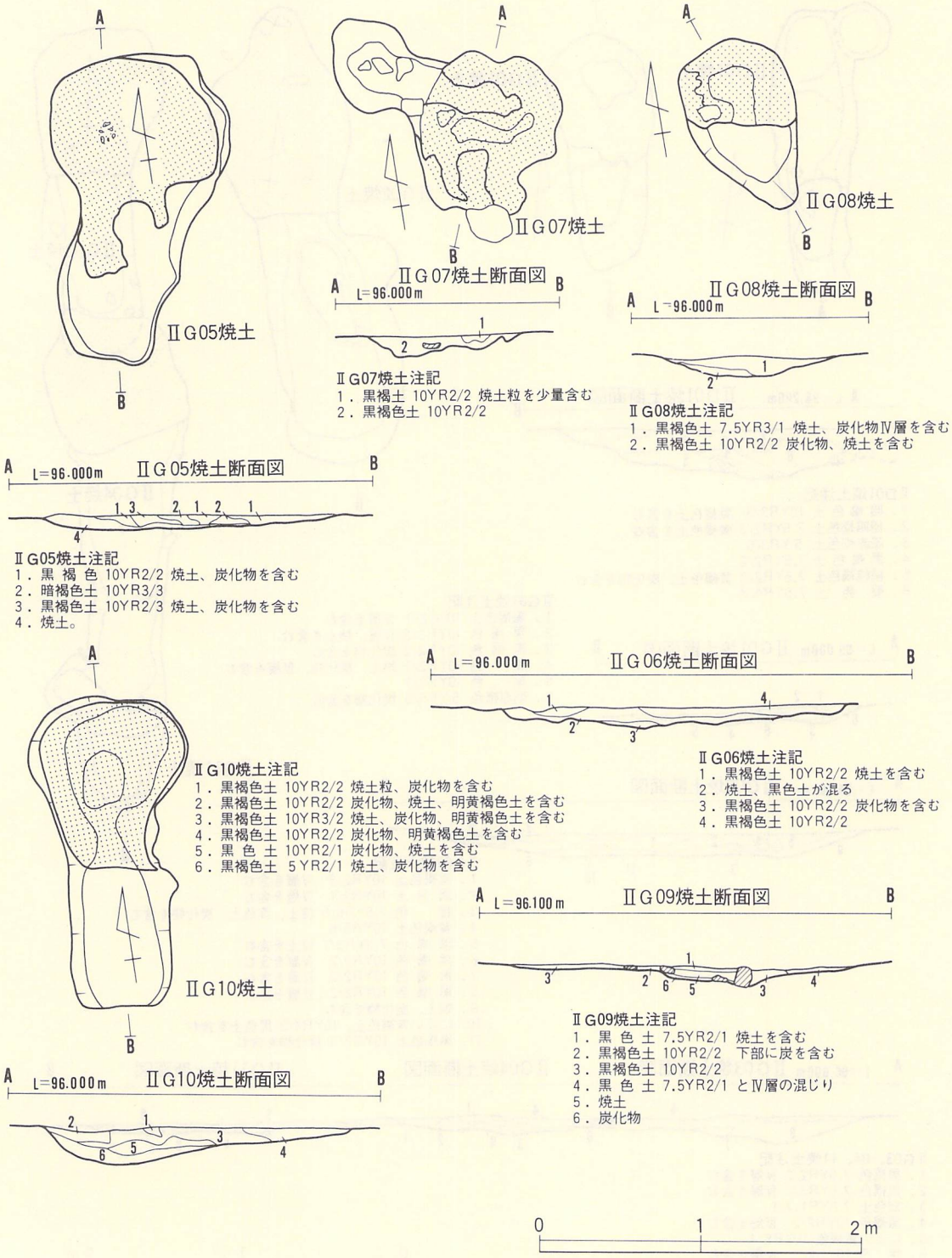
ⅡD01焼土注記
1．暗 褐 色 土 10YR3/3 黄褐色土を含む
2．極暗褐色土 7.5YR2/3 黄褐色土を含む
3．暗赤褐色土 5YR3/6
4．黒 褐 色 土 7.5YR2/2
5．極暗褐色土 7.5YR2/3 黄褐色土、炭化物を含む
6．褐 色 土 7.5YR4/3

ⅢG01焼土注記
1．黒褐色土 10YR2/2 Ⅳ層を含む
2．黒 褐 色 10YR2/2 Ⅳ層、焼土を含む
3．黒 褐 色 10YR2/2 炭化物を含む
4．黒 色 10YR2/1 焼土、炭化物、Ⅳ層を含む
5．黒 色 10YR2/1
6．明赤褐色 5YR5/8 炭化物を含む

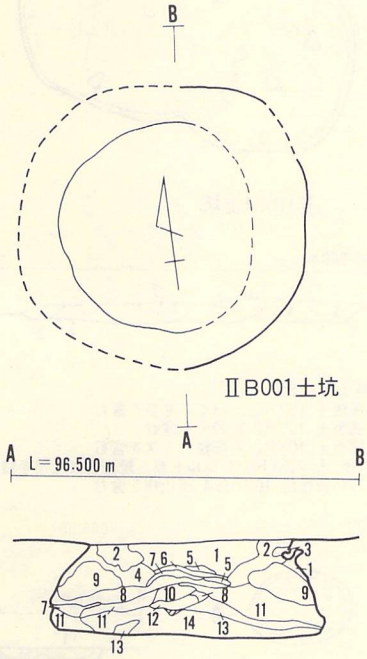
ⅡG02焼土注記
1．黒褐色土 10YR2/3 Ⅳ層を含む
2．黒 色 土 10YR2/1 Ⅳ層を含む
3．橙 色 7.5YR6/8 焼土、黒色土、炭化物を含む
4．黄褐色土 10YR5/6
5．黒 褐 色 7.5YR3/2 焼土を含む
6．黒 褐 色 10YR2/2 Ⅳ層を含む
7．黒 褐 色 10YR2/2 Ⅳ層を含む
8．黒 褐 色 10YR2/2 Ⅱ層を含む
9．焼土、炭化物を含む
10．にぶい黄褐色土、10YR4/3 黒色土を含む
11．黒褐色土 10YR2/3 炭化物を含む

ⅡG03、04、11焼土注記
1．黒褐色 7.5YR2/2 Ⅳ層を含む
2．黒褐色 7.5YR3/2 Ⅳ層を含む
3．黒色土 7.5YR1.7/1
4．黒褐色 10YR2/2 Ⅳ層を含む
5．にぶい黄褐色 10YR5/4
6．黒 色 10YR2/1 Ⅳ層を含む
7．黒褐色 7.5YR3/2 焼土と炭化物を含む
8．黒褐色 7.5YR2/2 炭化物を含む
9．焼土、下方は黒色土

図版24：カマド状焼土遺構(1)

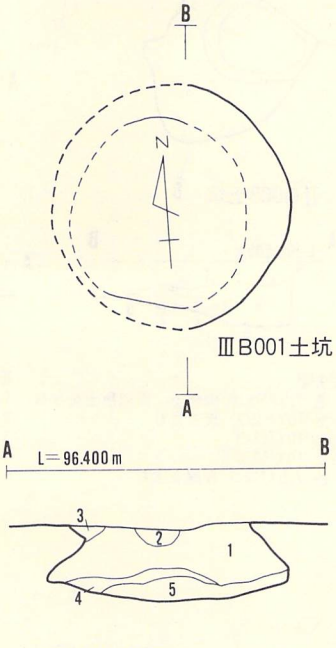


図版25：カマド状焼土遺構(2)



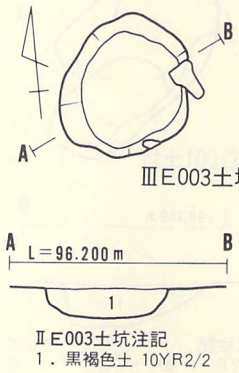
ⅡB001土坑

ⅡB001土坑注記
1．黒 色 土 10YR2/1　シルト質、細粒パミスを含む
2．黒褐色土 10YR3/2　シルト質、堅く締まる
3．黒褐色土 10YR2/2
4．黒 色 土 10YR2/1　シルト質、粉状パミスを含む
5．黒 色 土 10YR2/1　黄橙色土を含む
6．黒 色 土 10YR2/1
7．褐 色 土 10YR4/4　黒色土で汚れている
8．黒 色 土 7.5YR2/1 シルト質、細粒パミスを含む
9．黄褐色土 10YR5/6　Ⅳ層を含む
10．黒褐色土 10YR2/2　Ⅳ層を含む
11．黒 色 土 10YR2/1　Ⅳ層を含む
12．にぶい黄褐色土 10YR5/4 黒色土とⅣ層の混合土
13．黒 色 土 10YR2/1　Ⅳ層を含む　2/1
14．黒 色 土 10YR4/4 黒色土で汚れている



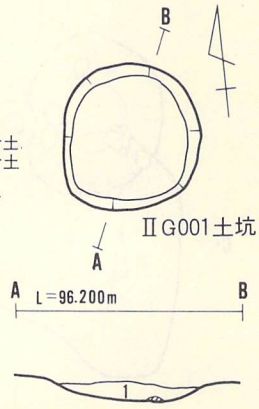
ⅢB001土坑

ⅢB001土坑注記
1．黒 色 土 7.5YR2/1
2．黒褐色土 10YR2/2 黒色土とⅣ層の混合土
3．黒 褐 色 10YR2/2 黒色土とⅣ層の混合土
4．黒 色 土 10YR2/1 炭化物を含む
5．にぶい黄褐色土 10YR4/3 黒色土を含む



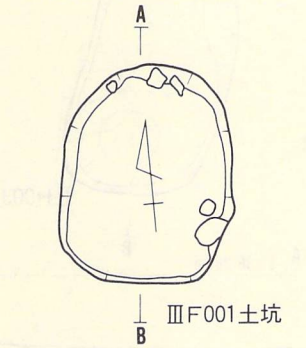
ⅢE003土坑

ⅡE003土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2



ⅡG001土坑

ⅡG001土坑注記
1．黒色土 10YR2/1 黄褐色土と炭化物を含む

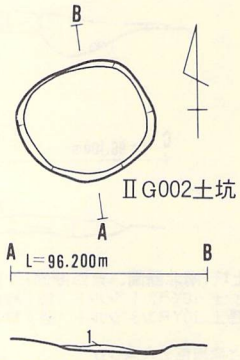


ⅢF001土坑

ⅢF001土坑注記
1．黒 色 土 10YR2/1
2．黒 色 土 10YR2/1 炭化物、礫を含む
3．黒褐色土 10YR2/3

ⅢF002土坑

ⅢF002土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2
2．黒褐色土 10YR2/2 Ⅳ層を含む

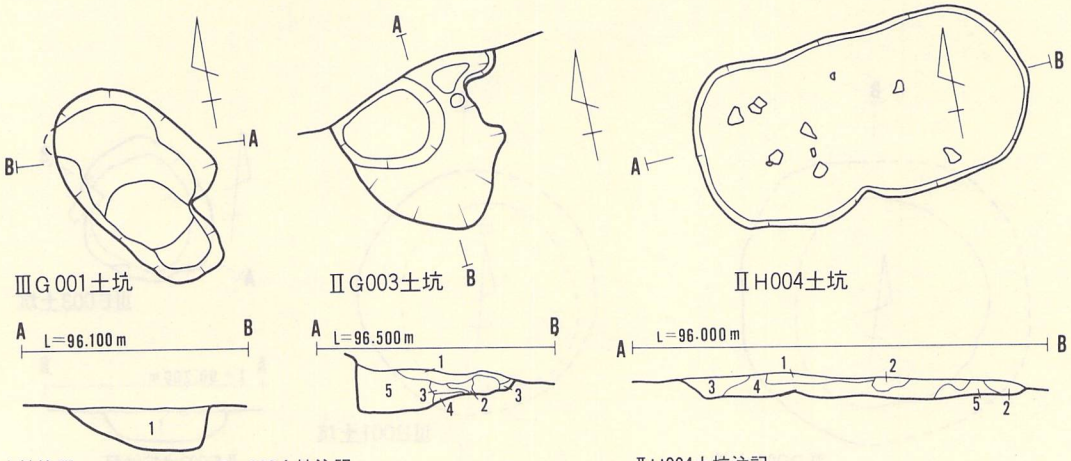


ⅡG002土坑

ⅡG002土坑注記
1．黒色土 7.5YR2/1 炭化物を含む

0　1　2 m

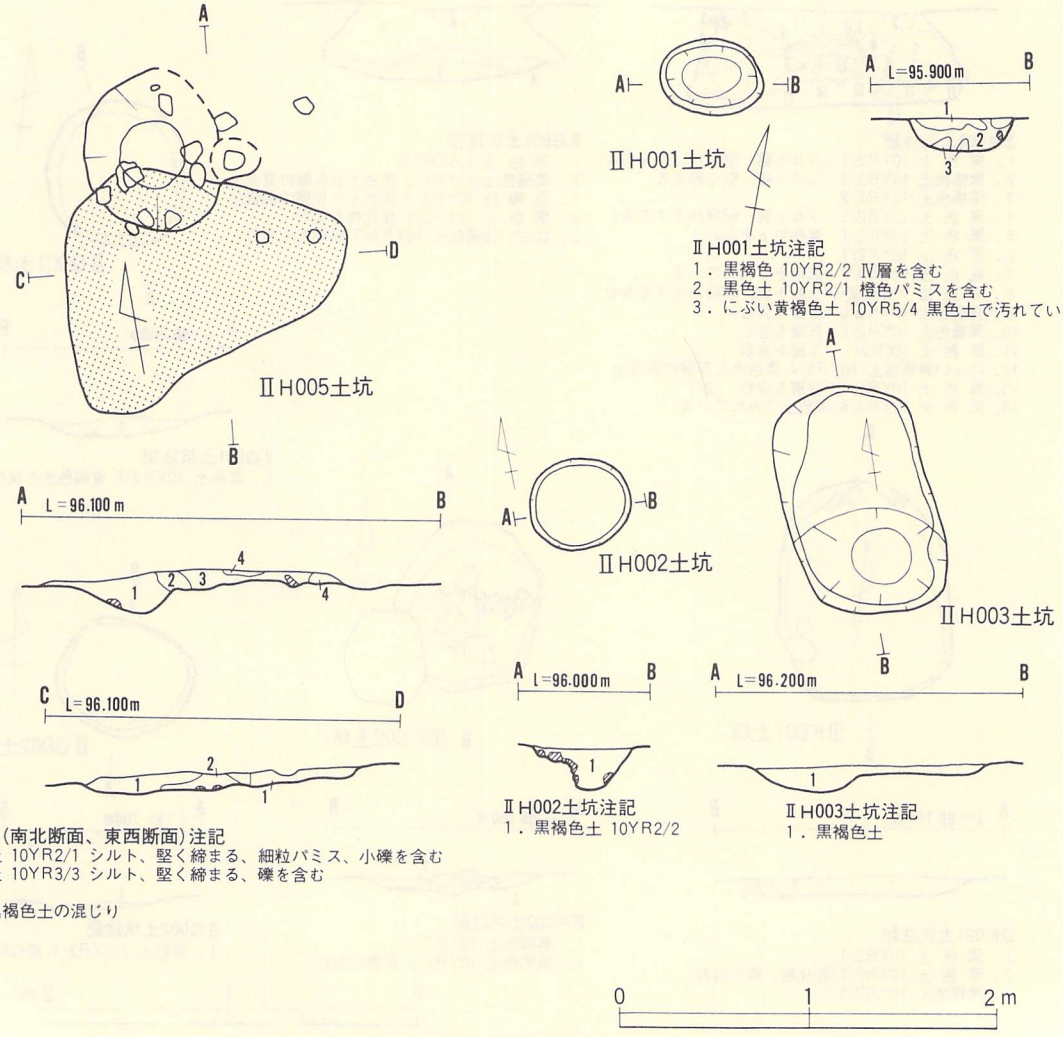
図版26：土坑(1)



ⅢG001土坑注記
1．黒色 10YR2/1 褐色土を含む

ⅡG003土坑注記
1．明　褐　色 7.5YR5/6 黒色土、黒褐色土を含む
2．黒 褐 色 土 10YR2/2　炭を含む
3．暗 褐 色 土 10YR3/3
4．明黄褐色土 10YR6/6
5．黒　　色 7.5YR2/1 Ⅳ層を含む

ⅡH004土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2 パミスを多く含む
2．黒褐色土 10YR2/3 焼土を含む
3．黒褐色土 10YR2/2 細粒パミスを含む
4．褐 色 土 7.5YR4/3 シルト質、焼土と炭化物を粒状に多く含む
5．にぶい黄橙色 10YR6/4 炭化物を含む



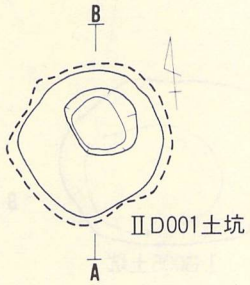
ⅡH001土坑注記
1．黒褐色 10YR2/2 Ⅳ層を含む
2．黒色土 10YR2/1 橙色パミスを含む
3．にぶい黄褐色土 10YR5/4 黒色土で汚れている

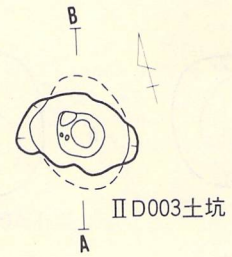
ⅡH005土坑(南北断面、東西断面)注記
1．黒 色 土 10YR2/1 シルト、堅く締まる、細粒パミス、小礫を含む
2．暗褐色土 10YR3/3 シルト、堅く締まる、礫を含む
3．焼土
4．焼土と黒褐色土の混じり

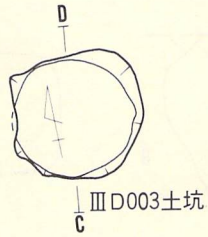
ⅡH002土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2

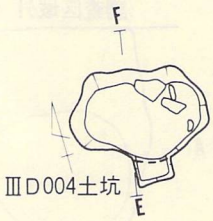
ⅡH003土坑注記
1．黒褐色土

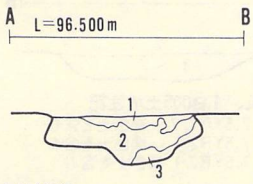
図版27：土坑(2)

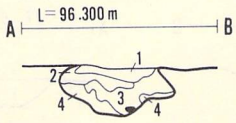


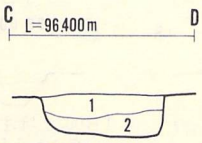


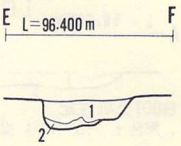










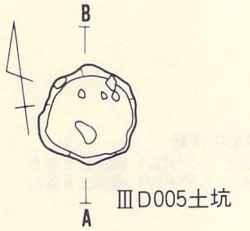


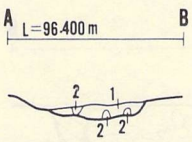
ⅡD001土坑注記
1．黒色土 7.5YR2/1 Ⅱ層
2．黒褐色土～黄褐色土 7.5YR2/2～10YR5/8の混土層
3．黒色土 7.5YR2/1 1層と同様の土

ⅡD003土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2 基本土層（旧表土）
2．黄褐色土～黒褐色土 10YR2/2～6/6 混合土
3．黒 褐 色 土 10YR2/2
4．明黄褐色土 10YR6/6 僅かにⅡ層が入る

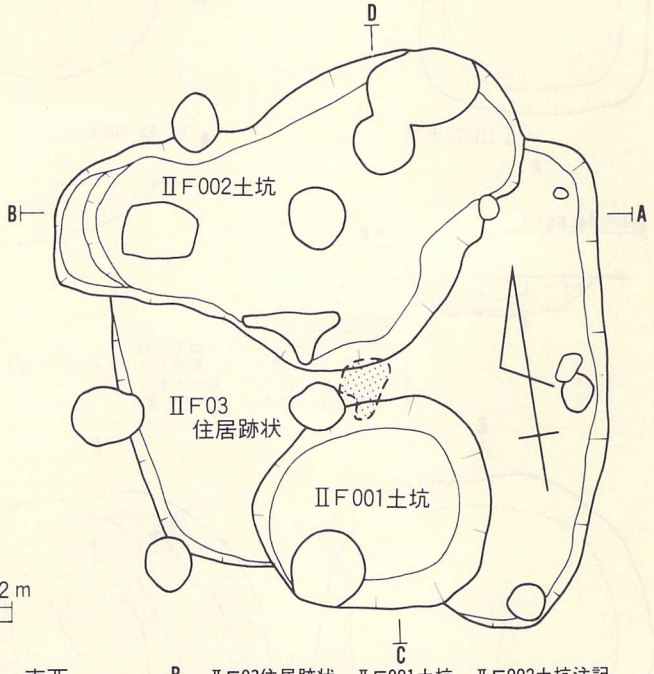
ⅢD003土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2 基本土層Ⅱ層
2．黒褐色土 10YR2/2 黄褐色（Ⅳ層）がブロック状に入る

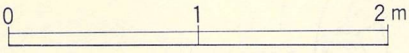
ⅢD004土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2（基本土層Ⅱ層）にⅣ層がブロック状に入る
2．褐 色 土 10YR4/4（基本土層Ⅲ層）にⅣ層がブロック状に入る

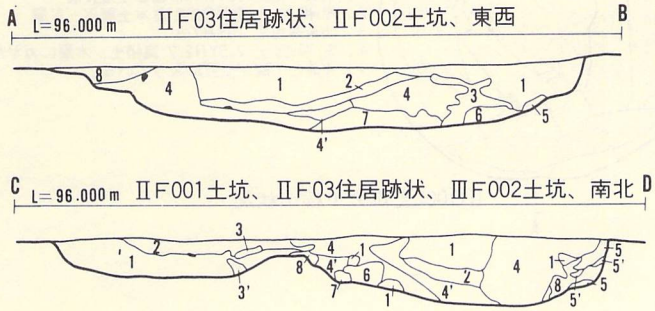




ⅢD005土坑注記
1．黒褐色土 10YR2/2 Ⅲ層暗褐色土が混る
2．褐 色 土 10YR4/4 基本土層Ⅲ層がブロック状に入る

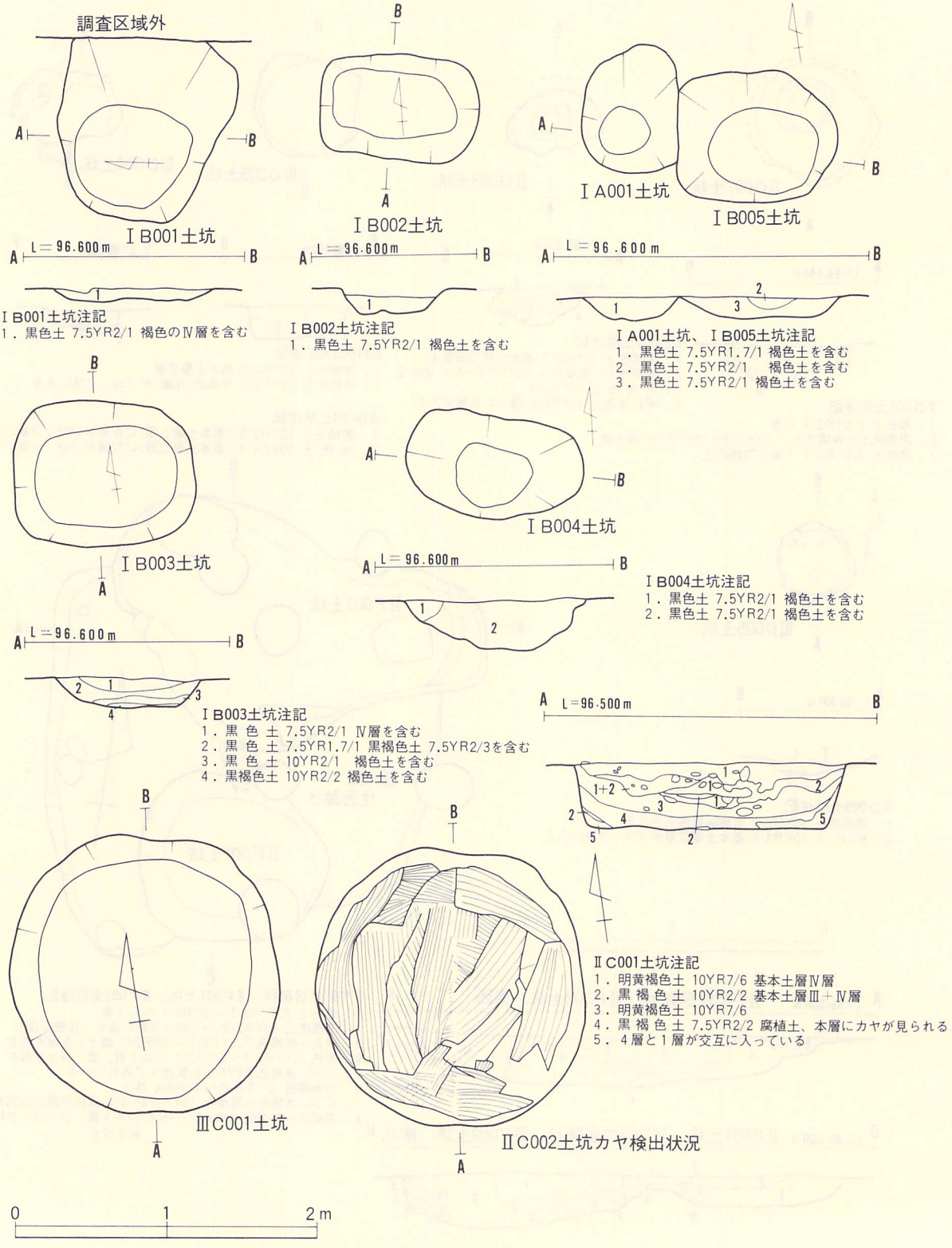




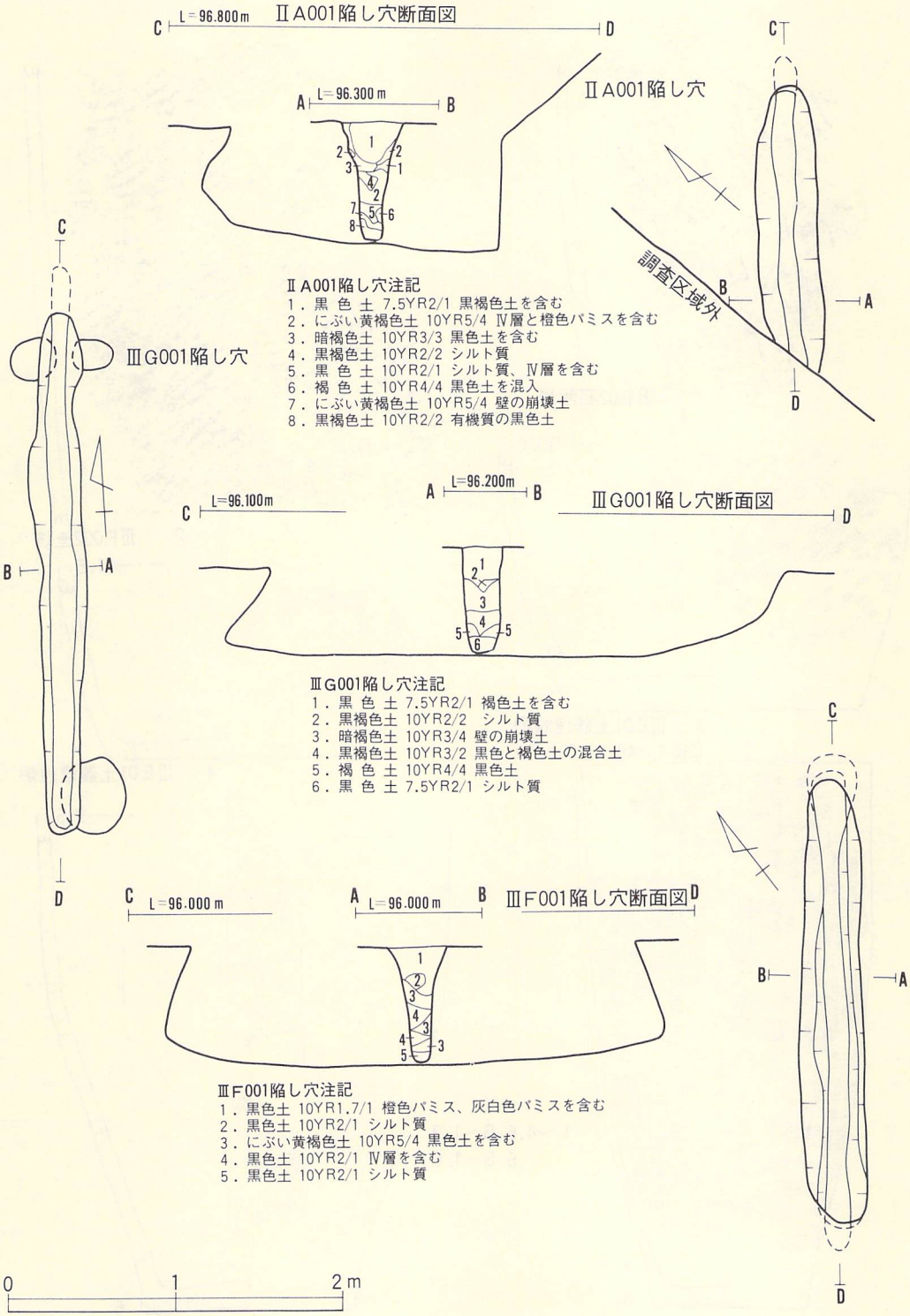


ⅡF03住居跡状、ⅡF001土坑、ⅡF002土坑注記
1．黒色土 7.5YR2/1～10YR2/1 シルト質
2．黒褐色土 10YR2/2 小ブロック状に含む Ⅳ層を含む
3．黒色～黒褐色 7.5YR2/1～10YR2/3 焼土とⅣ層を含む
4．黒色 7.5YR2/1～10YR2/1 シルト質、炭、焼土を含む
5．にぶい黄褐色 10YR5/4 黒色土で汚れている
6．明赤褐色 5YR5/6～10YR4/6 焼土
7．にぶい黄褐色～暗褐色 10YR5/4～3/4 黒色が混入し汚れている
8．黒褐色～黄褐色 10YR2/3～5/6 シルト質、小ブロック状に含む 炭を含む

図版28：土坑(3)


調査区域外
A
B
ⅠB001土坑
L＝96.600m
ⅠB001土坑注記
1．黒色土 7.5YR2/1 褐色のⅣ層を含む
ⅠB002土坑
ⅠB002土坑注記
1．黒色土 7.5YR2/1 褐色土を含む
ⅠA001土坑
ⅠB005土坑
L＝96.600m
ⅠA001土坑、ⅠB005土坑注記
1．黒色土 7.5YR1.7/1 褐色土を含む
2．黒色土 7.5YR2/1 褐色土を含む
3．黒色土 7.5YR2/1 褐色土を含む
ⅠB003土坑
ⅠB004土坑
ⅠB004土坑注記
1．黒色土 7.5YR2/1 褐色土を含む
2．黒色土 7.5YR2/1 褐色土を含む
ⅠB003土坑注記
1．黒 色 土 7.5YR2/1 Ⅳ層を含む
2．黒 色 土 7.5YR1.7/1 黒褐色土 7.5YR2/3を含む
3．黒 色 土 10YR2/1 褐色土を含む
4．黒褐色土 10YR2/2 褐色土を含む
L＝96.500m
ⅡC001土坑注記
1．明黄褐色土 10YR7/6 基本土層Ⅳ層
2．黒 褐 色 土 10YR2/2 基本土層Ⅲ＋Ⅳ層
3．明黄褐色土 10YR7/6
4．黒 褐 色 土 7.5YR2/2 腐植土、本層にカヤが見られる
5．4層と1層が交互に入っている
ⅢC001土坑
ⅡC002土坑カヤ検出状況
0
1
2m

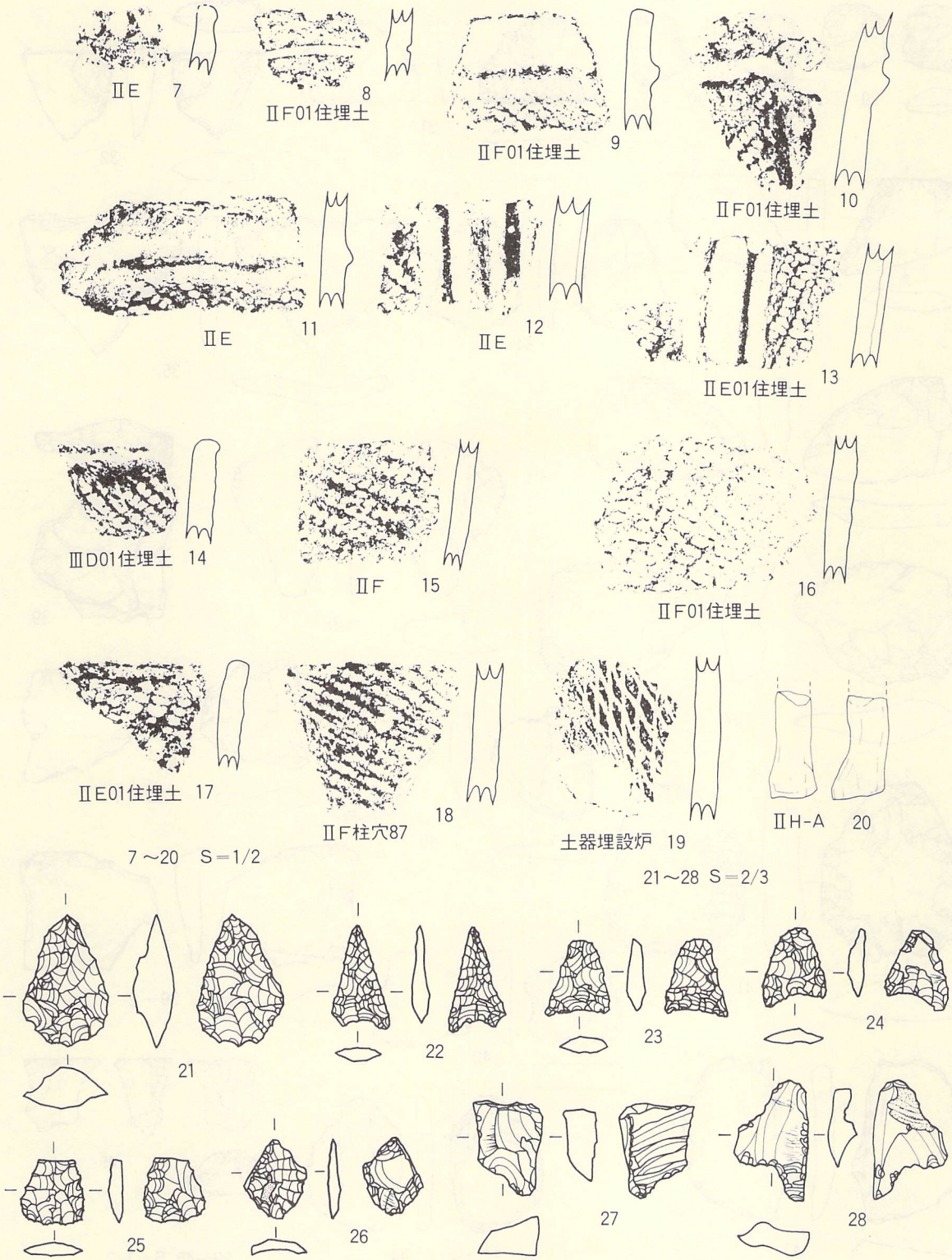
図版29：土坑(4)


ⅡA001陥し穴断面図
C L=96.800m D
A L=96.300m B
ⅡA001陥し穴
調査区域外
ⅢG001陥し穴
ⅡA001陥し穴注記
1．黒 色 土 7.5YR2/1 黒褐色土を含む
2．にぶい黄褐色土 10YR5/4 Ⅳ層と橙色パミスを含む
3．暗褐色土 10YR3/3 黒色土を含む
4．黒褐色土 10YR2/2 シルト質
5．黒 色 土 10YR2/1 シルト質、Ⅳ層を含む
6．褐 色 土 10YR4/4 黒色土を混入
7．にぶい黄褐色土 10YR5/4 壁の崩壊土
8．黒褐色土 10YR2/2 有機質の黒色土
C L=96.100m
A L=96.200m B
ⅢG001陥し穴断面図
ⅢG001陥し穴注記
1．黒 色 土 7.5YR2/1 褐色土を含む
2．黒褐色土 10YR2/2 シルト質
3．暗褐色土 10YR3/4 壁の崩壊土
4．黒褐色土 10YR3/2 黒色と褐色土の混合土
5．褐 色 土 10YR4/4 黒色土
6．黒 色 土 7.5YR2/1 シルト質
C L=96.000m
A L=96.000m B
ⅢF001陥し穴断面図
ⅢF001陥し穴注記
1．黒色土 10YR1.7/1 橙色パミス、灰白色パミスを含む
2．黒色土 10YR2/1 シルト質
3．にぶい黄褐色土 10YR5/4 黒色土を含む
4．黒色土 10YR2/1 Ⅳ層を含む
5．黒色土 10YR2/1 シルト質
0 1 2m

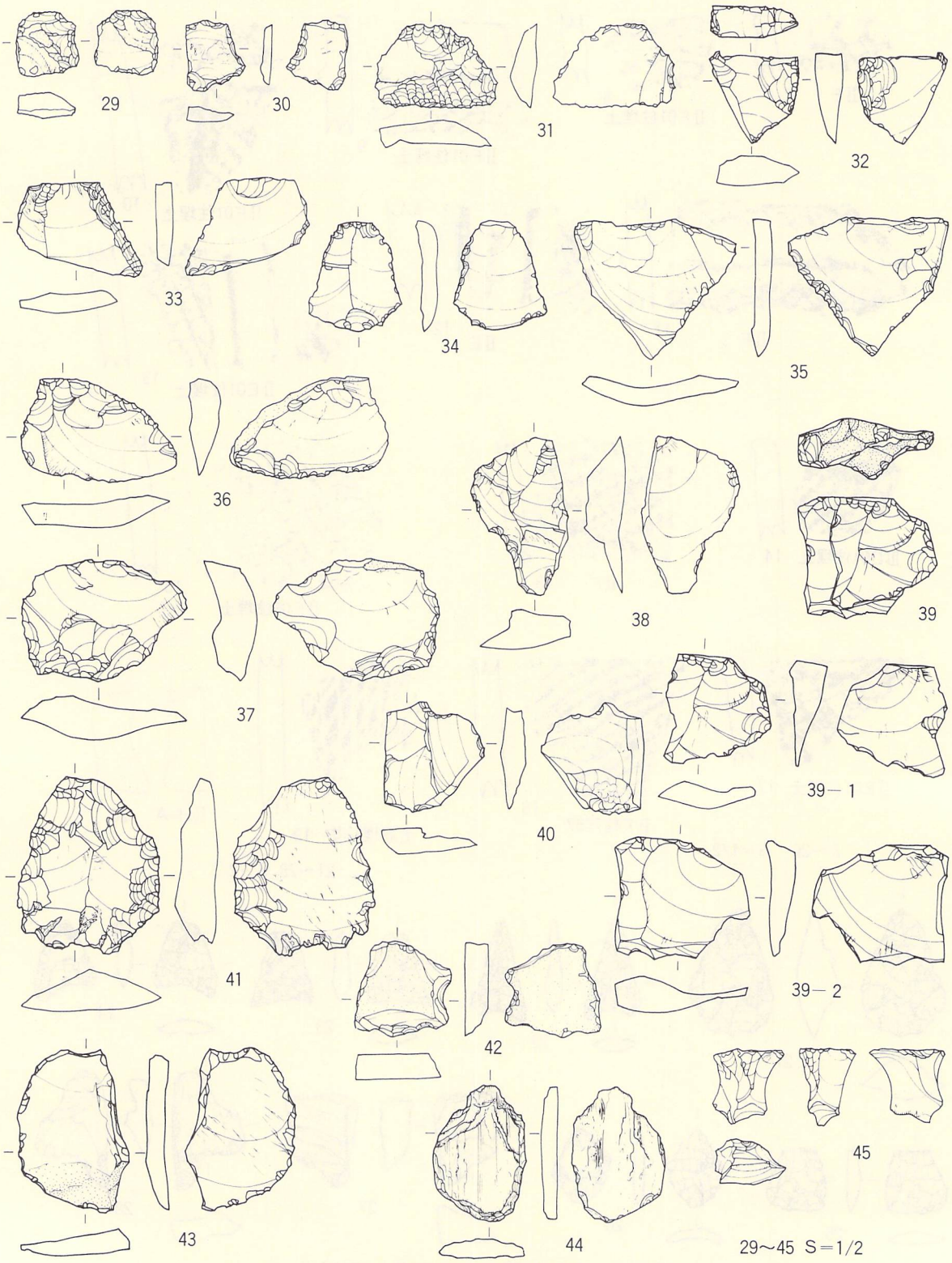
図版30：陥し穴状遺構

ⅡE02石囲炉
1
—•—13.0
2
ⅢF002土坑
—•—11.5
3
ⅢE01土器埋設炉
(26.4)・49・13.6
4
ⅢE01土器埋設炉
—•—9.5
1～4.6 S=1/3
5 S=1/6
5
ⅢG01土器埋設炉
6
ⅡG01土器埋設炉

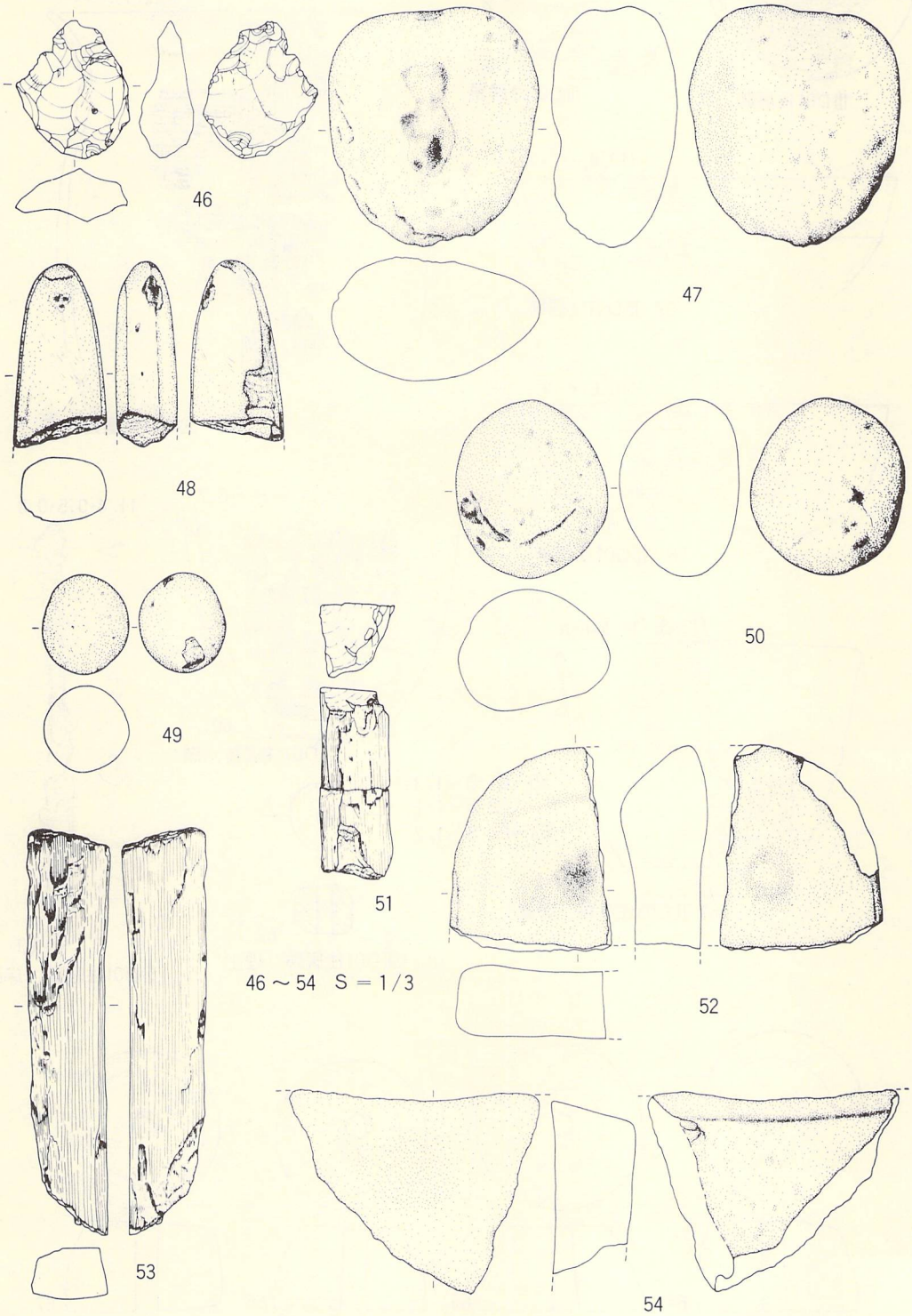
図版31：縄文土器1



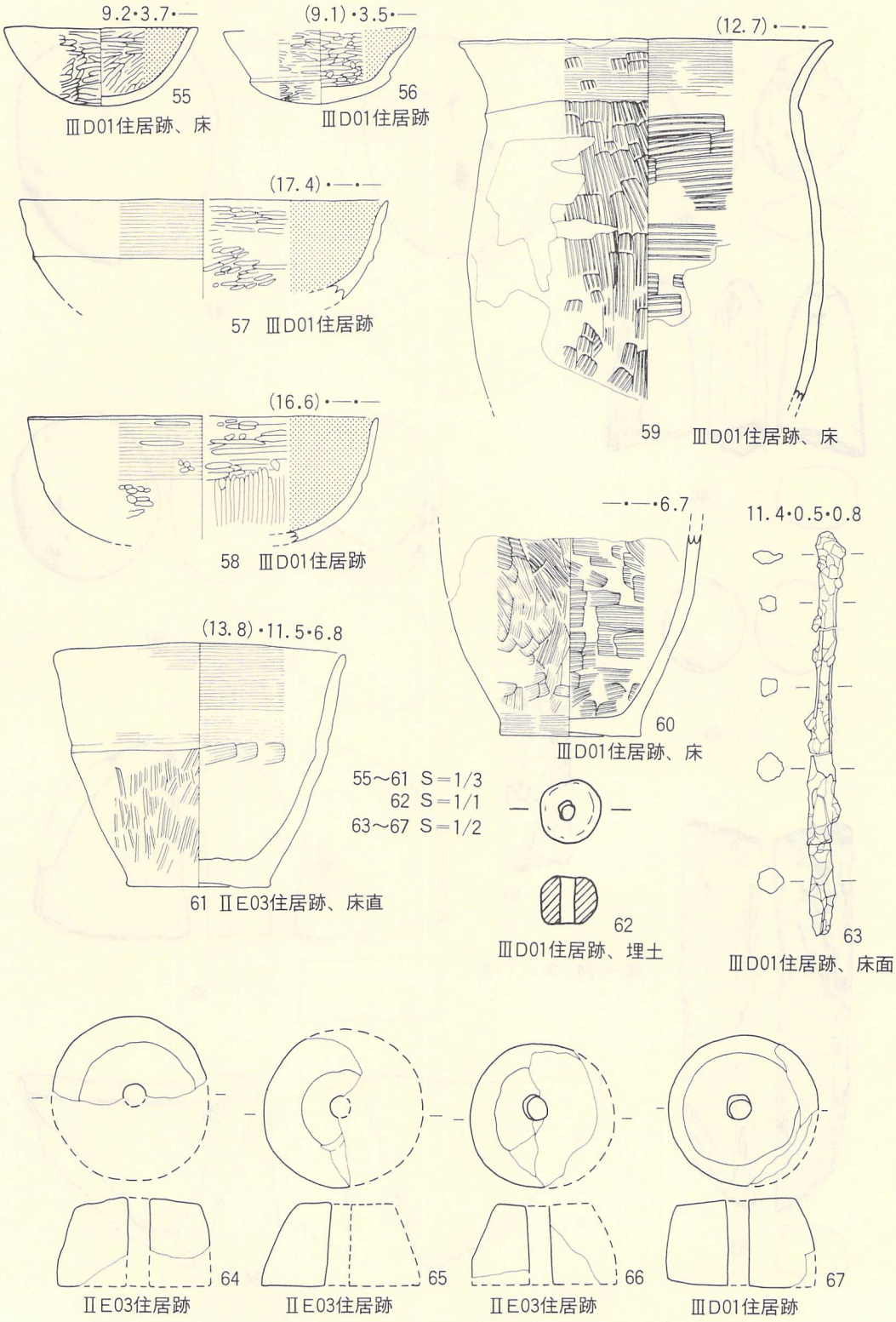
図版32：縄文土器２、土製品、石器１



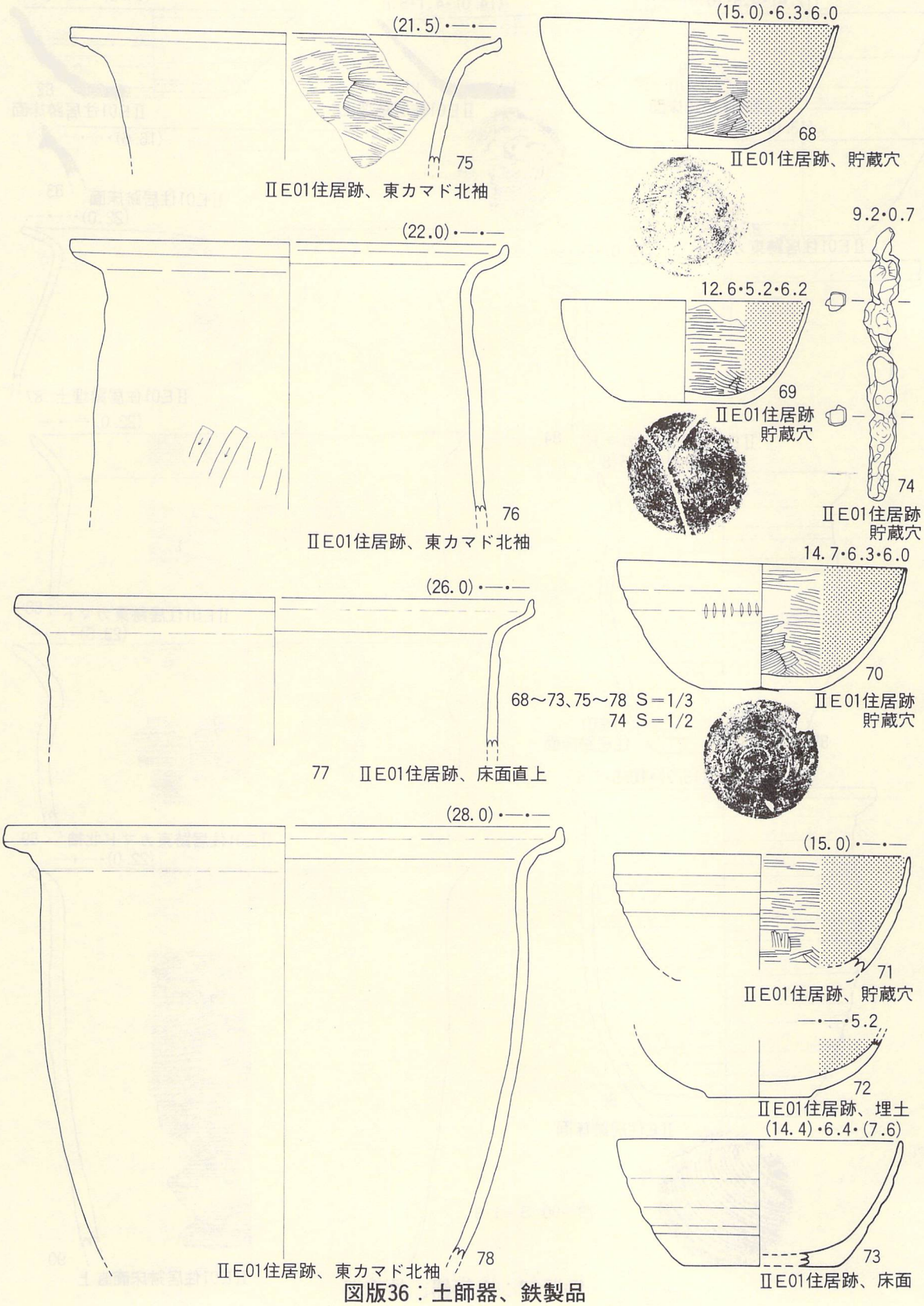
図版33：石器(2)



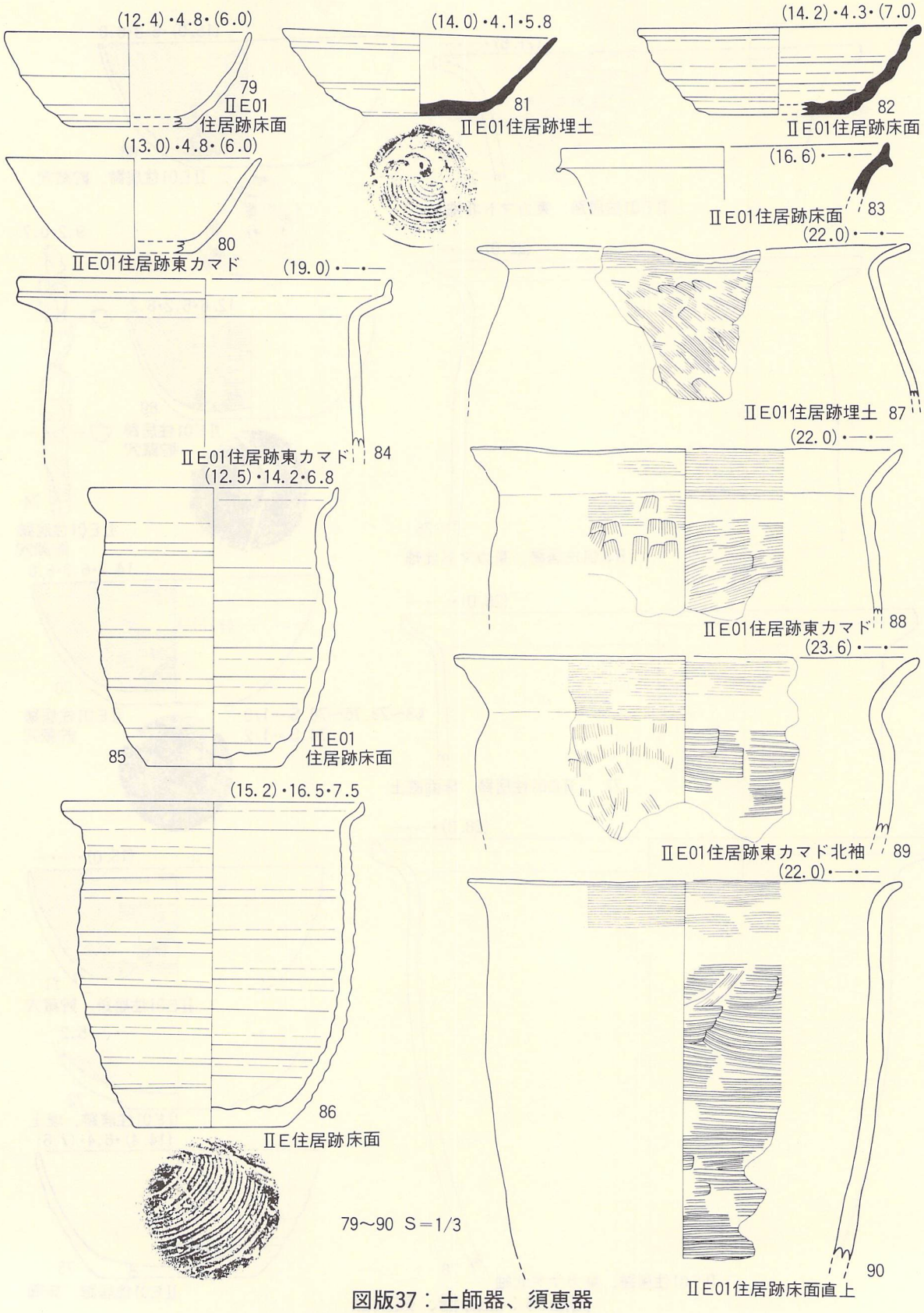
図版34：石器(3)



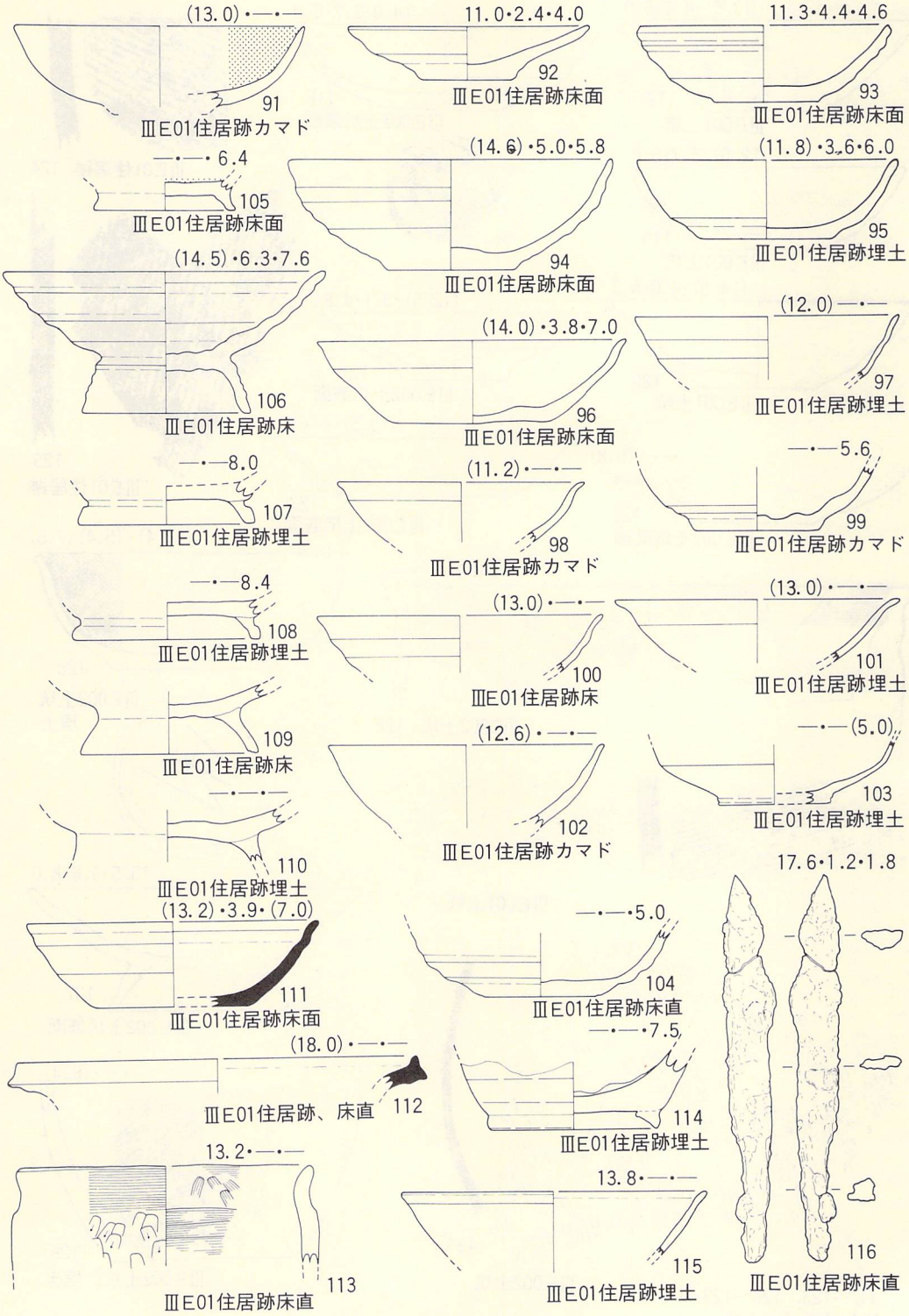
図版35：土師器、土製品、鉄製品


(21.5)・—・—
75
ⅡE01住居跡、東カマド北袖
(22.0)・—・—
76
ⅡE01住居跡、東カマド北袖
(26.0)・—・—
77　ⅡE01住居跡、床面直上
(28.0)・—・—
78
ⅡE01住居跡、東カマド北袖
(15.0)・6.3・6.0
68
ⅡE01住居跡、貯蔵穴
9.2・0.7
12.6・5.2・6.2
69
ⅡE01住居跡
貯蔵穴
74
ⅡE01住居跡
貯蔵穴
14.7・6.3・6.0
70
ⅡE01住居跡
貯蔵穴
68～73、75～78 S＝1/3
74 S＝1/2
(15.0)・—・—
71
ⅡE01住居跡、貯蔵穴
—・—・5.2
72
ⅡE01住居跡、埋土
(14.4)・6.4・(7.6)
73
ⅡE01住居跡、床面

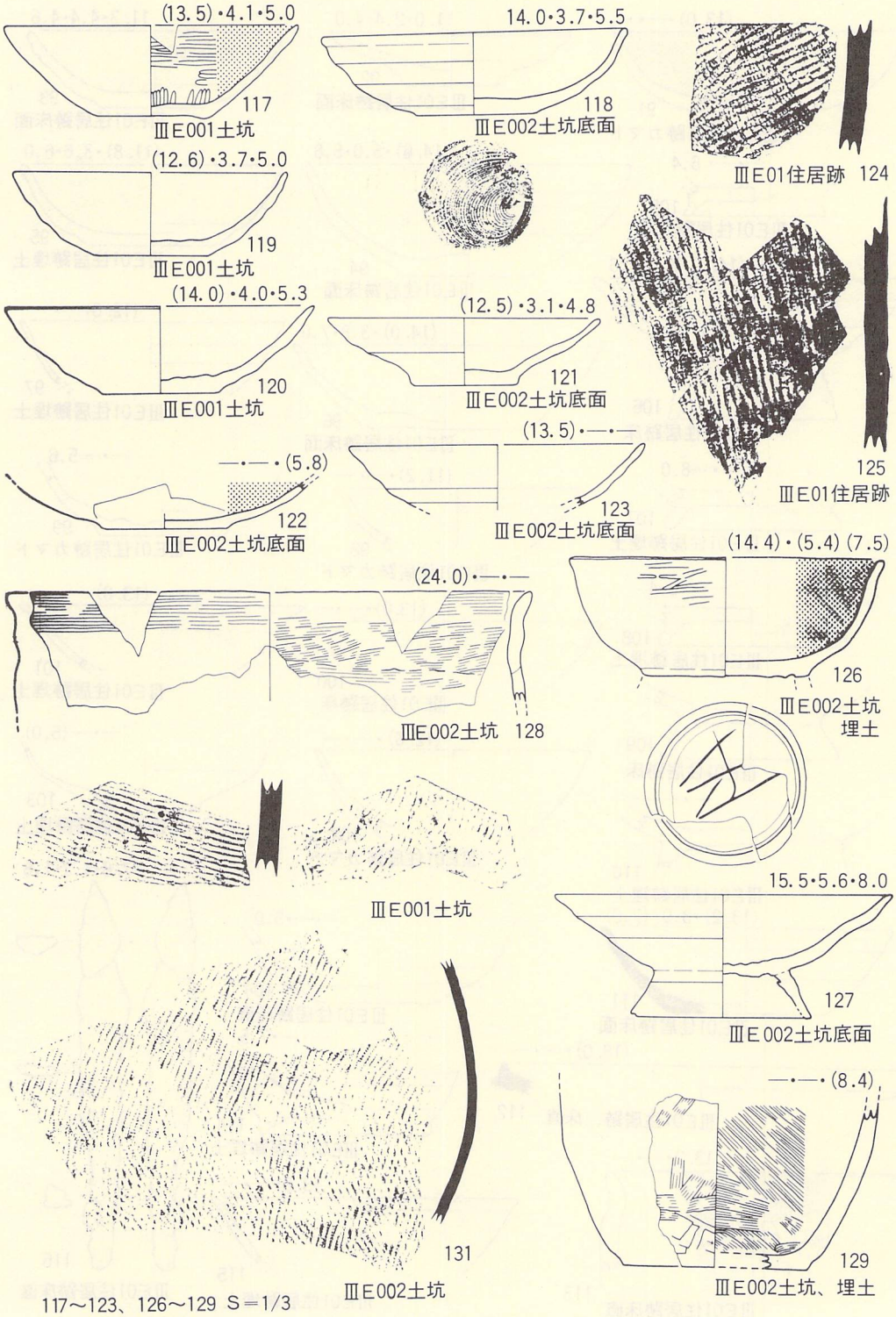
図版36：土師器、鉄製品


(12.4)・4.8・(6.0)
79
ⅡE01
住居跡床面
(14.0)・4.1・5.8
81
ⅡE01住居跡埋土
(14.2)・4.3・(7.0)
82
ⅡE01住居跡床面
(13.0)・4.8・(6.0)
80
ⅡE01住居跡東カマド
(16.6)・—・—
83
ⅡE01住居跡床面
(19.0)・—・—
84
ⅡE01住居跡東カマド
(22.0)・—・—
ⅡE01住居跡埋土 87
(12.5)・14.2・6.8
85
ⅡE01
住居跡床面
(22.0)・—・—
ⅡE01住居跡東カマド 88
(23.6)・—・—
ⅡE01住居跡東カマド北袖 89
(15.2)・16.5・7.5
86
ⅡE住居跡床面
(22.0)・—・—
90
ⅡE01住居跡床面直上
79～90 S＝1/3

図版37：土師器、須恵器

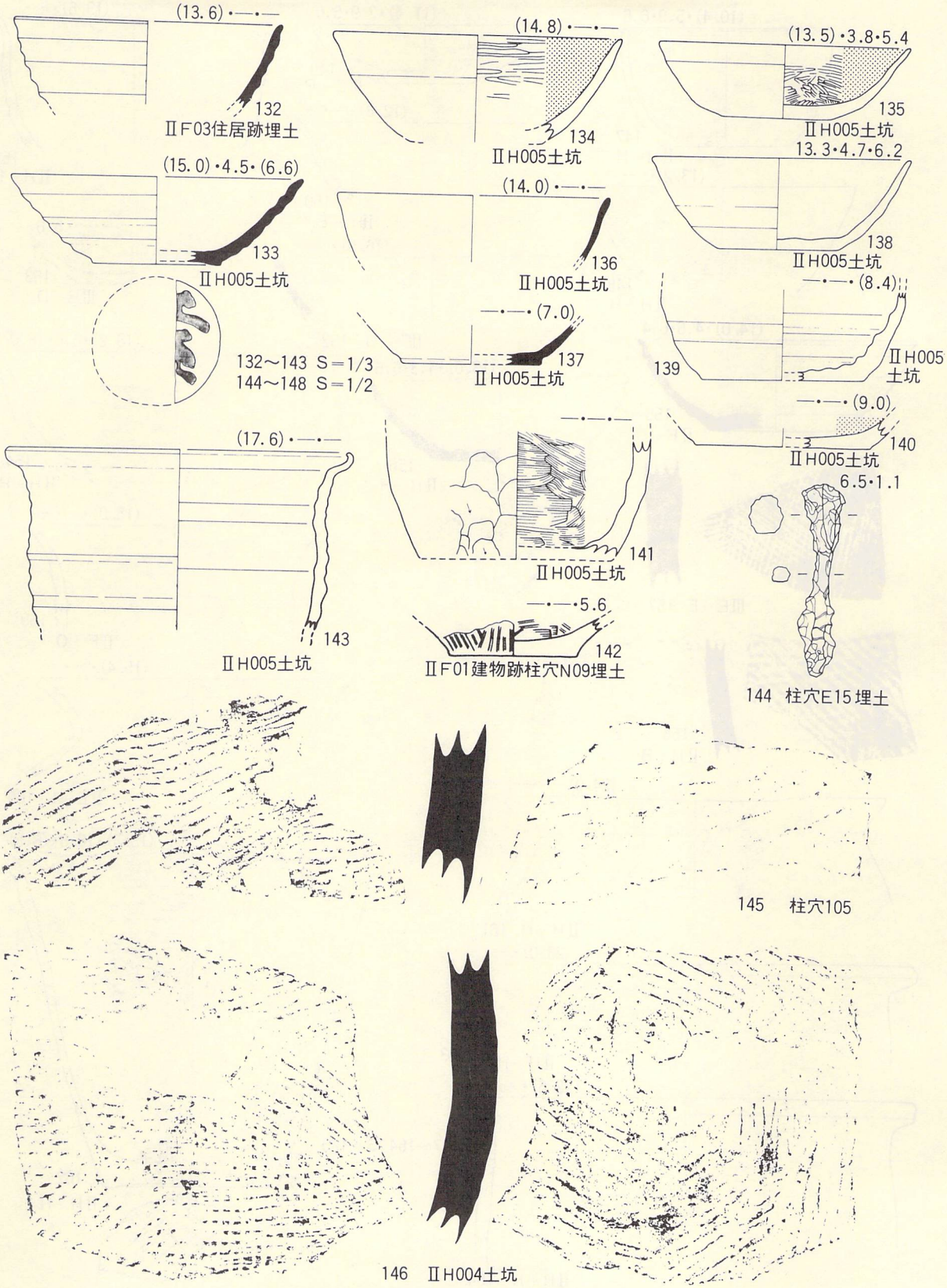


図版38：土師器、須恵器、鉄製品

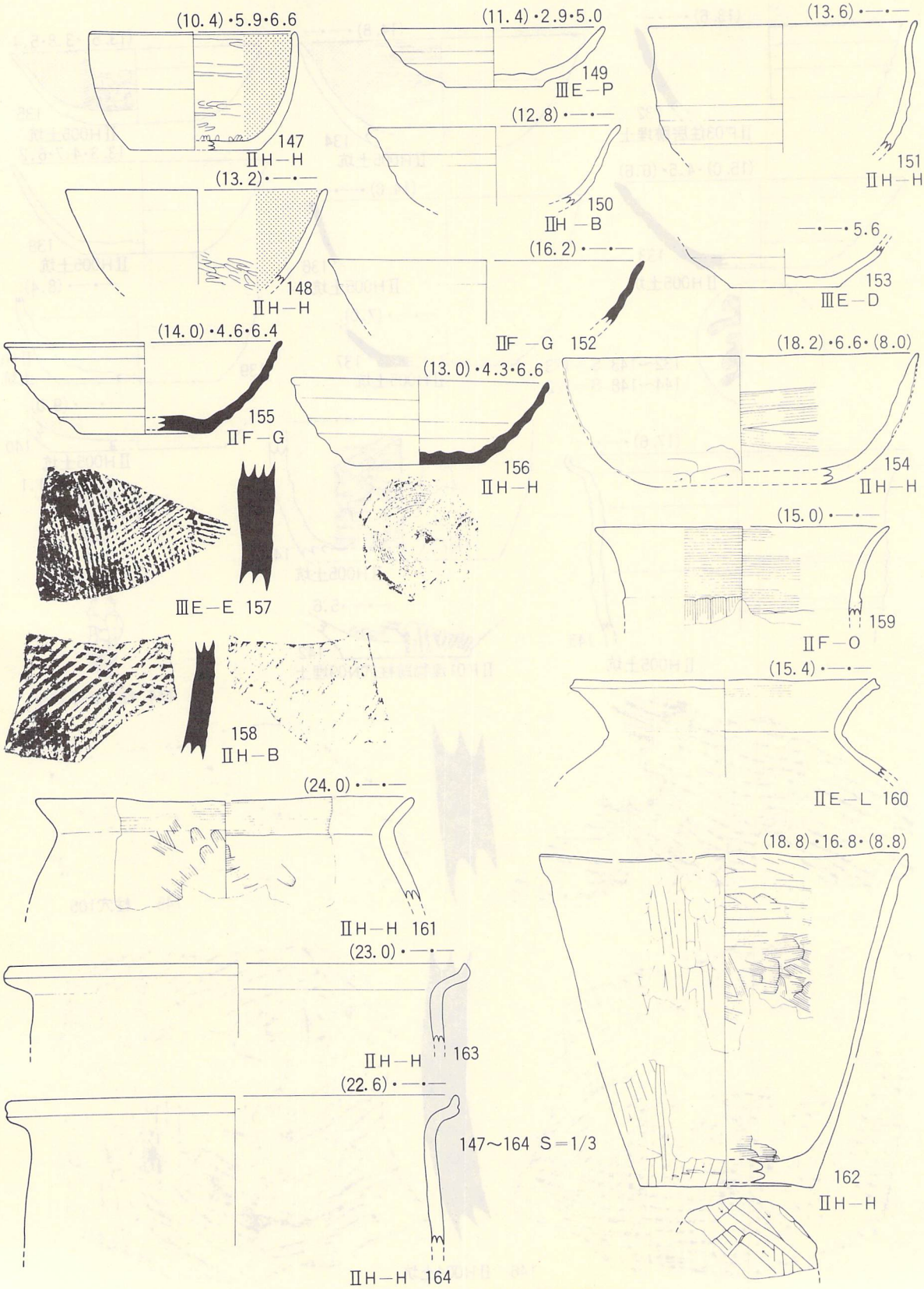


117～123、126～129 S＝1/3
124・125 S＝1/2
130・131 ＝＝1/4

図版39：土師器、須恵器



図版40：土師器、須恵器、鉄製品


(10.4)・5.9・6.6
147
ⅡH－H
(11.4)・2.9・5.0
149
ⅢE－P
(13.6)・—・—
151
ⅡH－H
(12.8)・—・—
150
ⅢH－B
(13.2)・—・—
148
ⅡH－H
—・—・5.6
153
ⅢE－D
(16.2)・—・—
ⅡF－G 152
(14.0)・4.6・6.4
155
ⅡF－G
(13.0)・4.3・6.6
156
ⅡH－H
(18.2)・6.6・(8.0)
154
ⅡH－H
ⅢE－E 157
(15.0)・—・—
159
ⅡF－O
158
ⅡH－B
(15.4)・—・—
ⅡE－L 160
(24.0)・—・—
ⅡH－H 161
(18.8)・16.8・(8.8)
(23.0)・—・—
ⅡH－H 163
(22.6)・—・—
147～164 S＝1/3
162
ⅡH－H
ⅡH－H 164

図版41：土師器、須恵器

写　真　図　版

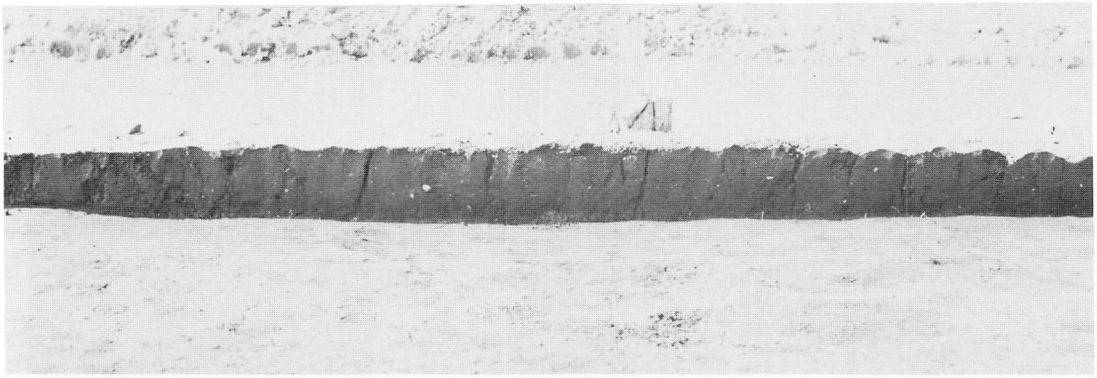
写真図版１：遺跡周辺航空写真（南から）

写真図版２：調査区域航空写真(真上から)

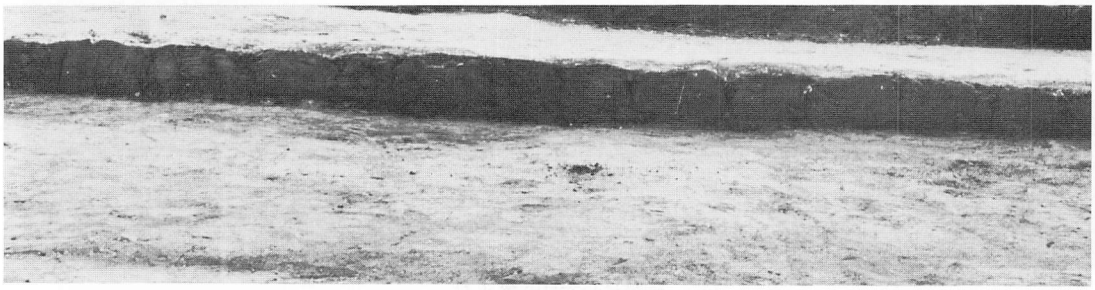
調査区C～H区東より

調査区A～B区南より

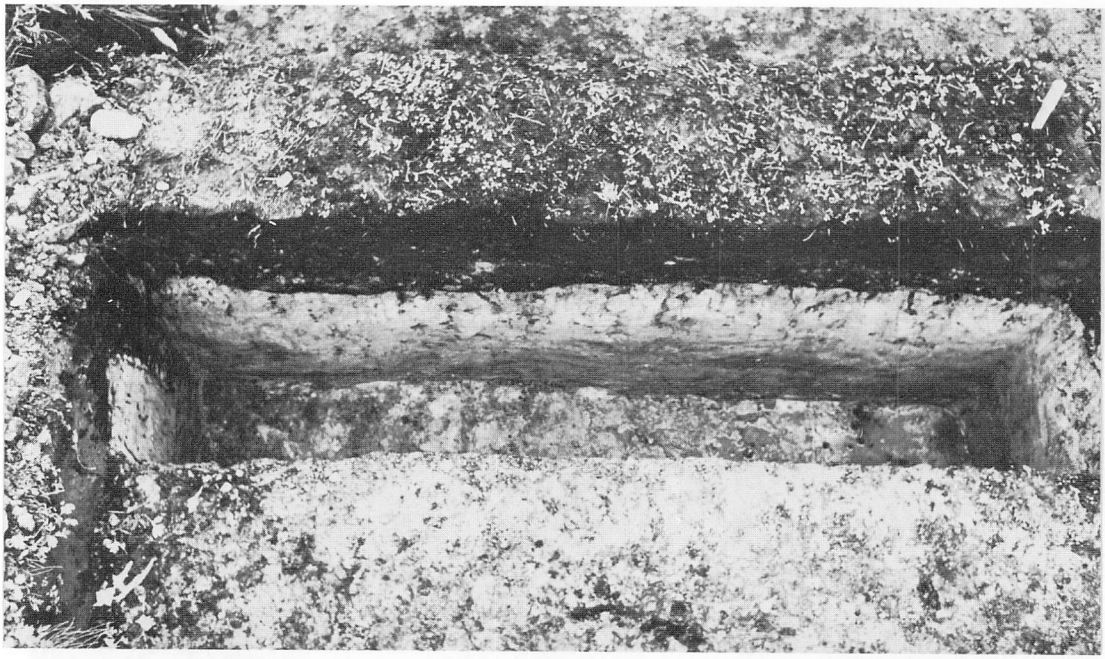
写真図版３：調査区近景



ⅡE－HL土層断面、南より

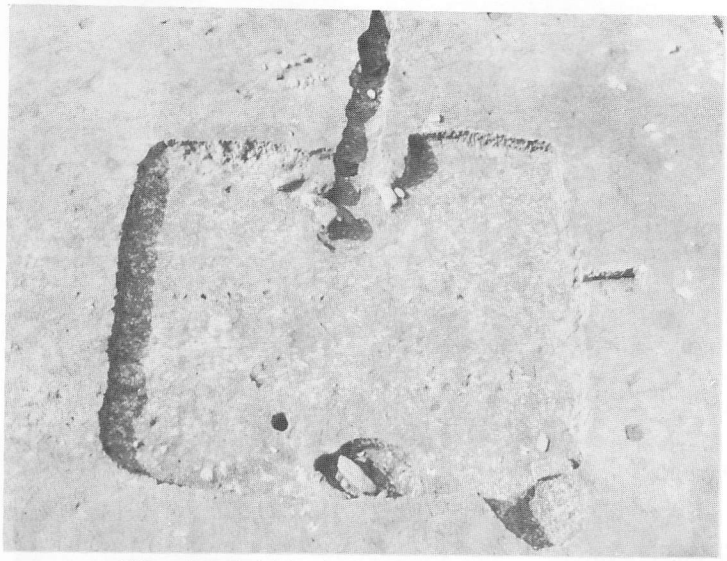


ⅢD－M土層断面、西より



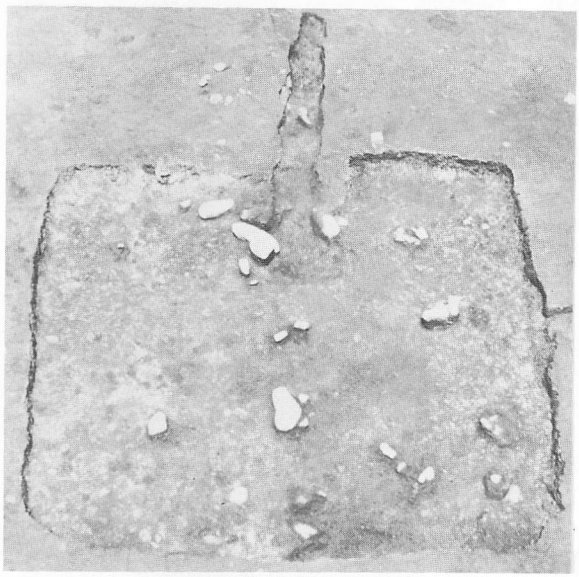
ⅢG－B土層断面、東より

写真図版４：土層断面

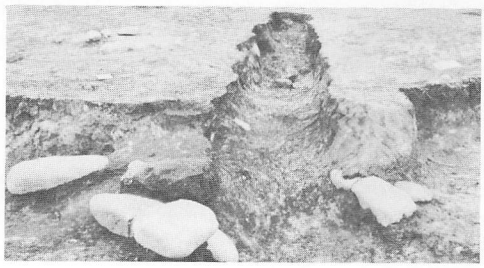


ⅢD01住居跡全景　完掘、南より

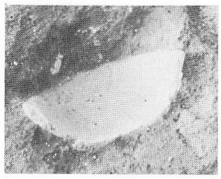
カマド精査中



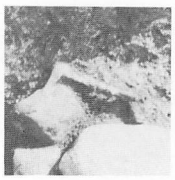
ⅢD01住居跡遺物検出状況精査中



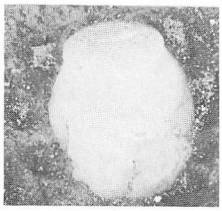
カマド精査中



坏



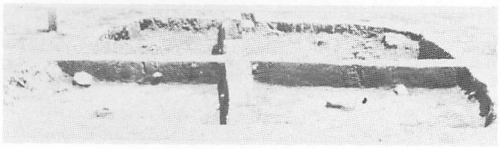
鉄 鏃



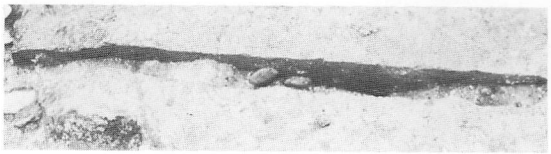
甕

紡錘車

ⅢD01住居跡埋土断面、南より

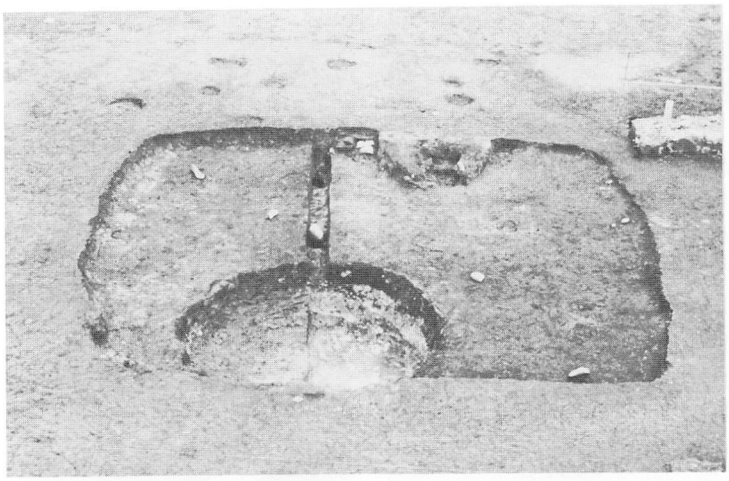


ⅢD01住居跡埋土断面、西より

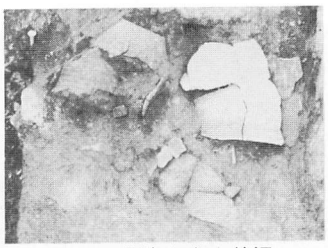


カマド煙道部断面、東より

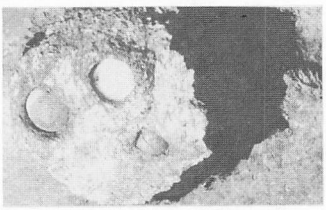
写真図版５：ⅢD01住居跡



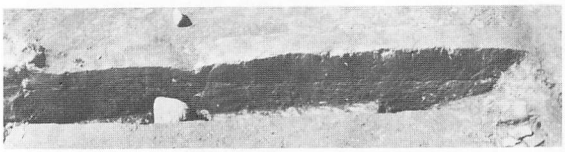
精査中 西より



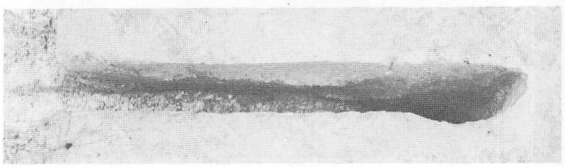
カマド北脇甕出土状況



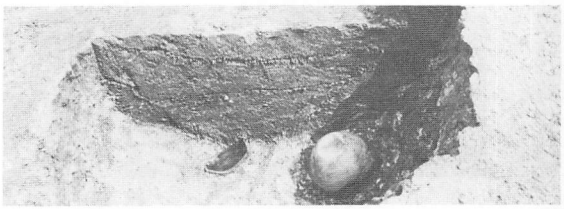
No.1 貯蔵穴内杯出土状況



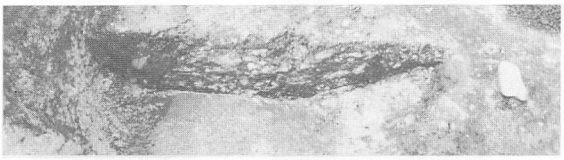
断面(東側半分)南より



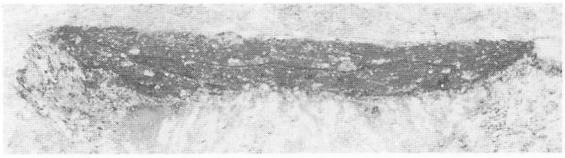
北カマド断面、東より



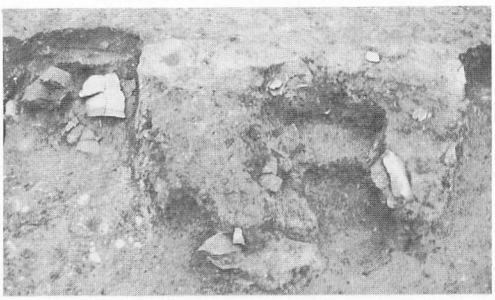
No.1 貯蔵穴断面



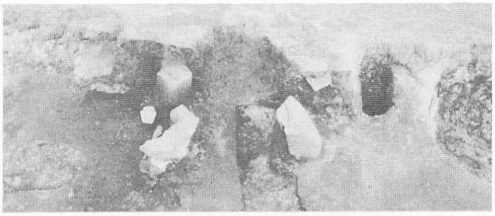
No.2 貯蔵穴断面、南より



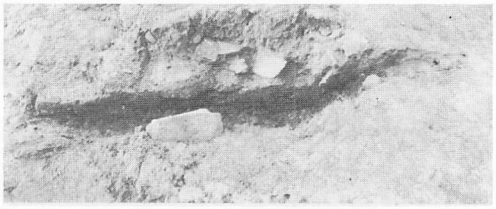
No.1 土坑断面、南より



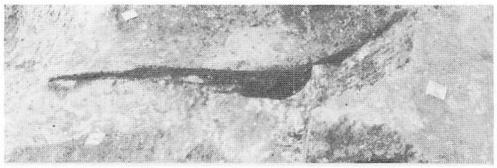
カマド精査中、西より



東カマド石検出状況、西より



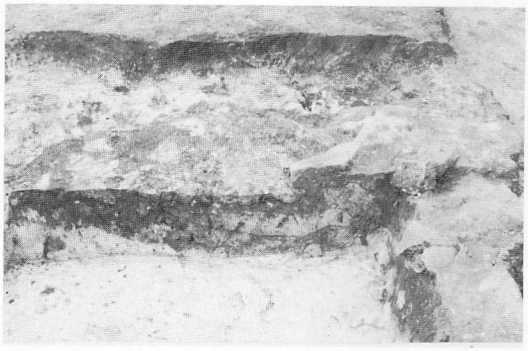
東カマド断面、南より



東カマド南袖の南側焼土断面

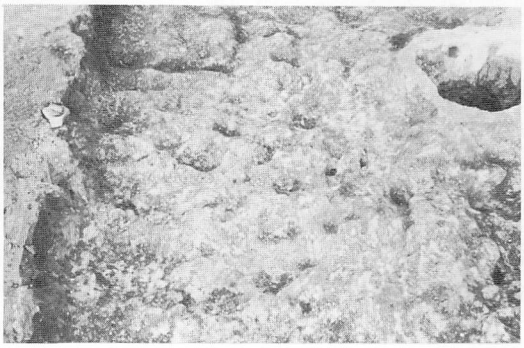
写真図版6 ： Ⅱ E01住居跡

精査中 西より



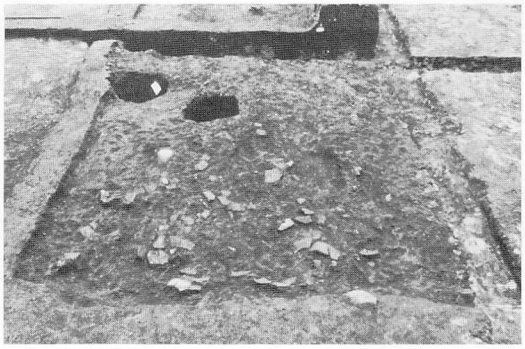
カマド断面、南より

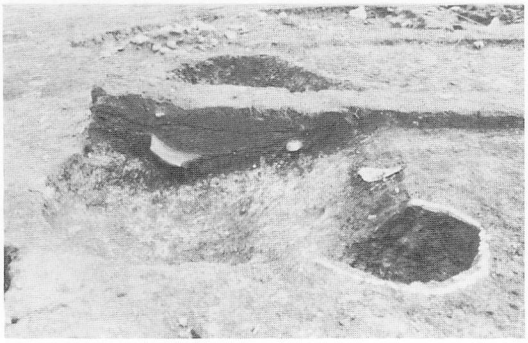
カマド断面、西より



床面掘り方状況、西より

刀子出土状況





ⅢE002土坑断面、北より

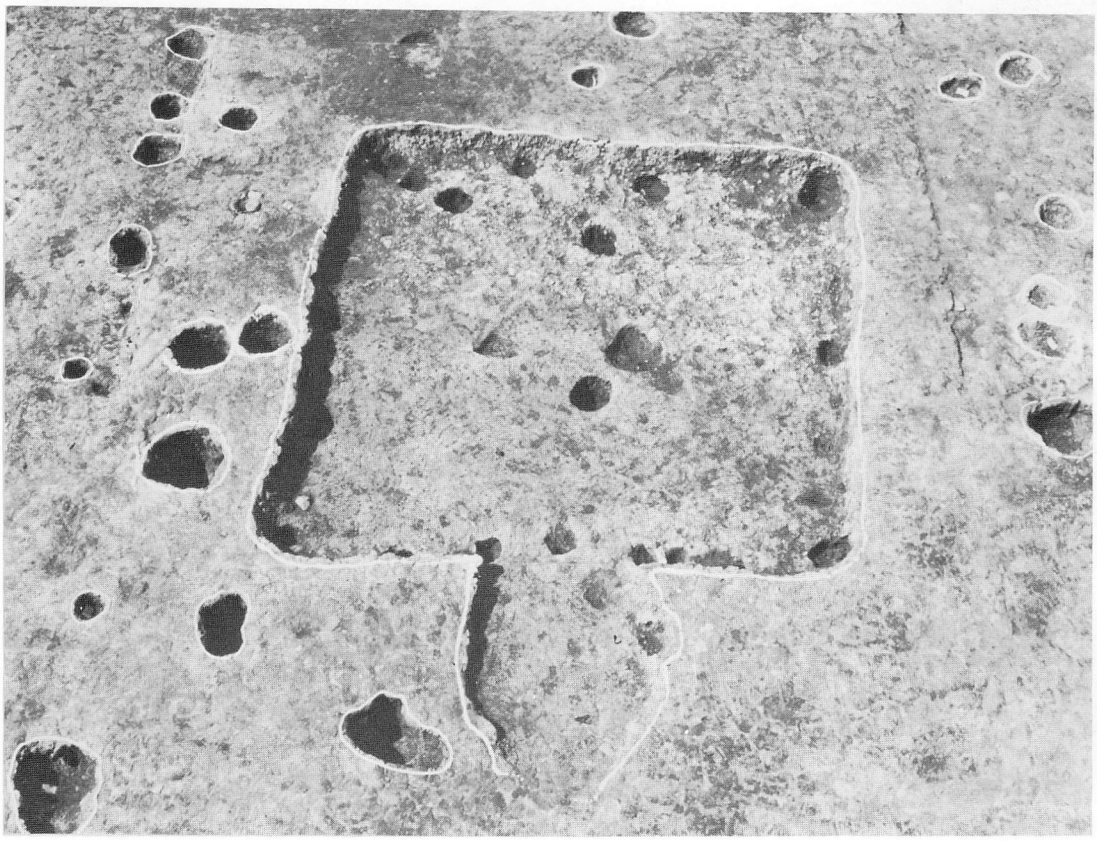
ⅢE002土坑坏等出土状況、東より

写真図版７：ⅢE01住居跡

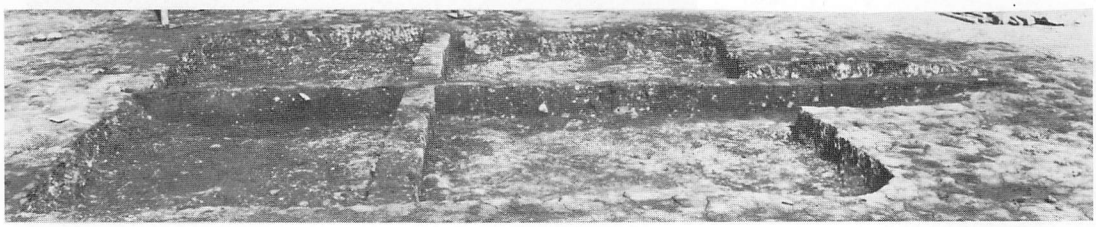
ⅡF01住居跡検出状況

ⅡF02住居跡検出状況

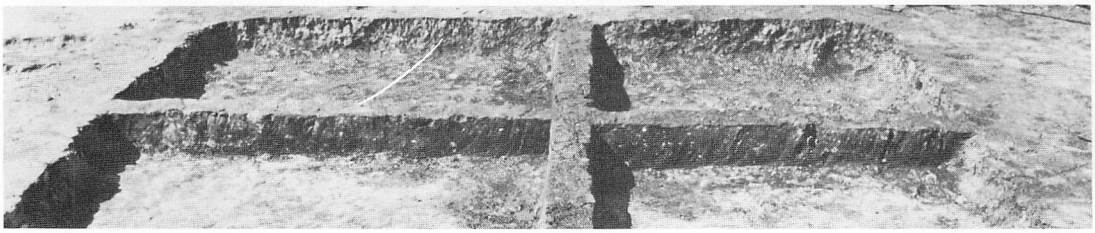
写真図版８：ⅡF01、ⅡF02住居跡検出状況



完掘、全景、南より

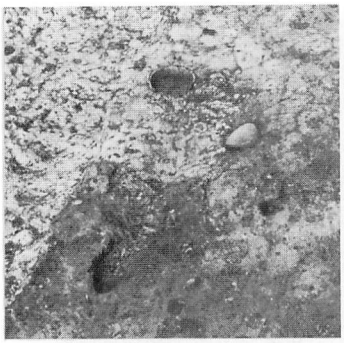


精査中、埋土断面、西より

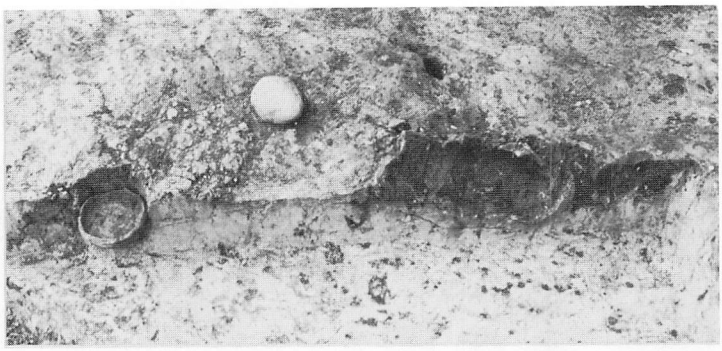


精査中、埋土断面、南より

写真図版９：ⅡＦ01住居跡

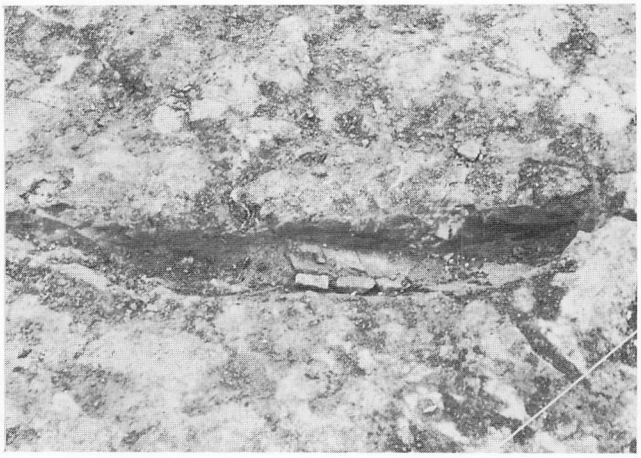


ⅢE01検出状況、東より



ⅢE01断面、南より

ⅡG01精査中、南東より

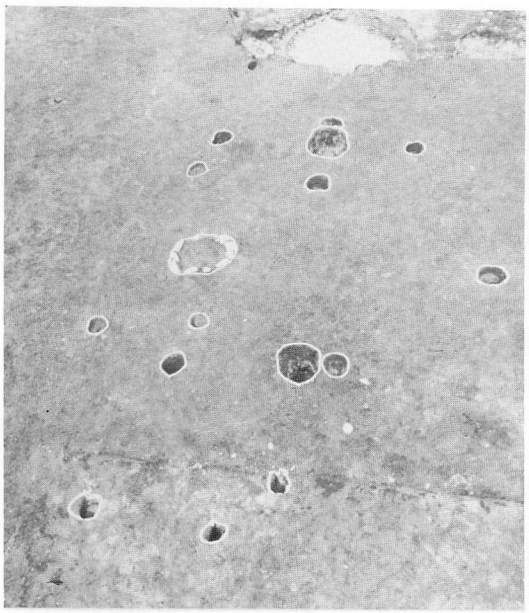


ⅡG01断面、南西より

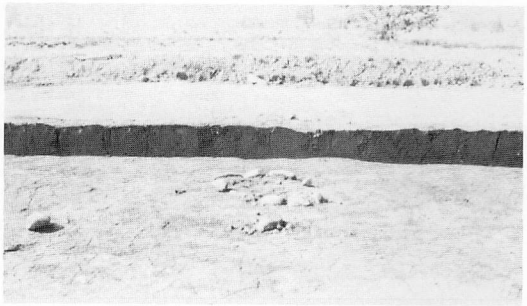
ⅢG01検出状況、東より

ⅢG01断面、北より

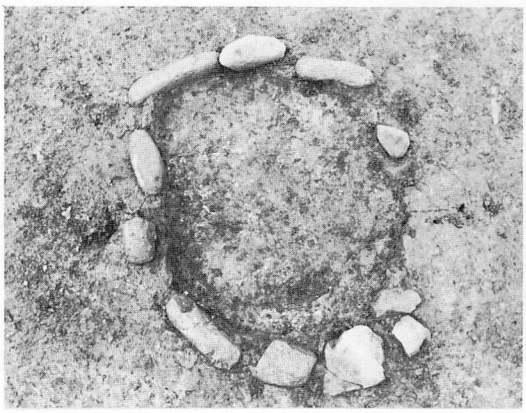
写真図版10：土器埋設炉



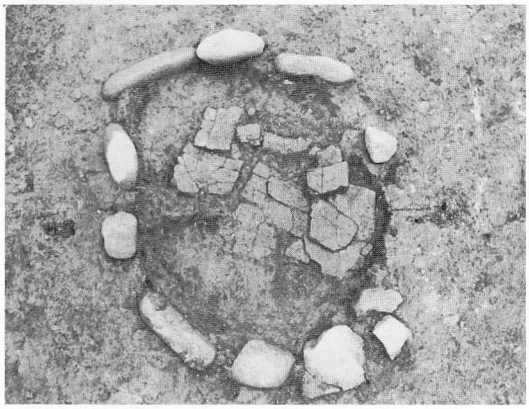
ⅡE02石囲炉検出状況、東より



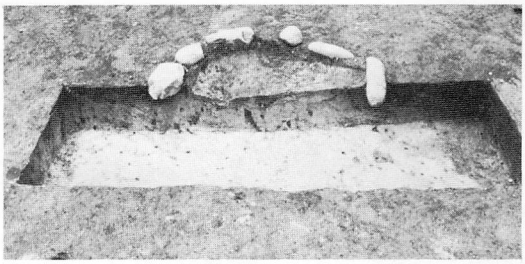
ⅡE02石囲炉付近の土層断面、南より



ⅡE石囲炉完掘、南より

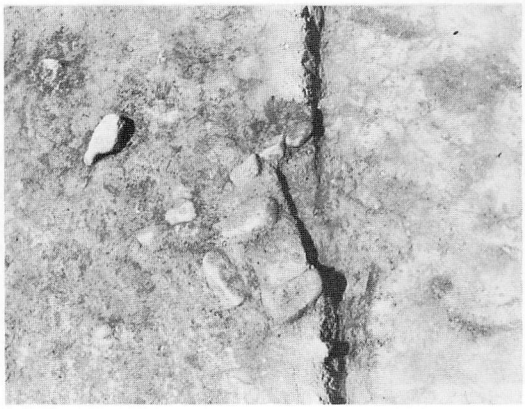


ⅡE02石囲炉土器出土状況、南より



ⅡE02石囲炉断面、北東より

ⅡE02石囲炉断面精査中、南より



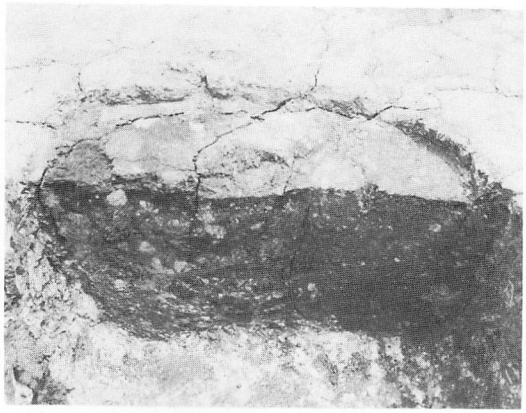
ⅡE01石囲炉検出状況、南より

写真図版11：石囲炉

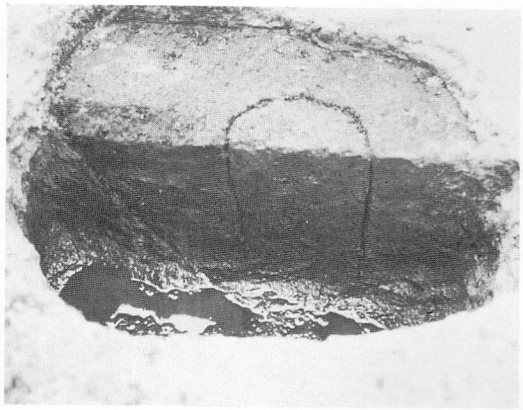
ⅡF01掘立柱建物跡柱穴検出状況、南より

ⅢF01掘立柱建物跡柱穴検出状況、東より

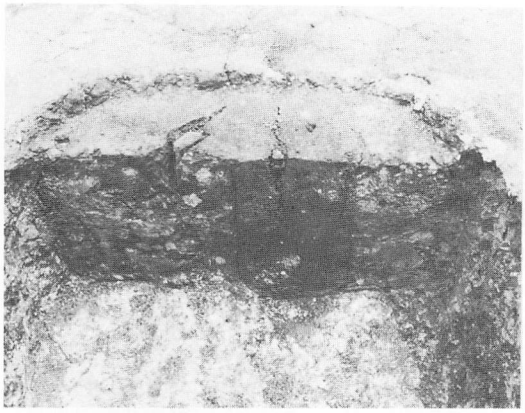
写真図版12：掘立柱建物跡



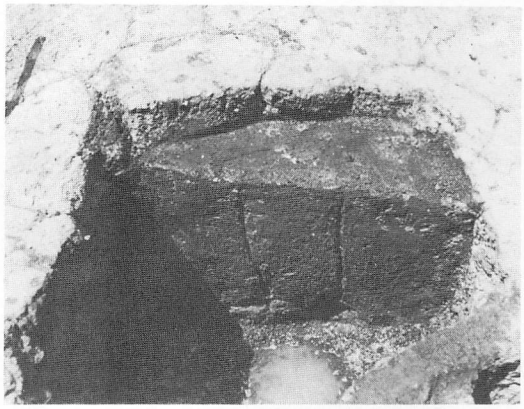
ⅢF01 No.2柱穴埋土断面、西より



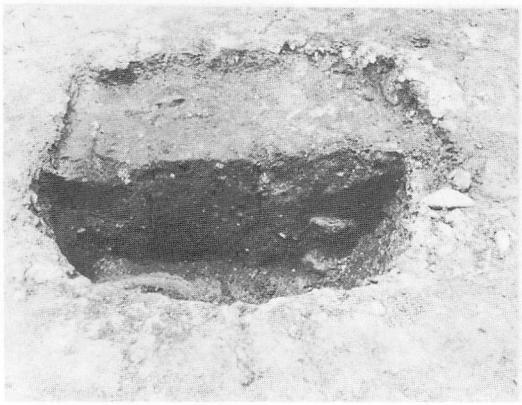
ⅡF01 No.2柱穴埋土断面、東より



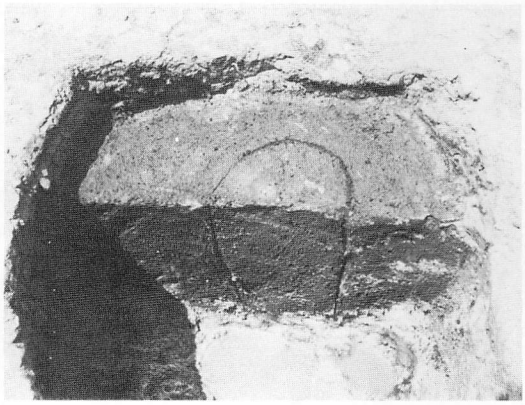
ⅢF01 No.3柱穴埋土断面、西より



ⅡF01 No.6柱穴埋土断面、東より



ⅢF01 No.9柱穴埋土断面、東より



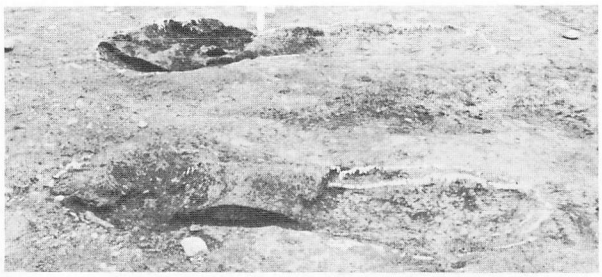
ⅡF01 No.9柱穴埋土断面、東より

写真図版13： 掘立柱建物跡柱穴埋土断面

ⅡG区カマド状焼土遺構全体検出状況、北より

ⅡG01完掘、北より

ⅡG03、ⅡG04完掘、北より
（手前）　（後）



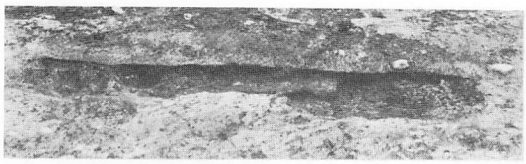
ⅡG01焼土断面、西より（手前）

ⅡG02完掘、北より

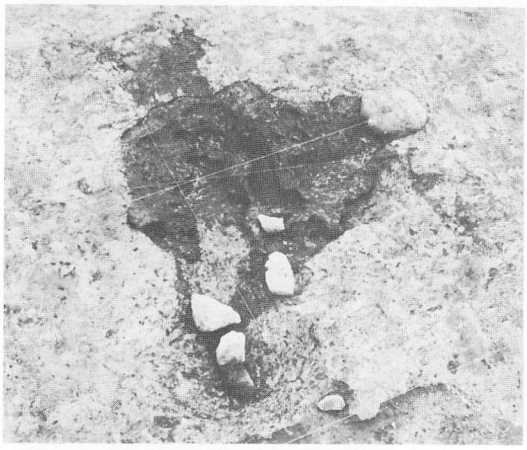
ⅡG05完掘、北より

ⅡG02埋土断面、西より

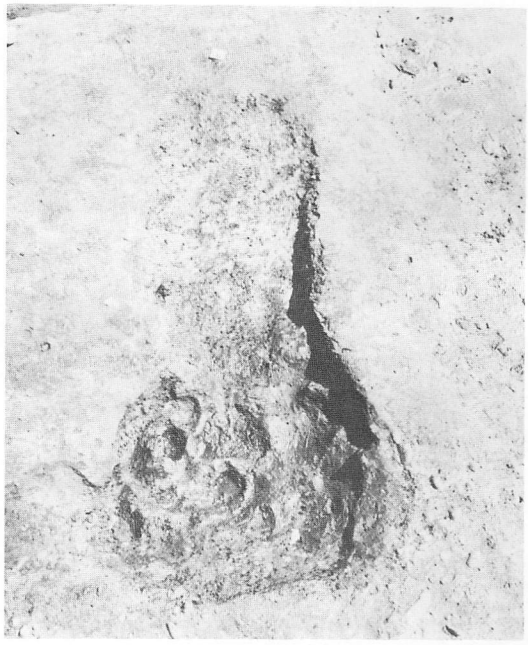
写真図版14：カマド状焼土遺構（1）



ⅡG05埋土断面、西より

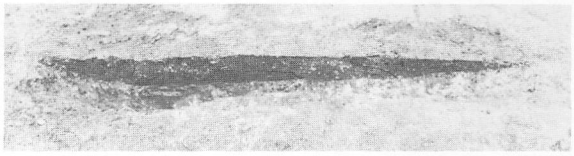


ⅡG07完掘、北西より

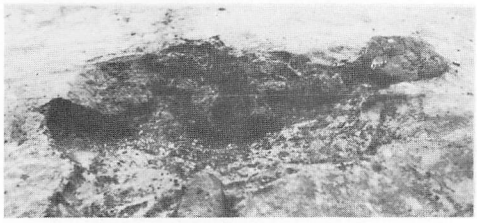


ⅡG10完掘、北より

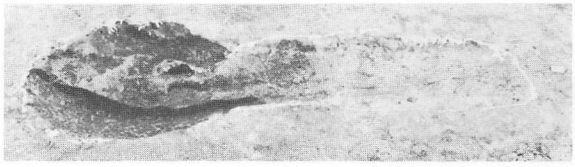
ⅡG07埋土断面、北西より



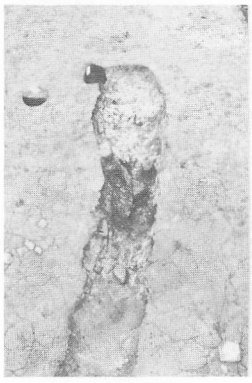
ⅡG10埋土断面、西より



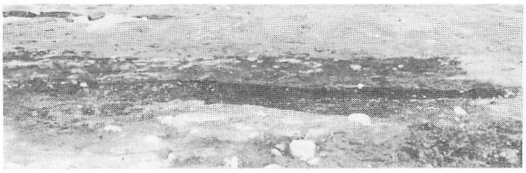
ⅡG07焼土断面、北西より



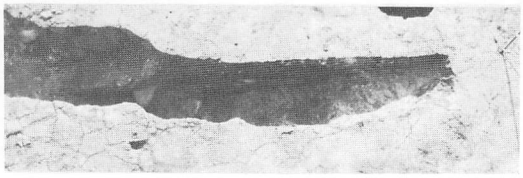
ⅡG10焼土断面、西より



ⅡD01完掘、南より



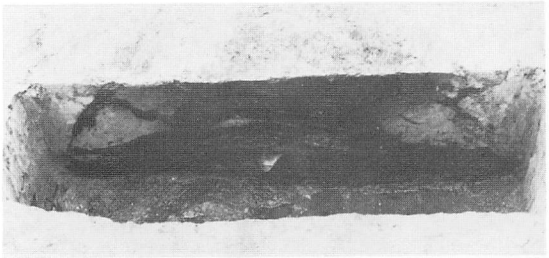
ⅡG06埋土断面、西より



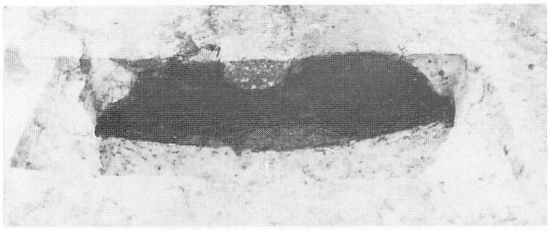
ⅡD01埋土断面、東より

ⅡG06完掘、南より

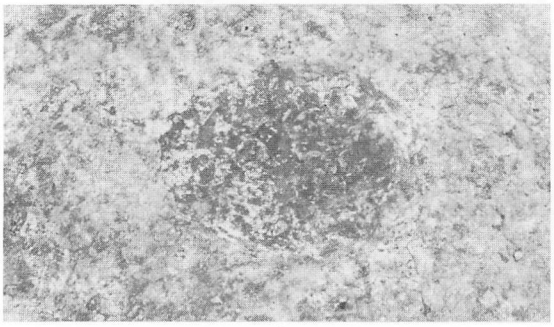
写真図版15：カマド状焼土遺構(2)



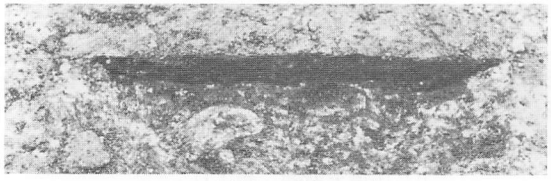
ⅡB001土坑埋土断面、東より



ⅢB001土坑埋土断面、東より

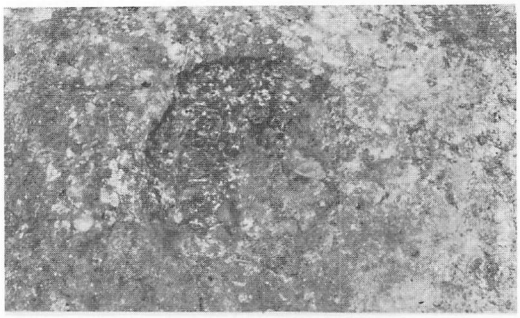


ⅡG002土坑完掘、南より

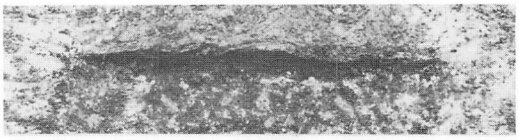


ⅡG002土坑埋土断面、東より

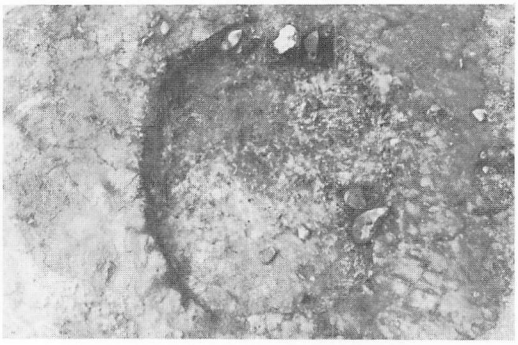
ⅢF002土坑土層断面、西より



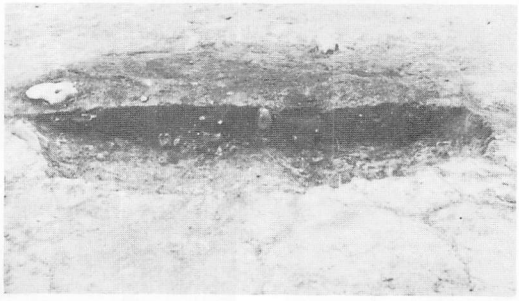
ⅡG01土坑完掘、南より



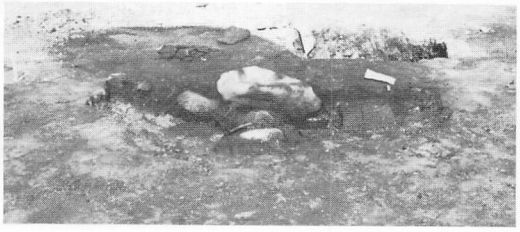
ⅡG01土坑埋土断面、東より



ⅢF001土坑完掘、南より

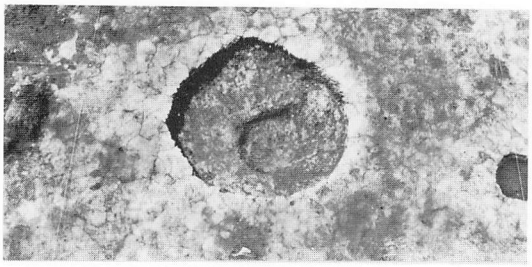


ⅢF001土坑土層断面、西より

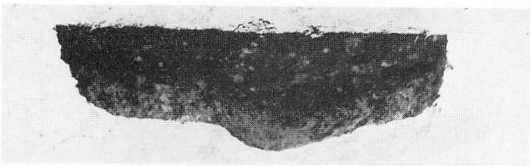


ⅢF002土坑土器出土状況、西より

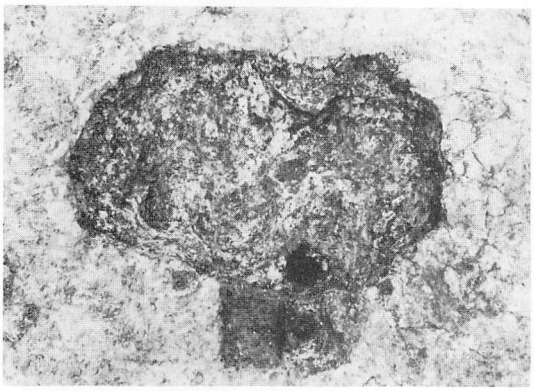
写真図版16：土坑(1)



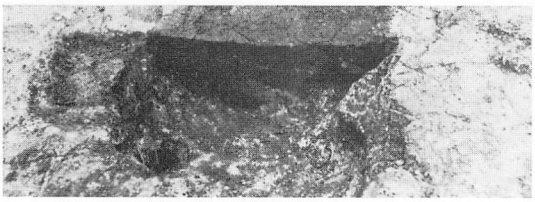
ⅡD001土坑完掘、東より



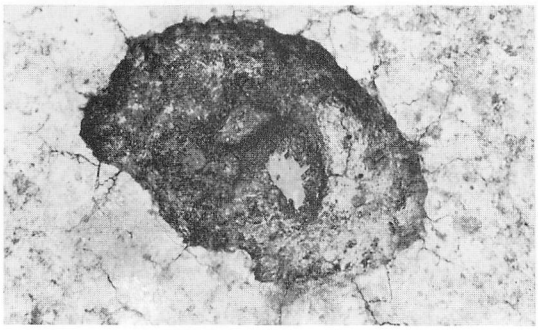
ⅡD001土坑埋土断面、東より



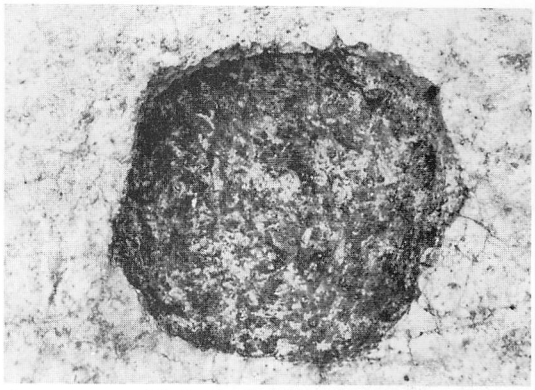
ⅢD004土坑完掘、南より



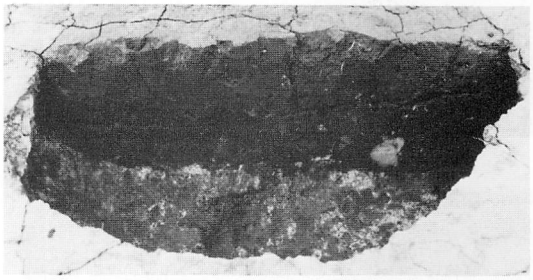
ⅢD004土坑埋土断面、東より



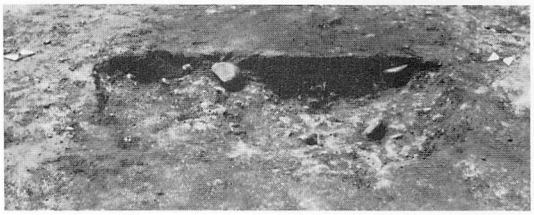
ⅡD003土坑完掘、南より



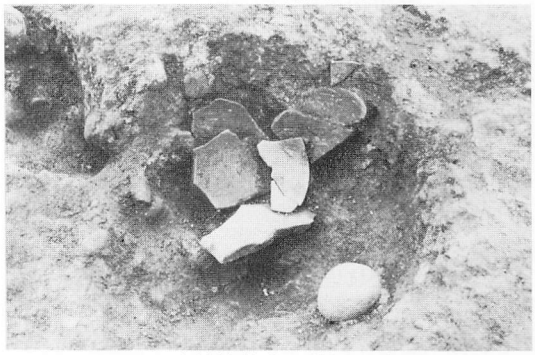
ⅢD003土坑完掘、南より



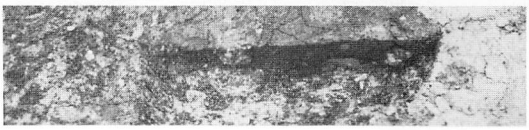
ⅢD003土坑断面、東より



ⅢE001土坑埋土断面、東より



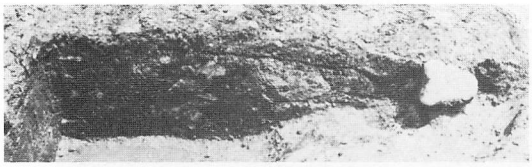
ⅢE001土坑遺物出土状況、東より



ⅢD005土坑埋土断面、東より

写真図版17：土坑(2)

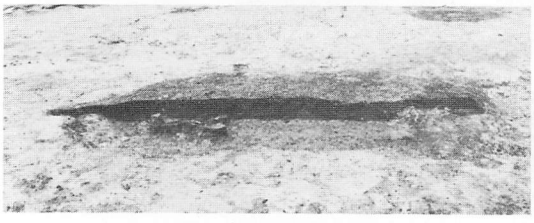
ⅡG003土坑完掘、南より



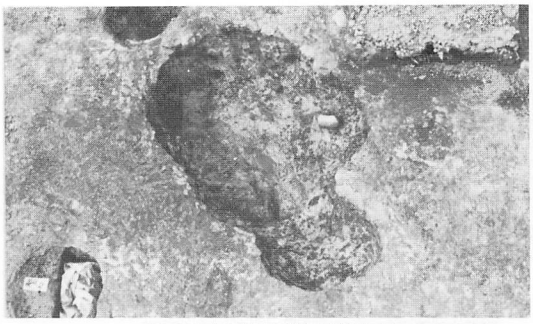
ⅡG003土坑埋土断面、西より

ⅡH001土坑完掘、南より

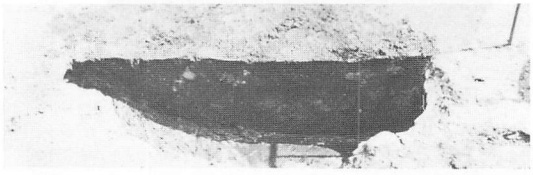
ⅡH001土坑埋土断面より、南より



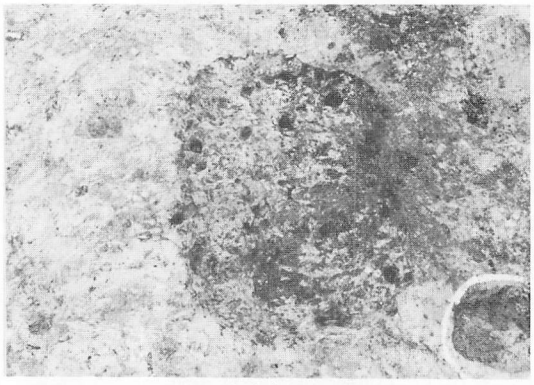
ⅡH004土坑埋土断面、南より



ⅢG001土坑完掘、南より



ⅢG001土坑埋土断面、北より



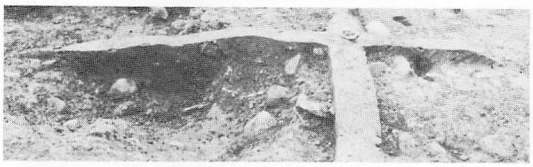
ⅡH003土坑完掘、南より

ⅡH003土坑埋土断面、西より

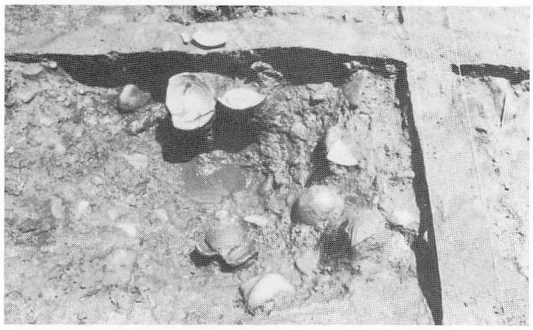
ⅡH002土坑完掘、南より

写真図版18：土坑(3)

ⅡH05土坑完掘、西より

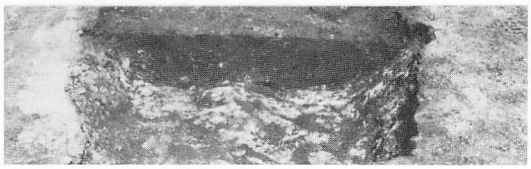


ⅡH05土坑埋土断面、西より

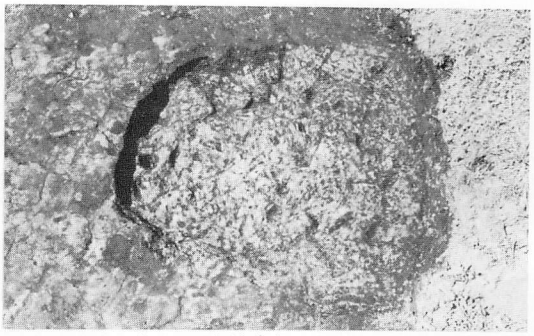


ⅡH05土坑杯出土状況、西より

ⅠB002土坑完掘、南より

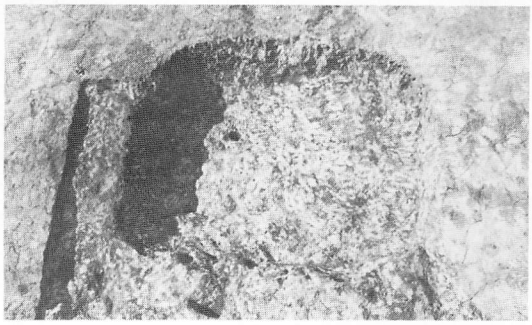


ⅠB002土坑埋土断面、西より

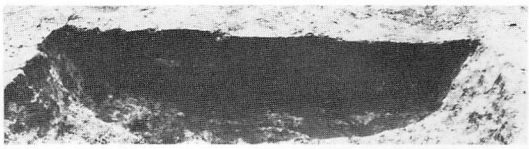


ⅠB001土坑完掘、南より

ⅠB001土坑埋土断面、西より



ⅠB003土坑完掘、南より

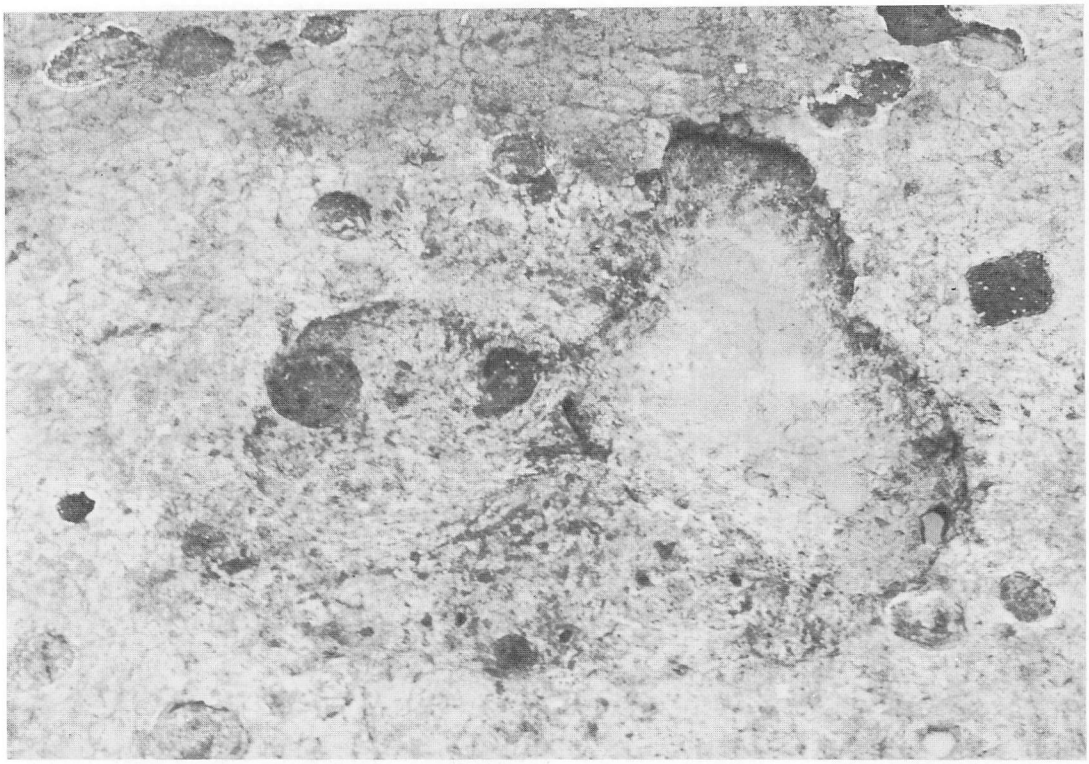


ⅠB003土坑埋土断面、東より

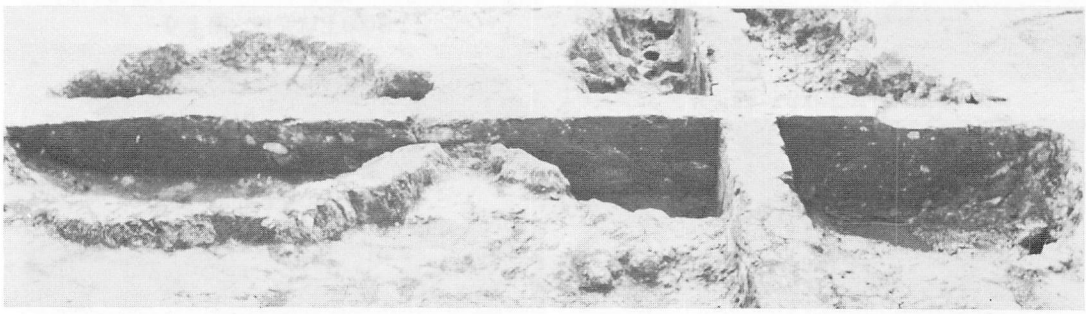
ⅠB004土坑完掘、南より

ⅠB004土坑埋土断面、南より

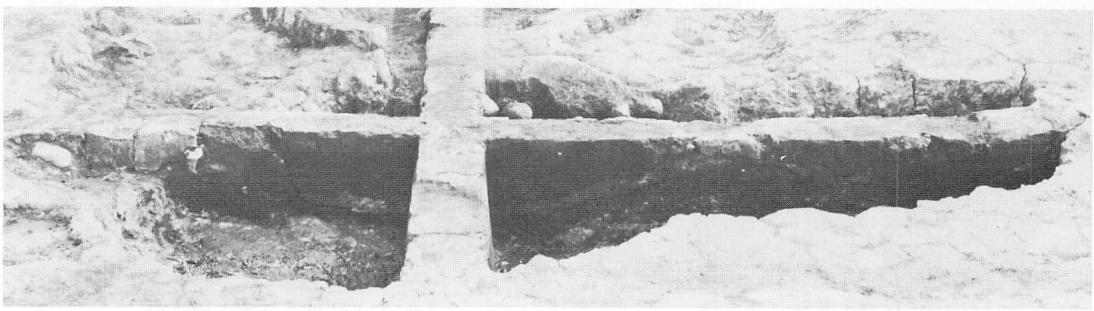
写真図版19：土坑(4)



ⅡF001、002土坑完掘、東より

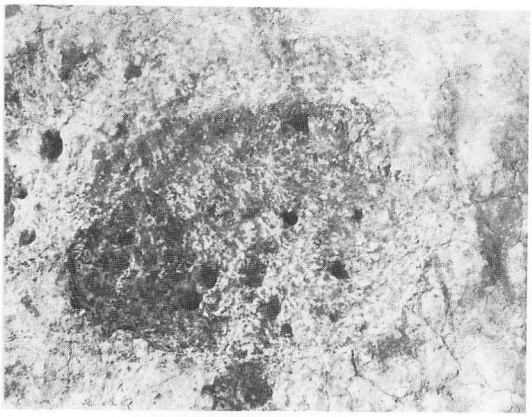


ⅡF001、002土坑断面、東より

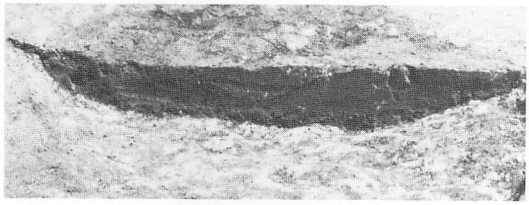


ⅡF002土坑断面、北より

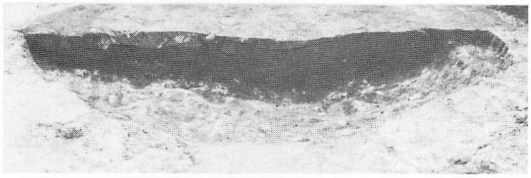
写真図版20：土坑(5)



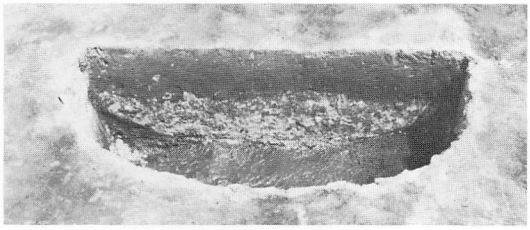
ⅠB005土坑完掘、南より



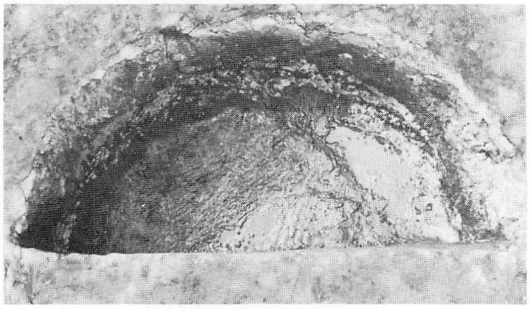
ⅠB005土坑埋土断面、北より



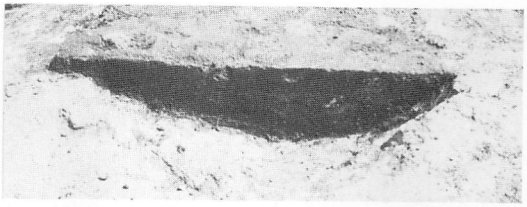
ⅢB002土坑埋土断面、西より



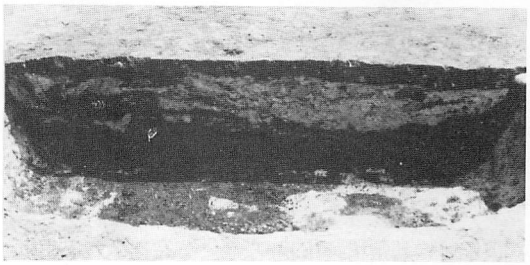
ⅡE002土坑埋土断面、南より



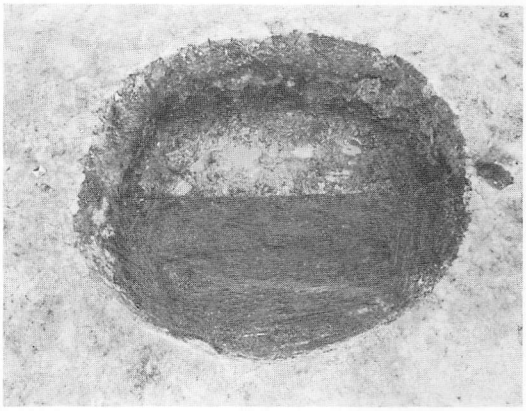
ⅡE002土坑カヤ検出状況



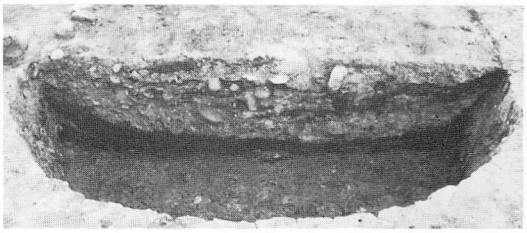
ⅠA001土坑埋土断面、北より



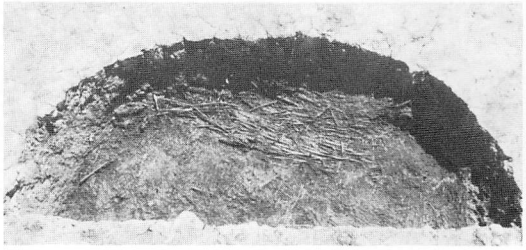
ⅡB002土坑埋土断面、北より



ⅡC001土坑西半分カヤ検出状況

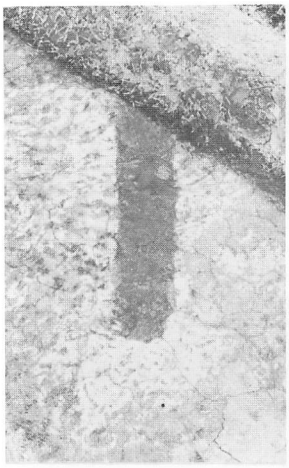


ⅡC001土坑埋土断面、東より

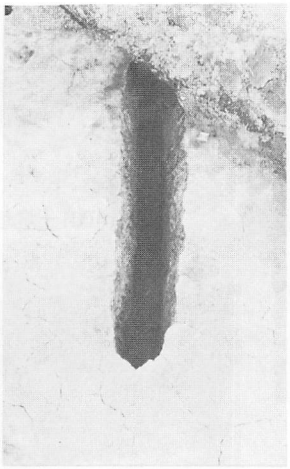


ⅡC001土坑カヤ検出状況、西より

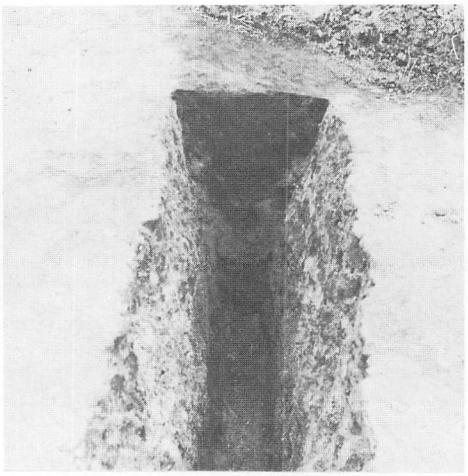
写真図版21：土坑(6)



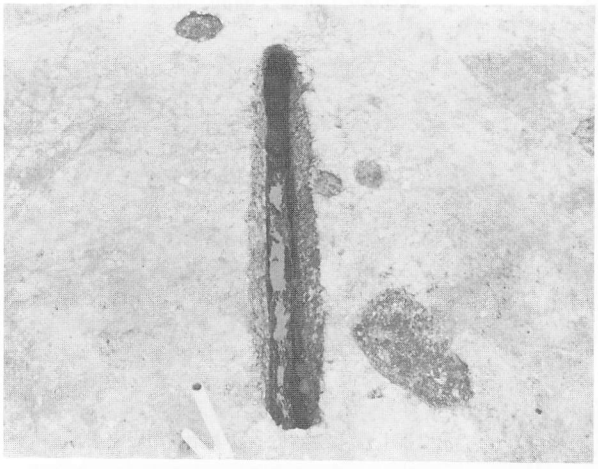
ⅡA001陥し穴状遺構検出状況



完掘、北東より

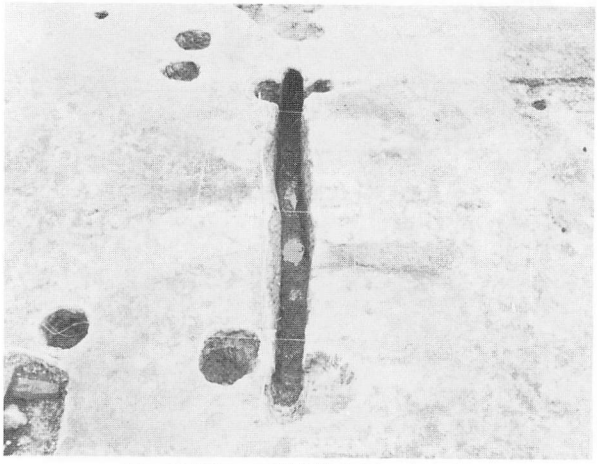


ⅡA001埋土断面、北東より

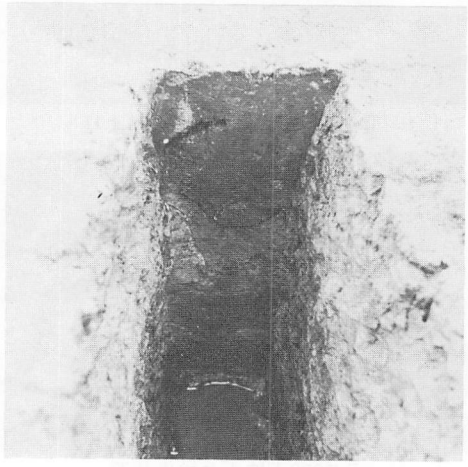


ⅢF001陥し穴状遺構完掘、南西より

ⅢF001埋土断面、北東より



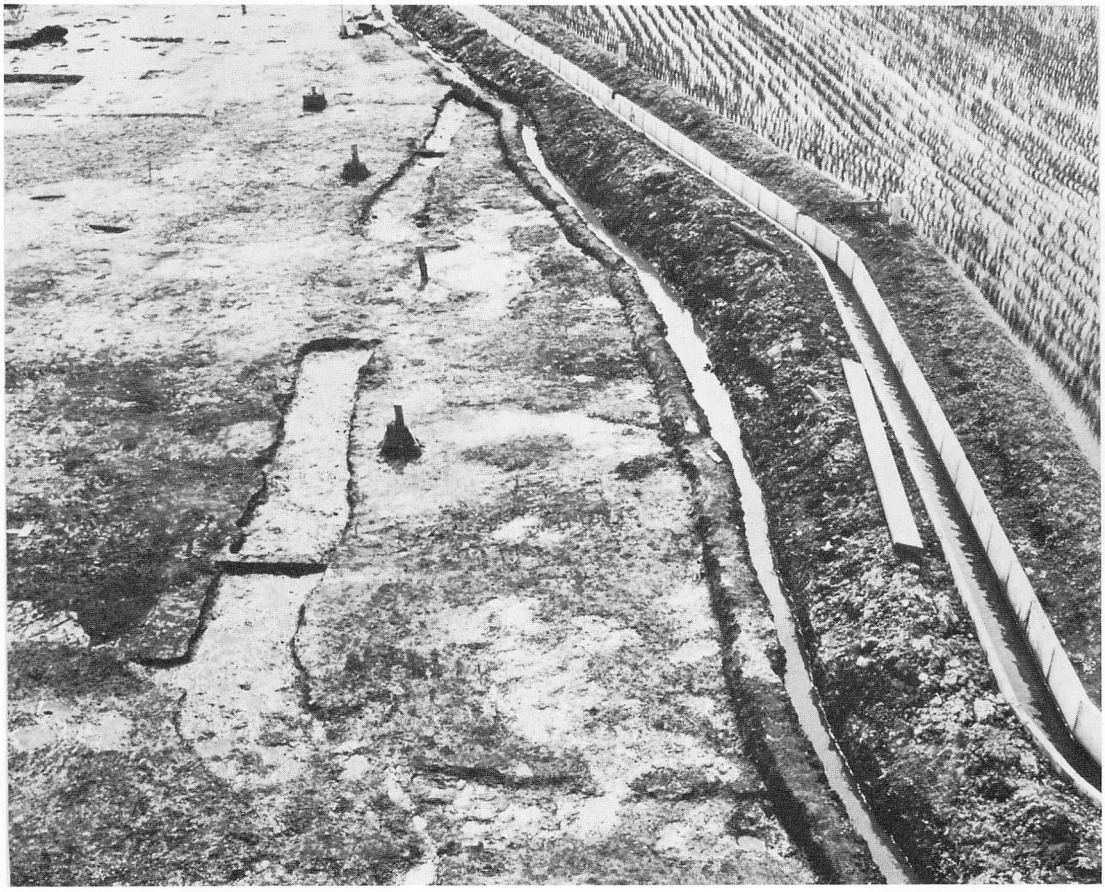
ⅢG001陥し穴状遺構完掘、南より



ⅢG001埋土断面、北より

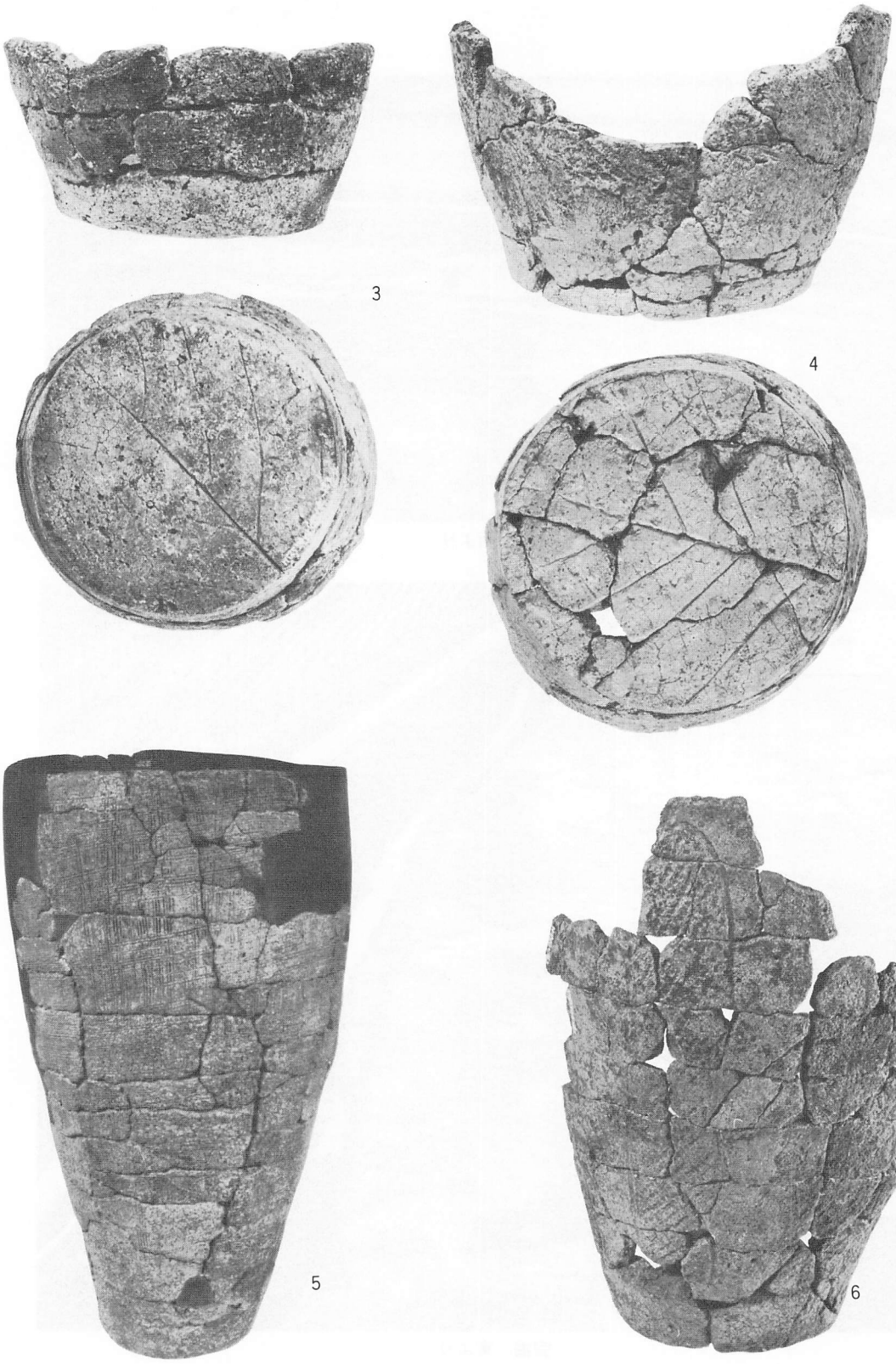
写真図版22：陥し穴状遺構

完掘、南より

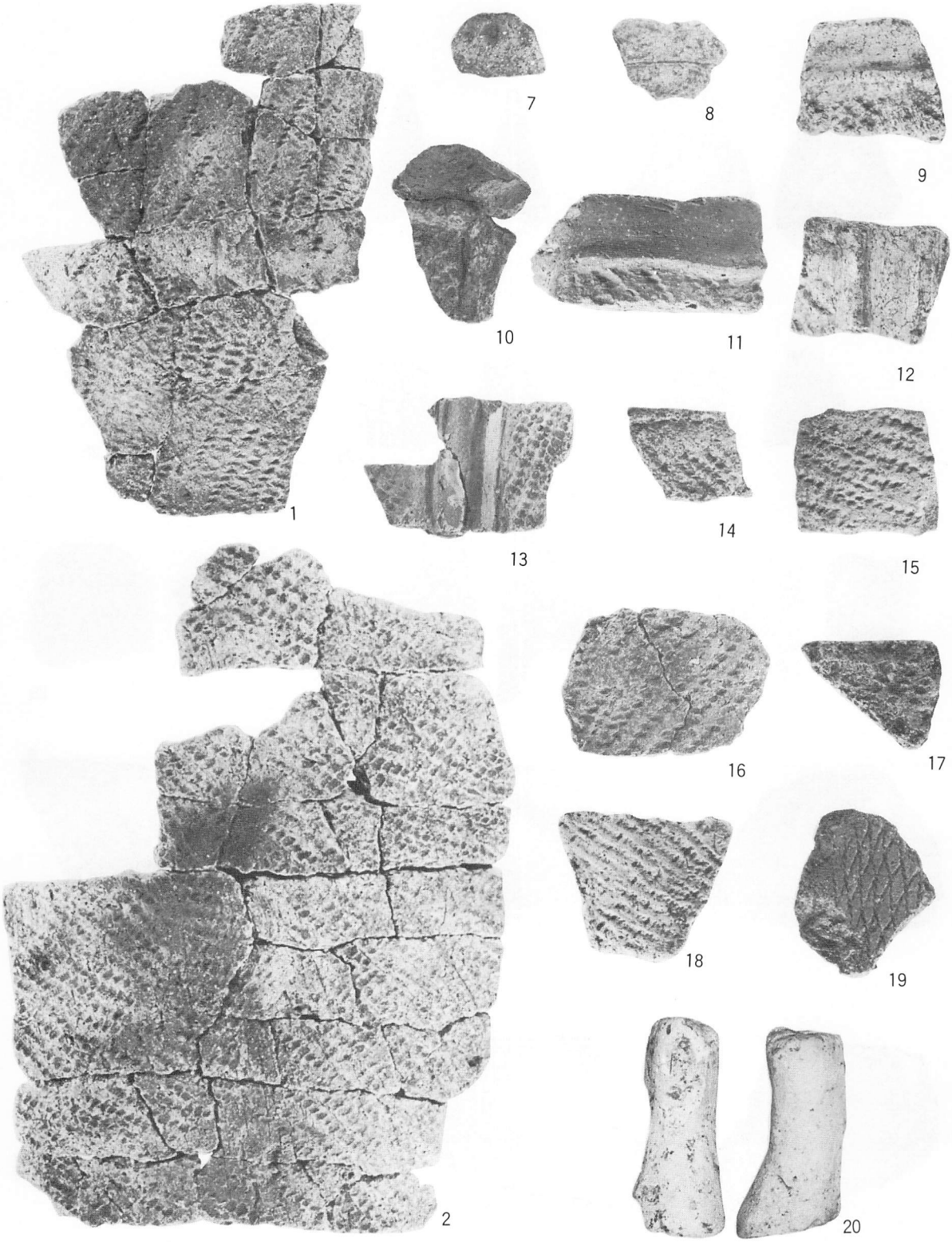


完掘、東より

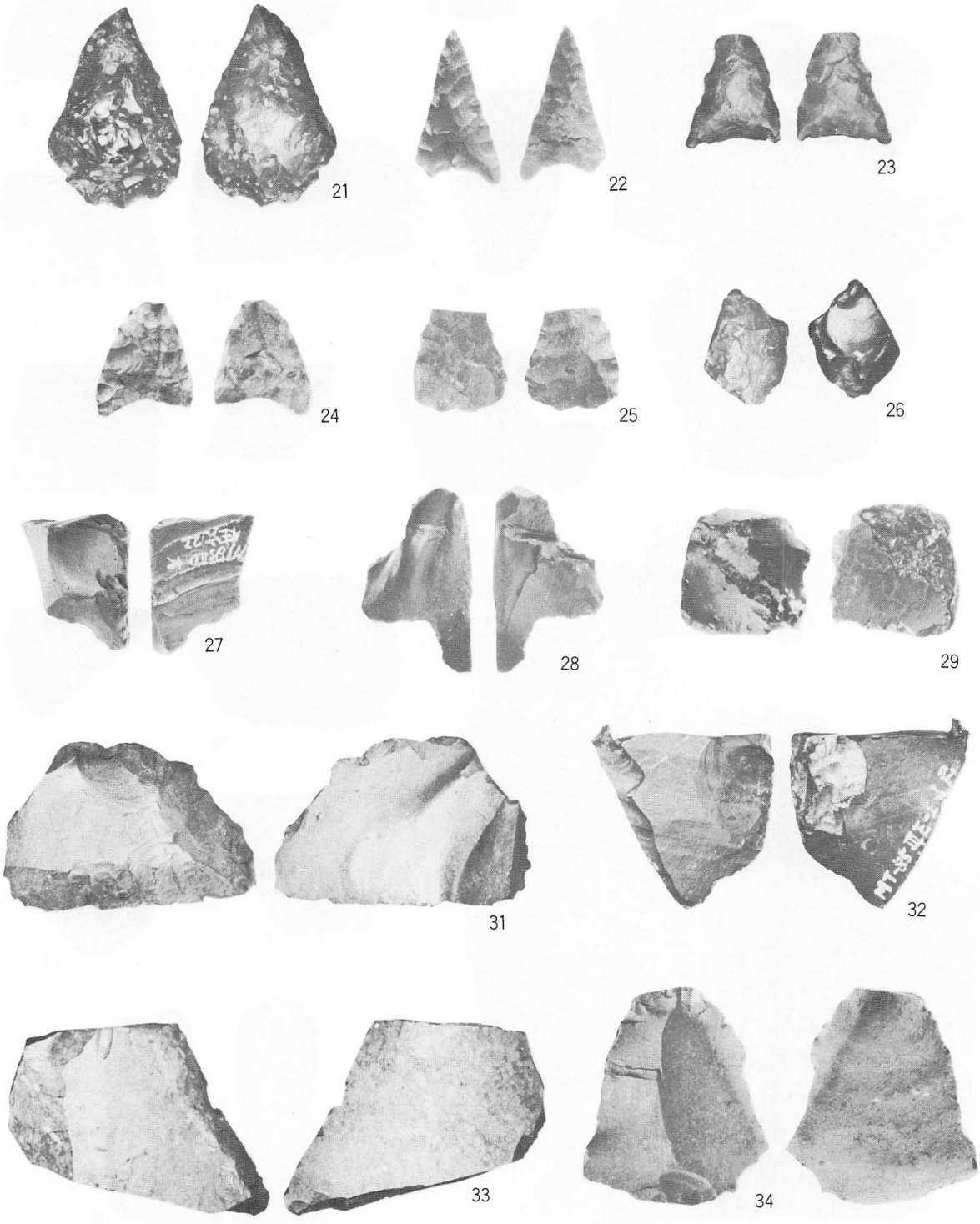
写真図版23：屋敷跡（ⅡG01、02溝）



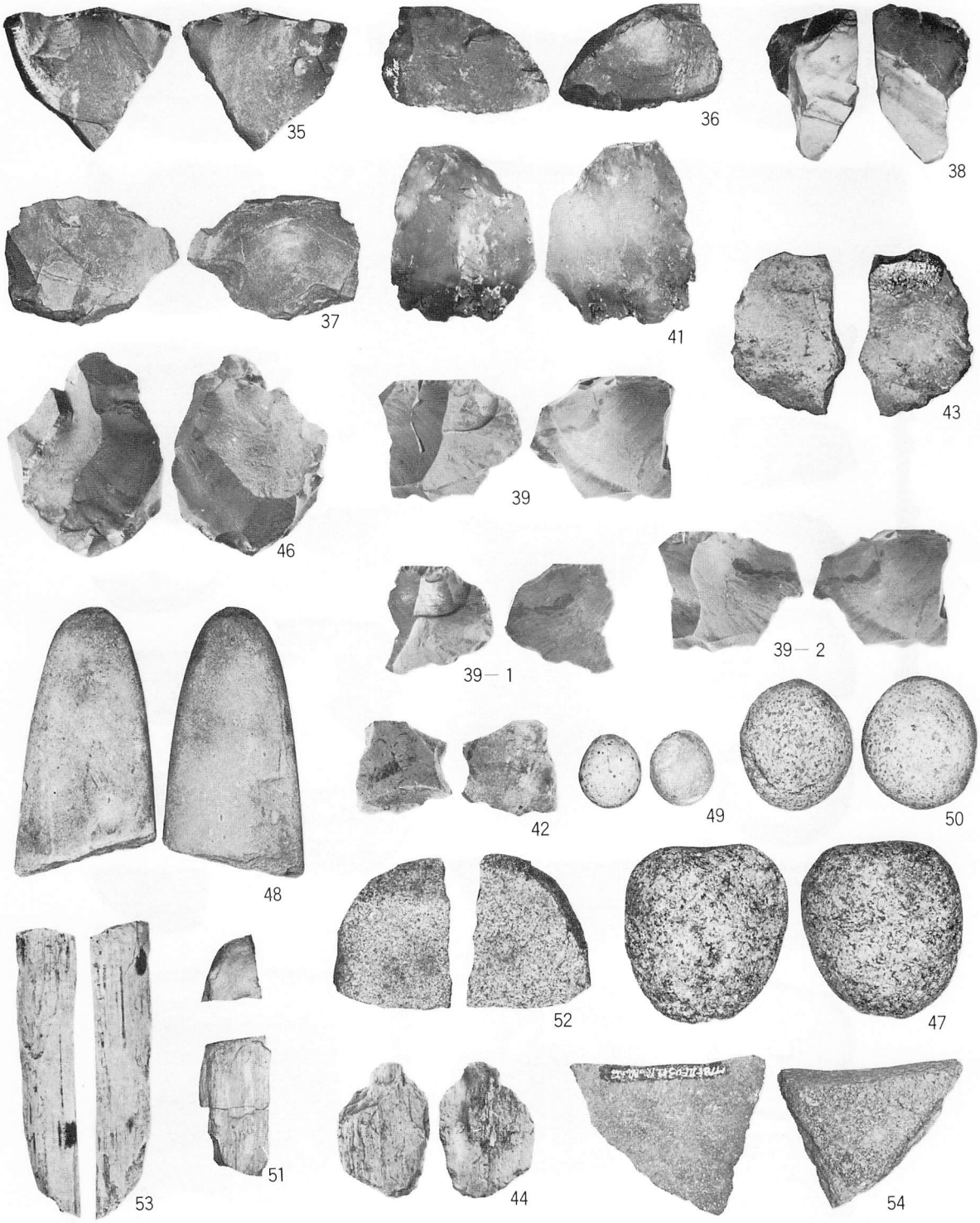
写真図版24：縄文土器１



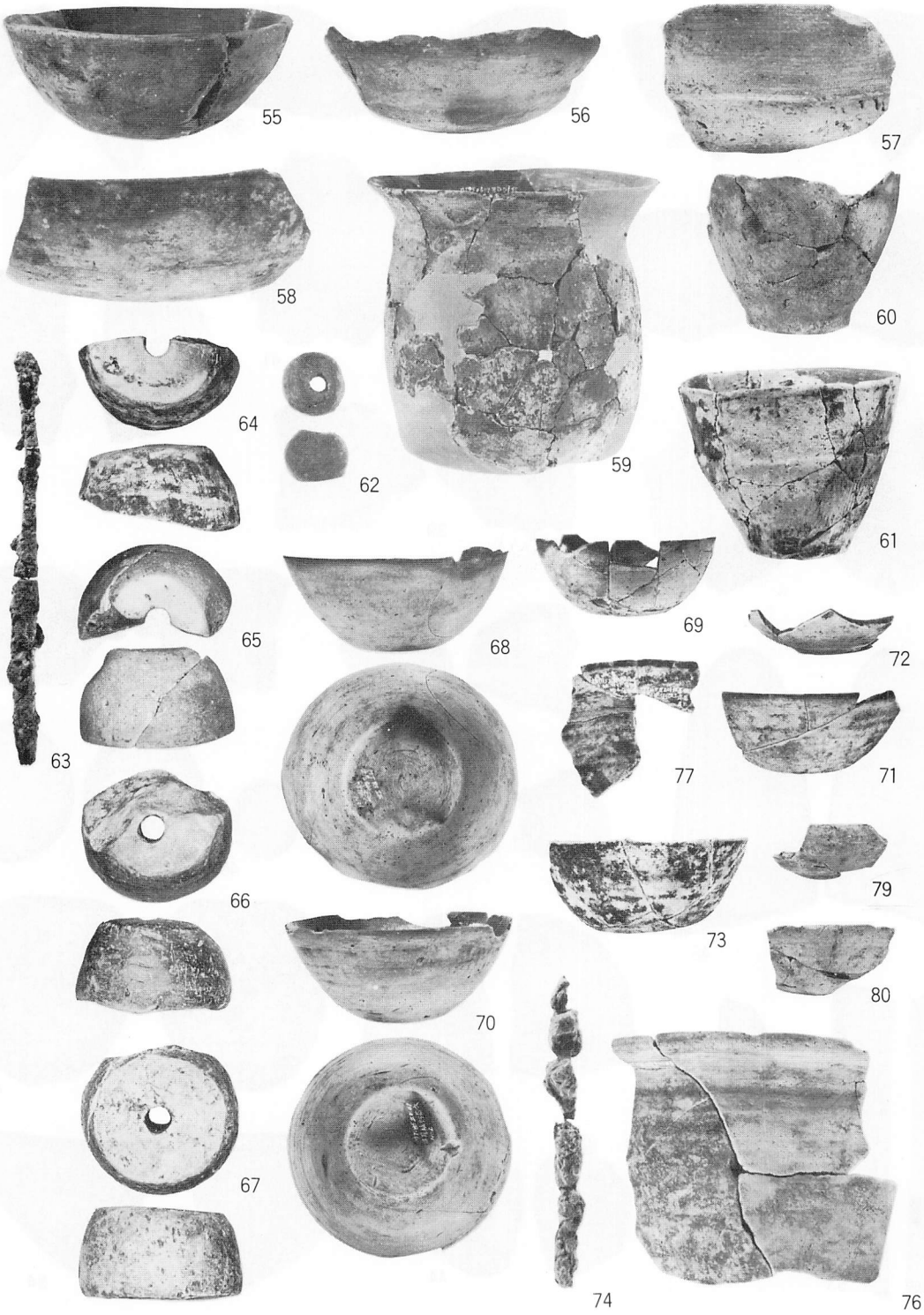
写真図版25：縄文土器２、土製品



写真図版26：石器 1

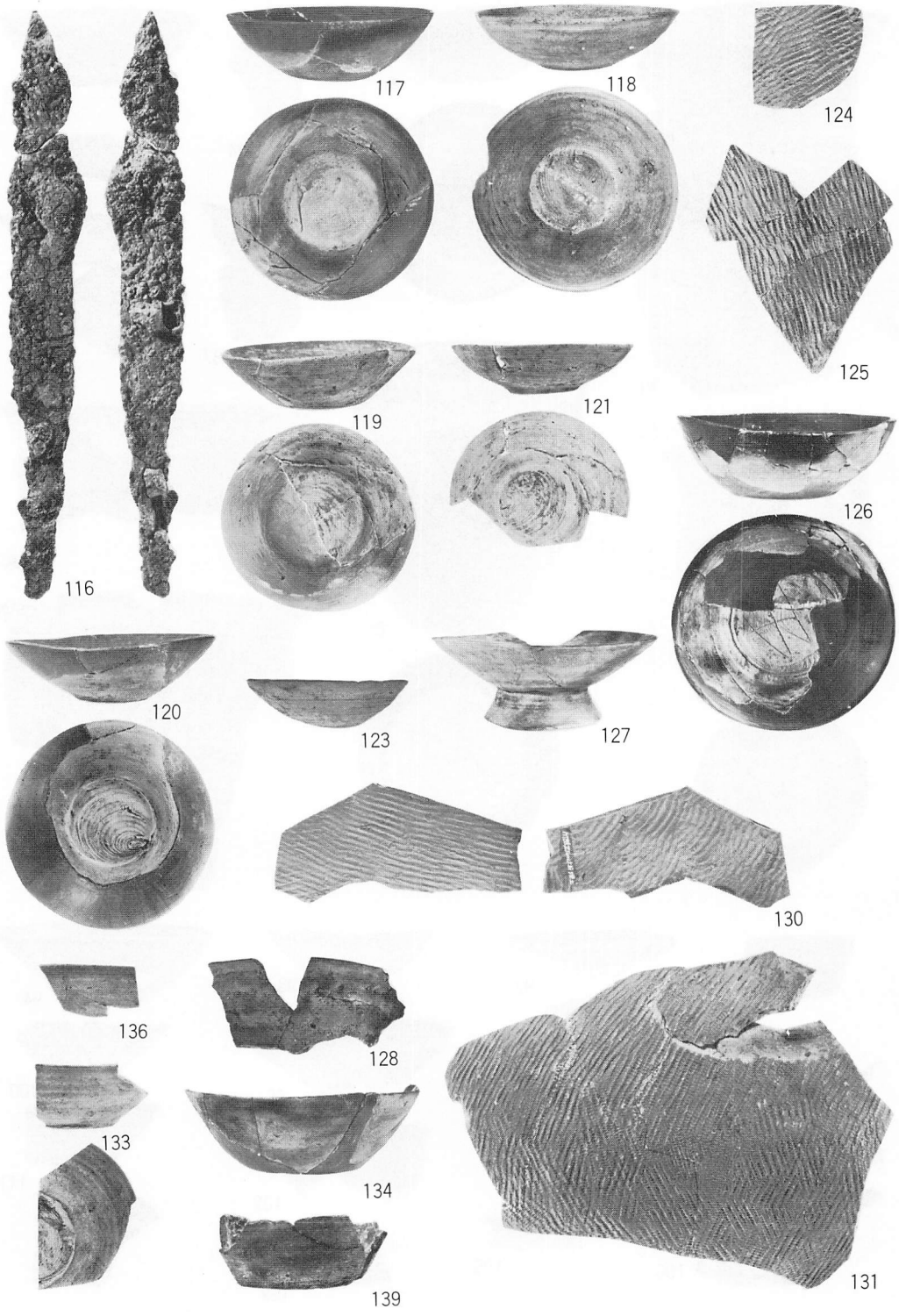


写真図版27：石器 2

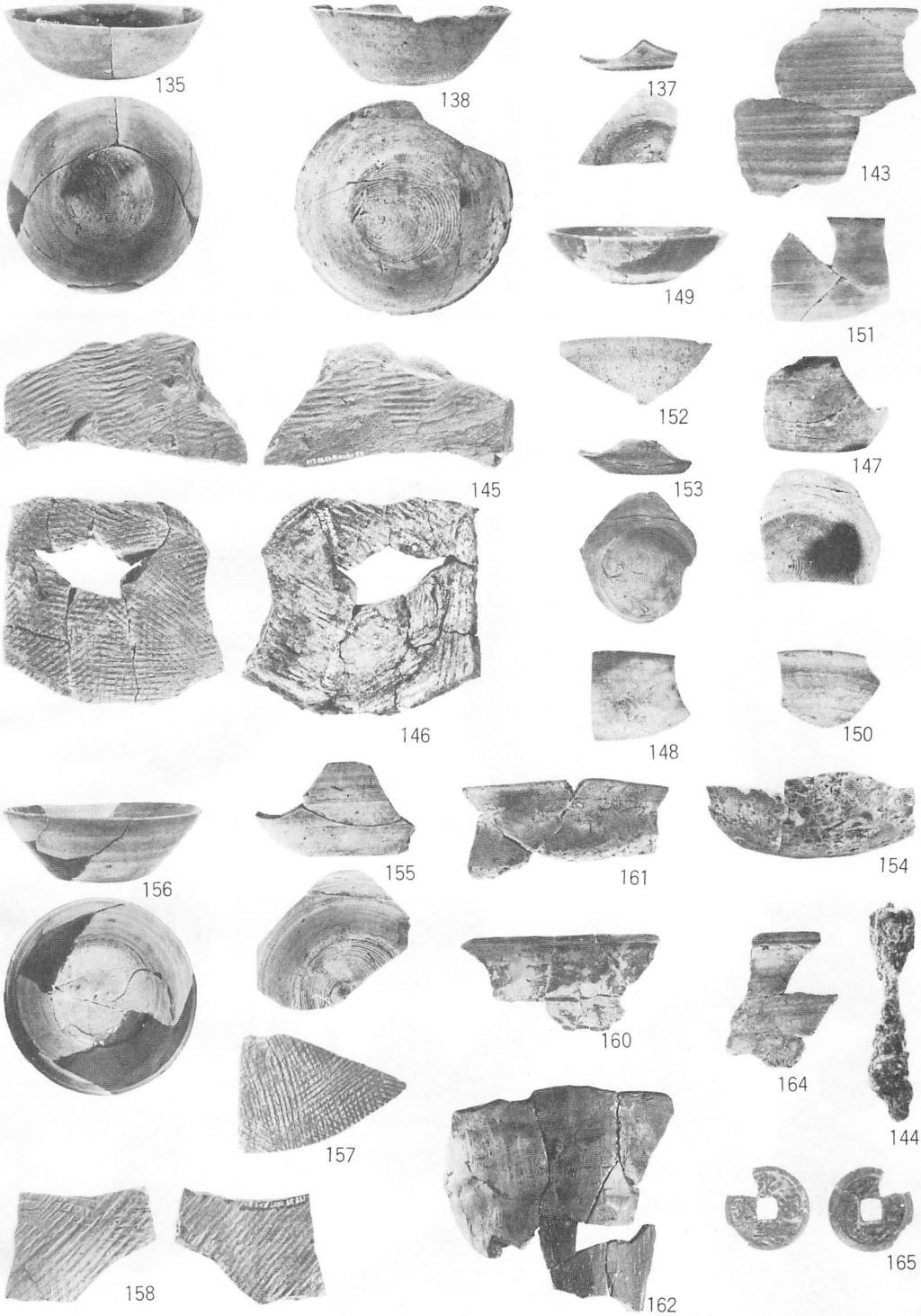


写真図版28：土師器、土製品、鉄製品

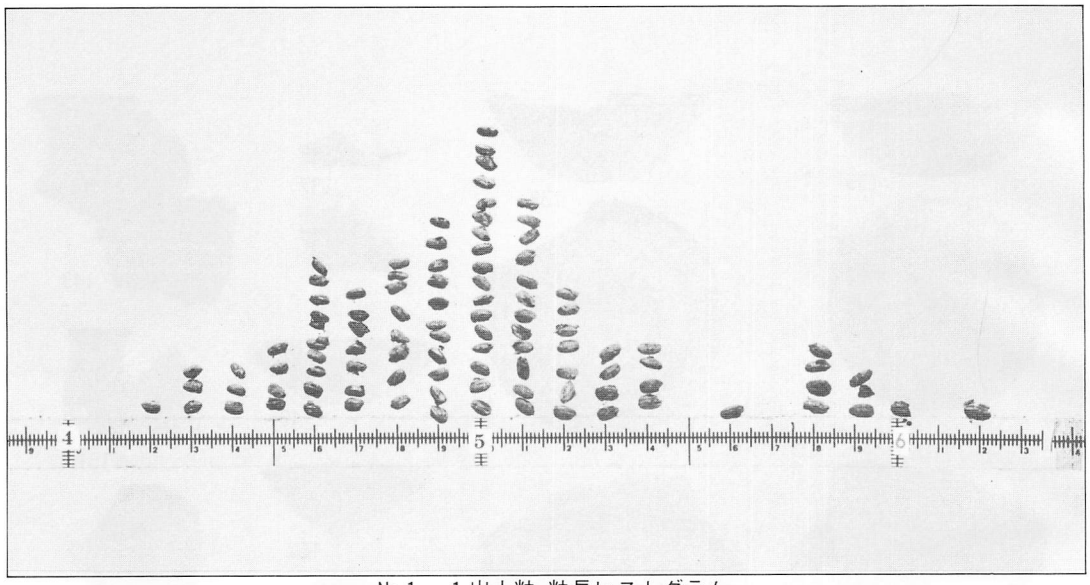
写真図版29：土師器、須恵器



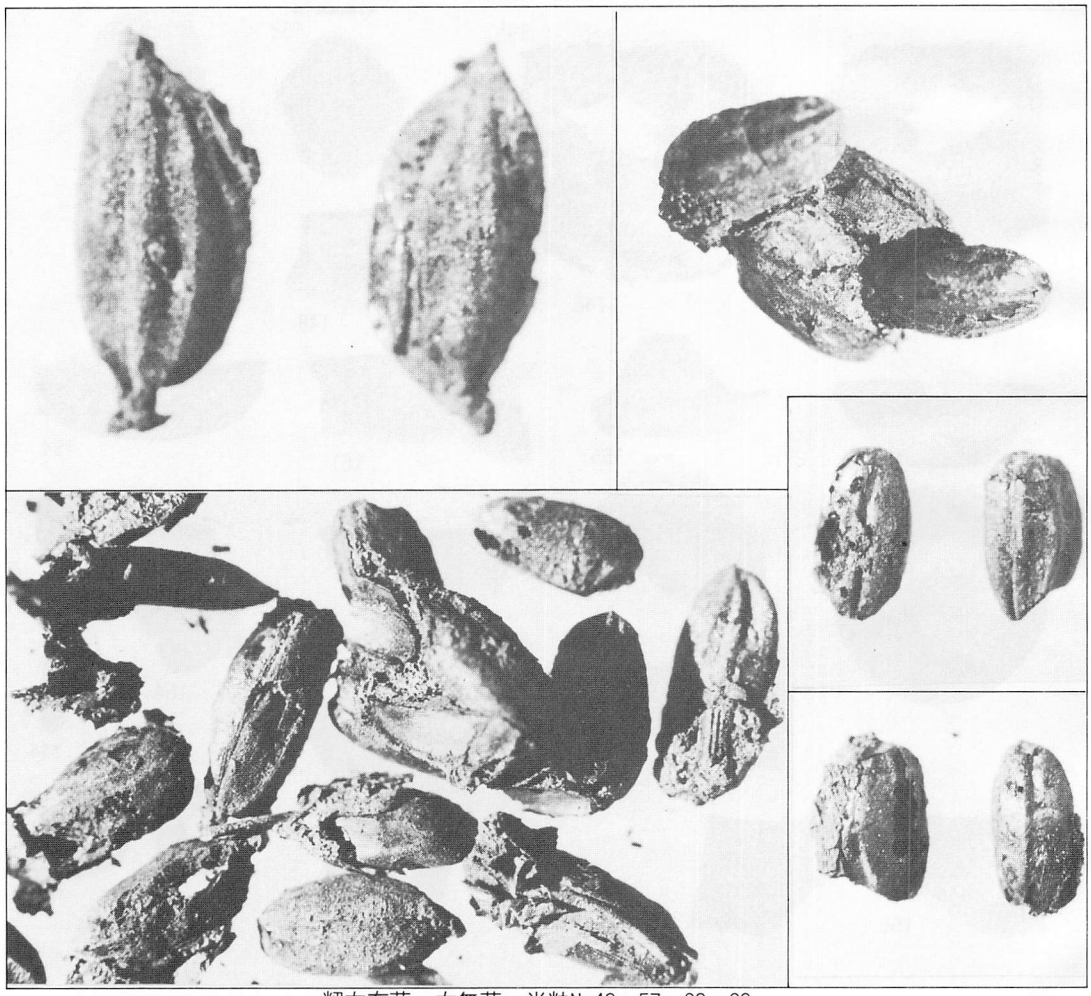
写真図版30：土師器、須恵器、鉄製品



写真図版31：土師器、須恵器、鉄製品、古銭

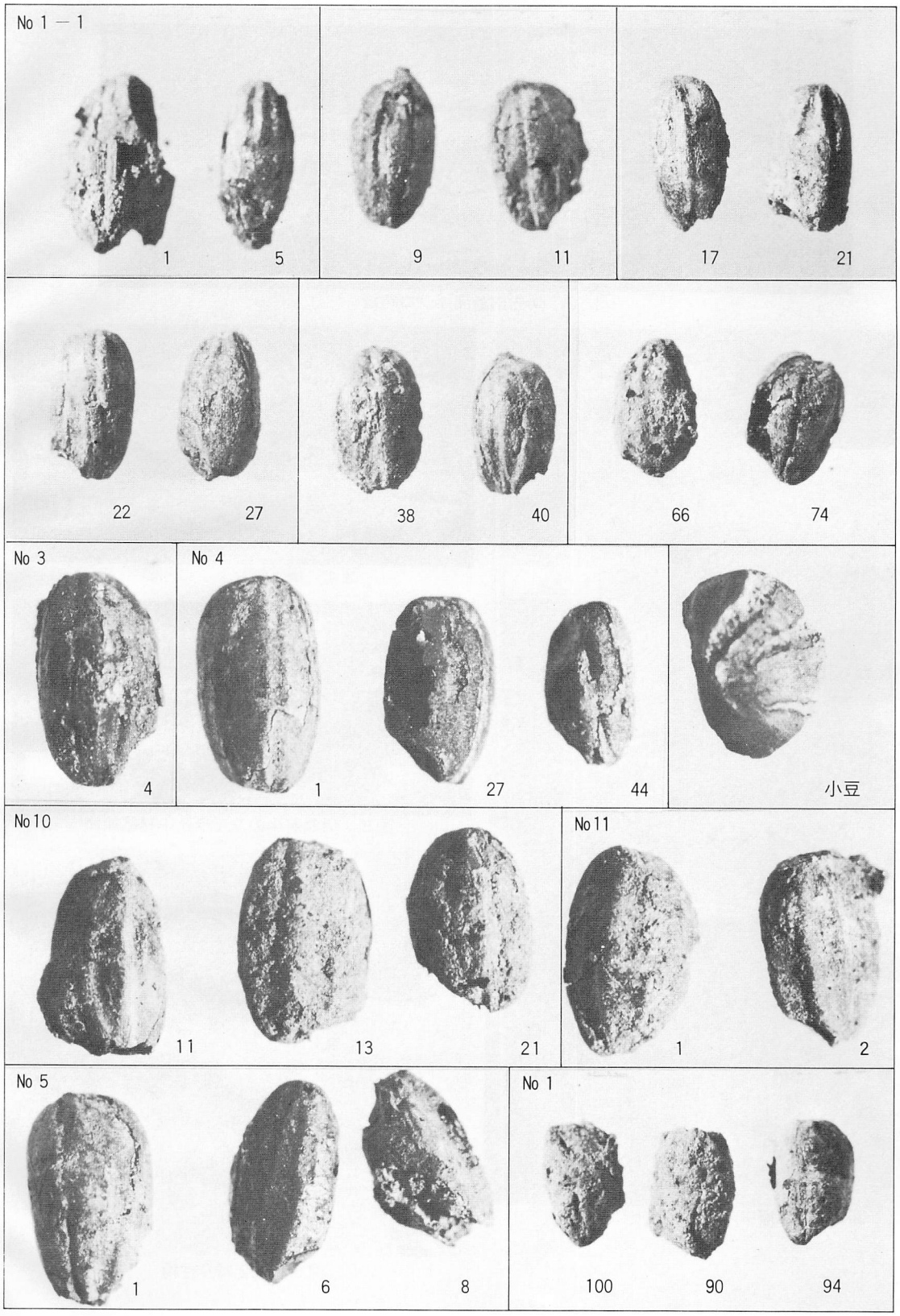


No 1 － 1 出土粒 粒長ヒストグラム



籾左有芒、右無芒、米粒No 42・57・62・63

写真図版32：殻粒 1


No 1 — 1
1
5
9
11
17
21
22
27
38
40
66
74
No 3
4
No 4
1
27
44
小豆
No10
11
13
21
No11
1
2
No 5
1
6
8
No 1
100
90
94

写真図版33：殻粒 2

図2　切先部断面マクロ組織

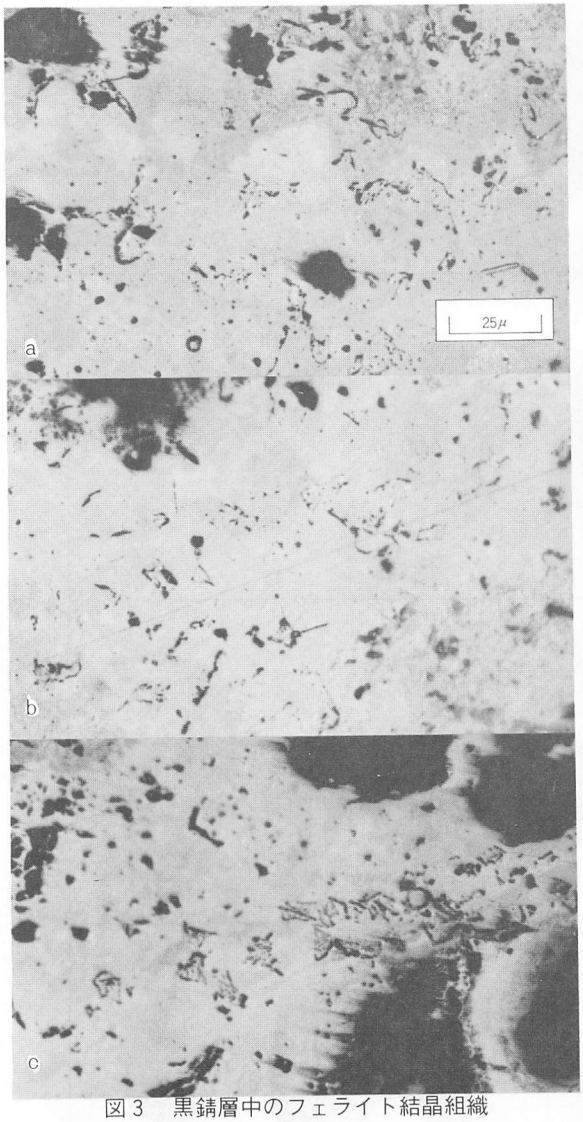


図3　黒錆層中のフェライト結晶組織

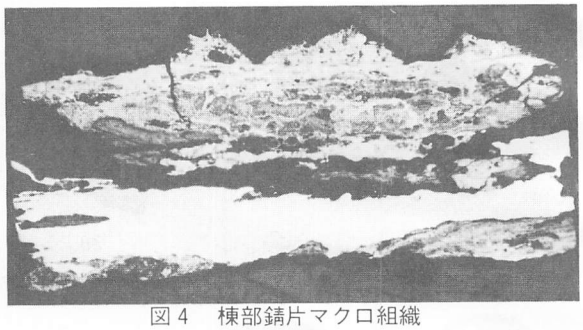


図4　棟部錆片マクロ組織

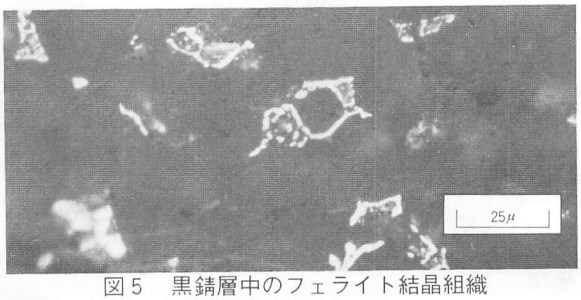


図5　黒錆層中のフェライト結晶組織

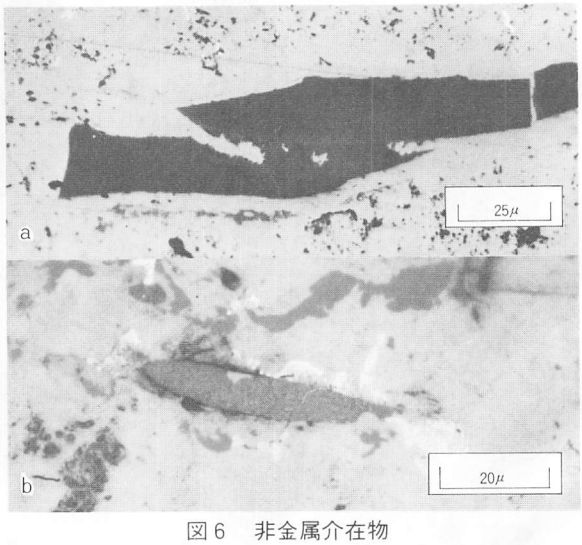
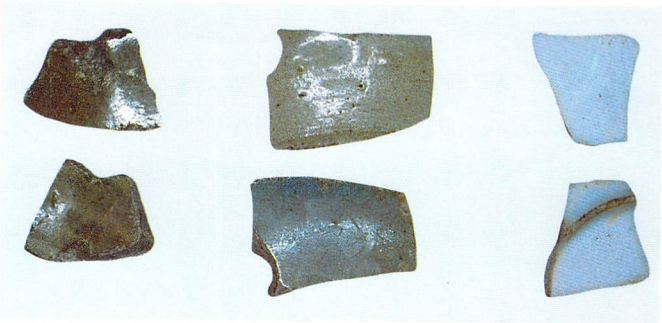


図6　非金属介在物

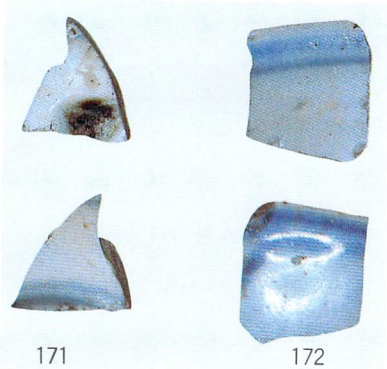
写真図版34：ⅢE01住居跡　刀子金属組織

166

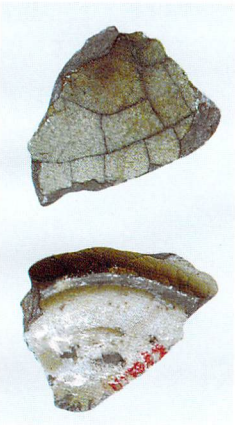


167 168 169

170



171 172



173

175

174

115

114

写真図版35：陶磁器

財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長	及川昌二
副所長	宮　英一

〔管理課〕

課　　長	千葉久夫
課長補佐	阿部詔夫
主　　事	立花多加志
技能員	佐藤春男

〔調査課〕

課　　長	近藤宗光		
主任文化財専門調査員	昆野　靖		
文化財専門調査員	片方宗明	文化財専門調査員	光井文行
〃	長沼　彬	〃	玉川英喜
〃	菊池利和	〃	石川長喜
〃	渡辺洋一	〃	三浦謙一
〃	佐々木嘉直	〃	工藤利幸
〃	平井　進	〃	中川重紀
〃	中村良一	〃	高橋与右エ門
〃	田村壮一	〃	高橋義介
〃	岩渕　久	〃	酒井宗孝

〔資料課〕

課　　長	名須川溢男
文化財専門調査員	田鎖寿夫
〃	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第102集

万丁目遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ関連遺跡発掘調査

印　刷　昭和61年3月20日

発　行　昭和61年3月25日

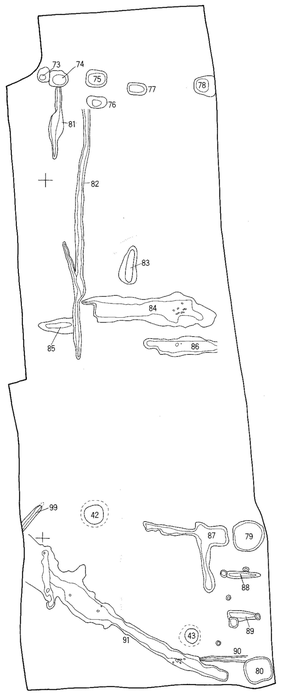
発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

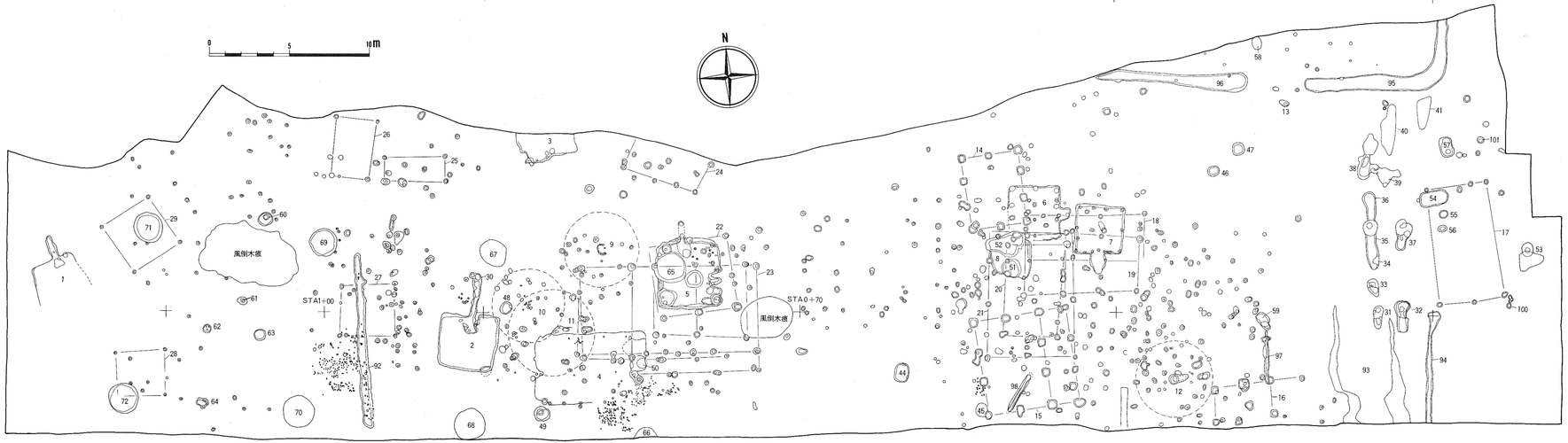
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11－185

印　刷　株式会社　吉　田　印　刷

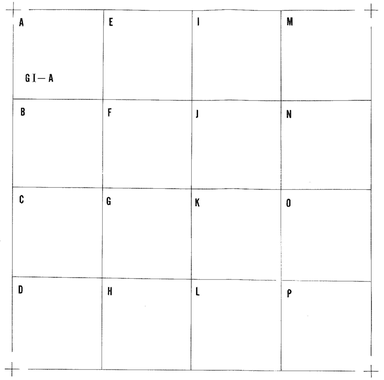
〒020 盛岡市名須川町23－27

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986





1．Ⅱ C01住居跡	34．Ⅱ G11カマド炊焼土遺構	67．Ⅱ E001土坑	100．Ⅱ H02焼土
2．Ⅲ D01住居跡	35．Ⅱ G04カマド炊焼土遺構	68．Ⅲ D002土坑	101．Ⅱ H01焼土
3．Ⅱ E03住居跡	36．Ⅱ G03カマド炊焼土遺構	69．Ⅱ D003土坑	
4．Ⅲ E01住居跡	37．Ⅱ G05カマド炊焼土遺構	70．Ⅲ D001土坑	
5．Ⅱ E01住居跡	38．Ⅱ G02カマド炊焼土遺構	71．Ⅱ C001土坑	
6．Ⅱ F02住居跡	39．Ⅱ G07カマド炊焼土遺構	72．Ⅲ C001土坑	
7．Ⅱ F01住居跡	40．Ⅱ G06カマド炊焼土遺構	73．Ⅰ A001土坑	
8．Ⅱ F03竪穴状遺構	41．Ⅱ G09カマド炊焼土遺構	74．Ⅰ B005土坑	
9．Ⅱ E02石囲炉	42．Ⅱ B001フラスコ形土坑	75．Ⅰ B003土坑	
10．E01石囲炉	43．Ⅲ B001フラスコ形土坑	76．Ⅰ B004土坑	
11．Ⅲ E01土器埋設炉	44．Ⅲ F001鼎状土坑	77．Ⅰ B002土坑	
12．Ⅲ G01土器埋設炉	45．Ⅲ F002鼎状土坑	78．Ⅰ B001土坑	
13．Ⅱ G01土器埋設炉	46．Ⅱ G002鼎状土坑	79．Ⅱ B002土坑	
14．Ⅱ F01掘立柱建物跡	47．Ⅱ G001鼎状土坑	80．Ⅲ B002土坑	
15．Ⅲ F01掘立柱建物跡	48．Ⅱ E003鼎状土坑	81．Ⅰ B02溝	
16．Ⅲ G01掘立柱建物跡	49．Ⅲ E001土坑	82．Ⅰ B01溝	
17．Ⅱ H01掘立柱建物跡	50．Ⅲ E002土坑	83．Ⅱ B02溝	
18．Ⅱ F02掘立柱建物跡	51．Ⅱ F001土坑	84．Ⅱ B03溝	
19．Ⅱ F03掘立柱建物跡	52．Ⅱ F002土坑	85．Ⅱ B05溝	
20．Ⅱ F04掘立柱建物跡	53．Ⅱ H005土坑	86．Ⅰ B04溝	
21．Ⅱ F05掘立柱建物跡	54．Ⅱ H004土坑	87．Ⅲ B04溝	
22．Ⅱ E01掘立柱建物跡	55．Ⅱ H002土坑	88．Ⅲ B03溝	
23．Ⅱ E02～03掘立柱建物跡	56．Ⅱ H001土坑	89．Ⅲ B02溝	
24．Ⅱ E04掘立柱建物跡	57．Ⅱ H003土坑	90．Ⅲ B01溝	
25．Ⅱ D02掘立柱建物跡	58．Ⅱ G003土坑	91．Ⅲ A01溝	
26．Ⅱ D01掘立柱建物跡	59．Ⅲ G001土坑	92．Ⅱ D01溝	
27．Ⅱ D03掘立柱建物跡	60．Ⅱ D001土坑	93．Ⅲ C02溝	
28．Ⅲ C01掘立柱建物跡	61．Ⅱ D003土坑	94．Ⅲ G01溝	
29．Ⅱ C01掘立柱建物跡	62．Ⅲ D005土坑	95．Ⅱ G02	列敷石
30．Ⅱ D01カマド炊焼土遺構	63．Ⅲ D003土坑	96．Ⅲ G01溝	列敷石
31．Ⅱ G01カマド焼焼土遺構	64．Ⅲ D004土坑	97．Ⅲ G01陥し穴	
32．Ⅱ G10カマド炊焼土遺構	65．Ⅱ E002土坑	98．Ⅲ F01陥し穴	
33．Ⅱ G08カマド炊焼土遺構	66．Ⅲ E003土坑	99．Ⅱ A01陥し穴	



附図　グリット・遺構配置図